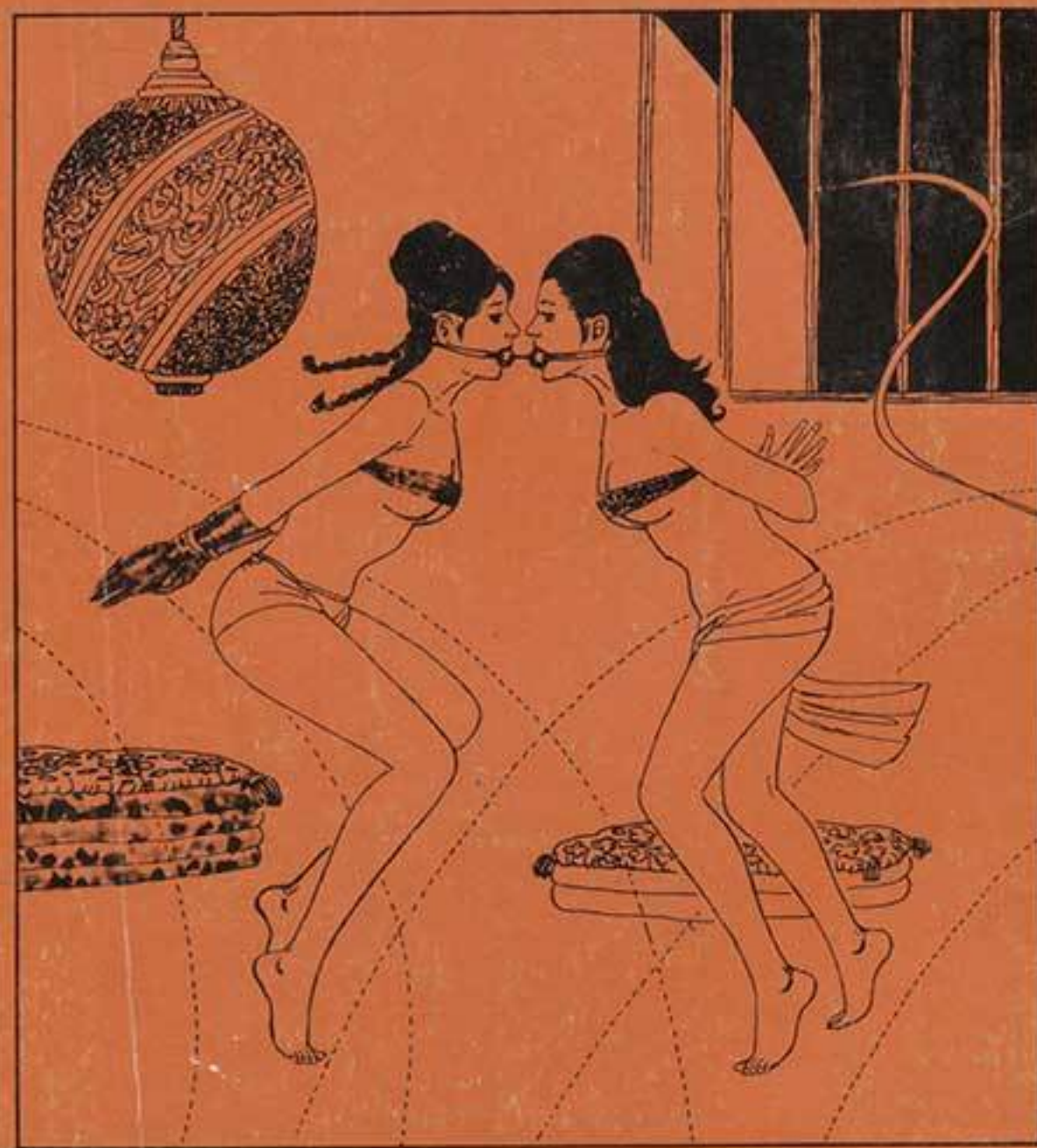


奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

1965・12

12
月
号



奇譚クラブ

12
月
号

定価三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



12月号

¥ 300

オシメを当てたあと、ゴム製
ムツカパーをしてもう。

★最新資料／文献写真／特別分譲品★

落ちた下着後手吊

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ろよ)

激しい緊縛プレイの連続の末、
たった一枚残ったパンティが足元
に引き上げられ、厳しい高小手の
縄尻が高々と天井へ引き上げら
れる。爪先立った脚線の緊張。

浴槽荒縄強烈折檻

大手札三枚一組 三〇〇円
山原清子 略号(ろる)

トゲトゲとした荒縄が柔肌を痛
めつける上に、更に浴槽に浸され
て緊縮する荒縄。情容赦のない折
檻の手と足は、悶える裸身を水中
に埋没せよとする。

梁から両手吊り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村洋子 略号(ろふ)

交叉して括られた両手首は梁に
しっかりと縛りつけられた。両足
先は床から離れて全身が完全に宙
に浮いてしまった。軽量でマゾ性
のモデルだからこそ出来る離業。

床柱宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村洋子 略号(ろへ)

瘦身を床柱にぐるぐると胸から

胴、膝頭、足首と括りつけられて
完全に宙に浮かんだまま正面向い
て晒される女体。全身を締めつけ
る緊縛感に苦悶の表情が漲る。

開股々間縛正面

大手札二枚一組 三〇〇円
山原清子 略号(ろほ)

麻縄による全身を縦に真二つに
割る強烈な股間縛りの上に更に両
膝を八の字に開かせ両足首を括っ
た縄を左右に引っばって後手の縄
に連結した凄惨な縄目のむごさ。

二女連縛責模様

大手札十枚一組 一〇〇〇円
大塚・山原 略号(ろそ)

後手高小手に厳重に縛り上げ
た二女の縄尻を連結して、いたぶ
り続けると、両足だけは自由にさ
れているので、いたぶりに対して
奇妙な姿態が交錯転々とする。

二女連縛煩悶場面

大手札十枚一組 一〇〇〇円
山原・大塚 略号(ろひ)

縛られた二女の上半身は高小手
手に厳しく只自由な四本の足だけ
が空を蹴って悶えぬき、後手を連
結した縄がぎしぎしと悲しいきし
めきの声を放つ二女連縛の姿態。

股間縛刺青競艶

大手札三枚一組 三〇〇円
山原清子 略号(ろさ)

背中刺青をいっばいに見せて
麻の太縄が双丘に陥没する見事な
股間縛りと刺青の競艶は、むごた
らしいサジスチックな連想を画面
いっぱいにふりまいていく。

股間縛正面表情

大手札三枚一組 三〇〇円
山原清子 略号(ろす)

豊胸をくびれる程縛った麻縄が
身体をタテに割り裂く微細の縄目
の行方を正面と背面から大写しに
よって鮮鋭なレンズの眼を通して
いきいきと描写しました。

喰込む股間縄目

大手札三枚一組 三〇〇円
山原清子 略号(ろせ)

肉づきのよい肌をまるで俵をく
びるように区切った横縄にプラス
して縦縄が身体を割った有様を側
面からのカメラアングルで前面背
面の様子を同時に捉えました。

女レスリング寝業

大手札八枚一組 一〇〇〇円
東浦・大塚 略号(ろわ)

晒の六尺褌一本の両嬢が、プロ
レスのルールに従って大胆に、奔
放にマット狭しと荒れ狂うレスリ
ングの寝業の攻防戦。双方共真剣
に興味を以って相争う数場面。

女斗美争闘シーン

大手札八枚一組 一〇〇〇円
大塚・東浦 略号(ろか)

裸女二人がなりふり構わず、こ
こを先途と掴み合い押さえ込み
合う女体の躍動美となまめかしい
エロチシズム。押さえる者も下
なる者もナマの裸身を晒けだす。

女相撲取組場面

大手札六枚一組 一〇〇〇円
大塚・東浦 略号(ろぬ)

相撲をきっちりとし身につけた
両者が十二分に練習を続けた上
で合せにより、一方が仕手とな
りがっぷり四つに組んで激しい攻
戦が繰りひろげられます。

女相撲実戦場面

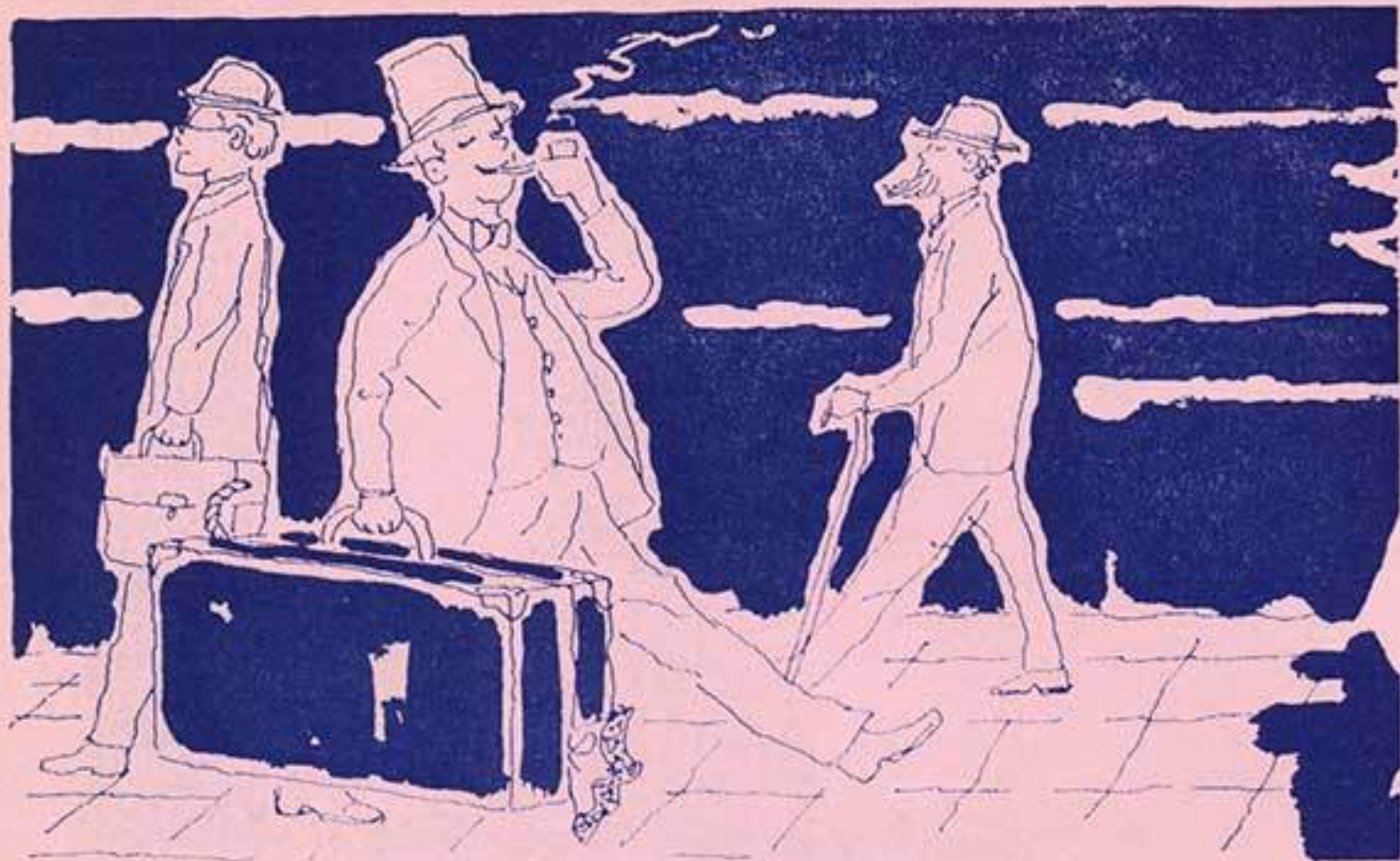
大手札六枚一組 一〇〇〇円
大塚・東浦 略号(ろお)

機が熟したところで、お互いに
相手を物の見事に倒さんものと懸
命になったチャンスを見逃さず、
早いシャッターで次々と撮影し
いく実戦的な興味のある場面。

女相撲投業場面

大手札六枚一組 一〇〇〇円
大塚・東浦 略号(ろり)

力の籠った裸身、躍動する二つ
の女体が四つに組んで投業を放
つ瞬間に、予想もしなかった美し
さで輝くように感じられる女相撲
の魅力溢れるエロチシズム。



奇譚クラブ 12月号 目次

◇奇クサロン.....編集部選.....(9)

○ひかり2号の車中で.....編集部選.....(9)
 見る鼻責.....編集部選.....(10)
 乃探郎(11).....編集部選.....(10)
 小妻容子(12).....編集部選.....(10)
 通信.....編集部選.....(10)
 地英之介(14).....編集部選.....(10)
 新英之介(14).....編集部選.....(10)
 集(18).....編集部選.....(10)
 三原(20).....編集部選.....(10)
 2120.....編集部選.....(10)
 切腹(20).....編集部選.....(10)
 陽通(20).....編集部選.....(10)
 著.....編集部選.....(10)
 室井重砂路(2424).....編集部選.....(10)
 〇或る期待と希望.....編集部選.....(10)
 徳山庄一(24).....編集部選.....(10)
 〇僕(23).....編集部選.....(10)
 〇奇ク(23).....編集部選.....(10)
 〇アンタジ(23).....編集部選.....(10)
 〇愛(23).....編集部選.....(10)

〈本文〉

△扉.....邂逅と別離.....編集部子.....(25)
 △手記▽私論「エス・アンド・M」.....保藤 久人.....(26)
 「真夏に感あり」男はみんな狼か.....川崎 進一.....(32)
 踊子のお腰.....牧 高志.....(34)
 木戸川健氏の耽美な生活.....木戸川 健.....(40)
 世相診断室(最終回).....木戸川 健.....(46)
 責道具とアルバムと.....
 「マゾヒスト・古川裕子」メモ.....久我 庄一.....(48)
 △御厨番秘聞▽夢の、また夢.....芳野 眉美.....(54)
 SMカメラ・ハント.....続美木乃々子の巻.....辻村 隆.....(60)
 「クリス・ラプソディ」.....山口 広.....(74)
 読者原稿 善子の回顧.....

初 陣(悦唐絵灯籠その十五).....万田 不仁.....(78)
 痴人の糧「洗礼」.....山本 一章.....(84)
 耽美ファンタジー「でかだん」.....夜乃 探郎.....(88)
 嗜虐の歴史(ソバイの記録より).....三原 寛.....(91)
 続・妊娠腹観賞会.....高野 原美.....(94)
 耕土散筆 落穂拾い(その三).....保藤 久人.....(102)
 KK時評 論壇ヶ原に伏兵出現!.....橋 行司子.....(110)
 心傷たむ遍歴.....西条 操.....(114)
 (続コンピエーヌのイヴエット看守)
 唯一の体験「洋子のこと」.....山口 広.....(111)
 浣腸の方法 H診療所にて.....宮辺紀美子.....(114)
 「私の心境」探郎でなく私のオシヤベリ.....夜乃 探郎.....(116)
 秋色の中での雑感.....保藤 久人.....(118)
 「ア・ロハ」.....木戸川 健.....(153)
 奇ク・フィクション劇場
 「探郎SM版・パノラマ島奇談」.....夜乃 探郎.....(156)
 雲は天才である.....木戸川 健.....(162)
 ガン作・マニアのノート
 濡れにぞ濡れし.....芳野 眉美.....(164)
 アリアドネ(希臘神話の再編成).....黒渕 嬰一.....(172)
 赤裸々な告白記 夏彦蛇行録.....堀 夏彦.....(191)
 読者通信.....編集部選.....(216)



ひかり2号の車中で

編集子

急に思いついて上京することになった。うまく用件が片づけば日帰りしよう、と、起きぬけに顔も洗わずに鞆一つをぶら下げて地下鉄の人となった。始発の地下鉄に乗ると新大阪六時発のひかり2号に充分間にあう。洗面をすませて座席に落着くと、六時きっかり車は滑るようにホームを出た。

朝モヤをついて大阪平野をひた走りに驚進する。ビッフェにあるスピートメーターの針は、丁度二〇〇を指している。トーストとコーヒーで簡単な朝食をとる。座席に座っているときは、そう感じない

のと、「召し上りません」と予想通り言葉がかかってきた。「ああ有難う」と差し出されたチューインガムを受け取るとき、一瞬、相手の指先を見た。これが悪魔のようにとがった爪先で真赤にマニキュアしていたら、用心しなきゃいけない。彼女の爪は染めていなかった、どころか少し荒れていて、自ら炊事をしている手と睨んだ。私は安心して、半分包紙をめくってくれてあったチューインガムを口にほうり込んだ。

それから私は私も食べる方が忙しかった。チョコレートにドロップにキャラメル。幼稚園の遠足なみに彼女が差し出してくれるお菓子を次々と頂戴していた。私が何にも問わないのに、彼女は自分の身上話を語り初めた。館林に住む実父が病氣なので見舞に行くのだそうである。幼稚園のとき京都の叔父の家へ養女にきて、以来ずっと京都で大きくなり大学を卒えてから好きな商業美術を自宅で作っているというのである。

そこで私は雑誌の挿絵やカットが描けるかと訊ねたところ、挿絵はやったことはないがエッセイのカットぐらいなら描けると言う。そこで目の前にある八快樂主義の哲学Vを見せて、その中にあるカットを示して、こういった耽美的なものはどうだろうか、と言ったところ、彼女の淡くルーージュを塗った可愛い唇から、サド・ボーдрール・ワイルドといった言葉が次々と飛びだしてきたのには驚いた。私が詳しく説明するまでもなく谷崎潤一郎の作品のようなムードなんですネと念を押された。サロメのお盆にのせた生首という言葉聞いたとき、私は思わず知らず心の中で八話がわかるネVとつぶやいていた。

最初顔を見たときは二十二、三才ぐらいと判断したのだが、話を聞いていると、もう二つぐらい上かもしれない。とにかくカットを描いてもらうよう依頼する。できるかどうかわからないが、書いてみようという口約束を得た。彼女の筆になるカットが本誌を飾る日があるかもしれない。

八分遅れて列車は十時八分、東京駅に滑り込んだ。お蔭で私は快樂主義の哲学を読むことが出来なかったばかりか、参考にするからと彼女に借りられてしまった。どんな試作品が送られてくるか、それを私は楽しみにしている。



嗚呼、鼻、鼻、鼻……

映画

「花と蛇」に見る

鼻責

藤村若葉

十一月号にも掲載されていたが、団鬼六氏脚色に依る「花と蛇」の映画を観賞した。不満足な点も多くあったが、映画のラストシーン近くにサジスチックな女性がヒロインの静子をつ縛る様に命じ、男二人で裸にされたヒロインをつ縛り上げてゆく。そして縛り上げた静子の鼻を拇指でなんと鼻責めにするのである。映画史上、私が観る限りでは初めての鼻責めシーンである。静子の髪を掴み、顔面を上向きにし、男の拇指がゆっくりと鼻に近づき、やがて静子の鼻の頭をグッと天井に向け、時々彼女の鼻の穴に男の太い拇指が入り込んでゆくのである。その度に、可愛い顔をしながら静子の口から呻き声が洩れ、かなり強く鼻を押し上げると、彼女は嫌々をする様に頭を左右に振るのである。

唯、カメラの位置が静子の鼻を側面から写していたため、鼻の穴の変化を見ることが出来なかったのが残念である。それでも彼女の鼻を横から見て相当にそり反っていたから、もし真正面から見ればノビ切った鼻の穴をつぶさに観賞できたであろう。ともかく、予期せぬ鼻責めが「花と蛇」の映画に出現したことに、鼻に魅入られた私の心は躍っているのである。団鬼六氏に感謝せねばなるまい。その他に、静子の耳をつねたり、無理矢理に酒を飲ましたり、バナナを口中にねじ込み猿轡の味を出したりして、多種多様な制約の上に、あれだけの作品を創り上げた熱意に我々は感謝せねばバチが当たるといふものである。さて、十月号の「SMカメラハント（山本阿津子の巻）」息詰まる

刹那に酔う女」の文章中、鼻に関連した部分がある。たとえば、「口をこじあけて押し込んで、嵌孔と口を塞がれて、彼女は辛ううじて洩れ入る微小な空気を呻き喘ぎ乍ら呼吸している……云々」「私はその刹那を承知して、握っていた裁ち鋏で鼻の先端の紐をパチンと切り、ぐいと嵌孔を力任せに引き下げる。鼻孔は極度に拡大して瀕死の金魚さながら、鼻翼を大きくうごめかしながら、空気を貪る様に吸い込んだ……云々」などは鼻責めの作品ではないが鼻に強烈な魅力を感じている私にとっては、容易にその時の阿津子さんの鼻孔の状態が察知出来るのである。

苦しげに鼻の穴を拡大し、黒々とした神秘的な穴を辻村氏の前に呈している阿津子さんの様子を想像しながら、私は心を躍らせている次第である。

十一月号は久々に湯谷照夫氏の鼻に関する小作品「週刊紙に表れた「女優の美鼻学」」である。氏は常にユニークな角度から鼻を眺めていられる。飛行機内に於ける行動等は、美しい鼻に魅せられている人間以外には、まず考えられ

編集部だより

○山原清子を囲む第二回座談会も盛會裡に無事終了。山原清子後援会の行事として彼女の未完成の刺青を立派に完成させてはどうかとの意見があった。青木順子の後援会は折角の辻村隆氏の提唱にも拘らず彼女の一身上の都合で途中立消えになったのは残念である。

○山原清子に引続いて東浦ひかる大塚啓子などの後援会を作ってはという意見も散見されるが、果たして如何なるものであろうか。先日女相撲の撮影で大塚啓子、東浦ひかる、木村洋子の三名を一室に集めたが、お互いにきやきやと騒いで女三人寄れば何んとやらで、相当賑やかであった。

○大塚啓子といえば先月号のこの欄でパンティの穿き古したものとその着用写真の入札に言及したところ、早速第一回の入札者があり六枚全部譲ってしまった。但しその後、彼女は汚れた古いパンティを漸次提供してくれるとのことなので、枚数に限りはあるが入札の上予約された方々には、お送りできるだろうと思う。

ない面白さがある。

週刊文春の「女優と美学」は私も一読したが、湯谷氏同様痛快であった。尚、十一月号九七頁のカット写真も楽しい。山原清子？の鼻は前々から美しく思っていたがこのカット写真の鼻責めは、彼女の鼻が美しいだけに、私の心をゆさぶる。八の字型に上向いた山原清子の黒々とした二つの穴は、私

『探郎さろん』

坊ちやん様

私の十一月号に掲載された『小説・芳野眉美』をじっくり読んで頂けば八ガン作・マニヤのノートV十一月号「A十月号への返書」の私へのよびかけの答えはある程度、ナットクされようと考えますが、なお一言述べさせてもらおうと（昭和二十七八年頃の私と、現在の私と、どう興味があるのか）について）

——吉原の夜の街をいどるネオンの世界を出た八女を知ったVその男には、まるで肉体と、あの

にサジスチックな血を湧きたたせる。奇クサロンにある城野道一氏の「女を責める楽しみ」にも直接鼻責めの描写はないが、それに類似した個所がいくつかある。

「吸った煙草の煙を全部二つの鼻穴から出すように命じた。セーラー服の女学生の二つの鼻穴から白い煙がもうもうと出た……云々」

「太いキセルをくわえて無理に煙

つんと鼻をつく液体が別個の生物のようV（小説・芳野眉美八十一月号V参照）のデリケートな心情が、現在までにどのように変化したか？（道は違いますが、私は女の心を求め肉のみ知らされた過去を持つ）もっとハッキリ言えば、実存主義作家であろうクリスチャン作家・椎名麟三氏は宗教によつてユーモアをつかみ、絶望からの脱出の作品的モチーフに（ユーモアを）応用している。

あなたは神酒的美学に、多分昭和三十七年七月号あたりからか？ユーモアを入れはじめた。それは宗教的でもない、哲学的でもない。ハセックスVそのものから

草を吸わされている姿が、責味をそそり、特に鼻穴から白煙をふき上げながら引きたてる女学生は、一段とショッキングである……」

私も美しい鼻の穴から苦しみながら煙を出している女性には興味を感じる。しかしながら、美しい鼻に直接煙草を押し込んで責める方が、もっと楽しいのである。

割出された人生観でもある。

既成的モラルから見たとしたならば、悲劇よりないアブ的な世界に、あなたは徹することによってユーモアをつかみだした。現在はそのユーモアにどこかむき出されたコンプレックスが感じられる……？

あまりにも人間的な芳野眉美氏の奇クを舞台としたドラマの流れは（幻と神酒党という違った世界はあっても）同じニヒリストであり人間として、私は共感と反発と興味をもたないわけにはいかないのである。御諒解を——。

赤シャツ

○既刊号にて予告しておいたKK会館建設の件、実は本誌の愛読者で某社の社長が愛読者集合の殿堂としてその費用の大半を負担するからという申出があり、先ず建設用地を確保されたいとの要求があった。然しその後折柄の不況のため、会館建設の話も一頓挫をきたし、最近に至り中止のやむなきに至った為ここにお知らせしておく。

○最近の本誌の内容充実について喜びや激励の便り通信を多数頂戴している。改めて事新しく誌上に掲載しないでいるが、昭和二十七年頃よりの愛読者で当時の特別会員証のコピーを送ってこられたのには一入なつかしく思った。現在はその頃の大冊にも決して劣らぬ内容の豊富さを誇っているというのだが、どうだろうか。

○本誌がA判になってからでも、すでに百数十冊発刊されたことになる。それらを全部集めたなら此の種資料の一大エンサイクロペディアになるだろう。古書店を漁ってみて、よく分ることだが、こういった文献資料を過去に求めるとき、その僅少なには全く驚くばかりである。特異なものだけに本誌の稀少価値も馬鹿にできない。

サロソ楽我記

(第十八回)

辻村 隆

誌上論争は花盛りである。私は専ら実現派。過日、夜乃探郎氏より御恵送して戴いた、ナイロンの斑らの紐を使って、このフォトをカメラ・ハントに掲載し、些かなりとも彼の御厚意に酬いたいと、九月上旬、美木乃々子さんをわずらわし実現した。彼女とは『拷問刑罰特集グラビヤ』撮影途中斃れて一別以来です。これは改めてカメラ・ハントで詳細に書きますが、箕田氏を通じて、夜乃探郎氏作成の斑ら紐緊縛のフォト数葉、夜乃氏宛贈呈してもらう様依頼しておきました。私のいささかの気持、お受取り下さい。

× × ×
 輝マニアなら一見の映画が、大映の『続兵隊やくざ』である。軍隊の風呂場のシーンで、勝新太郎と芦屋雁之助、小雁の全裸シーンが延々とつづく。越中輝を、後姿の全裸の勝が、輝をしめるシーン。慰安婦と同衾する下士官の隣室で、独り悶えて転げ廻る輝一丁の勝新の悶々のシーン等男気たっぷりのお色気が盛り沢山である。戦

場のお守りとして、勝新の大宮一等兵が、小山明子扮する白衣の天使に、髪の毛ならぬ、もう一つの毛を欲しいと頼み、別れる日、さりげなく塵紙に包んでそっと投げりカットは、小山明子の羞じらいの大写しが、実に見事。こんな面から見ると、この『続兵隊やくざ』結構面白かった。

× × ×
 カメラ・ハントの材料が、この一夏中に随分溜った。毎月一つ発表して行くと、夏の物語が冬になりそうで嬉しい悲鳴、ここ暫らくカメラ・ハントは欠号しなくとも済みそう。

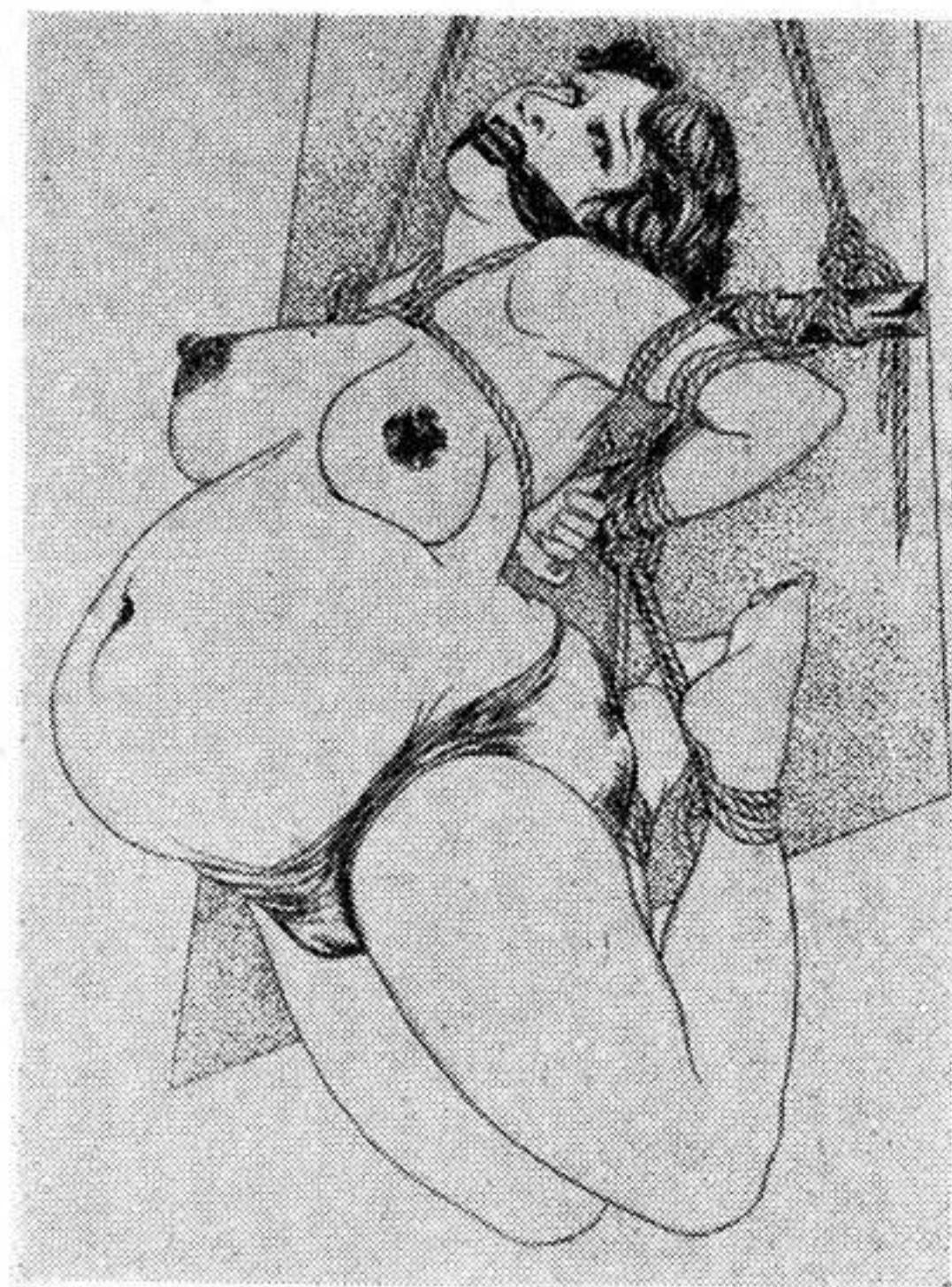
× × ×
 四国に三泊の旅をして、その途中ふと拾った、多度津の蛇娘。お盆過一泊で出掛けて静岡のU氏宅での伊藤晴雨ばりの責めフォトをとった想い出。鼻責版夫婦善哉の増田夫妻と、お逢いして、鼻責めぬきのクリスタール一辺倒のフォト。前述の美木乃々子とのプレイ等かなり収穫があった。

× × ×
 友人のM氏から連絡あって、大

阪府下の堺郊外で、男許りのSM友好クラブがあって、誘われたが、そのうち一度探訪に出掛ける予定である。会の性質上、その所在地は明らかに出来ないが、M氏の話によると、常に五人ぐらいのSM会員が常住していて、土曜日の夜など、十数人も集って、SMプレイは花盛りと謂う。相当強烈なものらしく、逆吊りも一時間程度吊り下げておくというから、これは本もの。内訳は、十中、女装五、M三、S三位の比率らしいが、会員で愉しんでいるらしく、確実な

紹介人あれば、入会出来るそうです。会員は全裸に輝着用。SMプレイは屢々夜から深更、夜明けまでもつづくというが、スタミナ不足の近頃の私、少々おそれをなして遅疑逡巡している。

× × ×
 前号この欄で紹介した『悦楽』映画の方は予想通り失望落胆。SMシーン皆無、原作のイメージ零。サジスト女性登場の件りは全部オミットしてあり、スチールではマゾ女性の方は謳ってあるのに、内容には、それらしいシーン



妊婦逆海老吊り

小妻容子

『Japanese Nudes』のカメラマン、ニコライ・ディス氏が日本娘のヌード・モデルスカウトの結論として、「日本娘がモデルにかなり心やすく応じてくれた理由は、まずおカネ。世界中、どこかの女性でもおカネのきらいな人はいない。次に虚栄心、ボクが前に使ってい



愈々<妊婦フォト> の撮影可能か

編集部

たモデルより、あなたのほうがずっと美しい。といったセリフが常に最適だ。三番目に芸術論。女性の裸は美のフォルムとして最高のものだということを女性はいともたやすく信じる。そして好奇心、この好奇心をみたすために、日本の女性は、かなりのところまでい

は、タバコの火を足におしつけるワンカットで片附けてある。大島の渚のコンチクショウと怒鳴りたくなかった。高級エロダクシオンものに過ぎないとは噫々！。私は見ていないが、映画『花と蛇』を期待して見ていった人の気持が分る。映画は所詮、原作の冒読者である

うか。

× × ×

九月二十七日、山原清子さんの第二回懇談会開催。第一回の出席者六名と新規の会員八名の計十四名で終始なごやかに歓談。美柳輪生の参加を得て、その凄絶なるM振りを見、彼女の女王ぶりも堂

に入ったものだ。代って会員諸氏のSの面々が彼女を責めたが、一人一人そのタイプが違っていて興味をもった。いずれ、会場を、東海、関東方面にも移し、遍く山原嬢を後援して貰いたいとの編集長の意見だった。第三回の開催日時は未定だが、次回は撮影会になり

そんな気配濃厚である。いずれ山原清子さんとの対談で、彼女の在り方など精しく書くつもりでいるが、締切り間際なので、報告程度で一寸書添えました。
〔註〕山原清子、辻村隆の対談はいずれ本誌上に載せる予定になっております。

く、ということですよ」と、うがつたことを述べている。

さて、待望久しい妊婦フォトだが、この方はその性質上、ヌードモデルのように、若い女を裸にしでというように簡単にいかない。きわめて困難であり、稀少価値がある。それでいて、第一のおカネについては、なにしろ限られたマニアが対象なので市場性がない。何万冊何十万冊と発行できるヌードグラフィならいざ知らず、たかだか十数名のマニアを相手では、その方の見込みは絶望だ。

ある熱心な妊婦マニアの言、貴誌作成の妊婦フォトは全部頂戴いたします。但しマニアに免じて贈呈して下さい、と。例えば費用はいくらでも負担するというスポンサーでもつけば、いいのだが、今のところ、そういった奇特なマニ

アは見当らない。

今まで二、三予約をした人もあるが、それも妊娠したら、という条件では急の間に合わない。しかし今度、山原清子さんの友人で今春結婚した女性に話をしてもらったところ、只今妊娠三カ月で報酬如何ではOKだという。

うまく交渉成立して「若妻妊婦のフォト」が本誌写真部の手で撮影できるかどうか。とにかく、山原清子さんの手で密接な連絡を保ってもらっているのも、いずれ吉報をお知らせできることと思う。

安原さゆり夫人の第二回妊娠のときのように、本誌から約束の日に出向いたときは、すでに入院中というようなことは残念である。ちなみに、安原氏が夫人の出産直前に撮影したフィルムは、空回りのため失敗した由。

映画通信

最近の縛り映画から

東山映史

新東宝映画など独立プロのエロダクション作品は相変わらず、おピクムードいっぱい、縛り、拷問シーンなど、エログロの画面でその通の愛好者を喜ばしている。最近の緊縛シーンやサジズムシンの作品をとりあげてみよう。まず高尾ゆり子の「性(さが)に泣く女」。これが、後手の緊縛シーンで電気責めにあうというシーンを十分楽しませてくれた。まず、ファースト・シーンから強盗に押入れられ、そして、後手に縛りあげられる。その上、夫の前で暴行される。ついで、アルバイト学生との山荘での夫の仕掛けたワナで離縁される。その後釜には自分の妹が入る。そしてバーの女給など、おきまりの転落の詩集。そこで親切そうなバーテンの口にしたのが間違。そのバーテンの三百万円の借用証文の抵当に、その親分の所へつれ込まれる。

山荘の一室に檻禁され、二人の乾分に着物をはぎとられ、はだかにされる。親分は「縛れ」と命令する。そして、後手に緊縛され、乳房の上を三重にぐるぐると回わされ、後手にしっかりと縛りあげられ、ころがされる。そこで、電気アンマ機のようなもので、縛られた乳房の上から全身を責められ「アアアア」悲鳴をあげる。両足も縛られており、両足をもちく。背中できつちりと縛られた手の指を開いたり閉じたり、その苦痛をのがれようとがく。長いシーンである。「それでよし」と親分は乾分を外に出し、それから、飲んでいたブランドーを彼女の身体にかけ、それをペロペロとなめまわす。性的不能者の変態的愛撫というところだろう。最後は逃げ出し、山のアルバイト学生と一緒になるといふ。

また、「愛撫」がムチ打ちシンの連続である。ヌード・モデルからお手伝いさん、そして、ホステス、その社長から月三十万円でかこわれる。それだけに、何でも「はい」である。社長室の隣のベッドルームには、ムチや色々の縄がぶらさがっており、一寸したサジスチックなフニキをもって

〔読者投稿〕

木馬責の女

加地英之介



革の服

山口 広

△新聞の切抜から▽

婦りに駅で買った『大阪スポーツ』に嬉しい記事があった。(九月九日付)

チャネル007△おしゃれ▽

ことしの冬は、レザーウェアがものすごい流行になりそうだという。昨年あたりから皮革服オンリーをつくる会社などがどしどし現われ、流行らしいムードを盛りあ

げていたが、各メーカーでは意識的に製造をフル回転、九月ごろからラッシュで売りはじめるという。している。

レザーウェアによるファッションショーもこのところ多くなり、ほとんどが高級ものだという。人気があったのはカーフスエード(子牛の皮もの)でタウン用の

いる。「お前の女体は美しい。それを余計に美しくしてやる」と、全裸にし、オリブ油で全身をマッサージする。そしてムチ打つのである。「ピシピシ」というムチ打ちの音、彼女はもたえる。縛りはないが、ムチ打ち愛好者にはたまらないだろう。全身には赤くはれ上ったムチのあとが縦横に走っている。

香取環の「赤いしごき」が、時代劇のすさまじいもの。町家のお

かみが夫殺しの罪でハリツケになる。その前の捕縛シーンから、非人にいじめられるシーンなど、豊かな肉体と乳房で楽しませてくれる。牧和子の「美人局（つつもたせ）」は、着物をぬがされるシーンなど、カラーで浮世絵的のシーンは見せるが縛りシーンがないのがさびしい。東宝の「法界坊」で、岡田茉莉子の美しい縛りシーンはさすがに情緒的で美しい。

〔次号（新年号）掲載予定作品〕

○SMカメラ・ハント「讃岐の蛇娘」……辻村隆○八神酒Vを酒の肴にした酔人酔談……木戸川健○「久我庄一」メモ……久我庄一○耕土散筆「落穂拾い」……保藤久人○台湾の女……江間和男○「花の女斗美たち」……奮斗士好太○女性の羞恥心を衝く……三木徹朗○痴人の糧「旅愁」……山本一章○ポケットブックに発見したM的小説クライマックス紹介……河津安春○小説「奇譚クラブ編集局」……夜乃探郎○連載小説「続篇花と蛇」……団鬼六○或る真面目なたわごと（乱歩作品からマゾフィ

ズム的空想など）……須渾朔○アリアドネ……黒淵嬰一○感じるのと八田代俊夫氏Vの「蚯蚓のたわごと」を読んで……保藤久人○続「マゾヒスト古川俗子」メモ……久我庄一○嗜虐の歴史……三原寛○「心傷たむ遍歴」……西条操○漫筆「帯の魅力」……牧高志○映画「コレクター」に寄せて……湯谷照夫○断続の空間——エミ様に……三原寛○A・F・実験告白V五彩の虹の水玉はしお辛かった……夜乃探郎○読者通信の分析ハニアの声の探究……長田実○告白V「見られたい」という欲望……河上恵子○その他告白、読物、小説など多数準備中——。

ジャケットにはラフさとやさしさが表現されてステキというわけ。ただしお値段のほうは二万円以上で困ったもの。

これと似てるものでシープスキン（羊皮）もあり、これはホーム用にモテるらしい。

ともかく嬉しい。レースのノースリーブも悪くない。だが「革の服」は最高だ。早く寒くなれ。そうしたら、街に、乗物に、「革の服」が美しい女性の体を包んで流れるのだ。

九月頃から売り始めるとか、さり気なく婦人服売場をうろついて見るか。恥しさをこらえて。

「レザーウェア」のファッションショーはいつ、どこで開かれるのだろう。誰か教えてくれないかな。「革の服」の記事を見ると、あの拙作「革の盛装」を想い出す。去年の暮から、朝夕のバスの中で時々はすぐ眼の下に、革の服を見、

押し合いながら、ぬめぬめした光沢と、しっとりした手触りに憑かれて、削ったり、書き足したりしながら、あの三部作を書き上げたのを思い出す。あいにく、全部で二十余カ所も削除されたので残念だった事も。

時あたかも本誌に対する風当りの最も強かった頃、「読む雑誌」への脱皮も板についてきた感じがする。編集部が努力が実った感がある。あと二つばかり台風が来て、肌の引き締まる秋が過ぎれば、革に憑かれた人たちのシーズンインだ。今年は、去年以上であってほしい。冬の到来が待たれる。黒、赤、緑、紺、……色とりどりの、ぬめぬめした、しっとりとした輝く、冷たい、暖かい、強靱な革のオーバ―が、スーツが街を流れる冬が待たれる。そうになったら又血が騒いで、革の服をテーマにした愚作が書けるかも知れない。



短 信 往 来

木戸川健先生へ

夜乃探郎より

「小説・箕田京二」十・十一月号とも興味深く拝見。△新劇俳優を軽演劇俳優Vにうんぬんと——大變、十月号のユカイ? な書き振(り)「小説箕田京二」及び「一筆啓上」△とは、舞台の展開も、ぐうーっとペースある「続・小説箕田京二」のムード調に、とまどいを感じました。しょせん、幻の夢男は喜劇役者でけっこうです。奇クの誌上にはかない演技をするヨルノサグロウはピエロ(軽演劇俳優)とよばれ、エンコの空気を青春のものとして育った木戸川先生のプロ級の演出では、道化あつかいされようと光榮の至りです。

(御心配なく)

また、ぼくが、云わんとして表現し得なかった芳野氏観を、ズバリ小説にことよせて△ピエロ。——悲しみをかくして、人を笑わせる。ぼくは、芳野眉美君にピエロを感じるんですよVと代弁して下さってウレシイ。ほんとうにアリガトウ。

△最近、バカな事をする奴が少なすぎる。Vの言は、近頃、珍しい気骨ある言葉をきくものよ。ユーモアとペースまたは諷刺をわからぬ人間どもは、乙にすましてお家大事といわんばかりに、イチャモン付けたがる。イヤニナツチャウね。ぼくもそうだが、木戸川先生だって、これっぽっちも△特定の読者や寄稿者Vと考えたことも、自称したこともないと思います。奇クが死ぬ程好きだから、書いて書いて書きまくり、発表したいんだ。第一、昔もいまも奇クに特定の作者が居たろうか? 辻村さんも、いつも単なる一読者とことわり書をしているネ。——それが奇クの特徴。(だれでもジャンジャン書けばよいのだ) 論争の妥協は、ぼくもきらいです(幻対神酒のこと)。それはそれとして、十一月号・奇クサロン・『雑感』

山本一章氏の一文について、木戸川先生の正しいお言葉をおききたいものです。(実は、いままで、ぼくは、芳野氏と同じく感情的になつたことはありません。ただし、今度ばかりは大感情的に、山本一章氏に大公開状を書こうと思ったが、まてよ、木戸川先生のお声をきいてからと、思いとどまった。

これも「続・箕田京二」ETCを拝読したからです)これは探郎でなく私の文と御理解下さればよろこばしいことである。(九月下旬記)

志村善子様へ

松岡 寛より

志村善子様、再三再四に亘って貴女への呼びかけ、大變しつこい男だと思いでしよう。でも、読者通信で短信往来で、他の人の貴女への呼びかけを読む毎に気が気でなりません。貴女を他の人に取られてしまいうで、貴女のフォトでも発売されれば、それを眺めて慰めも出来るのですが、どうかこの欄で良いお返事を下さい。

街で貴女位の体格の良い女性を見る度に、志村さんはどんな人だろう。丁度今すれ違った女性みたいな人だろうか、そんなことばかり気になって仕事も手につきません。未知の男性と逢って、いきなりプレイをするなど、若い女性にとつては、こんな危険なことはありません。それだけに貴女がたまされはしないかと、そんな心配までするようになりました。

どうか勇気を出して私に逢って下さい。逢えばきっと貴女は首を縦に振るでしょう。お返事をお待

ちしております。
東浦ひかる様へ

山代正代より

読者通信での私の便りに対してお返事を下さりありがとうございます。そして十一月号で新しく分譲品として登場された事を知りました。貴女様の豊富な経験から、以前とは相当に異った雰囲気一杯にみなぎらして素晴らしいポーズを作られているのではないかと期待しております。私も女友達とプレーを数回経験しましたが、この一年音信も杜絶えて寂しい日を過しております。

(ここで改めて申し込むのは失礼かと思いましたが)是非一度お便りを下さいませんか。貴女の豊かな体験談を楽しみに待っております。

長谷川洋子様へ

安達 清より

十月号掲載の読者通信を拝見、毎日繰返し繰返し拝読し、幾度びか躊躇逡巡を重ねましたが、とうとう思い切って、ペンを握りました。

KK誌は昭和二十七年からの愛読者で、生来マゾの性向が強く、若い女王様にかしずき奉仕したいという欲望は片時も脳裏を去る事

はありませんでした。

併し現実には、その様な理解ある女性に廻り合うこともなく夢に過ぎませんでした。

かかる私にとってKK誌は僅かに心を慰めてくれる唯一の憩であったと申せましょう。

そしてそこに私が夢見、理想として描き続けたその尽の貴女様のお便りを発見して胸の高鳴る思いが致しました。

私は身長一六九釐、やせ型ですが頗る健康、一流会社に勤務する三十七才の妻子ある男でございます。残念ながら妻にはMについて理解は困難な事のようにプレイを行った経験はございません。趣味は音楽、写真、ドライブなどで、小さなボロ車で通勤しております。

私は幼い頃からM性向が強く、趣味だ道楽だとは言って見ても所詮最大の悲願ともいうべきMの満たされぬ半生は空しい寂しさを否定出来ませんでした。

身体に傷が残るような烈しいプレイには辟易しますが、若い女王様の奴隷として、縛られたり、玩具にされたり、馬になったり、顔にヒップを載せて頂いたり、汚れたパンティを口に含んだり、特に

ネクタールを吞ませて頂いたりすることが出来たら、私はこの世に生れた幸福に涙を流して喜ぶことでしょう。想像するだけでも胸が高鳴るようでございます。

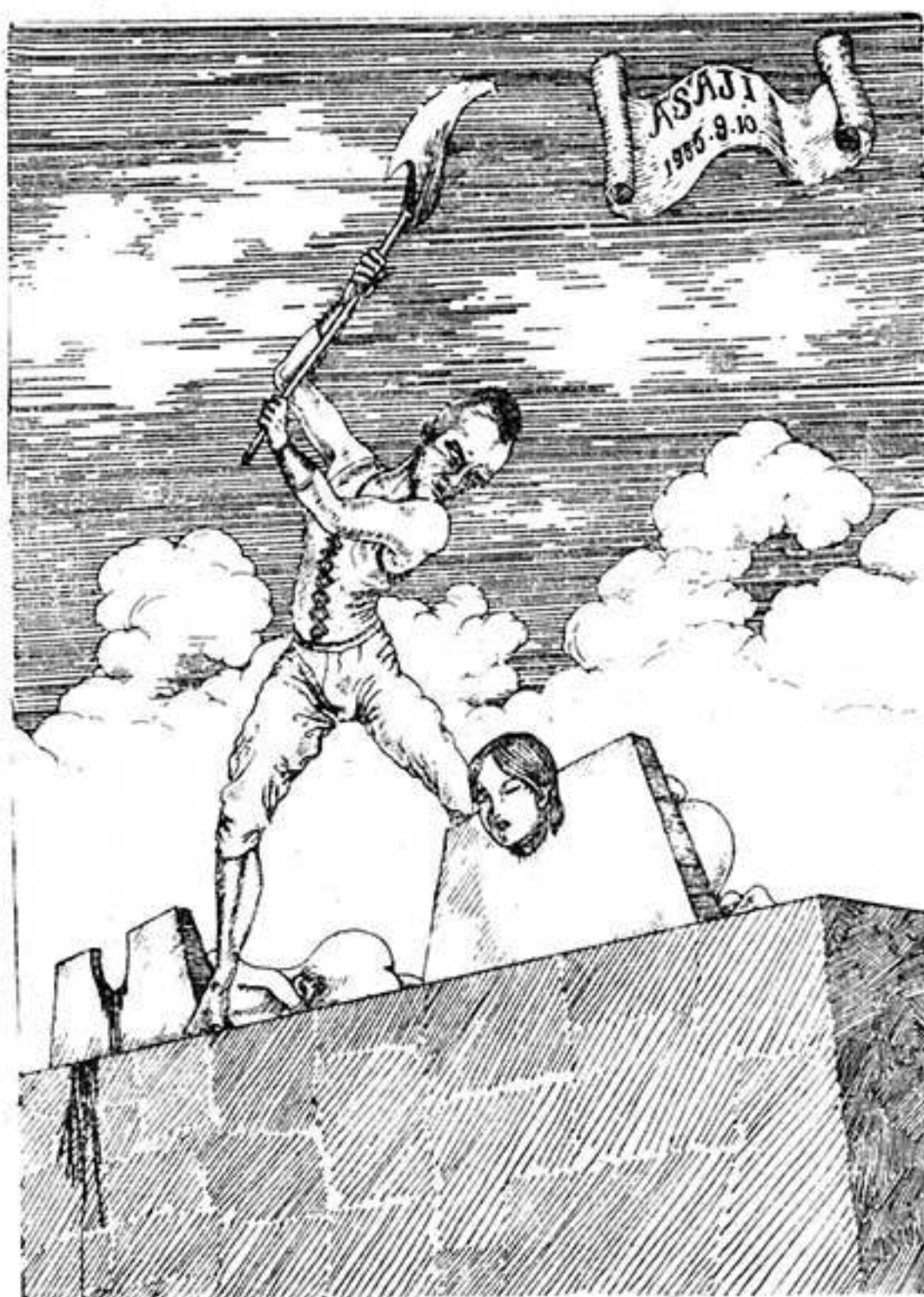
お会いすることが出来たら……先ず私は衣服を脱がねばならないでしょう。奴隷に着物は不必要です。次に後手に縛って頂きます。私が狼藉を働く気遣いはありませんが、ご安心頂くためにも必要です。

若し貴女様がビールを召し上げるようでしたら沢山呑んで頂きたいと思えます。ビールがお嫌いでしたらジュースでもコーラでも充水分をお探り頂きたいと思えます。奴隷の宣誓は女王様のネクタール拝受によって始まります。バスで頭から顔から全身女王様のネクタールを浴びて奴隷の宣誓が出来たら……夢のようです。否、もったいないことです。出来れば一滴余さず吞み込んでしまいたいものです。医学的にも新鮮なものは殆んど有害ではないそうでございます。大昔エジプトでは、それでうがいをし、歯を磨いたという記録すらございます。貴女様のネクタールの中で溺死することが出来たら本望ですが……

＜僕のイメージ画集＞……（室井亜砂路）

「斬首」

断頭台にて今まさに、その可細い首を斬られようとする哀れな少女の美しさ――。



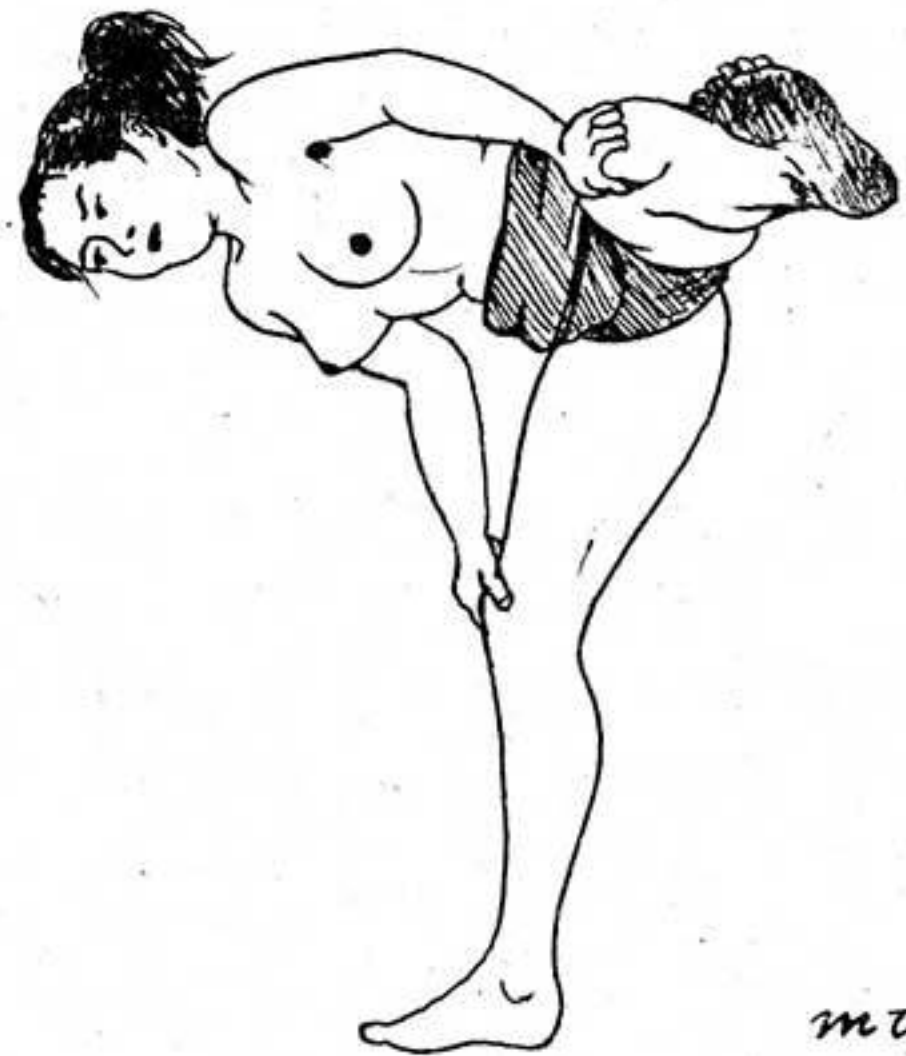
それから奴隷の検分。私の全身を調べて頂きます。勿論つねろろと、蹴ろろと、打とろろと、突こうと、踏んでも、押してもお気に召す尽です。

下着の洗濯やら身のお世話を……携帯トイレ兼痰壺……まだまだ夢は果しなく拡がります。然し何事も女王様の意の尽です。女王様の欲する尽になるのが奴隷の最

大の欲びであり、私のお願いはもとより奴隷の願いに過ぎません。但しどんなことがあっても女王様に狼藉を働くようなご心配はありません。お誓い申し上げます。Mの紳士とはそういうものなので。勿論口約束だけで証拠がある訳ではございませんので、厳重に手を縛るなどの策をとって頂いて結構でございます。

「女の子の禪談義」

高川 敬一



燈台もと暗しとは、この事だろう。歳末助け合い運動で集めも集めたり二百本の禪を、困っている方にあげて下さいと申し出て、地元新聞のトピック・ニュースとして、紙面をかざったのが、吾が温泉のインテリ芸者、お玉姐さんだとは、思いもよらなかった。

温泉旅館の番頭として、日頃親しく口を利いている仲の僕は、早速彼女を置屋に訪れたが、三十才には間のあるグラマー姐さんは、開口一番、近頃の若い者は、禪に縁のないが多いせいとか、とんだらしが無くてねえと初まった、

禪談義をご紹介したい。男性の禪姿で最も魅力のあるのは、ずばり真新しい晒の六尺禪で、赤銅色の筋骨たくましい体にまきつけた奴を見ただけでも、ぼーうとなつてふるいつきたくなる程。越中や水泳用などは全部落第。ましてパンティーまがいの物は、眺められたさまではなく、まあ最低もいいとこね。

女の子が禪をしていけないって事は、勿論ないはずで、真赤なネル地腰巻の下には、何時もちやあんと締めこんでいる。只、体の構造上、前の方につっかかりがなく、

敏感なところを締めあげている為に、晒一点張りと言う訳にはいかない。種々研究したあげく、本絹を黒く染めて、横に廻す箇所は太目にし、股をたてに通して覆う布地をせまくしたのが、きりっとして工合いがよろしく、前のたれをさげないで、まき上げながら左右に分ける風にして、きちんとはさむとの由。

たんすの中から秘蔵品を出してならべたが、錦のものや、麻、ビロード、ナイロン。長さや色彩も各種で、よくも集めたものである。珍らしいのには、女武者が陣中に使用した越中式の変形で、片端を首にまきつける、はなやかで美しいものや、大奥で腰元が愛用したと言われる、特殊な器物をはさんだいささか公開をはばかる逸品など。

バタフライなんて、あれや毛唐用なのさ。大和なでしこの使える代物じゃござんせん。

ところで、単色で濃いのが似合うんですよ。ついでにおがませようかしら、玉代一本でねえと、若い二人の芸者を呼んだ。相当訓練されていると見えて、ぶるんと波打つ弾力充分の、威勢よい日本髪禪姿を、何度も拝見したが、浴室

代理部だより

○只今本誌では八代理部目録Vを別に作成していません。それでもやはり毎日のように「目録」のお申込みが若干あります。いずれ目録の作成が出来ましたら誌上に広告しますから、それまでお待ち下さいますようお願いいたします。

○先月号のこの欄で限定版グラビヤ写真集第七集、第八集、第九集の予告をしましたところ同好者の方々から早く刊行しろとの激励を多数受けました。割付寸前まで準備の進んでいるものもあるのですが、残念ながら今月号の広告には間に合いかねました。

○本誌既刊号の在庫もうんと種類も減ってしまいました。しかも只今在庫中のものでも部数の大変少いものがあります。売切以後になつてからの申込みが意外に多いので一寸申添えておきます。

○臨時増刊号の「花と蛇」特集号や八美3Vなど、依然として未だにお申込みがあとを絶ちません。せいぜい在庫しているうち、ご注文頂ければ有難いのですが。

○折柄御注文下さりながら、住所

でのヌードに見あきしている僕も、強烈すぎる新鮮な魅力に戸まどった。やはり女の子の場合、六尺禪よりも、黒、紫、ピンク等の単色で、食いこむ様な細身の奴が

最高に思われた。いや、実に目がくらんだ。

私に禪を締めさせて呉れる旦那さんなら、どんな苦勞もいといやしませんよと、流し目で笑うお玉



近頃の「表紙」について 夜乃探郎

グラビヤ及び口絵廃止の現在、せめて表紙のみは色刷、SM的な絵によるものを継続されることを望むものであるが（これが白表紙またはグラマー美人がニッコリでは、もはや八無惨Vというより他はない）表紙は、おそらく四馬孝画伯の手によるものと思うが、この半年程に発刊された表紙（五月号から10月号迄）を部屋にズラリと並べ、『四馬孝傑作SM画展示会』と独り名付けて、それらの絵を眺め、初秋の一夜を楽しむのも又、楽しいことである。

孝画伯の貴重なSM画コレクションとなると思う。特に9月号の女斗美あるエキゾチックなものは圧巻だった。ただし色の配合がチヨット同色すぎてスツキリしなくて惜しかった。ワクの中のピンクかワク外の茶の方、どちらかを濃くか淡彩にすべきか――。

同色に近いものを利用した多色刷もアカヌケした方法だが、その場合、原色のみを使用せず、白を混入した色も、ある程度まぜればいっそう遠近感が出てくると考えられる。10月号は、ゴム・マニアのよろこびそうな、又は今はやりの

姐さんの言を拝ちようして、ひとまず引き下ったのだが、次回はどんな事があったても、彼女達の素晴らしい禪姿をカメラに奇クサロンを飾りたいと、心がけている。

のSFを取入れた宇宙時代をおもわせるシャレタSM画であろうが（それともビキニ・スタイルの美女の首のロープをつけ黒衣の男が海に飛び込む所か）カットの絵の部分か外の部分を濃くか、より淡彩に出来なかったものか――。

5月号のソファの上に縛られた美女と紳士による組合せは、裏表紙のダンビラとシルクハットの美女との設定と共にウィットに富んだ構図であったが、特に色の配合がよかった。原色を使っても、8月号の表紙（アクロバットの美女緊縛絵）は、フチに黒が使用された所に心にくい程の素晴らしい深みのあるものとなった。

6月号の表紙は、どうも頂けない。チヨットおあそびがすぎたようだ。表紙としてはグロがかった風になった感がする。四馬孝画伯の一貫して流れるモチーフは、えきぞちつくさを出しているようだが銅版画のよさをお願いしたい。

が抜けていたりお名前がなかったり、余りにも達筆で判読できなかったりするのがあります。何卒楷書で封筒にはっきりお書き願えれば助かります。局留のご指定で発送したのに、お受取りになれない方が時々あります。お受取りに行かれて未到着のときは、更に両三度御足労下さるようお願いいたします。

○待望の八妊婦フォトVが写真部の手で撮影される運びになりますと、六・七カ月あたりから臨月まで月を追って精密な妊婦ヌードの記録写真が完成されるばかりでなく、臨月妊婦の緊縛、切腹、浣腸などのフォトも必ず撮影されることと思います。分譲品としても、きつと素晴らしい作品が多数出来ることでしょう。

○尚、従前分譲して、その後分譲打ち切りになりました左記略号の品只今少しばかり在庫していますから、御希望の方はお申込み下さい。内容値段は以前に広告した通りです。

「にん3」「さほ8」
「によ1」「かき3」「かき4」
「かき5」「かき6」「かき7」
「かき8」「くた」

○別項でお断りしました通り、当分の間八切手代用Vの御送金は御容赦下さるようお願いいたします。



FRAGMENTS

三原寛

「人間を乗りこなす」

こういう標題で、八月二十日付の朝日新聞の記事が目をつけた。二人並んで腹這いになった男の背を踏まえて美しい女性が仁王立ちになった写真もついていて、思わずエキサイトさせられた。水上スキーの女流選手が、男をスキー代りに使用して居るのだが、誠に羨ましい次第で、女性のおみあしの奴隷として、美しい女王様のおみあしに総べてを捧げてお仕えし、

そのおみあしの美容の為の犠牲として踏みにじられる事こそ私の最高の望みである。

本誌のお陰で私は、烈しいサディスティンに一度使用されるといふ体験を得、彼女の尊いおみあしを鞭に脂汗を流し悲鳴を上げつつも、舌の先がしびれて動かなくなる迄なめさせて戴き、そしてうつ伏せの体をそれこそトルコ嬢が懇願されておすおすと踏むのと違って、文字通り踏みにじられ、うつ



三たび

妊婦マニアへのアピール

妊孕美礼讃

瀬沼四郎

秋になり、十一月号もすでに発行されて、今年もいよいよわずから十二月号を余すのみとなった。三月号以降のグラビア廃止——自粛の線に沿って、奇巧が大きく変貌した記念すべき年であったと言えよう。例によって、本年度の成果をここにつづつてみたいと思う。

読み物では二つの収穫——羽鳥水江さんの「子を孕んでいるナルシス」(八月号)と、高野原美氏の「妊娠腹観賞会」(十一月号)がある。十一月号の予告(一五ページ)によれば、高野氏のもの十二月号につづきが載るといふ。うれしいことである。

それに反して、分譲品の方はどうか?

今年が妊娠マニアの当り年になるだろうという事は、すでに早

くから(四月号羽鳥さんの「最近のわたし」)期待され、その後もくりかえし(九月号高野氏の「妊花盛り」や十月号夜乃氏の「今年妊婦マニアの当り年か」など)のべられて来たところだったにもかかわらずまったく実のり少なかったと言わざるをえない。なるほど八月号で、安原さゆりさん二度目の妊婦による妊娠九カ月までの若干の写真は分譲されたが、それも妊娠六カ月のものを含めてわずか十五葉、しかも編集部による撮影はお流れになって(九月号二〇ページ)その後の写真は発表されてない。すでに書いたからもうくりかえさないが、読者の提供により可能と見られた芥川氏ほかの妊婦写真もそのまま、十月号で交渉中と知らされ(十二ページ)

ぶせのお臀の上をぐいぐいと体重をかけて揺り動かされた時は、苦しさで快感が交錯して随喜の涙をこぼしましたし、首筋をぴたりと踏まえられた時は、首の骨の折れそうな断末魔の苦悶と、彼女の足の裏で死命を制せられているというマゾの幸福感に浸りながらも、口から洩れる魂消る様な悲鳴を抑え様もありませんでした。朝日新聞の記事が思わぬ空想を呼びました。

「木暮実千代邸のワン公」

日刊観光の記事で、妖艶な木暮女王の股下に這い込む犬の図が如何にも哀れな自分の姿を再現された思いでした。

この様にして、犬同様の扱いで、

一週間でも飼ってくれる女王様があったら、等と夢想します。

「電車の中で」

満員の混雑で、美しい女性に軽く踏まれたので、慌てて引込め様とするハイヒールの下にこちらも慌てて自分の靴をずらせると、こちらの意図を見抜いたのか、さも軽べつした目でこちらを見据え、今度は思いっきりぎゅうっ、それから一駅間、私の足は彼女のハイヒールの下になった。電車がゆるゆるの苦痛。彼女は今一度じろりと、こちらをさげすんだ様にみて下りて行ったが、こうした場所でさえなければ、その場に土下坐してでも、おみあしへの御奉仕を哀願する所でした。

期待していた妊婦モデルについても十一月号では音さたなし。妊婦マニアにとっては、来月号こそは何かあるだろうと期待させられっぱなしで、イライラの連続だった。妊婦モデルというものは、それほど得がたいものだろうか、とあらためて思い知った次第。

本誌の「女性写真モデル募集」に妊婦モデルをとくに求める旨が記載されるようになったのが昨年九月号から。以降毎月かならずその広告がのらないことがない。一年余募集しつづけて、まだ一人として名乗り出る妊婦がいらないとは、妊婦モデル獲得の困難を思うべきである。もっとも、いつも最後の三行ぐらいにつけ足しのように

に述べてあるので、案外見落されてしまうのかも知れないが。

腹に子を身ごもってグロテスクに膨らんでいる若い妊婦の、白くやわらかい美しい裸身を観賞することは、そんなに無理なことなのだろうか？ さいわい、十二月号が発行されてからでも一九六五年はもう二カ月ある。その間にどうか、編集部の手で妊婦ヌードをとって下さい。できれば、十一月号一七ページにあるように、天然色写真で、妊婦ヌードをとって下さい。奇ク読者の奥さんで妊娠中の人もきつとあるにちがいないのだから、マニアのために一肌ぬいでほしい、と小生は切に希望するものです。



〔読者原稿〕

磔 (ハリツケ) H・K生

短歌「メス犬の歌」 山中冬子

嵐吹く野面の庭に正座して裸身をさらす夜の
明くるまで
海老のごと縛しめられし我が肌に小さき虫の
羽音たて寄る
腹這いてメス犬の尾を着けられし屈辱いまは
楽しと思う
泉水の冷たき水に浸りいて肌いたむ縄ゆるめ
んとする
肌に打つ鞭はひとしお響けども悔りの眼の忘
れかねける

山原清子後援會

第二回座談会開催

△S Mプレイ鑑賞会▽

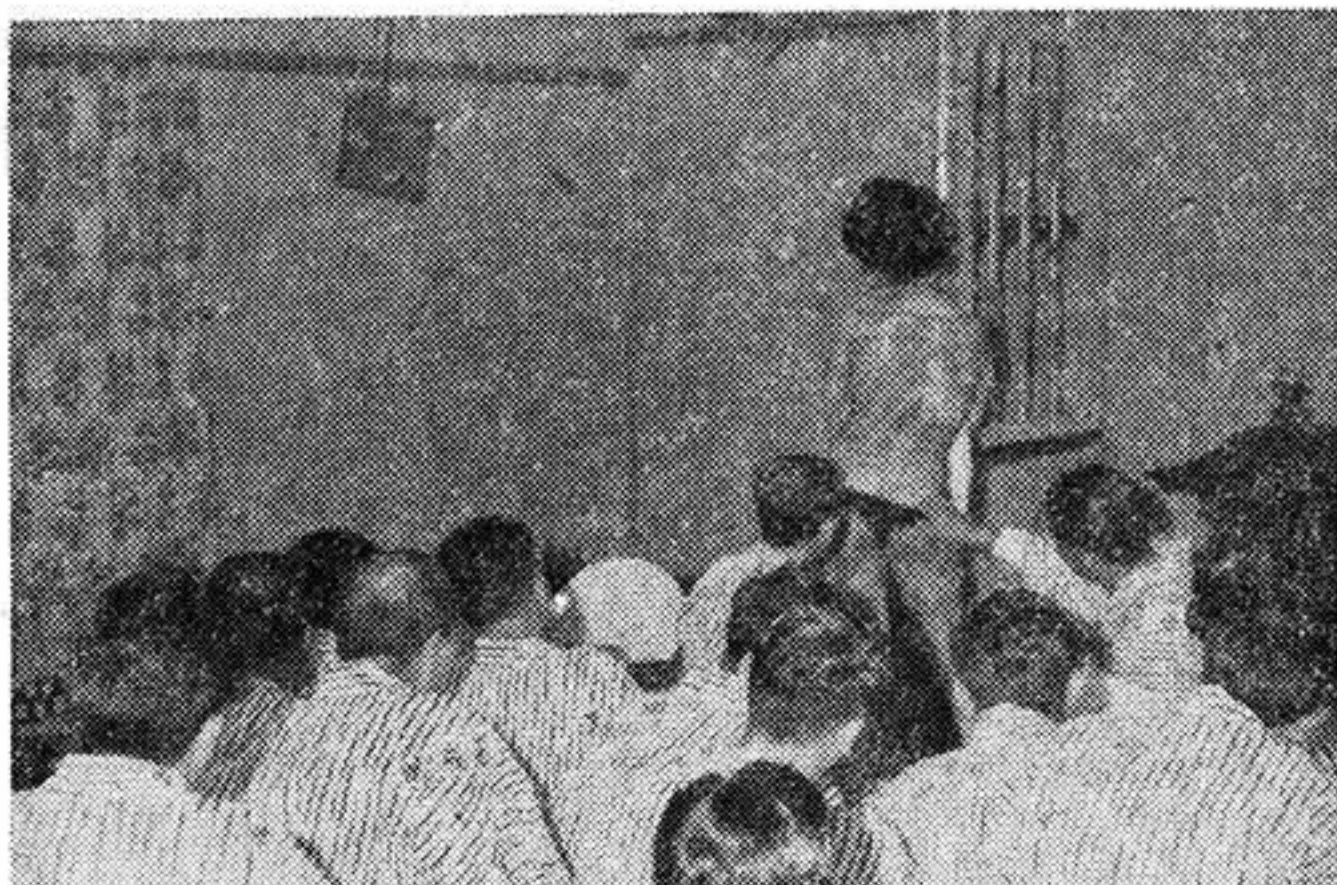
九月二十七日(月)午後二時より大阪市郊外国際観光旅館天兆閣にて、山原清子後援会第二回座談会並にS M鑑賞会を開催致しました。参会する会員十四名それに山原清子、箕田京二、辻村隆の計十七名にて和気藹々のうちに四時間に亘って繰りひろげました。

先ず当所ご自慢のゲテ風呂に入浴したあと、会場に参集。ビールに咽喉をうるはしながら暫く休息しました。山原清子嬢を中心に座を始めてから、例の通り辻村隆の司会で当り障りのない各人の自己紹介から座談に入りました。第一回座談会に出席された方の中で本日都合により出席できなかった三名の方からの伝言を箕田京二から紹介。引続いて山原清子を囲んで会員の方々からの質問やら彼女の回答などが交換されました。

次いで清子嬢の刺青の鑑賞にうつり、京都女斗菊氏の詳細懇切な

る解説つきで一同首を集めて仔細に見学。これは第一回のときと同じですが、前回女斗菊氏の説明の落された箇所を敷衍されました。この時、皆さんの承諾を得て鑑賞中の場面を背後から数枚スナップしました。これが終わってから料理をつつきビールをあほりながら、各人の忌憚のない座談が楽しく続

女斗菊氏から刺青の説明を受ける



けられていました。と、突然、障子が開いて、革褌一本の美柳輪氏が鼻輪のくさりを山原清子嬢に引っぱられながら四つ這いで入ってきました。

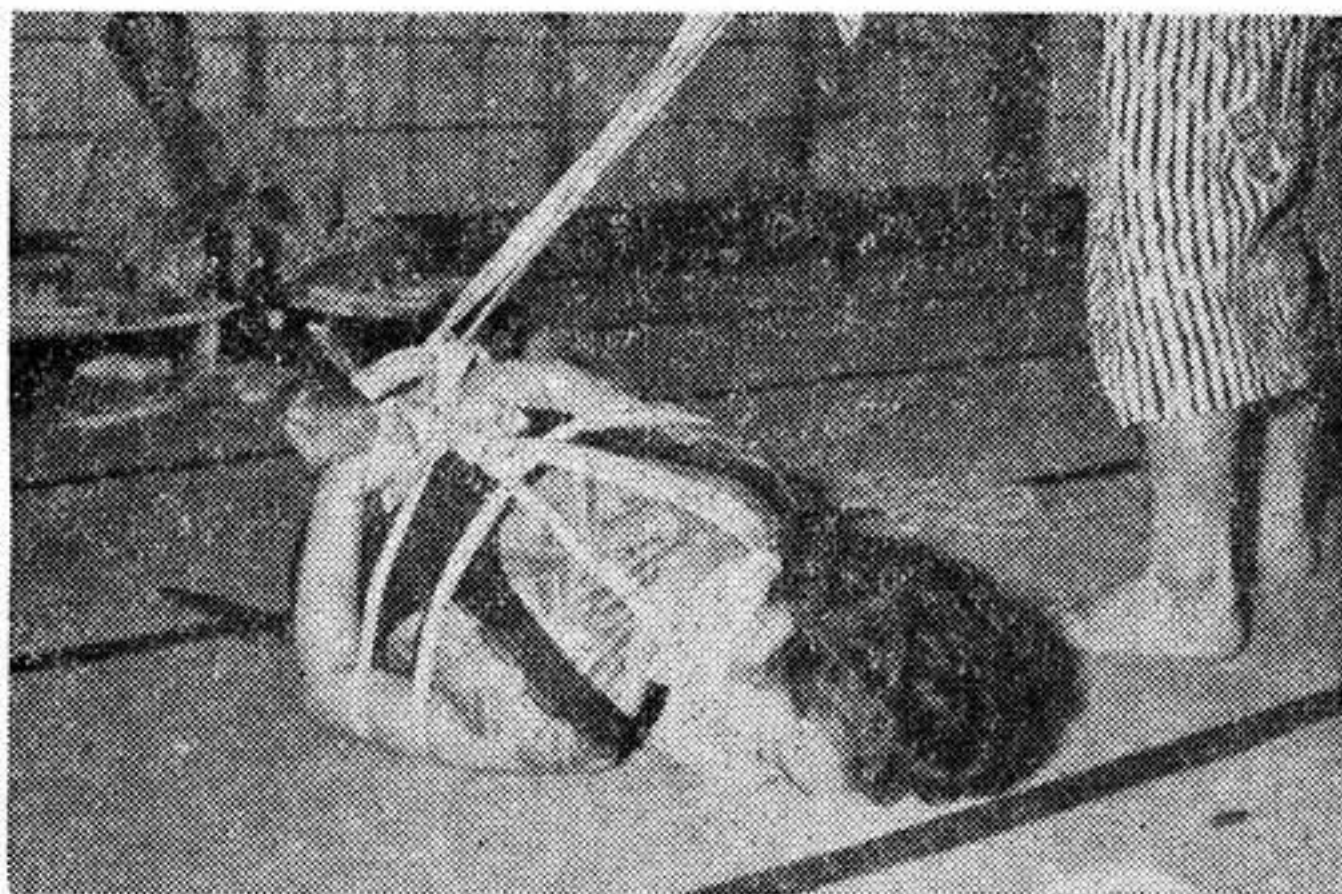
一瞬、箸を置いた一同がカタズをのんで見守るうち、美青年美柳輪氏に対する山原清子嬢の激しいプレイが続けられます。Mプレイが終わってから、酒宴。そして会

員による山原清子嬢に対する緊縛プレイが次々と楽しく展開されてゆきました。第一回のときは辻村隆による模範的なプレイが行われて、一同感銘を新にしたのですが、今回は我も我もと希望者が現われ、氏の出る幕はなかったようです。

次回第三回の座談会は十一月下旬開催の予定です。詳細の日時会場その他については、会員の方々に直接ご通知いたします。

山原清子後援会に入会御希望の方は入会金千円同封の上お申込み下さい。尚入会された方々には、山原清子のポートレートキヤビネ判二枚贈呈

プレイに興ずる会員達



いたします故、刺青、S、Mの三種の中、いずれを御希望かお申添え下さい。

今後会員が漸次増加致しますといろいろと楽しい企画を樹てたいと考えておりますので、何卒山原清子後援会にご入会下さるよう心からお待ちいたします。

山原清子後援会



さらばこの一閃

六角京之介



のけぞる瞬間

六角京之介

「浣腸通信」

○

一個中レシチン炭酸複合体五〇・三五%、通常一回乃至二回を出るだけ肛門内深く挿入、重症の場合には、一日二乃至三個を数日続けて挿入。これは新しく(といっても数年前に出たものですが)発売されているドイツ直輸入便秘治療剤レシカルボン坐剤です。

グリセリン坐薬と違うのは、挿入されると腸内で炭酸ガスが発生し、直腸を拡張しその拡張反射により直腸粘膜に対し排便刺激を与える。それがS状結腸に伝って大腸の運動を誘発し自然的な排便現象を惹起するとあり、習慣性や副作用はなく、従来のものに比べ、

その優秀性を誇示しています。

この炭酸ガスを発生するあたり愉快ではありませんか。白色に赤い四角のついた箱に納った黄色の坐剤で、まずは快適ですが、多少刺激があるようです。夏は冷蔵庫に入れておかれた方が良いでしょう。尚、発売元はゼリア化学KK(日本橋小舟町二ノ三)です。使用報告を期待します。

○

余興に『げて物』を紹介しましょう。「特許胃洗滌式看護実習モデル人形(女)」というものです。浣腸、注射、導尿、可能の由、注文先は坂本モデル製作所(京都市左京区下鴨森ヶ前町二八)。看護学院隣にあるものです。(東京都品川区八吉田健三)



ボクの責め方

宝塚二三夫



著者の愛のク

池田 勝

新しい編集となって益々充実の本誌、編集者のご苦勞に敬意を表するとともに愛読者として嬉しい限りです。小生五年來の読者、書店も別に一冊予め包んでおいてくれ、きまつた日に立寄ると、ちゃんと出してくれます。平常日々の生活に不愉快があつても、本誌を開くと精氣が漲りますこと不思議

なくらいです。これまで分譲写真を数度注文購入しましたが、お守りとして財布の中に入れて、いつも身につけています。私の心の完全の一部となっております。

さて、この途の趣味の方は誰でも若し機会があればプレーしてみたいと思つておられると思います。小川、小妻、安原各ご夫婦は誠に羨しい限りに思います。

三年前、或る会社を訪ね受けて財布から落ちた一枚の写真が受付嬢の目に入ったことから親しくなり、私はS彼女はMの趣味が一致して私のたつての頼みに応じてくれ会社の帰りの数時間、プレイして写したうちの一枚が先月号のサロンに発表した写真です。目隠しが邪魔ですが、彼女が「顔が写るのは勘忍して」とのこととやむを得ません。写りがよくありませんが、ライトの準備がなく普通電球でしたので明暗が少しばけたようです。胸の的は私の好みの一つで、輪ゴムで紙の玉を打つときのの意意味と、全く危険はないものの一応急所の防護も兼ねるためです。この趣味はほんとに好きな人同士で実演して始めてその醍醐味があるうというもの。互いの趣味を理解してあとに満足の残るもので

あることが大切だと思います。もしM女性の方と文通お付合出来れば幸いと思ひます。ご意志とお好みを十分に尊重して、この趣味をお互いに楽しみたいと思ひます。

或る期待と希望

徳山 庄一

すっかり秋の氣配が深まってまいりました。益々内容充実し發展を遂げておられる奇ク。又いよいよ豊富に白熱的な企画の分譲フォト或はモデルさんを囲み読者との懇談会等貴社の存在は吾々マニヤにとつて唯一無二の心の糧として明日への生きる楽しみを恵んでくれます。山原清子さんを囲んでの第一回座談会が盛会だった由、此の様な催しが東京でも開催される予定とのこと、若しそのような計画であれば入会し出席したいと思ひます。是非実現して下さいようお願い致します。

僕のファンタジー

室井 亜砂路

今では紙芝居は小学校の教材か女学生の育児所慰問くらいにしか使われないうになつて、当然の結果、俗悪な(と言われた)僕達のヒーロー黄金バットや怪傑はやぶ

さは姿を消し白雪姫や青い鳥等のいわゆる教育的な内容のものとなつて街角の詩情は失われました。

当時(紙芝居の)悪人は今のテレビマンガみたいに世界制覇を夢みたりしないで怪人二十面相のように宝石泥棒か婦女誘拐の専門です。怪人が科学者の発明したロケットの設計図を狙つても決して産業スパイを使つてコピーさせる様な無礼なマネはせず、夜になるのを待ってシルクハットをかぶつたりして令嬢の室へ忍びこんで袋につめてカドワかして来ます。科学者には美しい令嬢が居る事にきまつていました。それから改めて、設計図と物々交換の交渉をして来るのです。アルサーヌ・ルパンの様なマントを着て片手に氣を失つた令嬢をかかえ、ビルからビルへ張ったロープを伝つて逃げるシーンを僕はベッコオ給をしゃぶりながら息をつめて観ていたものです。11月号の夜乃探郎氏の『都会の神秘』には、そんな懐しいムードが漂つていて大変楽しく拝見しました。本誌もこういう江戸川乱歩式ファンタジックムードをもう少しとり入れてもいいと思うのです。空想力のカケラもないリアリズムは純文学にまかせましょう。

奇譚クラブ

昭和40年12月号

(1965年・12月号 <第19巻第11号・通刊209号>)



邂逅と別離

昭和十八年十月四日、私はシンガポールのラッフルス通りから出る戦跡巡回バスに乗っていた。窓側の席から何の気なしに外を眺めた私は、目の前に級友の山本の姿を発見して思わず「山本君」と叫んでいた。彼と私の視線が合い、彼が窓口へ駆け寄ろうとしたとき非情にもバスは発車してしまった。灼熱の陽を浴びて彼の軍曹の襟章がきらりと光っていたのを覚えていいる。船待ちのつれづれに戦跡めぐりでもやろうかと乗ったバスなので、発車まで一分でもあれば、そのまま降りたものにと、うつろな眼を窓外におっていた。

山下パーシバル会談のフォード工場から競馬場へ、ブキテマの激戦地から紫山の丘陵へと戦跡を訪ねて、紫山の山頂の石碑にあった「みはるかす丘も林も深みどり、血汐に染めし土はかくして」という牟田口兵団長の歌を讀んで遙かブキテマ高地を望むと、緑なす樹林の彼方、かげろうのような露が立ちこめているばかりだった。

その後、山本君はニューギニアのラエで戦死したと聞いた。階級は中尉ということなので、シンガポールで逢ったときは或は見習士官であったかもしれない。

二十何年か経った今、私はあのと時の山本君の階級章と牟田口中将の歌とが、なにかしら忘れられないで印象に残っている。

昭和四十年十月四日

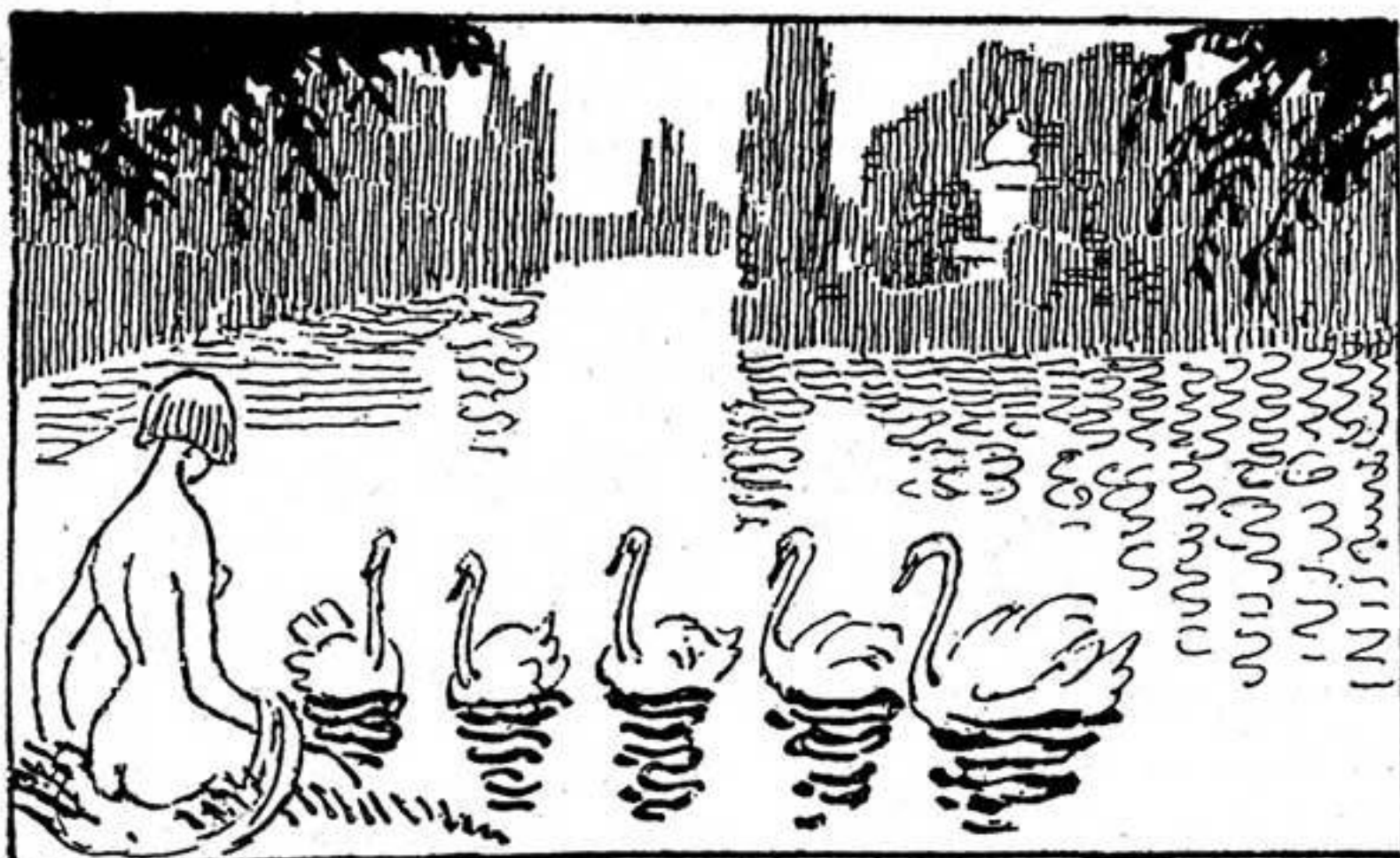
八編集子V

＜手記＞

— 私論 —

「エス・アンド・エム」

保 藤 久 人



「奇ク花壇（論争の場）は、満開前夜」

△天下御免のSM時評▽で橘行司子さんは誠に見事な表現をなさった。（10月号）

振り返って見ると40年度は年頭から奇クの中に話題が山積していたといえる。折良く、と言っては語弊があるが、社会の情勢が奇ク自体が好むと好まざるとに拘らず、それを押付けて来たのかも知れない。

昭和四十年一月発売の奇譚クラブ三月号は△通刊二百号▽という輝やかしく偉大な実績を内外に公示した。と同時に、それが奇クにとって画期的な句読点となった。そしてその辺りに、論陣・論争の必然性が再燃した。

西条さんの「想うこと」「続・想うこと」に端を発したかの様に、久我さん以下多数の方々の論議盛んで、やがて、芳野さんの「遊び」は、夜乃さんの、「空想と現実」を引出し、更に「主題と必然性」が、「小説か読み

物か？」と益々活発に、木戸川さんの仰言る△論騒▽へと発展していった。

これ等は、或る意味で、今日以後の奇クの行く道を暗示しているともいえる。悪いことではない筈なのだ。論争の終止には、必ず発展性妥協が確立されて、附随するものだから――。

そう思い乍ら私は、静かに拝聴させて頂き今日に到っているが、内心は、少し活発過ぎるのじゃないかとハラハラしていたことも事実だ。というのも、芳野さんの「主題と必然性」の執筆の素因のいくらかが、私の「SMよ今日は」にある様に思えた為（自惚れ、などという気持ではありません）

何か発言しなければ不可ない。夏中、私はそのことを頭の中に浮かべて過した。だが、私の様なものに一体何が喋れるというのか。九月号の辻村さん（サロン楽我記）十月号の

木戸川さん（一筆啓上）同じく橋さん（SM時評）そして、夜乃さん、芳野さんも、それぞれの立場で適宜に、“思う部分”を発言していらっしゃる。これでいいのだと、私は自分自身に、言い聞かせて来ている。それなのに、何かしら喋って見たい。併し扱て、ペンを執って見ると自己の『主題も必然性』も芽生えて来ない。其処で私は改めて奇クに深入り（？）しようとした当時（今年四月・SMよ今日は投稿）を振り返って見た。

もともと無学な私には人様のものを評することは不可能な事で、私に出来るのは、自分の想うこと、感じたことを、極めて自己本位に、自分の四囲から、割出して書き綴ること。従って多分にエゴイズム的な思考思想に終始していることを否定出来ない。が、しかし、そういう中でも私は常に一つの念願を自己の内部に植え付け秘め育てつつ今日に到っているといえる。



一口に言って、私は明朗な△SアンドMVを理想としたい。

というと、とてつもなく大上段に振上げた恰好だが、実際は極めて静かで、もっともつとささやかなもの。

アブノーマル所謂△S・MVは既成の社会観念によって、『暗色乃至灰色』と決定づけられている。通念的道義・常識の上では、それに肯定し乍らも、私は人間の極めて“人間的”な感情を知る様になってから、其処に言い尽せぬ矛盾を感じ始めた様だ。

明るい色であって悪い筈がない。『陰』に潜むものでなく『陽』にはならぬとしても、せめて『半陽』。同じ『灰色』であるとしても、シルバー色素の多い『光沢のある灰色』であつても決して可笑しくなく、それが、人間の心を尊重する（自己の心も含めて）一つの道ではないのかと思ひ、心からそれを念願した。

折から誌上では外部からの弾圧泌みた圧迫で議論の華が咲いている。育成条例はそれ程重大な意味を持ち、編集部でも非常に困難な時期であつたと思う。これ等の背景が私にまで書く意欲を与えたのかも知れない。

実際に、“対悪書”に関しては奇クを愛する人々の総てが、何等かの発言を欲したと思ふ。其処に絶対的な“発意の必然性”が存在したのだから——。併し、皆さんも私も、直面してふと、途惑いを覚えたのじゃなかったか。

真実の難問題なのだ。SMは、人類的道義的な観念の範囲内で“異常”と意味づけられていて、その思想思考の変節は、容易に果されぬものであると知悉していたが為に——。

元来、SMなんていう心理は、人間でも比較的大人の抱く、深部感情から醗酵するもので、最初から青少年は不対象という、判然とした容認の原則があるにも拘らず、社会の歪みを糊塗する一環として摘発、蔑視攻撃された様なもの。遺憾ではあるが“世論”という力には屈する以外なく、何一つ施す術はなかった。というのも、SMは単に通念的解決で非行・異常と罪悪視されていた為。

が、黙って引下れば益々“悪者”になって仕舞う。姑息ではあつてもと、グラビア廃止挿絵制限という形態で一応の処置は成った。

——SMの発芽を人の心の一端として推察すると、通常、子供の頃に多いといえる。だが成長は殆どが青春期以後の産物だろう。

大人としての思慮分別を十分弁えた者によって開花す可きで、其処に実質的な結実も存在する。

又、近代感覚によるSMは、嘗つての定義的サジズム乃至マゾヒズムに比較し、その思想・心理・感覚、凡ゆる面で異質的進歩発展

を遂げ、人間の心の中に、美的要素を含みつつ健全に育っていると言っては可笑しかろうか。私には可笑しくなかった。これは独善的な一個人の考えに過ぎぬかも知れぬ。

併し、男女が一对となって営む健全なSEX的生活から考察し、その個人的な嗜好を人々は阻むことは出来ぬ筈なのだ。

この辺りから、私は「SアンドM」の『光輝ある灰色』の可能性を見出したのだといえる。そして私は『SMよ今日は』を書き度くなり、奇クの中へ侵入しようとした。

この点は、以後の私の書くものに何かの形で出ている様に思うのだが（但し自己流に）

◇

生意気な発言で、自分で面映ゆく恐縮し乍らだが、我々は常に社会の一員として、秩序や道義に関しては極めて常識的な区画線を与えられており、現実には線上より踏み出すことの抑制を強いられるといえる。兎に角SMも社会通念では常識外と限定されているのだ。

だが、果して人間は限定された枠の中で最も善良(?)に生きることが伴せなのだろうか。重々しい圧迫に息苦しさを感じる人はいないのだろうか。私には、其の画一的な、良

識的な、健全なと称される人々に人間としての疑義を覚える。

生きた生活には解放感が不可欠ではないのか——と。

殆どの方が、その重圧よりの解放を、男女の結びつき、即、SEX・その生活の中に慰安を窺って一種の肉体的逃避として求めているのだと推定出来る。実際に、人間にとってSEXは、生きて行く上に於ての重要な部分ではないのか——と。

「SアンドM」は心である。SEXも又肉体であると同時に心なのだ。其処には密接に繋がる糸が無数に交叉していなければならぬ。人間にとってSEXが不可欠であるのと同程度に、SM的要素も（マニア的嗜好如何は論外として）当然其処に同席していなければならぬのだ。

趣味的な感覚や感情の皆無な人。その人達のSEXには真実にSM的な部分は現存しないのか。答は否。多少なり共、近代の自己負する人なら、実際のSM類似行為を行使している筈なのである。唯無関心・無意識なのか、或は、強いて無心を装っているか、この何れかであるに相違ない。

SMを信奉しようとする人、或はSMを生

かしている人々は、其の時に当って比較的己の内的心理に忠実なのである。

つまり、前者・後者の当面する状況に於ての差違は少く、前者は未知或は自己欺瞞に終始し、分者は極めて肉体的な、思考で行動する。

以上は甚だしい極論であるかも知れない。

併し、この辺りに「SアンドM」の救われる道と、同時に非常なむつかしさが同立しているといえるじゃなからうか。

そして、この救いと困難の兼ね合い。悪く言えば一種の処世術、其処に「SアンドM」の光明がある様に思えるのだが——。

◇

私には特定に類する交友が多い。その方々は極めて清々しく健全で解放的だ。併し、始めからそういう状態に、なれぬことは言を俟つまでもない。『他人に迷惑を掛けぬ』という、不文律の道義心に始まる理解と信頼の並立が絶対の基本線となる。互いの人格を尊重しての協調的融和で、其処には、通例観点による不道義も、不純も不倫も存在しない。それでいて極めて赤裸々で、しかも明快で健やかな状態が実在して、本当の姓名での真実の交りが育って行く。

少くともその前後の心は極めて明るく、
「やあ、今日は——」と、手を揚げて大通り
も濶歩出来る。

これこそ△SアンドM△の本質。近代感覚
の中で謳歌し得る△異常△なのだ。

今の私達の中には既成的に定義づけられた
「学術用語」的なSMは存在しない。私達に
必要なのは、生きている人間としての最も人
間的なSMの真理なのである。

そういう心で繋がると、意外に人間の醜い
部分や、わずらわしい穢なさ、そういうもの
が自然に影をひそめて行くものであることを
私は多くの方々から教えて戴いた——。

遠い方々からは信頼の確証の様なフォトを
戴く。極めて露骨である。が、その姿の中に
こそ、最も偽りのない真実の人の心の深い部
分が尊厳な形態で実存する。

私は、それを尊いものと思う。同時に、人
間の真実を知って心が悦びに慄えるのだ。

私が其処に見出したのは決して『陰花』で
なく、咲き誇る『麗花』にも似ていた。これ
は、私にとって実に大きな目覚めであった。



前文で、人様のことを……などといい乍ら
此処で特にお二方に対して、ほんの少し発言

して見たい。甚だしい「不遜事」で申訳ない
と心の中で恐縮し乍ら——。

△芳野眉美氏△

私が芳野さんの文章に接したのは随分旧く
27・28年頃じゃないかと思っています。その
テーマが先ず私の心に微妙に作用しました。

というのも、△珠江抄△40・1△で判って貰
えると思いますが、当時の私のSM的な関心
はまだ確立されていない「M的」な心理の中
での『粗相する乙女△剃髪・導尿△』に始まり

△Cunnilingus=Urine△という部分に集中し
て、一種の自己批判（嫌悪を含めて）による

懐疑的な時代だったので、芳野さんの異常希
求（その頃は確かに異常でしたよね）に全く
驚いた為。（珠江抄は、終戦時の一年程の海

軍生活と戦後短期を、挟んでその前後の出来
事。以後、私は都会より逃避し暫くは忘れて
いたが、舞い戻って来て再燃中）

更には△眉美△という名が印象に残ってい
ます。芳野さんのどの作品を見た時かは忘れ
ましたが、ふと女性であるのかと思ったもの
です。

女性が女の立場で希求する男の様子を書い
ているのかと感じ、その珍らしさから余計忘
れなかったのでしょう。芳野さんの投稿は、

或る時期途絶えていたのではなかったか？そ
のあとで知った時には、思い掛けぬ明快な文
章になっていた驚いたものですが、或はこの
頃、芳野さん自身の中にも、或る種の悩みが
あったのでは——。

兎に角、以来は、現在に到る如く、誠に切
れ味良く、『神酒』という特異嗜好にも拘ら
ず少しの陰湿さもない。この辺りに私は言い
尽せぬ親しみを覚え、その嗜好の是非以前に
進まれた姿に尊さを見出します。

思うに、芳野さんの出発もきっと「M」で
あったのでしょう。併し、今はもう「M」な
どという定められた枠を突き破り、立派な
『自己』を確立していらっしゃる様ですが、
そういう芳野さんなので、最も自己の現実を
貴重なものと、思いになるのでは——。併
し、変節出来ぬ「性」の素状から推察して、
その現実の下には滔々と流れ行く大いなる夢
……ロマンチストなのだと思うのですがね。

即ち夢想空想家。人間は時に「夢と現実」
というものに思い悩むものではないでしょう
か。それを現実らしく、或は現実に近い状態

で成長した時、現実には生きてあるだけに最も
誇らしいものになる。——失礼申しました。

△夜乃探郎氏△

夜乃さんを私は良く知らない。が、何故となく懐しみに似た近親感を覚えます。

夜乃さんの文章の中には、極めて人間的な誘う部分が存在している。時には、実際に文章の中に昔懐しいジントの響を挿入される。

従って夜乃さんのものを見てみると「天然の美」の演奏はなくても、人の心から限らない

『郷愁Ⅱ哀愁』を誘い出して行く。郷愁それは人の内部に暖い慈愛的な甘えて行き度い様な懐しむ心を植えつけて行く。それが人間臭い人間的なものとなり、人間共通の、親しき度い心にくれて来るのではないだろうか。

誰方かが△夢男▽と評されました。私は変な意味でなくその評に感心したものです。△夢男▽の夜乃さんは、何時も臍の辺りまで「幻雲」の漂う中に浸り、上体を現世の「現実」の中に浮き上らせて、差し上げた両手は遠い

「空想」の中へ——。瞳は厳しく現実を凝視し乍ら、時々片手は忙しく動き、下体に漂う「幻」を掴み、更に仰ぎ見る「夢」を手操り寄せてムシャムシャと喰べてしまう。夜乃さんの「幻」は極めて人間性を象徴する郷愁であり、「夢」は又、その郷愁を根幹として鮮やかな五彩を放っている——。

空想することの楽しさを自分の中にはぐく

み育てることの出来る方は、人間として幸せなのではないでしょうか。空想Ⅱ夢想、というものを自他共に許し乍ら、その実、仰言っていることも、お書きになる文章にも暖い人間味がある様ですが、感じた尽、とはいいい乍ら、私がこの様に言うのは失礼かも知りませんが——。

◇——

——結局私は、お二方ともロマンチストに仕立てて仕舞った。併し、正直に言ってそれが私の感じた尽。ロマン派でなければお二人のあの文章は決して生れて来ないと思える。

私自身時に、現実を夢見て、夢想を現世に見出そうとする。混然とする中でこそSMはより充実するのではないのだろうか——。

もう少し、生意気をお許し願って。

△必然性▽Ⅱ△現実▽と△空想▽と——。

「必然性」の必然は極めて個人的な発想の産物。△小説▽と△読物▽の考え方も同じ様に解釈してはどんなものか？人間の信念・思想・思考は甚だしく独善的で非協調的な部分も多く、そうでなければ主義も主張も有り得ない。同時に自主性も失われて仕舞うだろう。そしてその辺りに『個人Ⅱ独立したもの』の尊さがある様に思う。

今夏の或る時期、所謂、文芸中間誌と謂われる雑誌の中の作品に奇妙な現象が一つあった。それは皆さんも周知と思うが、多くの一流作家が競う様に『バー』或は『ホステス』と言った特種風俗に主題を求めたこと。

勿論、作品は極めて個性的、それぞれの持ち味が充分に生かされており、一つのものを八方から睨みすえた感があった。

我々も同じなのだ。目的は、一つなのである。それを甚だしく個人的な思考で文章にする為に妙なる味覚も生れて来る。画一的であってはならず、対立する立場こそ尊いのではないか。従って△主題と必然性▽或は△小説と読み物▽以前に「個性」を尊重したいと思う。△空想と現実▽も同じく、「個性」によって貫かれてこそ「意義と意味」が浮き出て来るのではないだろうか。

実際問題として△現実▽だけでは文章は綴れない。創意には△空想▽が附随し△空想▽的作意があるので、かえって人の心の中に入り込み易い形態となる。特に、アブニストには、それ等総ての要素に加えて、「個人」というものがより重要な意味を持つ様に思えるのだが——。

◇——

△SアンドM△それは、陰湿でも暗灰色でも、更に又、淫猥なものでもない私は言い度い。併し、言い切れぬところに、独り相撲の様な空しさを覚える。

けれど、私の思考は飽くまで、人と人とで触れあうことの可能な、明るく健やかなものであることを希い、私の思想は常に其処から出発して行こうとする。

良く私は、女の方が好きだと公言する。何処の馬の骨とも判らぬ世の片隅の私などには女性は一顧も与えぬだろう。併し、兎に角私は女の方が好きなのだ。これはどうすることも出来ぬ個人的な偏傾心理といえる。

常に美々しく柔軟で捌やかなる「肌」に限りなく憧憬するのだ。私の、対女性崇拜思想は当然の様にマゾヒスチックな心理に基く。足指から遡って根源への奉仕を渴望する。

特に、まだ知らぬ「或るもの」に対しては自己破壊するかと思う程の強烈きわまる「誘い」の部分が存在する。

若し、行き逢ったと仮定しよう。アブニストは自己の心理・性向に最も忠実でなければならぬと主張し乍ら、そして、どれ程凄まじい強さで希求していたとしても、矢張り四囲に目を走らせる筈だ。その瞬間は、其処、其

の場でと心は激烈に欲しているのだ。道端に坐って……と心だけは思っているだろう。併し、実行は不可能事である。明るいという意味でなら正に明光。が、実際はSMより以前に狂態即ち、精神異常者となっている。そうなり度くない為に凡ゆる思索を駆使して夢を現実的なものに組入れようと努力する。

つまり、SMをと念じ乍らも、それ以前に人間らしく、人間であり度いと気持の上で判断する。エゴイズム乃至自己への欺瞞なのだ。が其処に「人としての限界」のあることを痛感せずにはいられない。

従って△奴隷△を忌避し△人間便器△を否定する。それが、人間性の範疇からはみ出し人間的でなくなるから——。この辺りに△夢と現実△の偉大な相違が厳存し、儚さを教え込ませる。と同時に△空想△の要因も存在し、私は不可能事を「夢想」に依存し、それで良いのだと思っている。それが△空想△の楽しさ、醍醐味だとも思う——。



△エス・アンド・エム△それは一体何だろう？自分自身で驚く程素朴な気持になってふと内部に問いかけて見たいときがある。この様なことは、きっと皆さんにも経験が

お有りじゃないか——。

△鞭。それもさまざまのものが、必要なのか。太い麻縄。とげとげしい荒縄。柔軟であり乍ら鋭く喰込む細いロープ。或は又、鳥羽根、筆。更に電気器具。滑車、鎖、鉤等。縛る。打つ。叩く。罵る。辱かしめる。苦虐の絶叫と、哀愁の悲鳴。のた打つ姿——。

唯、それだけなのだろうか？訝の様に反射する手応えと、耳を擦ぐる苦悶の声と、喘ぐ姿、その虐待だけが目的なのか——？

△非情な鞭。高慢無礼極まりない足。誇示し、渴仰させ、それを蔑視し冷酷無残に突き離して、重圧を加え、人間であることを放棄させて、自己の意志に対する誓約を強い、果ては総ての生理欲求の処理具とする。

蹴る。踏む。潰す。殴る。汚辱を強いる。自己嫌悪の入り混じる表情。拝跪して許しを乞う。進んで汚辱にまみれようとする——

唯、それだけなのだろうか？全身的な受感で盛上って来る愉悦。権威者の悦び。自己愛を含めた優越感その征服的圧迫感だけが目的なのか——？

前者△男対女。後者△女対男。実質的な、「嗜虐と被虐」の代表的な形態が其処に実在する。だが本当にこれだけなのだろうか？

新しい感覚の△SアンドM△は、その様な安易なものであってはならないのだ。

虐めることが総てではない。傷つけることも避けねばならない。汚しても、不可ないのだ。何よりも人間の心を忘れてはならない。

真実の△エス△の眼は其処にある。もの△の「極限の美」を追求する人間の瞳でなければならぬ。苦悶と羞恥の喘ぎの中で妖美にうねりくねる美しいものに対する人間的な愛の心を欠かしてはならない——。その様な経緯が極めて人間的な作用となり真実の△エム△を守り育てて行くことになる△。

△賜ることが総てではない。欲せる汚辱も避けねばならない。痛め傷つけることも不可ないのだ。何よりも結びつこうとする人間の心の糸を忘れてはならない。真実の△エス△の嗜好を、其処から自己的に貪ぼってはならず、人間的な希求も、認めてやらねばならない。哀願と困惑の蠢めきの中で実在する姿がたとえ変異ではあっても、人間の奥深い真実を察知し、与える心を欠かしてはならない。その様なふれ合いが、深い心理に繋がり、真実の△エム△の歓喜を引出すことになる△。極く自然な妥協は許容される可きだ。併し偽りの馴合は排斥に価する。限界を知悉した



「真夏に感あり」

男はみんな狼か

川崎 進一

今年の夏は、新聞にあまり痴漢の記事が出なかったが、痴漢がへったのだろうか。いやそうとも思えないのだが、参議院議員選挙、東京都議会問題と、都会議員選挙、河野一郎氏につぐ池田元総理の死、ベトナムや日韓問題と、息つく間もない新聞種に痴漢などニュースバリューがなかったのだろうか。

「夏は痴漢の洪水よ、男は皆狼よ」と、女性には騒ぐが、それは間違っていると思う。たしかに、冬はあまり、痴漢の話聞かない。夏に多く冬に少いのは、女性の肌の露出に関係があるのではないだろうか。痴漢に襲われたという女性よ、貴女の服装と心構えを振り返ってみた事があるだろうか。人一倍肌も露わなブラウスを着ていなかっただろうか。スカートは膝小僧が日射病

にかかる程短く、ブラジャーがすけてみえる程の薄物のワンピース、水着といえ、トップレスとかビキニスタイル、人一倍濃いルージュにアイシャドウ、お尻の割れ目を殊更強調するタイトスカートで、男にこれ見よがしに街を流して居られるのではないだろうか。

そんな女性のお尻を追いかけ、一寸さわりたくなったり、公園の茂みにおさそいしたくなったりするのも、強ち無理とは言えないような気さえするのだ。

育ちのよい女性、しつけのしっかりしている健全な家庭の女性を観察してみれば、いかに華やかな装いをしていても、どこかキリッとしていて、隙がないような気がする。そこに清楚な美しさを感じ、何か近づき難いような美に打たれるものだ。

上での自己への最高度の忠実是不可欠で、それが、△SアンドMVの真理に近くなる。

その形態は極めてむづかしいといえる。何故なら、通常、「男対女」を近接させなければならぬ。そして幸か不幸か△SアンドMVの推移は、男女一対を最も自然としているのだから――。

併し考えて見るとその形態にこそ尊くも輝かしい「確実性」を含めた部分が存在する。

つまり、再び此処で、最も人間的な結びつき……男と女……という人類生活の基本目的に歩み寄って行く。皮肉なことだが、それが社会の常識なのだ。人間男女は社会公認の中で結合を許されている、

社会道義（外的生活）では△SMVを異常として排撃忌避しようとする。

人類義務（内的生活）では△SMVは愛情内部心理として受入れることが出来る。

生活と社会の、大きな矛盾であるといえるが、其処に、現実としての△エス・アンド・エムVの絶え間なく流れつつ、真実に繋がり強く結びついて生きて行く道が確在する。

人間の心の存在する限り△SMVは息吹き続き人の智と真によって、明るく健やかなものに育って行く事も可能なのだ、と言っては暴論だろうか――。

（四〇、九、八）

さて、顔を上げて男性を見て見給え。どんなに暑くても、アロハの袖をチョン切ったりステテコ一枚で街を歩く者などおりはしない。ネクタイこそしないが、開襟かセミシヤツ、きちんとズボンをはいて、素足どころか、ふくらはぎまでの靴下をはいて――暑いのは女も男も同じではないか――。

考えてみれば、男がズボンをはいて、その下にはパンツを着けて、大切な一物を要塞堅固に守りに守って居る。花の操がと声を大になさる女性こそ、大切な部分をしっかりと守るべきなのに、薄い布でごく簡単にぐるっとまわりを覆っただけ、しかも昨今は、下着すらおつけにならぬレディがおられるというではないか。

駅の階段でつまずいてもんどり打てば、見たくないと思っても、いやが応でも下着が、更にその下までが目に入るのはわかり切ったこと。膝小僧すれすれのスカートで国電に腰掛け、夏の陽差しについてウトウトとして、両膝が何となく左右に十センチ程開いた時、バスに乗ろうとしてステップに足をかけながら不図上を見れば、高い座席にお座りの女性の短いスカートの下からは――。

デパートのエスカレーターは上りと下りが交錯する。下から上ってゆく私達の目に、下りてくる女性、偶々、冷房のきいた一陣の涼風が、下から吹き上げて来た時、私達は目をどこにやったらよいのだろう。それを見て、ニタツと笑ったからといって、男は皆狼よと言われても、そりゃ聞こえませぬと言いたくなるのは当り前だろう。

とまあ、こんな小むづかしい事を言っても始まらない。倫理の教科書ならこういった所だろうが、現実はその逆になっている所で、人間臭がして、面白いのかも知れない。男がいるから女はオシャレにうつつをぬかすし、女がいるから、男は夏の暑い日も、必死になって働くのだろう。

真夏の朝の、人いきれでムンムンする国電の中のほんの一瞬、押され押されて、ぺたっとふれ合う若く美しい女性のお尻のぬくもりに、

「オッ、よかったなあ」

とばかり、今日一日の運勢を占って、モリモリ働く意欲の出る男性、男はちっとも狼ではない、愛すべき可愛い動物だと思いが、どうであらう。

踊子のお腰

牧

高志

文重



今夏はひさびさに墓詣りを兼ねて、今様お遍路ならぬ南国土佐をふり出しに一週間余の楽しい旅行をしたが、図らずも表題の物件に遭遇し、また東京に舞い戻って今度は処もあるうに銀座のと真中（銀座松坂屋々上）で鳴門連の特別出演に出喰わすなど、重ねがさね

の奇遇に内心驚いた次第である。

まず、南国土佐では、ご存知（…とは云っても正直なところ筆者は、その時まで何んの予備知識も持合せていなかった）三日目が最終日（八月十一日）だという名物高知の『よさこい祭』が街ぐるみ熱狂裡にくりひろげら

れていた…。

へ土佐の高知の播磨屋橋で

坊さん かんざし買うを見た

ヨサコイ ヨサコイ

誠に余韻のある唄だが、事の起りは、そもそも安政年間の出来事であるそうな。（高橋掬太郎著・日本民謡の旅・下巻）

どういう仕組になっているのか知らないがガイドさんの説明によると、思い思いに飾り立てた町のあちこちの広場には各町ごとにそれぞれ若い男女で編成した踊子連中が、次から次へと繰り出しては華やかに踊り、しかるべく規定の踊りの審査を受けると、また次の広場へと勇躍遠征するということであった。

その踊子達は肉休条件から云っても、よぼよぼの婆さん連中と違って、皆んな若くピチピチした娘さんばかりだから衣裳ぐるみの発散は正に芳烈至醇。それが夜目遠目傘のうたと云われるように連によって柄こそ違え、揃いの浴衣に深あみ笠の鳥追い姿：こうなると不思議にどの娘も美人に見えそうだが、足は後で登場する阿波踊の紅白鼻緒の利休下駄ならぬ草履一色という軽ろやかさ、しかも帯から下の裾を真二つに端折って下から鮮かな桃色かまたは真赤なお腰（2枚巻いて居ったと

すれば、あとの一枚は当然蹴出しが裾除けと云うことになるが、を十二分に出して、踊る節につれ、一きわ鳴り渡る『踊子』の拍子はあたり一面に反響して、極めて印象的であった。

なにしよう県庁の所在地だけに、そして南国土佐の面目にかけてか、街は巾何十米と大都会なみに広るびろとして上の新盆近いは云え、まだ外は真夏の炎天下という始末だから、ゾロリ歩く訳には行かないと見えて踊子達は専らバスで巡回の花を咲かせるという有様。

そうしているうちに、とある街角で、カメラをひっさげ取材中？の一人の旅の者、すなわち筆者と休憩中の一連の連中とが正面からぶつかり合い、いささか面喰う始末と相成ったのである。

それは文字通り路上巾狭しとばかり小休止の最中であつたのだ。たった今他所で踊って総勢五十人が、大型バスで只今ここに到着したばかりというのだろう。道理で冠った鳥追い笠を脱って、てんでに片手に持ち、現代風の髪をなびかせながら順番に同乗した美容師から一人一化粧直しをして貰っていた。豆しほりの襟に太い黒の横縞の入った揃いの白

地木綿の浴衣を着て赤い博多織風の帯を文庫結びに結び上げ、裾を端折って（と云いたい）がどうも最初から五十センチばかり裾を上にあげておいて腰紐を締めたものと思われる）腰から下の半分は延々三日間に亘る激闘振りにいささか疲れ果てたか、ぐったりと青い細線の入ったピンクの化繊物のお腰。そのお腰は哀れなことに汗とほりをたっぷり吸っていた（と筆者は直感した）。この場合、揃

いも揃って仕立方が同じだと云うお腰を一樣に腰に巻いているというのは如何にも現代のインスタント時代を象徴するかのようで、心理的にも早や往年の個性味溢れる女の『お腰』では、もうとうないからであろう。

もし『お腰』が本当に若い女の生命だとするならば、何はともあれ、この娘さん達は汚れたお腰を人前に晒らすことなく即座に洗濯して新しいものと取替したに違いない（おせっかいな話だが……）。

この点、花のお江戸で物見高い群衆に囲まれ折からの風に開く裾を手で押えながら登場したミス阿波連（詳しいことは後で）が示した極度の羞恥心は村上信彦著『女の風俗史』によると、さしずめ次のことが該当するかも知れない。ズロースがわが国で安易に普及し

なかった最大の原因は、それを穿くことが従来の女らしを失うことであって、ノーズロと女らしさとは心理的に結びついていた。腰巻は名の下着であって、きもの一枚めくれれば、その下は裸体であるということが女の羞恥心を育て、しとやかさ、つつましさを土台となり封建的な女の本質構造の支えにまでなっていたのだ。

従って一方では、極度の羞恥心を育てておき、他の一方では極度に不安定な服装に縛りつけて置く——ここに当時の男の求める受動的なマゾヒスティックな女の魅力があったのだ……云々、というには、如何せん高知の踊子さん達は、まだまだ程遠しの感がありそうである。

兎もあれ視力の効く昼間から一たび星空の夜に諸々の舞台が廻ると、パンティを召した現代娘はすこぶる勇敢さを発揮する。あかあかと照らし出された県庁横のメインストリートには宛ら南海の黒潮の如く、とめどもなくよさこい踊子連が次から次へと切れ目なく繰り出され雑音の多い昼間と違って一きわ両手の鳴子はキーン、キーンと夜空を震わせた。ひるま無責任極まる旅人が散々毒づいたくたびれ切った踊子達のお腰も一段と鮮かに夜露

に濡れてピンと張り切り、踊りの列が人工光に逆光にでもなるうものなら、下半身のお腰の中から、すんなりとした両脚が遠慮なく透いて見えるという色っぽさ。

身動きも出来ぬ程混み合った群衆の中でシャツ一枚、ただ観るだけで汗をかいだ筆者に較べ帯や紐でかつちり緊縛され、びったりとまといつくお腰の裾をさばいて或る時はお腰の皺目が縦により、また次の瞬間には斜めにピンと皺目を寄せて踊った踊子さん達は、さぞや滝なす汗を肌襦袢はおろか裾下のお腰の隅々に至るまで、しっとりと汗ばめたことであろう。

三日目最後の晴れの舞台を競った一連の群れが、今度は帰途楽屋裏に相当する脇道のアーケードの通りに集って来た。ピンクのお腰ばかりかと思っていたら、この一連は何んと真赤なお腰を巻いている。しかも少々いなせだナァと思っていたら、某町旅館組合の姐さん達だと云う。



「ご町内の皆さま、何にとぞ、幾久しうお引立の程を、お願い申し上げます…」

とPRよろしく団長の挨拶が終ると、やや哀調を帯びたクラリネットのお囃子に木製の鳴子をカチツと一斉に鳴らして闇の中へと消えて行った…。

さて、このようにして熱狂裡に土佐のよさこい祭が無事終了したものとすれば、そのあとは当然街ぐるみ青い空の下にへんぼんと赤

やピンクの洗濯物が翻ったことであろう…などと、これまた要らぬおせっかい口をたたきたくなるのが無責任な旅の者の心根なのである…。

斯くして誠に名残惜しくも思ひ出多い高知を立て、土讃線を池田で右折し一時間余りの旅窓を眺めつくすと、阿波踊の本拠である徳島に着く。

日時と懐ろの財布が許せばあと一週間後に迫った阿波踊りを充分見物出来るであろうにと駅前の突き当りに黒々とにゅうツと聳える眉山の頂上から踊り一色の準備に大童の町々を眺めおろした筆者は、兎も角許るされた停車の時間を割いて市中漫步としやれてみたのである。

実の処、その時心中、筆者はさぞかしあの絢爛たる阿波踊りの衣裳の一切が何処かの店頭狭ましとばかり陳列されているものと思っていた。

処がこの期待は見事に外れた。ざっと瞥見したところ、あるには確かにあったが何んとお粗末であったことか…。いわゆる『夏物一

掃』という立看板の下に実物大の人形に鳥追笠をかぶらせ一反五百円前後と思われる浴衣に薄っぺらな黒帯を結んで、白の帯締めで締め、ナイロン製のしぼのある薄ピンクの帯揚げをのぞかせた、そしてご衆知のシンボルである化粧と思われるピンクのお腰をいれて一切合切めて二千五百円也と云う。

とてもじゃないが筆者は元来女装タイプの人間ではない。第一骨太がかくれるようなデリケートな衣裳では決してなかったのに東京に帰えると『下駄だって結構じゃないの、買っているらしいやればよかったのに……』と家の者からぐちをこぼされたのである。

もっとも咄嗟な旅先の記念にと思い、かさばらず軽くて実用的なものとなると、いささか気がひけるが、さし当り表題の物件位に落ちつくだろう。

女店員「ハイ、あの特別よく裁ってあります。お求めになりますか有難うございます。

三百五十円頂きます……」

店のおっさん「このお腰だったか、三百円です。へい……」

店のおかみさん「ああこれ？旦那、女物ですよ。二百三十円ですけど……」

と云う始末である。

計、しめて三枚、処が全部作りが違う、白い腰布のついたのはその内一枚だけで本体はピンクのナイロンモスリン、あとの二枚は、少しゴワゴワするアセテートと今一つはテカテカするデシンまがいの着地で共に腰布のなみのっぺら棒の一枚布、そして三枚とも気持ばかりのお粗末な細い紐がつけてあった。

お腰のスーベニールにまつわる顛末もさることながら、流石にローカルだナアと感心？したことは店先きに堂々と『お腰』という文字が書かれ、店員から『おこし』という戦前の言葉が無難作に聴かれたことである。幸いなことに昨今は観光ばかりだからいいようなものの、遥るばる阿波の徳島でピンクの『お腰』を買って踊りの素養のない人に配っても無駄だから「それこそ気の済む何処かへそっくり寄附しなさいよ……」とのきついご託宣には、その実弱り切っている始末なのである。

今度は嫌やでも目近かに実物の連中が居るのだから観察は勢い微に入り細にならざるを得ない。飯田義資著『阿波踊り』に依ると、昔から阿波の盆踊には朝から昼にかけて行なわれる静的な『流し』と夕方から夜にかけてはずむ『ぞめき』の二種があった。今盛んに行われているのはこの『ぞめき』が発展したもので『流し』の方は年々衰退の傾向を辿っている。しかし優雅な流しは衣裳も一きわ豪華である。新調の友禅縮緬。緋と大型色模様の二枚重ね、上衣を脱ぎ、金糸で刺繍した蹴出し、浅黄襦子の手甲、腕抜き、脚絆、饅頭笠の水々しい娘が上手に三味線を弾いて行く……顔形はよく判らないが笠の下端から僅かにのぞかせる頬のふくらみや愛らしいおとがいや、美しい襟脚から一層美人振を想わせたものである。現今では富田町（花柳界）あたりの奇麗どころの姐さん達が二十人位組んで桃色の腰巻に赤い蹴出しも鮮かに県庁や警察に押しかけて行き各室を廻ってパツと景氣を添えると云う（踊る大阿波、徳島新聞出版部発行）この流しには

へ赤いべべ着た踊子姿

色に迷うも無理はない

云々などのよしこの歌が唄われるそうであ

る。さてこの静かな流しが一通り終って日没ともなると三味線、大太鼓、鉦などでかき立てられ狂喜乱舞の『ぞめき』が開幕する。ご存知

へ踊る阿呆に見る阿呆

同じ阿呆なら踊らな損々

新町橋まで行かんか来い来い

アーラエライヤツチャ

エライヤツチャ

ヨイ ヨイ ヨイ ヨイ

のはやし言葉が伴奏される。もうこうなると女はピンクか赤の蹴出しもなまめかしく鳥追い姿で、およぐ手、くねる腰、蹴る足と云う姿態の一色化、飯田氏の文献によれば明治の昔から男と女の踊りには明らかに区別があった。女はあまり足を高くあげず、手はひじを大きく動かさず、前腕を屈伸、上下して踊ったものである。だから踊り方の形態と機能についての分析的構造観としては体重を右足にかけて左足で僅かに地面を蹴り、後にはね大げて前に出しその爪先を右足の前方に軽く接地する。この場合、鳥追い笠で顔の大半がかくされ、下半身にひらめくお腰の間からのぞかせる白い脛には底知れない魅惑的なそして挑発的な要素が多分にひそんでいるものと

思わねばならぬ。一代の粹人、吉井勇の歌に

へ賑やかに手振りのそろう面白ろさ

阿波踊り見て愁ひ忘れむ

と絶唱させたのもむべなるかなである：云々

々と云ったようなことが、その他の文献にも記載されてある。

扱て、本論に戻ってデパートの屋上での実況は二組の連が結局競演された。その後半はどうもその道のベテラン連らしくピンクの肌着、ピンクのお腰（ではなくて本当はピンクの長襦袢に、その下にあるとすれば同色のお腰をしていたのではないかと思われたが）をしたやや年配層の女連。そしてその前半は既出のミス阿波連の娘さん達による連で総勢十人足らずのグループであった。

二日目午後二時折柄土曜日であることも手伝って、二回目上演の時刻が迫ると、買い物客に加えてアマチュアカメラマンも蟻の如く集って来た。例によってやや哀調のよしこの唄に続いて、ぞめきのはやし言葉が急テンポの楽器に合せてかなぐり立てられる西側に設けられた舞台の正面に向って東のたまりから静々とミス阿波連による二列に組んだ踊りながらの行進が始まった。こうした場合、日劇でも新宿コマ（東京での話であるが）でも洋舞

の時の男性の如く男は全く女の支え棒にしか見えないから余程かっこいい腕達者でない限り男性による踊りはほとんど抹殺されて了まう。カメラ、カメラの砲列は果たせるかなすべてミス阿波連に集中せられた。筆者の8ミリが軽快な連続シャッターを切り続けたのは申す迄もない。ここで一番焦点をミス阿波連の娘さんにあわして見よう。

第一によりに選った美人に相違ないが、揃いも揃って大変なメイキャップ振りである。第二に本場で安売されていたような衣裳とは似ても似つかぬ程飛切り上等の衣裳に変わっている。第三は端折った腰から下は肌身に接してじかに本絹物（しほの大きい縮緬物ではなかった）の真紅のお腰を締め、その上に肩脱ぎの着地と同じ（と思うが）着物のしなやかなピンクの裾除をしていた。この一見裾除と推定されるものは或は長着の一枚長襦袢か、または2部式のセパレートしたものであったかも知れない。

処で、ミス阿波連の踊りは今や最高調となった。幸か不幸か？屋上5米余りの風が吹いて来た……。またまた無責任かつ残酷な話となるが、手を振り、腰をくねり、そして足をあげるたび毎にピンクの裾が不規則に乱れ、か

つ開いてそれこそなめるような緋のお腰がチラつき明滅したのである。

およそ日本の民謡踊りの中で、この阿波踊程上下動を主体としたリズムミカルな踊はあるまいと思われる。従って中身の身体がこうなら着ている着物の躍動美も必然的に挑発的なものとなる。ただ踊る女性もそれを観る群衆も所詮生きた人間である以上、そうした躍動美の中にこれはまたひどく動物的なものを感じるのである。その是否は筆者の撮った8ミリが現像されてスクリーンに映写される暁でな

いとはんとも云えまいが、この動物的の匂いを別の言葉で分析して表わしてみると、満開のバラ園の中でむせ反える芳香にむせびながら赤い前掛で包んだ抜き立ての白い大根を正に撫でようとする思惑……と云うことにもなりそうである。

ミス阿波の連中が近代娘であることはよく判っている。でも化粧と衣裳に眩惑せられ浮世絵調の風情を斯程まで出されては最早や筆を投げるほかに手立ては無いであろう。ただカメラに執心これつとめた筆者達を尻目に流石は

広い東京の貫禄を誇るかのように、見る阿呆から脱却して「聴く阿呆」を満喫していた録音マニアが結構居たことには恐れ入ったが、地面を這うかくしマイクが、どうように踊子のお腰の絹ずれをとらえたかは是非とも拝聴したいものである。

△次号「新年号」掲載予定▽

牧高志文並に画

漫筆「帯の魅力」

〔最新版〕女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

一組一枚	一五〇〇円
五組五枚	五〇〇〇円
十組十枚	九〇〇〇円
二十組二十枚	七〇〇〇円
三十組三十枚	五〇〇〇円
四十組四十枚	三〇〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

A1	フミツケ汚辱縛り	(新井)
A2	手吊り乳房責め	(五月)
A3	ハリツケ猿ぐつわ	(新井)
A4	全裸正面柱しばり	(遠藤)

A5	亀甲強烈乳房縛り	(遠藤)
A6	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A7	豊満乳房いじめ	(遠藤)
A8	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A9	鼻責鼻梁いたぶり	(遠藤)
A10	全裸後手高小手	(遠藤)
A11	膨隆臀部さらし	(長野)
A12	全裸正面強烈縛り	(長野)
A13	うねる緊縛裸身	(長野)
A14	色輝の開股しばり	(長野)
A15	正面縛蛙股ひらき	(長野)
A16	裸自慢縛りヌード	(長野)

A17	正面アグラしばり	(長野)
A18	正面大の字開股縛	(長野)
A19	遅ましき裸しばり	(長野)
A20	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A21	両手前縛り髪首絞	(大塚)
A22	両手吊り股間吊り	(桜井)
A23	両手膝下しばり	(関谷)
A24	疼れんする裸身像	(関谷)
A25	両股縄掛け開股縛	(大塚)
A26	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A27	乳房晒し肉体自慢	(長野)
A28	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A29	投げ出した全裸縛	(長野)
A30	捕われの全裸緊縛	(梨花)
A31	羞らいの両股縛り	(大塚)
A32	猿轡乳房いたぶり	(遠藤)
A33	荒縄全身縛り豆絞	(大塚)

A34	盛り上げる乳房縄目	(長野)
A35	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A36	ムチ打悶えポーズ	(関谷)
A37	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A38	縦縄股間縛り正面	(関谷)
A39	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A40	くさり乳房責め	(長野)
A41	強制片足挙げ責め	(大塚)
A42	正面乳房くびり縛	(関谷)
A43	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A44	手吊りパンティ落	(絹川)
A45	白バンド後手吊り	(東浦)
A46	豆絞り高小手呻	(絹川)
A47	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A48	ガンジガラメ立縛	(愛川)
A49	亀甲本縄股間縛り	(絹川)
A50	立木縛竹棒責め	(桜井)

きどがわけんし

たんび

せいかつ

木戸川健氏の耽美な生活

木戸川 健

1

木戸川健氏は、△何とか▽ロバーターという、アメリカ人と話していた。△ター▽というのは、日本の△子▽に相当する。女性である。但し、ミセスである。

遠くから眺めていると、いかにもカッコがいい。英語がベラベラのようなうだ。

ミセス・ロバーターがいった。

「私、日本の男性を楽しみたい」

調子は大だが、日本語である。彼には、日本語しか通じないのだ。

「ユーが楽しまんと欲求する男性は、いかなる種類の者であるか？」

「ユーでもよし」

「オー・ケイ、である」

土曜日の午後、銀座は四丁目なる、服部時計店の前で、交渉は忽ち成立した。

ミセス・ロバーターはオハイオ州の出身で一昨年バイヤーの夫君と共に、来日したのでそうである。子供は無い。そして、現在、嘘か本当か知らないけれども、N大学の英語の講師をしているのだそうだ。年は？。

「ハウ・オールド・ユウ？」

このぐらゐの英語は、彼にもしやべれる。

しかし、相手がベラベラと、英語でいった事は通じなかった。

「アイ・ベッグ・ユア・パードン」

途端に、彼は、余り痛くなかったけれども張り手を食わされたのであった。

道行く人たちが、変な顔をして、二人を見

た。どうも、カッコが悪い。

「三十ぐらゐかなー」

木戸川健氏は、苦笑して、つぶやいた。実は、こんな事を書いたのは、ものの順序である。盲目の中国娘（盲パイ？）を登場させるための――。

とに角、ミセス・ロバーターは、日本の男性を楽しみ、木戸川健氏はアメリカの女性を楽しんだ。日米協調の精神で、アメリカが行った時、日本も行ったのである。南ベトナムまでは行かなかったが、これは平和憲法がジヤマしているお蔭である。それにしても、でけえ尻だったよ。

木戸川健氏、思わず、叫んだ。

「ポリショイ！」と。そして、ポリショイ・



サーカスのような、ハラショー（素晴らしい）な演技を、彼女に強いたのであった。もっとも、ハラショーなのは彼女の方だけで、彼女は関谷富佐子ではなかった。（木戸川健氏は関谷富佐子のファンである）

「待たれよ、しばし——。ユーは、サジストであるか？」

「しかり、である。——このホテルは、全室が防音装置になっている。泣けど、叫べど、ダメである。汝、我の鞭を受けるに、ためらう事なかれ」

と、ポリシヨイな尻に、皮バンドをビシッ

ビシッ、と当てたね。（ホント）

「ヘルプ！——ヘルプ！」

英語の『泣き節』である。もっとお聞かせしよう。

「ハッ・ツー（痛い？）、ゴッシュ（畜生）

——ヘルプ！ヘルプ！ヘルプ・ミー」

英語の文弥節も、又よかりである。

木戸川健氏は、よっぽど、徹底的に行おうとしたのだが、やめた。やめたのは、多分キョウヨウのせいである。教養とは、程度を知るといふ事だ。（いや、よっぽどいい気なんじやあない、大真面目ですよ）女性に対して

どの程度帝国主義的愛情を発揮出来るか、こんな事は学校では教えてくれないが学問を基礎にしたハ心Vで、その程度を知るべきである。程度のわからないものは、そんなデリケートなプレーをするより、ベースボールをプレーした方がいいのだし奇譚クラブなどという複雑な本を読むより、マンガの本を読んでいた方がいいのである。その方が

世の中のためになる。

程度を知らない諸君！、野球をし、マンガ本を読んで、ハ期待される人間Vになろう。

木戸川健氏はハ期待されざる人間Vに、既になっっている。毛唐の女と遊んで大和撫子で裏を返すような、バカな真似をして喜んでるのである。彼は誰かさんのように、一日三回は無理だが、二回は確実に出来るね。

とに角、正常なルートが、日米交歓の後、ミセス・ロバーターが興奮冷めやらぬ面持ちでベリー・グッドといってから、

「アイ・ノー」といった。このくらいの英語ならわかる。多分、私は知っている、という意味だろう。愛情を交歓し合ったせい、英語が肌で感じられる。（ウソをつけ）彼が、裸のロバーターを、再び抱きしめたのは、そのためである。皮膚で聞く英語は、西北大学では教えてくれなかった。

「一人のチャイナ・ガールを——。それは、ユーと性向が反対で、喜びが一致する」

「性向が反対で、喜びが一致するとは、マゾであるや？」

「しかり。私は喜ぶであろう、ユーに彼女を紹介する事を——」

念のため、日本語で書かれてある会話は、

総て、日本語である。だから、木戸川健氏は日本語を皮膚で感じていたわけで、——余りいじられるのは反対である。(何を?)

彼はマジメな男だから、テニオハ、の話をしているつもりである。そもそもハオワルVを、△終わるVと送るものもあった、混乱している。どちらでもいいという。そんな、い

いかげんな……。 (木戸川健氏、その話はゆっくり△世相診断室Vで聞くとして、話を進めて下さい。——その姑娘は、横浜の南京町に住んでいて、あなたはミス・ロバーターの紹介状を持って翌日、会いに行くんでしたね。それから、どうしました?。——箕田京二)

2

その姑娘は、木戸川健氏の顔をじっと見ていた。が、どうも視線が定まらない感じである。彼は不図、K誌六月号の△サロンVに、カメラ・ハント志望「こんな私いかが?」と写真と共に、辻村隆氏に、呼びかけてきた、△堺市、大谷勢津子Vなる女性を、その姑娘の上に置いて苦笑した。もちろん、別人である。五月亜紀子嬢が、大きな天然洞窟に湧き出る温泉で有名な「観光ホテルに出てくるような奇跡は、彼にはおこらない。多分、信

心が足りないせいである。

ところで、大谷勢津子嬢、あの写真、視線が明後日の午前三時の方を向いてるね。本当に、アナタなんですか?どうも気になっていけない。

木戸川健氏が、その姑娘の上に△大谷勢津子Vなるイメージを置いたのは、年恰好、髪形が似ているという事もあるが、何よりも、視線が定まらないためである。いや、それ以上△大谷嬢Vを気にしていたためである。もちろん、年がら年中気にしては△お仕事Vが出来ないので、△心層心理Vというムズカシイ心の層にわだかまっていたものが、その姑娘を見た瞬間、例えば、食物をたべると唾液がひとりでに余計に分泌されるように△無条件反射Vに出た、という説明が本当である。

似ているという事を説明する為に、これだけ苦労する。だから、木戸川健氏には、芳野眉美氏という事がわかるのである。空想はい。しかし、空想にも、本当らしさが欲しいのである。現実の世界でも、空想の世界でも一プラス一は、二でなければならぬ。五月亜紀子嬢と、出会う奇跡はあるかもしれない。しかし、可能性はうすいのである。可能

性のうすい事を書くのが△奇譚Vだろうか。

(木戸川氏、あんたも相当な毒舌家だね。麒麟児久さんの、亜紀子嬢を想う、やむにやまれぬ気持が書いたという事も理解してやらなければ……。行間の意味を読んでやらなければ、ダメヨ!。——橋行司子)

とに角、その姑娘は、△大谷勢津子Vなる女性に似て、木戸川健氏には感じられた。読者各位も、何卒、そういう気分で、この物語を、お読みになっていただきたい。

ミス・ロバーターの紹介状は、英語で書いてあったから、木戸川健氏には読めない。その姑娘にも読めない。姑娘の母親らしき人が、時折りニタリ、又、ニタリ、しながら黙読していた。

中国人街は昼間でもうす気味悪い。その家は、H飯店の丁度裏にあって、下はしもた家の構えだが、二階は麻雀荘になっていて、直接外から上がれるように、非常用の鉄の梯子が下りていた。パイをかきませる音、中国語の談笑、そして、いい忘れたが、母親らしき女は西瓜の種をかんでいる。ざっと、以上のような雰囲気であった。

「あんた、ペイ、いくらやるか?」
西瓜の種を、ペッと玄関のたたきの上には

き出して、母親らしき女が、たどたどしい日本語で言った。

木戸川健氏は驚いた。覚醒剤なら、昔、いたずらにやった事はあるが、麻薬までは、手がまわらなかった。手が後にまわるし、食って、寝て、性交して、寿命が来ない前に死にしまうからね。

「この娘に、いくらペイするか？」
誤解であった。しかし、誤解を生ずる程の雰囲気でもあった。

「ミセス・ロバーターは、オールナイトで三万とっておりますがね」

「それは前の相場、今、上がったね。物価も上がったからね」

物価と？———そうか、関係あるんだな。
「いくらです？」

相手を前に、残酷な感じはしたが、もともと残酷な事をやりに来たのであるし、金の事はビジネスライクにしくはない。つめたいのは決してない。無理な感情を殺しているのだ。行間の意味。

「三万五千でも少ないね。でも、ミセス・ロバーターの紹介だから、まけとく」
何をけっかる、ババー奴！。娘を食いものにしやがって———。その

食いものを買いにくる奴は、誰なんだ！。俺なんだ！。どうも、調子わるいな。こんな事、書かなければよかった。△男子、玉を抱いて罪あり▽これも、行間の意味なんだ。
木戸川健氏の△玉▽は人一倍大きかった。それだけに、罪あり。———ア—メン！。

3

その姑娘が、盲である事を知ったのは、その家を出ようとした時である。木戸川健氏の右腕に、己の右腕をからませてきて、体を何かにおびえたように密着させるので、それはまことに姑娘らしい愛すべき仕草で結構のだが、これではアベコベである。姑娘は東の方を向き、木戸川健氏の体は西の方を向いている。東西の対立を象徴しているようなものである。彼女は中共系なんだろうか。どうして、そう東をむきたがるのだ。

木戸川健氏は、彼女がふざけて、わざとそうしているのかと思った。が、違っていた。母親らしき女が、すぐ西にむきを変えさせたからである。

「この娘は、盲なんだよ」
「メクラ？」

「あいてても、見えないんだ。———ミセス・ロバーターからは聞かなかったのかね？」

「いや、全然———」

木戸川健氏は、これまで、経済の許す範囲で、随分女の子に奉仕して来たけれども、盲は初めてである。

△面白い！▽。俄然、斗志が湧いた。その斗志を、耽美主義という。

瀬戸内晴美さんは、文芸春秋に『美は乱調



にあり』を連載して好評であるが、まこと、美は乱調にある。書だって、絵画だって、ポスター的な、整ったものには美は感じられない。音楽だって……いや、世の中の事象ことごとくがそうである。人間そのものが、そうであるからだ。

サラリーマンの生活には、余り美というものは感じられない。それを美しくするためには、芳野眉美君のバーで飲んで乱調したり、久我庄一氏のようにせつせと原稿を書いて投稿したり、新田英雄氏のように夫婦プレーをして撮った証拠をK誌に投稿したり、などする事である。いや、大真面目な語である。

とりわけ、役人とか先生の生活にはてんで美がない。絵でいえばポスターであり、書でいえば、書まで行かない活字体であり、音楽でいえばドレミファだけである。

何故、乱調に美が感じられるのか。それこそSMの本質である。木戸川健氏が、とりわけ、活字体的な、ポスター的な、ドレミファ的な、女の子を見ると、ムラムラしてくるのは、乱調させて、草書体の美を、モデルの美を、不協和音の美を、見出したい欲求の為である。

反対に、芳野眉美君のような美男子？が、

女性の神酒を拝受したがるのは、乱調されて己の美をもっと意識せん為である。但し、芳野君は、前衛の美を己に求めている。そこが普通のMとは違う。

木戸川健氏のようなSが女性に、前衛の美を求めたら、キケンである。が、しかしフオトでなら出来る。

通常のSMでもわかってくれない世間は全くわかってくれない、ようなものが出る。

来る。それで、よい。——それが、彼の六月号の△世相診断室▽の提案になったのである。

乱調の極致たる前衛に美があるか——。ピカソやマチスの絵に美があるか——。一般人

にはわからない。木戸川健氏にも、正直いって、わからない。しかし、前衛に美を感じたものは幸せである。芳野眉美君はわかっていらい。木戸川健氏が彼に何かがあると発言したのは、それである。神酒ではない。神酒を媒介にした、われわれにはうかがえぬ世界である。それが、彼にはあるんだ。チキ生！、と思う。



昔の彼は、単なる媒介である神酒に、罪悪感を感じていた。その罪悪感が、なくなった時、彼は確かに何かを持った筈である。で、なければ彼の書いた物に、辻褄が合わなくなる。△濡れにぞ濡れし▽の一連の発言は、単なる△生▽ではなく彼の発見の喜びである。従って、木戸川健氏が、彼を漱石の△坊ちゃん▽と評したのは、一部は本当でも、全部をいいつくしてはいない。芳野氏が、国宝『油滴天目茶碗』を見て、それで「マミとサクラのオシッコを飲んで、みたいと思った」などは、思わずドキリとさせる。

残念ながら、木戸川健氏はSであるから、そういう発想は出来ない。いくら女の子のお尻を鞭でたたいたって、せいぜい、美男におわす鎌倉の大仏さんに小便をひっかけてやろう、くらいの発想で、前衛の美は感じられないのである。Sには、前衛の美をのぞく事は不可能であろう。発言にケニーを持たせるために名前はあげないが、偉大な芸術家といわれる人々の、ほとんどがMである。

(木戸川健氏、オシャベリは、そのくらいにして、物語りの方を早く進行させて下さい。

——その姑娘と、タクシーで、野毛のホテルに行かれたんです。△野毛の山から、野毛——Vの、あの野毛山ですね。ホテルに着いた時間は四時ごろ。それから、どうしました？。——箕田京二)

4

——ながら、木戸川健氏は考えた。いや、疑問に思った。果して、この姑娘はマゾであろうかと——。

木戸川健氏は、緊縛は余り好まない。要求されれば縛りはするが、専門は鞭と浣腸である。そのムチも、主としてお尻に集中する。浣腸もお尻にするのだから——結局、彼は女の子のお尻が、大好きだという事になる。実

に、正常である。そこに、彼のレットウカンがある。女の子のお尻ばかり追い廻しているうちは、彼は偉大なゲイジツカにはなれないのである。そのうち神酒を拝受せん。

ともあれ、大きなお尻をどっかとそなえた女性を見ると、顔は多少まずくとも、年は多少行っても、口説いてみたくなる。——のが、自然の人情。

半月ほど前にも、自然の人情で、四十才の人妻と、プレーを通じて、お互の生を確認し合った。デカイ尻だったね。毎度出て来て恐縮だが、関谷富美子夫人みたいな尻だった。

木戸川健氏は、関谷夫人のファンである。この事、いった。だから、もしもお許し下さるならば△小説、関谷富佐子Vを書いてみたいと思っっているのだが、残念ながら資料がない。まるで無いね。——だから、書けない。

関谷夫人、お元気で！。

ところで、その姑娘のお尻であるが、これは関谷夫人みたいにでかくない。むしろ、小さい方だ。小さいお尻には、心からのヤサシイ木戸川健氏は、鞭よりも、平手でたたいてあげる事にしている。と、いっても、鞭よりも時間は長くかかる。だから、彼が、小さいお尻の女の子と、旅館にしけこんだら、まず

三、四時間では、出てこないと知るべきである。

その姑娘とは、オールナイトの契約であるから、時間はたっぷりあり、従って、お尻が小さくたってかまわない。

日本が中国を裸にして、馬のりになり、八紘一宇のムチを、その尻にあてたのは、二十年前のお話であるが、木戸川健氏、はからずも、そういう状態に実際なつて、やはり戦争はいけないと思つた。

そこで、正式の外交ルートを通じて、平和条約の調印をすませた後、木戸川健氏は、シ……ながら感じた疑問をたずねた。

「目は何時ごろから見えなくなったの？」

「七つの時——。お腹の病気をしたの。そして見えなくなったの」

お腹の病気をし、目が見えなくなるだろうか？。まあ、いいや。胸のヤマイで、盲目になる事もある。

「じゃあ、あんた、男が——。いや、人間がどんな恰好の動物であるかという事は、知っているわけだ」

姑娘は、うなずいた。

「でも、それ以後、七才以後の事は全くわからないわけだ」



(最終回)

木戸川 健

最近、日本では△乞食▽をする者が少なくなつた。まさに、憂うべき社会現象である。

乞食の精神は、元来尊い。仏教の大慈大悲万人救済の精神から来ている事は、申し上げるまでもない。万人喜捨即救済である。換言すれば、乞食をするという事はわれわれから△精神税▽を取りたてるといふ事であり、税吏のようにみだりに課税したり血も涙もなく強制取りたてなどしない点、まことに大慈大悲の精神の発揚であり

昔から△お乞食さん▽といわれてあがめられて来た所以でもある。

空海も最澄も親鸞も法念も、そして日蓮も、昔の坊さんはみなお乞食をしたものである。坊主がお乞食をして、全国を歩いていた時代、仏教は隆盛であった。信者の浄財をちよろまかして、妾を囲ったり、寺の一部をバーや酒場にしたり稼いだり、あまつさえ寺宝を売りとばしたり、などする不心得な坊主は一人もいなかった。そんなに妾が欲しければ、金が欲しければ、

木戸川健氏は、当り前の事を、至極真面目にたずねた。

「どんな男が、どんな顔して、あなたを責めているかわからないわけだ」

姑娘は、うなずいた。

「それでも、責められて、うれしい?。——仮に人間でなくて、ロボットだったら——、ロボットに責められても、あんた、うれしい?。」

「ロボットって!」

そうか——。彼女はロボットを知らないのか。

「機械で造つ人間の事だよ」

姑娘は暫く考えていたが、どうも、想像出来ならしい。しかたがないから、

「大きな、人間みたいに、大きなお人形さんだ。そして、人間みたいに動くんだ」

と、いつてやったら、やっとわかって、

「人間もロボットも、私にとっては同じよ」

と、いった。さもありません。

「——でも」

と、姑娘は語をついだ。

「人間はお金をくれるけど、ロボットはくれないわね。——やっぱり違う」

「違やあしないよ」

木戸川健氏は、やけに、しみじみとした口

調でいった。そして、やおら起き上がり、例え一時的にせよ、姑娘と同じ光のない世界に住むべく、本来ならば姑娘の口をふさぐために用意された豆しぼりの手拭いで、己の眼を固くふさいだのであった。

姑娘は、それを知らない。

「——責めて!」

あまり木戸川健氏が、おとなしくしているものだから、気にして、すすんで馬になったらしい。彼は手さぐりで、姑娘を探した。

「あなたは何処?。——どこにいるの?」

遠くで、船の汽笛が鳴った。

ば、乞食をすればいいのである。乞食をして妾を囲うほどの天晴れな坊主がでて、はじめて現代仏教は救済される。(と、思うが、今東光先生いかが——?)

お乞食坊主の事はさておくとして、一般の乞食についても、少なくとも、生活保護をうけるよりは、ずっと尊敬すべき態度であり精神である事は言を俟たない。何故なら、生活保護は申請すれば努力なしに得られるが、乞食は街頭に生き恥をさらして、喜捨を乞うという努力なしには、十円の金をも得られないからである。

世の中には、思うに、乞食以下の人間が満ちあふれている。その大部分を八月給泥棒Vという。つまり、日本に乞食が少なくなったのは八月給泥棒Vというロウドウシヤが多くなった為である。泥棒榮えて乞食が亡ぶ。

文化国家、福祉国家、万才!。果してそうかな?。——と、こなければ八月世相診断室Vにはならない。万才!、しまったんじゃあ、アサヒシンブンの社説になってしまふ。たしかに、福祉国家ではあるが、文化国家とは言い難い。精神文化が不足しておる。精神文化とは、月給泥棒たらんより乞食

たれ、という精神である。そういう精神があれば、月給とりにはなっても、月給泥棒にはなれない真理である。

月給泥棒の大集団であるソウヒヨウに欠けているものは、実に、この真理である。給料はかち取るものではなく、働いて、もうけて得るものである。無理にかち取るものだから、物価が上がってしょうがない。

そろそろ年末斗争が叫ばれている折り、私は見た——一人の年老いた乞食を。私は尊いものでも見るように、そっと、百円玉を置いた。

K誌は、いわゆる悪書といわれるものの中にあっても、最も品のよい雑誌であり、又、最も面白い雑誌であることは、等しく衆目の認めるところであらう。八月一匹狼Vたちの唸り声が誌面に満ち満ちていて、大変感動的である。狷介孤高な啜り泣きにも、似た一声もある、宿痾の、もの悲しげな遠吼えもある、ユーモラスな、喝声もある、ピエロの愁声もある、警世の嚇声もある、学究の穩声もある……。それ等が奏でる交響曲は八月完成Vである。これだけ八個人主

義Vヤクジョたる雑誌はない。

私は、三月号のこの欄に、八月不幸か、K誌には思想がない。あるのは嗜好だけであるVと書いたけれども、あれは、完全な誤りで、思想がないどころか、最近のK誌には、八月個人主義Vというイデオロギーだらけである。やがて、SMという嗜好をも排除せん、勢い、と見たは僻眼か?

乞い願わくば、この天晴れな、八月個人主義Vを、われわれの実生活の上にも躍如とさせられて、間違っても八月給泥棒Vにはおなりにならない事を——。

八月世相診断室Vは、これでしめる事にいたします。昨今の世相は、到底、最早や、私のようなヤブでは、例え聴診器をまともに当てても、診断出来ない程、末期的であり、かつ又、まっ先に診断を要するのとは、そういわれる、八月戸川健Vではないかと、反省したためでもございます。

どなたか、この欄をひきつがれる方はございませぬか。葉山啓氏いかがでしょう。

らん事を祈って、筆を止めます。
サヨウナラ

「訂正」

十月号のこのコラムで、ハカトリック思想の根本をなすものはストア哲学であるVと書きましたが、ハスコラ哲学Vの誤りです。ストア主義は、一口に静寂主義、禁欲主義といわれるもので、修道院生活の理想を主唱しており、カトリック思想の一部ではありますが、根本ではありません。

なお、ストア主義は、一般には快樂主義の反対と考えられておりますが、それは快樂主義イデオロル耽美主義なので、著書ハ快樂主義の哲学Vはもっと広い意味で、快樂主義を解説しております。

K誌の読者の中には、きつとハストア主義者Vもいると思うのです。耽美なものに反発して、唯我独尊して、——静寂してしまうのも、私はハストア主義Vだと解釈します。それで満足しておれば、彼も快樂主義者です。そこにハ法悦Vがあるのでしようから——。

西条操氏、麻生保氏、そして、ハ辻村隆はけしからんVといわれる人々、いかがでしょう。ゴイーング・マイウェイといわれた辻村さんのお言葉は生きています。

責道具とアルバムと……………

「マゾヒスト・古川裕子」メモ

久 我 庄 一

へいま目の前にならんでいるこの責道具——
いいえ、楽しい思い出の遊戯の道具——この
アルバム、古川裕子の実態はこれ以外のもの
ではないのです。▽

—29・6月号「わが心の記」古川裕子—

◇

マゾヒスト・古川裕子の華麗な悲劇につい
て書いてみよう。いや被虐の悦楽の後をたど
り再現してみよう——。

私は「創作・伊藤晴雨画伯」(40・9月号
掲載)を執筆した時、あらためて古川裕子の
一連の告白を読みその「凌辱の幻想と期待」
の強烈さに圧倒された。

私は近刊九月号の奇クサロンで、「奇クは
△孤独の広場▽であるといわれている。それ

には生きた文章が裏付けされなければ」と述
べたが、たしかに編集部の人告白・手記・体
験▽原稿募集のPR文句にもあるように「従
来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集
を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹
てた」伝統は、かつて、いまでもその評価は
変りはないと信じられるのだ。

たまたま、その全盛期とも評される昭和二
十七年より二十九年にかけてマゾヒスト・古
川裕子は登場し、大方読者のアブ的な血をか
きたてズタズタにし、全盛期が終るとともに
去って行ったということは何か象徴的なもの
さえ感じられるが、ともかく、告白の金字塔
をうち樹てたこの分野の歴史の中に、古川裕
子の像は特異な存在として、いつまでも記憶

されるべきことはたしかだ。

いま、私があえてマゾヒスト・古川裕子に
ついてメモを取りたいと思ったのは単に記録
をしたためたいというよりは現在の、これか
らの奇ク誌上に彼女の人間像を復活、再現さ
せたいと願ったからでもあり、そのことが、
『読む雑誌』としての誌上に、いっそうの生
きた真実の告白が掲載される刺激にもなりう
ると考えたからでもある——。

◇

シユトウラム・ドラック

古川裕子の「狂乱怒涛」の残光は『私を愛
して下さった皆様へ』——裕子の告別の言葉——
を二十九年三月号に発表してより、「奇譚ク
ラブ編集部からの義兄を通じて伝言が届きま
した。何か書いてみせて欲しいと。」という

言葉とともに『わが心の記』を同年六月号に掲載。復刊第二号に最後の寄稿『告別』を、そして小説家・吾妻新氏が三十六年五月特大号に『古川裕子への手紙』をもって一応、ピリウドを打たれた。

この古川裕子の華麗な悲劇を構成する、クライマックスでありフィナーレでもある吾妻新と、彼女の道行はアブ的な世界の中に、いっそうの複雑さをそえてロマンの華を咲かせたことにもなり、異質な男女の性格が、だか

らこそ、つかのまの激しいドラマを展開し得たとも考えられるのである。
私はこの二人による劇をモチーフとして、この稿をすすめてゆきたい。それが古川裕子を浮ぼりにし、ほり下げる一つの手段とも推察されうるからだ。



古川裕子の△悲劇▽を、私は「創作・伊藤晴雨画伯」の中で『告白の世界をはみ出したことに見られるようだ』とした。これは行動の人でもあった古川裕子と、散文精神に徹する吾妻新との（作者註・吾妻氏は30・5月号「きいたふう」の中で△私は告白を書くまいと思う。あくまでも小説は小説であり、私の小説の中に出てくる二俣志津子は絶対に私ではないことを断っておきたいのです▽について、これ以上に正しい散文精神はない。——と二俣志津子観を記しており、これはとりもなおさず氏の作家としてのあり方を裏付けた言葉とも考えられる。）

出合いにあってプラス（動）と、マイナス（静）が火花を散らし、遂に裕子の生々しい被虐への慾望が告白のわくをやぶって「吾妻新は古川裕子を愛すると、おっしゃって下さい」（作者註・裕子にとって事実的な意味で



「愛する」ということは「責めて下さい」と同意義でもあろうか」との、捨身の文章となり、吾妻新は沈黙した。この黙殺がはね返ってくる世界の中にある古川裕子を指して、私は「悲劇」と云う表現をつかったのである。

あの当時の、古川裕子にとってSM遊戯は単なる責めたり責められたりするという意味だけでなく、そこに信頼と深い愛情を前提としていた所に、「異常性慾の一筋の道を」血みどろになって幻想する渇した混乱せる位置に立っていたのではないかと思う。

古川裕子にとって遊戯という言葉は、あえて言うなら「肉の結合」が裏付けされた同棲を意味する長く続く生活の場をも付け加えることでもなかったろうか。

この点をよく考えてみたい。あの際に「裕子の告別の言葉」39・3月号で「私の手もとには山のようなお手紙の束が押しよせて参ったのです」というような、俗に云え「責めてもらえる、S男を選ぶとしたならば、より取りみどりの中に入った」。——それなのに、ただ一人の男、しかも誌上のみでさぐりあった吾妻新に公開誌上で愛の告白をし、去っていった。

ここに、遊戯という言葉を出しながら

それが愛の告白が、マゾヒスト・古川裕子のすべてでもあったことに感動するのである。いみじくも彼女は「わが心の記」の冒頭で言っている。「小説ならば「構想を変えて」ということもあります、自分を語るだけの告白では、ただ同じことをくり返すだけなのです」。リアリスト・古川裕子にとって、いやそうでないとしても、告白を書きつづけ誌上に発表していた当時の彼女にとって、虚構の世界を、物語を書く余ゆうが無いほど、生きることに危機を、はらんでいたとも推理される。

だから、ここまで古川裕子の世界を追求してくると、私は当然、最後の告白「告別」を書いた後の告白を読みたい望みかられるのだ。それがおそらくはいまになっては空中の月光を、この手にジカにつかむ、むなしさにも通ずることに焦燥を感じる……。



「古川裕子は完全なマゾヒストであるが、意志なき道具ではない。だから「あなたを存分に苦しめてやろう」などという希望がかりにあったとしても、彼女の人格をひとめめ封建思想の持主であり、ただ残酷だという低級な非人間的性格だったら、おそらく彼女は満足

せず、二人の関係は永続しないでしょう。単純な苦痛はマゾヒストにとっても苦痛だからです。「もの」として扱われるのが複雑な反感を起すのはリビドが相手に定着した場合であり、それが可能なためには日常生活でも幻滅を感じないことが条件です。

ここで、ひとりごとのように自分を組上に乗せなければなりません、古川裕子が吾妻新に惹かれた最大の秘密は、この点にあったと思います。彼女は彼が対象を道具視せず、独立の対等の人間としてみとめることを知ったのです。」

——この言葉は、古川裕子の最後の告白「告別」が掲載されてから、五年の断絶をへて、「その一つだけでも義務を果たしたいと思ってペンを取った吾妻新氏の「古川裕子への手紙」36・5月号の一節である。また「古川さん、最後にあなたへの本当の私書、返書を書かせてもらいます。私はあなたの愛の告白をよろこんで百パーセント受け取れます。ただこの誌上で、お互いの仮面の下に。」（傍点は作者）ともあった。

私はこの吾妻新の手紙を読み、もしこの一文を古川裕子がよんだとしたら、おそらくは淋しい微笑を口元にあらわすであろうことを

知ったとしても、私は作家・吾妻新氏の側に立たざるを得ない。私も文学の道をたずねるものであり、すでに固定せる社会生活を営む一員でもあるからだ。この問題について、もっと深く分析するために余談のようでもあるが、私とある若いM的な娼婦とのエピソードを告白を話させて頂きたい。私も事情・背景は多少違うけれど、吾妻新氏の『沈黙の場』で、私も沈黙し背をむけてしまった過去があるのだ。

妻も子もある私は、ある事情に流され、家にあつてはよきパパ、会社にあつては重要なポストにありながら日夜、赤線地帯（二十四五年当時）を別な仮面にかくれて放浪したことがあつた。その世界でマゾ性をもつ女性と知り合った。S的な男でもある私にとってぬきさしならない関係になることは急転直下のことだった。愛する事と責めることが、同意義をもつことを知ったのもこの時だった。私は彼女のために多額の金銭をついやした。身体の弱い女のために一日借り切つて湯治にも連れて行った。

——ある晩、彼女はある客から結婚を申し込まれたことを打ちあげた。そして、思いつめた顔付で私の答えを待った。（私はこのよう

な世界の通例通り、独身としてふるまっていた）その女の居無い人生を考えると「死」んだも同然と思いつめる程、私は真剣だった。私は彼女の幸福になるためなら、彼女の借金を返すことにも、なんでもやってやろうと思ひ、言葉にも出していた。

……だが、彼女がどのような答えを予期しているのかハッキリ判っているだけ私は沈黙せざるを得なかった。（彼女は、私の娼婦としてでなく、人間として対等の付き合いをもってくれたことに感謝し、また私は常に娼婦も人間なのだと、熱っぽい私なりのヒューマニティを振りかざしていた）私は答えを明日の夜までのばすことを約束して娼家を出た。

その夜以後、私は女と会っていない。ある親しい友人に、そつと打明けたことがあつた時、彼は「いつまでたっても文学青年だな」と笑った。そして、へあともどりのきく帰る場所をもっている久我庄一は幸福な男よVと付け足した。

とまれ、あの若い娼婦には、もどる場所が無かつた。やりなおしがきかない、一本勝負に、自分のすべてを賭けるより、他はなかつた。悲劇を地で行ってるものと、寒夜あたたかいこたつにぬくぬくと身体を入れてヒーロ

ーにおのれの分身をたくし、悲劇ある小説を書いている人間とは、同じ『悲劇』でも現実的な両者のキヨリは遠い。いまになって友人をこの場に登場させて人文学青年うんぬんVを持出すまでもなく、私は、若い娼婦に背をむけて去った時も、これらのことは百も承知であつた。それでも言葉なき別れをしてきたのである。この場合、エゴイズム——という言葉を出すのは簡単である。その通りだからである。だが、そんなありふれた定義を使用したくない何かが、私の中にある。それは、おのれの想像するヒーローをつねに『文学』の中で追い求め、現実の世界の中でさらに逢い触れた女性を、私なりの理想の人間像につくり上げ、おのれの（作家の）ストリー通りに行かなくなると人生のペンを投げざるを得ない宿命をもっていたからだ。けだし若い娼婦も悲劇であつたが、やはり、あの場合の久我庄一も悲劇であつたことに変わりはないと信じた。

——話をもどそう。マゾヒスト・古川裕子が公刊誌でもある「奇ク」に「愛の書」をたくし、「吾妻様」とよびかけざるを得なかつた心情も理解できる気持がするし、作家・吾妻新が、沈黙し「告別」の言葉に背をむけてし

まったことも判るような気持がする。

理想家でもある吾妻新は、「あなたもそうだと信じたが、私も性だけに生きる人間ではないからです」と、『古川裕子への手紙』

の中で言っている。たしかに立派な言葉だ。

私も、若い娼婦にむかって言ったことがある「本当に愛しているのだから、あなたの幸福のためなら物質的な意味でも、精神的な面でも陰ながらいつまでも、力になってやるよ」と。

その時、彼女は言った。「あなたは御立派だわ。わたしのような女にはもったいないほど、でも、それだけでは……」おそらく、肉につながる、そこからじみでる末長い男女の生活の場を望んでいたのではなからうか。

作家という限定された世界だけでなく、男にとって『性』はすべてでないことは論をまたない。だが、女性にとっては愛がすべてでもあるように、古川裕子にとって『性』が、そのすべてのすべてであったとしても、その宿命にもだえる姿に哀れと見ても、不誠実とは考えられないのである。

マニヤにとってSMの世界を美化し、理想的に意味付け、平凡な事実と確認することも真実だろう。だが、マゾヒスト・古川裕子に

とって、それが「異常性欲の一筋の道」と眼をそらさず全生活をそれに打込んでゆこうとする世界もまた真実の叫びであり、願いではなからうか――。

◇

古川裕子は、昭和二十七年十二月号に『囚衣』一本をひっさげて初登場した。しかもこの号は、現在、その寄稿の第一線で活躍している注目のベテラン執筆者・芳野眉美氏の初投稿でもあろう『孤独なFANTASY』がのっている意味で、また同じくいまは羽鳥水江氏の若き日の手になる『狂い咲くカンナ』――其の後の告白――（羽村京子）の相も変らぬ「大きな蛆の上に、腹をざっくり断ち割られて」の告白などがのっていることでも興味のある誌上の世界を構成していた。

昭和二十八年十二月号の『凌辱の幻想と期待』によると、「夫は昭和二十六年十二月、突然、自動車事故で死亡した」となっており、初登場の本誌の年月号（昭和二十七年十二月号）とのキヨリから考えて、おそらくは、夫が死亡したことの淋しさと、マゾの血がさわぐ空虚さにたえられず告白を書こう、発表されることによってこれからのマゾヒスト・古川裕子のすべてを賭けようという決意が

あったのではなからうか（作者註・『囚衣』に付けられた△筆者略歴▽の「現在の夫と結婚」及「夫は独立して、陸上運送会社を営す」という現在形の発表のしかたは、むしろ「今は亡き」という過去形の説明但し書が必要ではなかったらうか。発表時の本誌の年代号からおして、私はあやふく、この発表年代前三カ月以内位は、未だ古川裕子には現実の夫婦生活があったと考え違えをするところであった。手前みそではあるが伝記作者をこころざす私の編集部に対する感想を一つ――）

◇

――さて、古川裕子の告白は、「突然の自動車事故は、私から最愛の夫を一瞬にして奪ってしまった」と、ハッキリ書かれた『続・囚衣』28・4月号から、いっそう精彩が加えられ、『凌辱の幻想と期待』28・12月号をへて『慟哭の記』29・4月号でその頂点に達したと、見られる。この「慟哭の記」によまれる「生は暗く、死もまた暗い」という全篇に流れる歌声は、△――実は殆んどいつも『性欲』が私をしつかりとらえているのです。

しかもその『性欲』――それは私に於ては、△被虐の妄想▽以外には何ものでもないのです。はつきり申し上げます。一日のうち殆ん

ど二十四時間は、多かれ少なかれ△被虐の妄想△を——縛られ、鞭打たれ、猿ぐつわをされ、吊るされ、呻き悶えさせられ、すべての恥しさを露出されることを「望んでいる」のです。▽悲痛なマゾ女性のいやされないもだえを秘めて、不気味なめらめら燃える断面図も示めているのだ。

◇

私は△愛▽即△被虐▽。そして「遊戯」即『肉の結合』こそ、古川裕子が求める理想の男性S的な夫に死なれた後の、願いのすべてだと言った。

「古川裕子への手紙」で吾妻新氏が「彼女は対等の友人なのだ」と言ってるように、古川裕子も吾妻氏の文章から、理想的なS男の姿

★代理部の分譲品について★

○本誌上に只今広告してありますものは全部在庫しておりますから、お申込み次第直ちにお送りいたします。○お申込みはすべて（大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号△天星社△宛）宛に願います。○御希望の品名は、必ず△略号▽にてお書き下さい。○古い号に広告してありますものも最近号に広告していませんものは、在庫がないものがありますから、第二希望品を御指定下さるか、或は在庫の有無を一応御照会願います。

勢、思想をよみ取ったのであろう。ところが吾妻氏の言をかりれば「……二つの相反する極から、放電によって中和する可能性と危険性をはらみつたわれわれは近づい」——た、その結果が古川裕子の復刊第二号の『告别』・愛の書を捧げた——その吾妻氏の答えは沈黙であり、ようやく答えが出たのが五年の断絶後というのは、吾妻氏は予期した通りの行動であったが、古川裕子の方に計算違いがあったことをみとめる他に推理の方法が私には無い。しかも、吾妻氏の「あなたの切実な呼びかけにたいする答」にも「お互いの仮面の下に」であり、「ひとりごとのように自分を組上に」という一つのポオズをかまえて居り△古川裕子への手紙▽全体から受け取れるものは、最後まで散文精神を失わなかったペンネーム・吾妻新の見事なまでの姿勢である。古川裕子のすてみとも思われるアブ追求の態度にも頭が下るが、私は作家・吾妻氏の態度にも心を打たれるのである。

人間・古川裕子と人間・吾妻新は、ヒューマンな関係を少しも損わない誌上をとおしてのアブ追求の世界をたしかめあったが、遂に裕子はそれだけの世界のわくをはみ出さんとし、吾妻氏はふみとどまった。前者は書く、

告白の世界から、現実の場におどり出ようとし、後者は「幻滅」の世界に直面することをおそれた。この場合、すでに古川裕子にとつて幻滅という問題よりは「結婚して！」または同棲して毎夜楽しみましようという事実のゆうわくの方が、いっそう強烈だった——そう考えられるのだ。

古川裕子をモデルとし、それに相對する男に作者の分身をもってきた小説『夜光島』は吾妻新・（29・10月号より連載）は、想像の世界によるものであったが、古川裕子は、裕子なりに現実はこの地上に『夜光島』をきずき上げようとした。作家・吾妻新でなく「もし「運命」が二人を結びつけるなら」と、現実生活にある×××氏に、この一瞬（「告别」の手記）に賭けた。

この「マゾヒスト・古川裕子」メモ・にハッキリした結論らしい結論を付けられないのは、現在進行形のまま、むしろ次に展開されるべきドラマ性をはらんだまま、古川裕子と吾妻新との物語は中断されてしまったからであり、いやむしろそのことによって奇ク出版史上に永遠に未完成のままドラマティックな一頁を印すことにもなりうるだろうか——

御厠番秘聞

夢の、また夢

芳野眉美

第五章

畜財の秘密

これから書くことが、花仙老人の畜財の秘密のすべてであるとは思わない。単なる一例だが、その意外性に、薬種問屋の主人が興味を持ったことは、十分うなずける。

大奥の権力斗争の特色は、將軍の子女をもうけ、側室となった奥女中の実父なり養父なりが、側室の威を借りて出世し、権力を握るのが常であった。

その頃、有馬には、奥女中の湯治客が多かったという。有馬湯治場は、石女うますめによくきくというので有名であった。

有馬湯治に行く女中が、石女うますめだったとは限らない。將軍と一夜の交渉で、將軍の種を宿すためには、あらゆる手段がとられたという一例であろう。

あるお局の供をして有馬に行った花仙老人は、お局の腰元から、有馬の御師より、竜筒を借りて来るように命じられた。

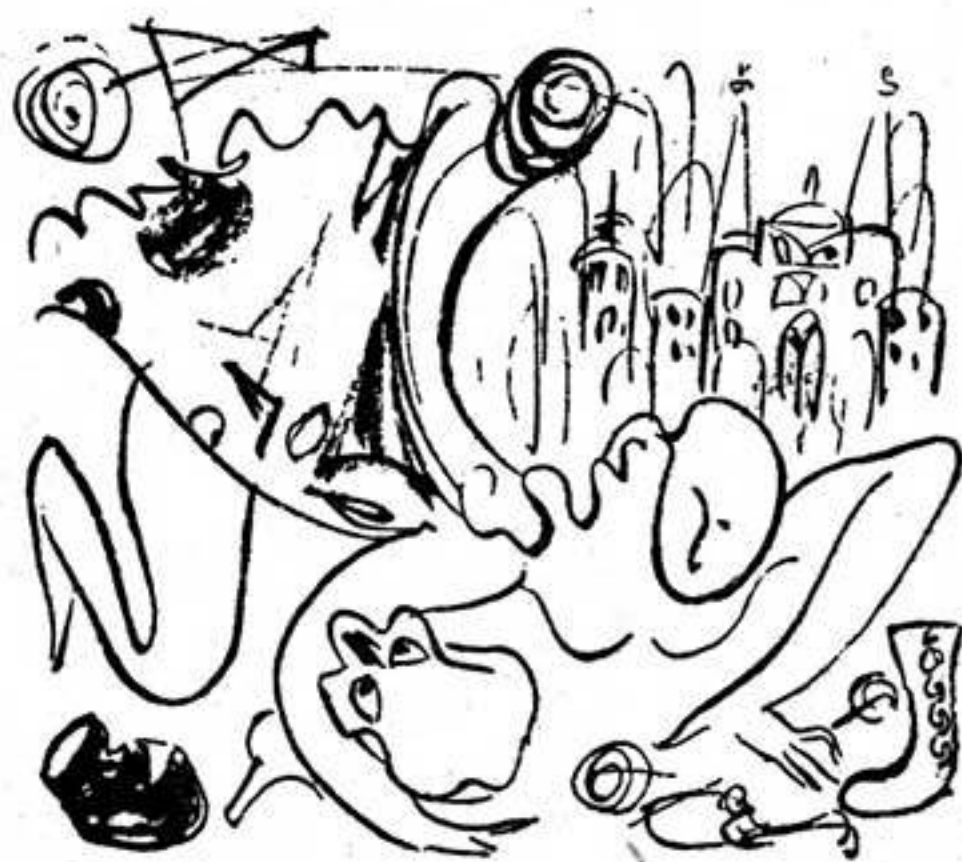
竜筒とは、文化年間、大和高取藩の藩医、柘植彰常が考案したもので、石女うますめにこれを用

いれば、かならず子を授かると、その効能を喧伝されたものである。

婦人の有馬湯治の目的は、竜筒を用いて湯を胎内に入れるため、と老人は御師より聞いた。しかし竜筒のくわしい使用方法是、御師から手紙で腰元に伝えられた。

老人は、お局が湯に入っているのを覗いている。老人が湯の近くに居たのは、お局の警護の意味もあったのかもしれない。お忍びの旅でもあり、少人数の供廻りだったとも考えられる。

といって、岩影からのぞいているのは、お



局の、すべすべしたまるやかな肩だけであつた。

そのまっ白な肩が、かすかに息づいていた。息づきの強弱で、お局の清らかなうなじが、ぐんと前に落ちたり、また、のけぞったりした。

そして、それはかなり長く続いたのである。両肩も、しなやかな背筋も、上下にあやしく動き続けた。素肌の背中が、これほど魅力的な表情をするものなのか老人はうなった。

ほんの、ちらっと見ただけだったのだが、その原因を、老人は、竜筒にあるとみた。

お局から竜筒が老人に下がってきたのは、江戸に帰る日であつた。老人は、有馬の御師に返す前に、秘密の香のする竜筒を見ておきたいと思つた。

薬箱の表をとって、老人は竜筒を見た。腕を伏せたような胴体は、黒漆に金蒔絵で

美々しく飾りたてられていた。糸底に、長さ二寸ほどの親指の太さの突起があつた。

その突起を女の秘所に挿入し、湯の底の湧出部をさぐり、その湯出孔に腕状の部分をおしかぶせるのだと、老人は宿の女中から教えられていた。

湯が噴出する度に、そのまま胎内に入り、

解毒するといふのだ。

老人は、竜筒の突起物を口に含んだ。

すべすべとまるやかなお局の肩が上下したのは、お局の胎内に勢よく湯が噴出した時であらうかと、老人は思つた。

しばらくの間、老人は、竜筒の突起物を舌でもてあそびながら、眼をつむって、竜筒をあてがっているお局を思い出していた。

お局が有馬湯治を思い立ったのは、毎夜のように將軍の寢所に召されているにもかかわらず、お局に懷妊の兆が見られなかったからであつた。

將軍の寵愛が一人の上臈にかたよるのは、他の大奥の上臈にとって、たえがたい屈辱であり、苦痛であつたはずである。

お局の障りの日だけ、將軍に召されるのは、女の誇りを傷つけられることおびただしい。

陰に陽に、お局に対してのいやがらせがあつたのは、考えられることであつた。勿論、お局に対してだけではない。上は側室同志、下は腰元同志、お互に羨望し、憎悪し、敵視したのに違ひない。

そこで、意外な事件が起つたのである。

奥女中、特に位の高い上臈お局、年若い上

級の腰元になると、廁で落下させる物は、極く少量であることが原則とされていた。

そんなわけで、奥女中のたしなみとして、節食か、流動食を主にした食事をとつたらしい。だがこんな馬鹿々々しい、非人間的な定めに従つていられるものではない。それに、誰が廁の落下物を、いちいち調べて見咎める者がいるだろう。

ところが、この弱点を見事につかんで、お局を笑ひ者にした奥女中がいたのである。

ある夜、老人が、お局の使用後の砂宮を掃除するために、廁の床下から取り出した処、廁の隅より呼びとめた腰元がいた。

その腰元は、だまって老人に多額の金を渡すと、不浄な砂宮を奪い去つたのである。老人に一言の返答も許されなかった。

翌日、大奥の廊下で、目をみはるような奇怪な事件が起つた。

お局の名前入りの不浄な砂宮が、こともあらうに、白昼、奥御殿の廊下にさらされたのだ。

犯人はわからなかった。

いや、老人だけが知っていた。昨夜、自分から砂宮を奪つた犯人が、すでに寵愛の薄れたある側室の腰元であることを。

この事件は、側用人が、あわててもみ消した。將軍の耳に入れる筋合ではなかった。老人が不問になったのも、その側室の圧力が暗にあったためだろうと思われる。

お局は消え入りたいような恥をかかせられたことになる。それより数日、お局は病氣と称して外に顔を出さなかった。

薬種問屋の主人が書いた交友録には、金のことは記されていないが、犯人をさがすためにお局側より多額の金が老人に流れたのではないだろうか。

また、その反対のことも考えられる。側室がわより、口止め料として、いくばくかの金

が老人の手に握らされたのかもしれない。老人は、別にお局を裏切ったわけではなかった。御厠番は、大奥のすべての奥女中のも

のであり、お局特定の御厠番ではなかったからだ。それに、そのお局より位の高い方の依頼であれば、買収金の多少にかかわらず、老人はただ従うだけであっただろう。

この事件は終りがなかったのである。

砂宮を白昼公開するような、はしたないことはしなかったが、御厠番に情報を聞き出すことはあとを絶たなかった。

とにかく、大奥の奥女中たちの不浄な秘密

は、誰でも御厠番に、握られていたわけであった。大食でなくても、彼女たちは、あらそって口止め料を御厠番に送るようになった、と思うのである。

彼女たちは、厠の使用後、御厠番を隅に呼んで、いくらかの金包みを手渡すようになった。そして、それが悪い習慣となったとしたら、どういうことになるのだろうか。

その習慣を無視した奥女中は、御厠番から悪しざまに宣伝されたかもしれない。いまいまいましいと思ひながら、どうしようもなかったのではないだろうか。

これはまた、いつもは虫けらのようにあつかわれ、時には頭から落下物を浴びせられるなど、人間として、あつかわれない日常の不満が、今度の事件によって爆発し、御厠番たちのささやかな反抗になったのかもしれない。

この時こそ、しぼれるだけしぼってやれという空気になったとしても、それは当然のことと思われる。

御厠番たちは、だまっけていても、情報料と口止め料が、自然に入ってきたのである。

その頃、花仙老人は、御厠番の頭のような位置に居た、組下の番人を集め、情報網を張

りめぐらし、あらゆる情報を提供して得た金と、口止め料とを、頭の権利をもって搾取したのに違いない。

これはきつと、馬鹿にならない金額であったことだろう。

老人は、こうして自然に入ってくる金を、ただ遊ばせておくことはしなかった。バクチの好きな番人たちに、高利で借すことさえしていたのである。

花仙老人の畜財の秘密は、あるいは、こんなところにあったのかもしれない。

奥女中の暗斗が続く限り、老人の顔から笑いが消えなかった。

第六章

小窓の影

薬種問屋の主人は、その交友録に、花仙老人が唐女の足を愛した原因に就いて、老人の話を記していない。老人が話をしなかったのか、老人が気にしていなかったのか、よくわからない。

だが、興味あることは、そのことに就いて主人が自分の経験から推察したことを書き残している。

それによると、唐女と主人の間に、ただならぬ関係があったようにも見受けられるのだが、これは微妙で、断言は出来ない。

その日、主人に背を向けて茶を点じている唐女の黒々とした艶やかな垂れ髪にさえ、顔を深く埋めてみたいという感情の高ぶりに、主人は悩まされていた。

その上、長い髪を分けて見える唐女の耳朶は、春の柔かい陽射しに濡れた可愛い桃の花片のようであった。出来ることなら、近寄って、かんでみたいと主人は思った。

「どうぞ」

唐女のなめらかな肢体から漂ってくる香の匂いが近寄り、透けて見えるかのようなまっ白な、そして、赤子のようにむっちりした二つの手が茶碗をささげて、主人の前にそっと置いた。

主人は、勢よく飲んだ。

「もう一服——」

優しく首をかしげてみせて、唐女は茶碗を取り、点前にかかる。その静かな微笑が、主人を激情にさそい込んだ。

小さな茶室には、主人と唐女しかない。老人の留守の出来事であった。

釜の湯がたぎり、炉は赤々と燃えている。

二人きりになったのは、始めてであった、それにしても、主人を応待する唐女の状態は馴れ馴れしすぎると思えた。それだけ、主人に親しみと信頼とを寄せていたのかもしれない。

生き生きとして弾力のある表情や、気品に満ちた所作が、唐女の人柄をしのばせて、主人を魅了した。

茶室に漂う香の匂いが主人を混乱させた。

主人のたくましい両腕に抱きすくめられて唐女は喘いだ。

が、逆う様子はなかった。

………

しばらくして、髪の香油の匂いが揺れ、唐女は身悶えしながら主人の腕からのがれた。

主人は茶室から庭に出た。

気を静めて、庭を見ていると、廁の吸い込み窓から、唐女の素足が覗いているのに気がついた。主人はそっと近寄った。

五本の足の指が、まるで、いきもののように、よりそったり、四方に別れたり、身をちぢめたりしていた。

その妖しい足の指の動きに、主人は我を忘れてみとれていた。

廁の小窓の影で、小さな丸い唐女の足の指

は、かすかな、とぎれとぎれに聞こえる息の音と共に、微妙な動きを続けていた。

これは、主人にとって、忘れられない小事件であった。その時から、主人は唐女の足を夢にまで、見るようになったのである。

そして、主人は小冊子にこう書いている。

朝に夕に、奥女中の排泄に接している老人は、廁の小さな吸い込み窓から奥女中たちの足をかいまみ、秘めやかな足の指の動きに魅せられていたのではないだろうか、と。

上臈、お局中老といった高級奥女中の顔は見たくても見られないが、彼女たちの足は見られたはずであった。老人にとって、大奥の美女たちの幻影は、すべて彼女たちの足に集中されたといっても、過言ではないかもしれない。

そう思うと、晩年になって、老人が唐女の足をこよなく愛し、舐め、すするといった狂崇の原因が、よくわかるような気がするのである。

老人の世界は、限られた廁の小窓の影に展開していたのだ。

主人は、再び茶室にもどり、衣服をあらためた唐女に、茶を処望した。

床の間の掛軸は、「夢の、また夢」と読め

た。

花仙老人の枯れた筆だった。

第七章

香炉と盆栽

花仙老人の性欲が、五十余も年の違う唐女を得てどう展開したか、薬種問屋の主人ならずとも、やがて年輪を経て老いるのだから、興味を持つのは人情だと思う。

幼少の頃から性の世界にそだち、男の快楽の道具として種々な技巧をたたきこまれた唐女の、いくら若いとはいえ、熟れ切った女体を、老人が十分に満足させることが出来たかどうか、考えただけでも、あやぶまれるのである。

肌に点々と老醜の見える年令となつては、すでに昔日の絶倫な精力は無く、唐女のひかえめな要求にも、全面的に応えることは出来なかったであろうと思われる。

部分的にも不能だったとしたら、これが、やがてせまりくる死の前ぶれとしての、完全不能の第一歩であることを、老人は身にしみて感じていたはずであった。

花仙老人の残り少い余世は、薬種問屋の主

人か、いみじくも例えた、奈良は三月堂の空繚索観世音菩薩像のような唐女を中心に、刻々と時をきざんだに違いない。

部分的にすでに不能であっても、いや、完全に不能になったとしても、唐女を全く関係が出来なくなっても、老人のおとろえを知らぬ性欲は、唐女を加虐の陶醉へと導いていったことだろう。

男女が関係することだけが、SEXではない。

老人の性欲に、夜も昼もなかったとしてもそれは当然のことであった。

薬種問屋の主人が、老人宅を訪問するうちに、心ならずも老人と唐女の秘めた遊戯を再三にわたり見てしまったことは、容易に想像出来ることである。

老人と唐女の秘戯を、主人の小冊子に追つて、この稿を終ることにしよう。

その日、玄関で案内を乞うた主人に、唐女の声だけが返って来た。

「お上りになって、お待ち下さいまし」

涼しい、やさしい声であった。

唐女が玄関に迎えず、返事だけをすることは、前に一度も無かったことだが、主人は別に気にもせず、勝手知ったいつもの座敷に通

った。

そして、主人は、縁に坐って庭を見ている（と主人は思った）唐女に会釈した。

唐女は、ふりかえると

「今、すぐ、そちらに参ります」

と主人に云った。

「御老人は、お散歩ですか」

「在宅しております」

「何か、御用事でも」

「いえ」

フフ、と唐女が笑った。

「ここに、おりますの」

「――」

「でも、ちよつと、手はなせませんので、失礼します」

その時、唐女の腰のあたりに、老人の顔がちらつと動くのを主人は見た。

主人からは、唐女の背中しか見えなかったが、裾をはだけた唐女の両脚の間に、老人が居たのである。

縁に坐り、庭石に脚を下ろして、裾をひろげた唐女は、そのあらわにしたまっ白な両股の間に、老人の顔をはさんでいたのである。唐女は、いったい、何をしていたのだろうか。それからしばらくして、老人の留守に、

唐女と逢った主人は（それが何回目かは知らないが）唐女の口から、驚くべきことを聞いている。

唐女は、そのとき、老人の口中に放尿していたのである。

とろけるような、甘い微笑を浮かべながら唐女は主人に云った。

女性写真モデル募集

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。○本誌愛読者の方でしたら、年齢、遠近は問いません。分譲品用です。○本誌上にも掲載希望の方は、お申し込み下さい。○出演希望の方は、お申し込み下さい。○掲載希望の方は、お申し込み下さい。○その他詳細につきましては、お返事下さい。○応募された方には、お返事いたします。○好みの傾向を附記した御返事、都合の良いお返事を、この世のものとは思えぬ、唐女が感謝いたします。○本誌の内容充実のため、御応募の文獻研究資料作成のため、御応募の文獻下さるよう、お待たせいたします。○用するよう、お待たせいたします。○特に妊婦資料の作成に御協力いたします。○を求め、御一報下さるようお願いいたします。○に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部▽

「この頃、御廁や樋宮をあまり使ったことがありませんの」

「御老人が、みんな……」

「ええ」

「御老人の、いいつけなのですか」

「すべて、とは申しません」

「——という」

「わたくしが、その気になることも御座居ます」

唐女は、葉種問屋の主人の唇を受けながら

荒い息を吐くと、

「あなたさまも」

と云った。

「いかが」

廁や、樋宮を使わない、という唐女の告白は、唐女の尿ばかりでなく、老人が唐女の、

そのものまで、口にしたことになる。

それを、主人がたずねると、

「まさか」

と唐女は否定した。

「しかし」

「無いとは申しません」

「では」

「たまに」

主人は絶句した。

二畳敷きの老人宅の廁は、盆栽と香炉が棚に置かれ、老人の、廁に対するおくゆかしさが、隅々まで浸み渡っているように感じられた。

床下は高く、石畳の床にいつもは溜めの桶が置かれてあるのだが、時には、それが、大奥の廁のように、砂宮に代ることもあった。

その砂宮の代りに、さらに、老人の顔が、廁の中央に矩形に切った穴から、まるで生首のように、突起していたとしたら、……

「それで」

「口で……」

「口で」

「吸う……」

と云いかけて、唐女は、主人の胸に顔を埋めた。

主人は、唐女の秘塊を呑み込んでいく老人を想像して、再び、絶句した。

老人の唇に、この世のものとは思えぬ、唐女の感触がつたわり、そのまま、唐女の落下物は、外界の空氣に触れることなく、老人ののどに消えていく。

匂いはない。

すべては、老人の、唇だけが知っていた。

（終）

S M カメラ・ハント

△続・美木乃々子の巻▽……………

「クリス・ラプソディ」

辻 村 隆

奇異な偶然の重なる日であった。その日、私は、配達の時を同じうして二通の封書を受取った。一通は青木順子より、もう一通は三木則子からである。

青木順子の便り――。

（この前は、あんな匂いのするような楽屋までお訪ねになられて大変恐縮です。休日の第一目を一緒に過したいと、向井も愉しみにしておりましたが、ここ二日位前から、又私の体の調子が少々悪くなって来ましたので今回は刺激を避けて、一日も早く安静の地に着きたいと思ひましてお手紙しました。

私達は仕事の日の続く限り、音や光や、雑多な人々の声や神経に悩まされておりますの

で、私達のいる処がアブノーマルな塊りでしょう。ですからそれだけに、平凡さを求め、自然に飢えているのだと思います。非常に地味な、平穩な環境におられる方は、むしろアブノーマルを求めて、自分を解放しようとしておられる事と思いますが……。

私は出来たら、この休みを、草や木になつたつもりで過したい気持で一杯です。平凡さや自然から切り離されたら、何のエネルギーもなくなり、まったく不毛の荒地になつてしまふような気がします。この荒地の上に這い廻っているアブノーマルは、砂漠のクモやサソリのようなものでしょう。殻の堅い毒性を持つたその地にしかないような。

辻村 隆 様

青木 順子

胃腸がどうしても治らないとか、不眠が続くとかいう生理現象も、ひとつの不毛化現象に近いと思いますので、この際新たなエネルギーを蓄わえるためにも、静かにボンヤリしたいと思っています。どうぞその点をお察し下さいませ。又元気になりましたらお眼にかかりたいとお思います。奥さまにもよろしくお伝え下さいませ。奥さまは大変温和な静かな方と思いますが、又いつか伺ひまして、一度お話を直接伺いたいと思っております。向井からもよろしくとの事です。では又



八月末、真夏の過労もあって、巡演を暫らく打ち切り、半月許り休養するという話だったので、二人に逢った時、是非遊びにいらっしやいと奨め、その時は、彼等もそのつもりで確約したが、青木順子の健康上の不調が訪問中止の手紙となったものだった。成程彼女の手紙にある通り、彼等は常にアブの世界にいて、偶の休日は平凡を求めたいであろうし、私を含めて大方は、日頃はノーマルな生活の

中にいて、偶にアブを求めるに、汲々としてゐる。正に彼女の言う通りである。私達のプライベートな会合の、ペンにのらない親交の愉しみは当然お預けとなつて私はがっかりしたが、真に彼女の体調を思えば、又やむを得ないと、今夏の機会は諦めてがっかりした気持でもう一通の三木則子の便りを開いた。

私のもじったペンネーム、美木乃々子の本名が、三木則子であろうかと、大方の賢明な諸氏は、とくにお氣付と思ふが、その、美木乃々子の便り――。

(突然のお便りお許し下さいませ。六月末、東京の向井一也様よりお便り戴き、巡業で京都へ来た時は、必ず連絡するとの言葉でしたが、先日スポーツ新聞で青木順子さんが京都で公演中の芸能欄を見付けました。それなれば、向井さんも必らず御一緒と存じますが、一向に御連絡ありませんが、どうなっているのでしょうか。若し御存知なればお知らせ下さいませ。私では

到底青木順子さんの万分の一も勤まらないズブのしろつとで御座いますが、辻村さんのお便りを受取り、都合によっては一度舞台へ立って見ないかとのお話もありましたのに――
勿論、そんな大それた希望もございませんが、そのご梨の礫ですので何だか割り切れぬ氣持です。最近縁談が起りましたし、又私事で是非一度お目にかかりたいと存じます。電話は京都の四五局八×三番でございます。御返事心よりお待ちしております。箕田様始め、皆様にもよろしく御伝え下さいませ。

かしこ

三木 則子

辻村 隆 様

これは又、思いもかけぬ逢いたいの便りである。捨てる神あれば拾う神ありとは、このことか。向井一也が私宅を訪問し、青木順子が体調悪く、郷里で静養中で、或いは再起出来ぬかもしれぬとの危惧から、私に誰かいい人を紹介してほしいと乞われ、それならばと多少は芝居っ気もあり、押出しもきくボリユームのある美木乃々子を紹介したのであった。その後、青木順子の体も恢復し、再びコンビで巡演し始めたのは、衆知の通りである

が、向井一也に便りを貰い、心待ちしていた美木乃々子は、自然忘れ勝ちになってしまったらしい。私も彼女を向井に紹介した手前、気の毒でもあり、ひとつは、「拷問刑罰史」特集の撮影中、熱発して倒れ、その後糖尿病を惹起して、絶えて久しくなっていたせいもあって彼女の便りと共に、俄然、急に逢いたくなったのは、人情のしからしむるところであらうか。

私は手紙を読み終ると、すぐさま受話器をとった。〇七五四五八××三は京都へ直通である。若い女性の声で、もしもしと出た。

「則子さん、おいでですか——」

「ああ、姉ですの。生憎とお茶のおけいこにいきはりました」

「妹さんですね。辻村といいますが、明日、午後一時、御池飯店の“ジャンゼリゼ”でお待ちしているからお伝え下さいませんか」

「はい、そう伝えます。けど、若しアカンかったら、どうおしやすえ？」

「私の方へ電話して下さい。電話番号は御存知だと思いますから……では」

短兵急の随分強引な片通話と受話器を措いてから反省したが、あの手紙の内容からすれば恐らく来るに違いない。彼女は近くだし、

私はわざわざ京都へ出掛けるのだから、まさか待ち呆けもあるまい。

忘れていた美木乃々子のイメージが猛然と蘇がえて来た。あの娘の場合、いつもこちらには、多人数だった。箕田氏、塚本氏、T氏、もう一人のT氏と複数であったが、明日は、彼女と二人っきりで、始めて逢う日である。私の胸はいっしょか弾み、愉しい妄想とプレイの種々相が、妖しく私の脳裡を掻き乱し出した。

× × ×

日照り続きの残暑は体にあたえる。翌日、私は懶るい体に鞭打って、その癖心は逸って、しばし支度に、途惑っていた。

彼女の手紙にプレイの件は一行もない。手ぶらで行くべきか、それとも例の通りプレイを予想して準備して行くべきか、仲々決しかねる。

しかし、矢張り私は根っからのプレイボーイなのだろうか、後者に決めた。きめたとな



ると逡巡していない。手早く愛用の黒のバッグにカメラ、ストロボ、三脚を入れ、さて縄という段になって、ありきたりの従来の白いロープより、若し出来得る可能性ありとすれば、変ったところだと、そこで急に思い立って、夜乃探郎氏より贈呈してもらった、ナイロンのまだらな紐を持って行くことにした。

この柔かい色彩豊かな紐を頂戴して以来、未だ一度も使用していないのが、夜乃氏にも悪

い様な気がして、この紐を使つての緊縛フォトを、箕田氏を通じて夜乃氏に贈呈したい所存もあつたからである。最近の夜乃氏の奇クに対する貢献たるや大したものである。あの情熱の傾注は唯事ではない。箕田氏が連絡すると、忽ちこだまのように、その反響ははね返つて来て、今迄溜つていたものを、一時にどっと吐き出した感で、せきを切った奔流の様に止まるところを知らない。今に『小説辻村隆』を書かれるぞと、箕田氏が脅かすが、彼の筆にのつたら私もさっぱりカタなしで、いい肴にされることだろう。彼の私に対する買いかぶりに、少しでも酬わねば、仙台より遠しとせず、泉の如く送り来る、彼の情熱に申し訳ない。このフォト受取つて頂いて、幾分でも喜んで頂ければ幸甚である。

閑話休題——。持参するプレイ用具の準備で、私はもうひとつ別の事を思いついた。不可能かも知れないが、可能にしたい浣腸プレイなのである。クリスタールは事実、大分私のプレイの範疇から遠ざかつていて、私自身クリス・プレイは決して嫌いな方ではなかったが、強いていえば撮る機会がなかったのかも知れない。このクリス・プレイを最近猛然と私に吹込んだのは、山原清子の第一回後援

会で知己を得た、大阪のT氏であつた。T氏のクリスタール遍歴は、それだけで最早一篇の物語りを構成するが、クリスタールなき生活は空虚な砂漠に等しいと彼は仰有る。この次のカメラ・ハントには、是非共クリスタールをと、再三再四の懇望であつた。この夏休み中、T氏には、私の子供達が随分とお世話になつた。芸能関係の方で、大阪の映画館をあちこちと、無料で入れてもらったのであつて、T氏が私宅を訪問されると、今では、私の客か、子供達の客か、どちらか分らぬ程家では人気がある。事実子供はお好きらしい。そのT氏の懇望もだし難く、かなり困難を覚悟の上で、私はカサの高いイルリガートル、エネマシリンジ、それに特大の一〇〇ccの浣腸器をボストンに納めることにした。鞆はかなり膨れて重くなる。これでフォトが撮れないとなると、まるで骨折損だが、可否半々の可能性を信じて私はその重い鞆を持上げた。

特急の走る間、開け放たれた窓から流れ込む風は快よかった。折角ヘア 드라이アーを使つて、丹念にウェーブし、ねかしつけた髪が風でバサバサになってしまったが、やはり涼しい方がいい。京都の終着駅から御池通りの喫茶「シャンゼリゼ」までタクシーで十分足

らず。定刻十五分前位に到着。待つことは往々あつても待たすことは嫌いな私、いつも定刻よりは少し早い目にきて、プレイの心構えをつくつておく。これぞプレイボーイの本領か。

道路に面した窓際に席をとつて、私はジュースを注文し、美木乃々子との回想にしばし耽る。

京都のT氏に紹介され、始めて出逢つた京都河原町四条の喫茶U。織物屋の娘さんで、花嫁修業中二十二才とかいわれたのを覚えてゐる。いよいよ実現の運びになって、鞍馬吹雪の午後、処刑の部屋を提供したT・S氏の家で、第一回の拷問刑罰特集をとり、続いて中五日おいて、再びT・S氏の家で、第二回目、西欧刑罰集を撮つたのだが、この時、悪寒、熱発し、撮影半ばで斃れ、一同に非常に迷惑をかけ、この第二回撮影行の様子は、遂に書けず仕舞いになってしまった。この稿で私は、発病に動揺し、カメラ・ハントは当中止して、療養に専念すると、最後に断わり書きをしたものだが、あれから半歳余を経過して、今再び、こうしてペンを握り、只管カメラ・ハントにうつつを抜かしているのはよくよくの助平根性らしいと、我乍らあきれ果

でている。

「拷問にのたうつ女」の終章――。

『私達三人とT氏、乃々子とは西と東に分れた。振り返ると、雪の中に手を振る乃々子のすらりとした姿が一入印象的で、それも、やがて、雪女が消えるように雪にかき消されていった』と、仲々ロマンチックである。

そして現実の今は夏、あれから半年、美木乃々子は果して変貌しているだろうか――。

午後一時、あの時と同じ様に、同じ喫茶で同じ時間に、同じ席で私は待っている。違っているのは、私独りであるということだけ。

そして、前と同じように、一時きっかり、美木乃々子は、「ジャンゼリゼ」の扉をあけた。豪華喫茶に似ず、チケット先払いで、一寸味気ないが、奢る手間は省ける。

すぐに私を認めて彼女はにこやかに一礼して、私の前の席に腰を降す。

「お元気そうじゃありませんの。糖尿だと聞いているものだから、どんなに痩せていらっしやるのかと思ったわ。でもよかったわ」

私の体を気遣っていてくれたのが嬉しかった。爽やかなスカイブルーの袖なしのワンピース。衿もとを飾るかれんなボーもふさわしく、裾の大胆な花刺繍も、腰で着こなすデザ

インが、美木乃々子をさらに新鮮な女らしさに仕上げていた。眼鼻立ちも体格も一入大まかで、育ちのよさが、奔放に伸びた若鮎の感触を私に与えた。笑うと、口許まで開けっぴろげに大きくなるのすら、辺りを意に介せぬのびのびしたフレッシュな童画風な雰囲気醸し出していた。

「向井一也に逢ったよ。休日をつくるというので、京都へ引っ張って、くるつもりだったが、ダメになった。青木順子から断わりの手紙が来てね。或いはあなたのこと、青木順子の前で話したから、一種のゼラシーかも知れない。向井氏は凄くあなたに逢うこと、乗気だったからねえ」

「御一緒じゃ、どうにもならないってわけなのね。でも、もういいわ。手紙だけのことですもの、どうってこともないわ。唯、あの人の手紙、案外名文だったし、何か惹きつける魅力のあることは確かよ。今度お逢いになったら、よろしく仰有っておいでね」

「ああ、いいとも、いずれ又逢う時もあるだろうからね。ところで今日の私に会って話したいことって何？」

「改まられると弱いなあ。唯、何となく逢って見たくなるだけ、こんな事云うと怒る？」

私は、美木乃々子のお喋り口の調が、多人数のあの時にくらべ、ぐっと親近感をみなぎらせて碎けているのに気付いた。この変化は妙である。あの時は、私なんかより、むしろ、塚本鉄三に近づいていった様に思えたのに、この親しさはどうだろう。話は案外し易いかも知れない。彼女にとっても、一対一の方が気分が楽なのではなからうか。

怒る？というて、彼女はコケティッシュに笑った。それは媚態に近かった。正に驚き。

淑やかな、織物屋の娘さんの、これは又大変貌だ。それならこちらこそ、その調子で。

「怒るどころか光栄の至りだよ。あんなのような素晴らしい人とデート出来るなんて、昨日の手紙見るまでは、想像もしなかったからね。これでプレイでもあわよくば出来れば、我が生涯の最良の日とくるね」

そろそろ奥の手を出し始める。悪いクセ。

美木乃々子はアルカイックな微笑みを洩らして、口は閉じたままであった。

「箕田さん、お元気かしら。あの時あった人は皆懐かしいような気がするの」

「是非又撮りたいって言ってたよ」

「ホント？」

「ほんとだとも。明日でも飛んでくるよ」



その癖、箕田氏には、今日のデートは知らせてはいけない。知らせて、若し一緒に行くといえ、折角の二人だけの機会がオジャンだし、又何か彼女にプライバシーな用件があるのかとも思えたからである。

「私、辻村さんや、箕田さんにも黙っていたけど、あれから、T・Sさんには是非と頼まれて、一度あの家へ行って、T・Sさんと二人きりでモデルになったことがあるの。御存知

かしら」

「知ってたよ。T・S氏が長田実という人に依頼したネガね、君のだったよ。長田実は私に見せてくれた」

T・S氏の依頼で、長田実を彼に紹介し、

二人の交遊は仄聞していたし、隠すことの嫌いな長田実は、私のためにわざわざ美木乃々子の緊縛フォトをT・S氏の撮ったものだとことわって、見せてくれていた。T・S氏は長

田実を私に紹介させておきながら、そのご、ウンともスンともいって来ない。痩せがたの、秘密主義のやや陰險なタイプの彼は、私の様な陽性の明けっぴろげな人間とは、兎角性が合わないのかも知れない。早速、美木乃々子のアドレスをきき、単独口説く様なそんなタイプの人間は、私の好みとしても、嫌いな方である。

「T・Sさんからは、何もいってこなかったの？」

「ああ、全然音沙汰なしだよあれ以来処刑の部屋を潰して

結婚したらしいが、コソコソ口説くあんなタイプの男は嫌いだよ」

「何だか悪いことした見たいね」

「いいよいいよ。探偵はあんたの自由だもの。気にしない気にしない。それより結婚の話あるんだって？」

「お見合する予定なの、九月中旬頃。でも余り気が進まないの。パーツと、華やかな恋がして見たいなあ。でもそんなチャンスもないし、あったにしても尻込みするでしょうね。私って矢張り古い女なのね」

「放っておく男性共が、おかしいくらいだがネ。ところで今日の予定は？」

「割烹学校行く日だけど、休んじやった。夜の十時までは自由な時間よ」

「なら好都合だ。久し振りにプレイどう？一対一だから私を信じるか信じないかは、あんたの胸次第、いやなら構わないんだよ。」

「ええ、いいけど、準備なさって来たの？」

「この通り——」

私は重いバッグを抱え上げて見せた。

「なあんだ。じゃ構わないもないわ。そのつもりじゃないの。若し断わったら、どうするつもりでしたの」

「重いバッグを提げて、シオシオと帰るに過

ぎないね。いける確信が七分、あかん方は三分ぐらいの気持ちで、兎も角つめてきたんだ。ああ、よかった」

事実、私はホッとした。と共に、湧然とフアイトがみなぎってくるのを覚えた。

夜乃探郎の約束も果し得よう。更にクリスマニアT氏の願望も恐らくは達し得るであろうとの確信を持った。こんなトントン拍子なら、もっと昨夜のうちに、いろいろとアイデアを考えておけばよかったと一寸後悔。

散々考えて行った挙句でも、何もとれない時もあるし、ブツケ本番で行っても、それこそ素晴らしいプレイフォトをモノにする時もあるし、これ許りは当って碎けるだ。

プレイの内容について、彼女に説明の必要さらさらない。大胆に振舞うお嬢さんだ。その気になっているのだから、大概のことなら否応あるまい。

私達は「ジャンゼリゼ」を出た。夏の暑い陽射しの直射を浴びて舗道に佇む。パーキングメーターに駐車した車が邪魔になって、仲々に車は拾えそうにない。行く先はどこでもよかった。二人のアベックに、広い部屋はむしろ不必要かも知れない。

安全ベルトに歩いて、漸く車を拾い、運ち

やんに気軽にホテルを告げると、そんなら二条城の近くに、いいホテルがあるという。

五分許り走って忽ち到着、成程、正面に二条城を借景したこのMホテル、見掛けの大きなハタタリに較べ、内部は細かく刻んだ安直型。その一室に通されて、始めて私達は神妙に顔を見合せた。彼女の顔から笑いは消えて真剣なまなざしで、部屋の内部の調度や、つい立てで仕切られた、大きなダブルベッドに眼を走らせていた。好奇と不安が等分に錯綜しているに違いなかった。

× . × ×

「まあ、綺麗な紐ね。それに柔らかいわ」

美木乃々子は夜乃探郎より送られた、例のナイロン紐を取上げて、物珍らしげにみつめていた。五本のまだら紐は、三色編みですべて色のとり合せが異っていて、それが白い肌にまとうとき、鮮やかな色彩となって、きつと異彩を放つに違いなかった。唯、難点をいえば一本が一メートル半程度なので、体を二廻りすればもう終りだった。出来得れば探郎氏よ、二種類程度の色でよかったから、もう少し一本が長くして欲しかったですよ。

私はひとしきり、まだら紐の由来を彼女に説明した。

「へえー、夜乃探郎ってペンネームなのね。いっそ、夜尾探郎ってすれば語呂がいいのね。ロマンチックで、ダンディな感じがするわ。近ければ辻村さんに紹介して戴いて、一度逢ってみたいような気がするわ。でも仙台じゃお話にならないわね」

「このまだら紐を使って緊縛フォトを彼に送ってやろうと思ってネ。それが今日の先ず第一の目的なんだ」

乃々子は無意識にうなずいていた。

「じゃあ、そろそろ始めようか——」

私はさりげなくうながす。心得た様に美木乃々子は、私の眼前でするすると脱いでいった。豊満な白い肌が惜しげもなくこぼれた。

「これも？」

乃々子は、パンティを手にかけて、稍々はにかんだ唇できいた。

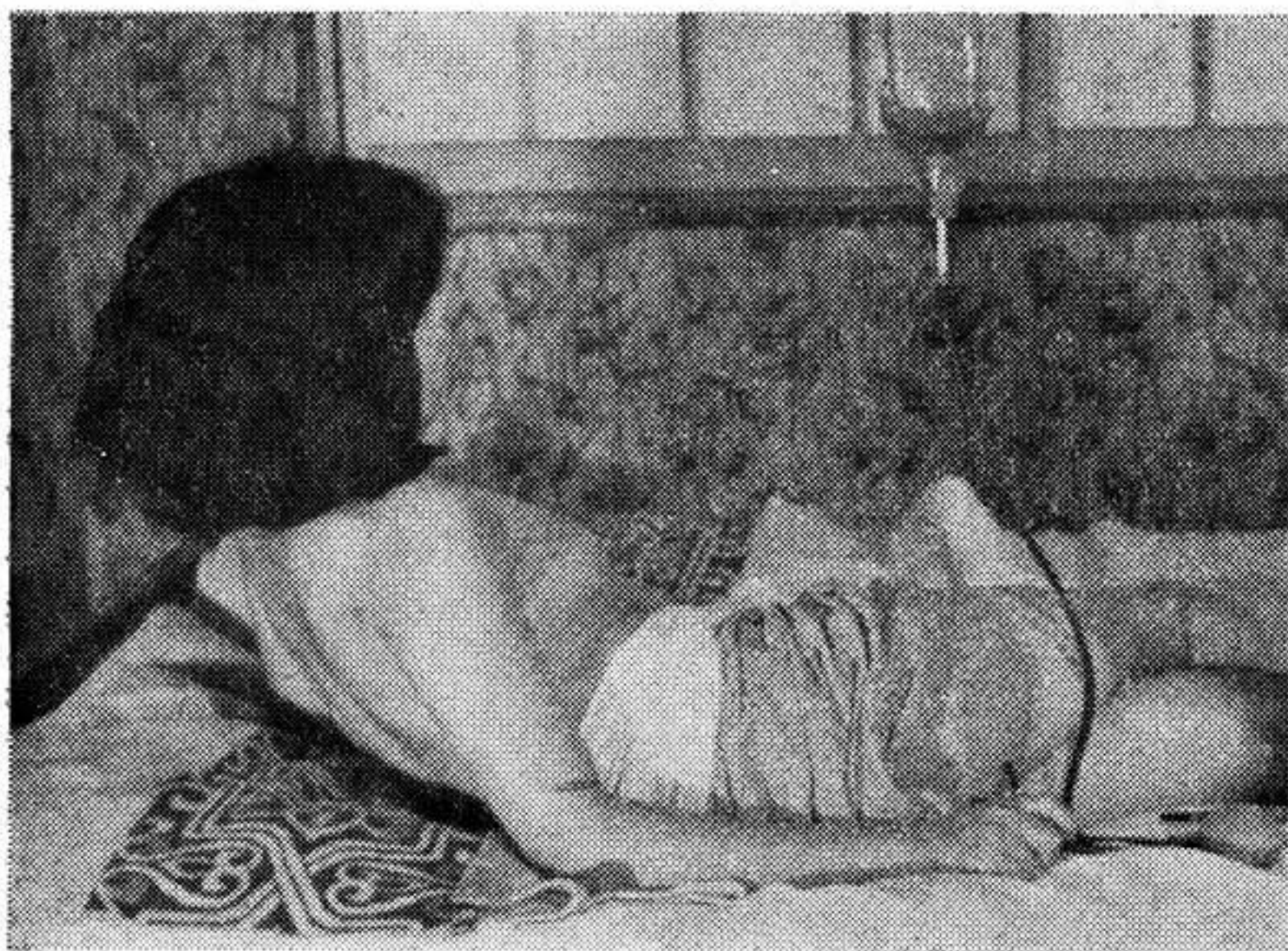
「出来れば、そうしたいね」

「いいわ」

思い切りよく、さっと片足つつ挙げて脱ぐと、フロアで胸を抱いて心持ち、左足を折って、私に裸身を傾けた。すべてを任し切った待機のポーズだった。

夜乃探郎のまだら紐を握って私は近づく。

一本が短かいので、結び目が矢鱈に多い。背



で結んだり、胸で結んだり、兎も角手に縛って、五本のまだら紐は、美木乃々子の柔肌にひたひたとまとわりついた。

彼女の円らな眼が、きらきらとまたたく。

私は床に膝つきのポーズの彼女を、三六〇度の角度から、十数枚撮り終る。緊縛とはいえ

ないかも知れない。しかしこのまだら紐は、ほどよくしまり、プレイに最適の快感と、悦楽を与えるのではなからうか。

夜乃探郎氏へ進呈のフォトをとり終り、引き続き休む間もなく私は箕田氏より頂戴した、帯地の芯に使う柔かいだんだら模様のロープを使って緊縛ポーズにとりかかった。このロープ夜乃氏の紐とは対照的に、いやに長い。二本にして使っても優に四メートルはある。いささか持ち扱いかねるシロモノである。

拷問刑罰一辺倒だった過去二回のフォトにくらべ、今回の、いわばオーソドックスな緊縛フォトは、美木乃々子の柔軟な肌、均整のとれたポーズにマッチして箕田氏や、塚本氏の過去のグラビヤに見る、典型的な、緊縛フォトのポーズだった。

私は心の片隅で、箕田氏にこのネガを提供する気で、それを意識して、下半身を持参した腰巻などで纏って、シャッターをきっていた。早くこんなフォトは終ってしまいたい。私には、更にもう一つの、残された、彼女に対するクリスへの要求があったのである。むしろそれが、

今日の本番とでもいおうか――。

私の心は次第にそれに向って疼き出した。

× × ×

浣腸に対して、美木乃々子は未知であるかもしれない。どう切出せば、うまく導入出来るか――。現在のこれは私に与えられた課題である。うまく迎合すれば、これにこしたことはないが、嫌悪の情を見せたとなると、折角期待のクリス・プレイもハイ、それまでである。余程慎重にかからないとブチコワシになる可能性が大いにある。単なるフォトをとるためのいわば恰好だけとか、それらしく見せかけるだけなら、わけはない。黙って、緊縛して、その傍らに、エネマシリンジなり、浣腸器をアクセサリーとして転がしておけばいいのであるから――。私の狙いは、クリスの実施如何にあった。アクセサリーは所詮、グラビア的フォトの所産に過ぎない。実施してこそ、そのフォトはリアルに生き生きと、なまなましく、いきづいてくるのではなからうか。しかし、どう切り出せば私の意図を納得してくれるだろうか。

私は思案に余って、暫し放心状態にいた。それを助けてくれたのは彼女自身であった。「どうなさったの？ぼんやりして……」

「えっ、いや何でもないんだ。唯ちょっと、次の構図を考えていたものだから。しかし、こいつは、むつかしいかな。どうも拒絶されそうな気配濃厚だな」

「何なのよ一体。ちっとも分らないわ。今まで大抵のなら辛抱したから、よっぽど力だった事なのね」

「話は違うが、奇ク読んだことある？」

「ええ、先日T・Sさんに相当お借りして古いのから読んで見なさいっていわれて、大方読んでみたわ。世の中には随分いろいろ変わった趣味の方があつたものだなあって感心しちゃった。辻村さんはSなのね。男性としては当然の帰結するところで、大なり小なりS性はあるでしょうね。従つて女性はM性なりと見て差支えないと思うわ。この反対の男性がM、女性はSというのは、私にいわせれば倒錯的と思うわ。しかし、その倒錯も一口にいえぬ程多いものなのね。切腹、生首、女斗美禪、女装、浣腸、ユリン、A感覚、オシメカバー、ゴム執着、拷問、夫婦相互プレイと、本当に多種多様なのね。私はね……」

彼女の言葉を横取って、

「一寸待った。倒錯のプレイの、今あなたが挙げた、そのひとつについて、やって見たい

と思うのだが――」

「分った、女斗美ね？」

「それは箕田氏に任せておこう。正直いって私に女斗美趣味はない」

「じゃあ、辻村さん好みとすれば、おしめカバーかな」

「それは竹野ひろ子で100%發揮したんだよ。

私の望みはクリスタール」

「浣腸。弱つたなあ、私、どうもヨワイわ。それには……」

真実、美木乃々子は眉にしわをよせて、困惑の表情をのぞかせた。

「二度許り、便秘しちゃった時、薬局でイチジク浣腸買つて来て、自分で挿入したけど、あのおながが洩つて、何ともいえない不快感はたまらないわ。便秘すると、私たちまち、にきびや吹出ものが出るの。緩下剤や整腸剤より、そのものズバリの浣腸がいいの分つていても一寸尻込みしてしまうの」

「尻込みネ」

浣腸に尻込みか。言葉のニュアンスに私は口に出して呟やいた。その言葉の綾に、乃々子も、フト微笑を誘われ、顔を見合して笑つた。卑猥な言葉も、時によっては、女性も平気で口に出す『尻込み』は、その一つの言葉

だ。

「尻込みしないで、出して欲しいネ」

「いやな方、人の言葉尻をとらえたりして」

「ほら又出た、言葉ジリ……」

私達は大きく笑つた。喋べると又出て来そうである。少し重苦しかった空気がなごやいだ。

「本当に注入するの？」

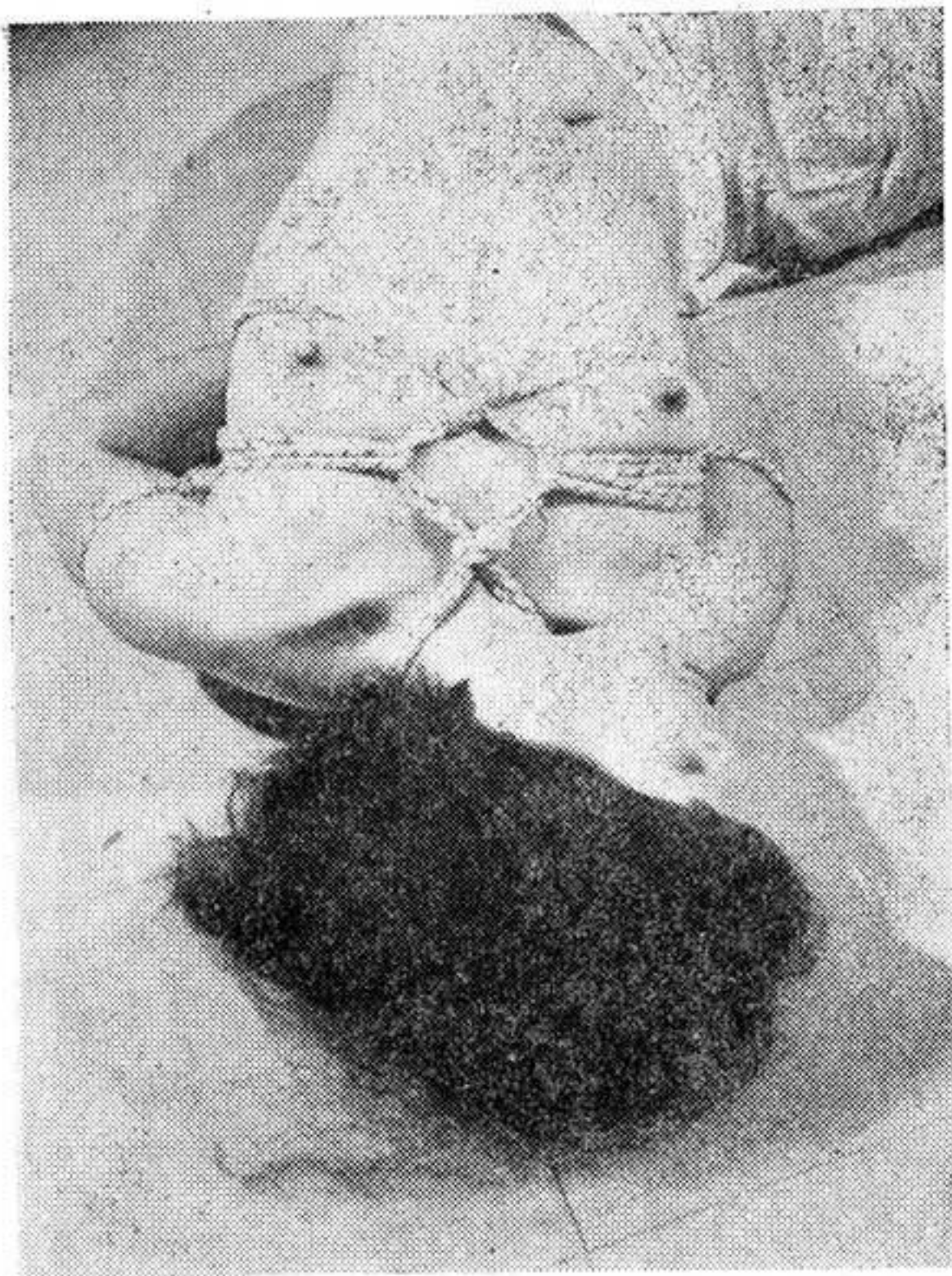
「出来れば、そうしたいね。よりリアルに徹してね」

「でも、フォトにしたら、注入しているの、分らないでしょう。その恰好だけでいいことよ」

「じゃあ、兎も角、その恰好だけでゆこう」云い終るやいなや、間髪を入れず私は、ぞろぞろと浣腸用具をバッグより取り出す。エネマ、イルリ、ポンプなどを、美木乃々子は多少の羞恥と、かなりの好奇心と、幾分のあきた顔で凝視していた。

「なあんだ。すっかり、その気で準備してたのネ。ずるいわ辻村さん」

してやられた顔付で、彼女はメーツとにらんで見せた。しかしその眼は許容していた。大きな衝立てを傍らによせると、純白のシートで蔽われたダブルベッドが、整然と二つ



の枕を並べて、物待ち顔に控えていた。何十組、いや何百組かの情事を、このベッドは知っているに違いない。その情事をしりつくしたベッドも、これから始めようにする浣腸プレイには、きっと途惑うに違いあるまい。ここは病院のベッドではないからだ。

適当なカタさで軋むベッドに、乃々子は豊かな全裸を横たえた。一旦度胸を据えろと女性には往々にして大胆なポーズをのぞかせる。乃々子も亦、その例に洩れぬ一人だった。

エヤー・レリーズをシャッターに装填し、

三脚を二メートルの位置に据え、私はクリスの媒介者となる。私の指示通り、乃々子は背面を見せ、少々腰高になって、施術者の私の手を待っている。彼女自身の手にもたせたポンプ、そして私の捧げるイルリガートルの尖端の水止めを握るポーズ、いわばクリスのポーズに過ぎないフォトが、次々とエヤー・レリーズの、私の把握を通し、カチカチとおちていった。

「この瓶に、どれほど液が入るの？」

イルリガートルに目をむけて、乃々子はきいた。

「二リットル、約一升ち

よっと」

「これが全部、おなかに入って、どうもないのかしら」

「少し馴れないと無理だろうが、半分くらいなら大抵我慢出来るよ。やって見ようか。ものはためし、温湯が一番いいよ。お風呂の熱湯の方を蛇口からじかに、入れてこよう」

乃々子の返事を待たず私は立上ると、小さい湯槽へ向った。壁一枚のしきりで、バス、トイレが隣接している便利さだ。

イルリガートルの硝子瓶に約半分許り微温湯を入れて引き返す。

「浣腸には石鹼水も使うがね。昔赤線華やかなりし頃、トイレにこいつがぶら下げてあって、爾後処置に瓶の水にカメレオンを溶解したバイオレット色の消毒液で、女達は洗滌したものだがね。フランスでは、未だに、トイレと隣り合って、洗滌室があるというが、文化国家らしい、ところかね。さあ試して見よう」

イルリガートルを衝立の帽子掛につるし、シートを濡らしてはとの配慮から乃々子を床に降した。

「本当に液を入れるの？何だか怖いわ」

私はもう無言だった。いろいろ喋っても、反って理論のみ空転するだけである。下手を喋べると、虻蜂とらずになる。

私はクリスに最も適した、横坐りの腰高のポーズをとらせ、菊花の芯に、黒いエポナイトを近づけた。水止めを握る。衝立に掛けた瓶の液体が減って行く。規則正しく液体は下降し、乃々子は顔を伏せ、声も立てず体を硬

ばらせていた。瓶の底辺に二、三センチの水を残して、下降は止る。水圧がなくなったのだろう。洩れた液体が彼女の臀部に線となつて糸を引いて流れ、床に水たまりが一カ所出来た。私が黒いゴムをたぐり上げると、胸を抱えた俛、ツイと立上つて、乃々子はトイレに駆けていった。激しい奔流の響きが部屋に伝わってくる。恐らく体の縮む思いで、彼女は洋式便所にまたがっているに違いない。その響きは次第に小さくなり、耳を傾ける私に伝わらなくなった。

相当の時間をおいて、彼女は虚脱したようにぼんやりと部屋に戻つて来た。

「苦しかったわ」

ぼつりと一言云つて、彼女は素早く、ベッドの上ののりのきいた浴衣を払げて、ゴワゴワした角ばった浴客の姿になった。

「けれど、すつとしたらう。」

「本当いうと、三日前からトイレへ行っていなかったのよ。恰度いい工合だといえは辻村さん、喜ぶでしょう。ダメダメ、もう二度としないから。残念ながら、クリスタールが好きだって告白している女性でなくて、お気の毒ネ」

「そう、本当は余り多くないかも知れない。」

しかし本来は好きでなくても、飼育次第で好きになる女性もあるかも知れない」

「私、奇クを読んでフト感じたのだけど、クリスタールに関する告白や、通信で、女性名になっているのは、或いは男性の変名ではないかと思うのよ。根拠はないけど、そんな感じがするの。クリスタールとA感覚は、いわば紙一重のものじゃない？クリスタールはA感覚の変型的な一種のサジ行為よ。男性はそれを妄想し、幻覚し、果し得ない夢を、女性名の文に托して自慰しているに過ぎないと思ふのよ。私の様な、何も知らないヒヨコが、その道のベテランの辻村さんに、こんな事をいうの生意気かも知れないけど、私自身、プレイとして、今高圧浣腸されて、それをつくづくと感じたの。産婦人科では、よく手術の前、この高圧浣腸するそうだけど、立派な医学的な意味あつての事でしょう。女性にとつて、A感覚、いいかえればアーヌスをクリスなどでプレイの対象にされるのは侮辱だと思ふの。女性の本当の人格を認めていないのじゃない？判っきり言い難いけど、女性は女性としての機能を最大に発揮するところでプレイするのがいいのじゃないかと考えるの。未婚の私がいうのはヘンな話だけど——」

美木乃々子のいわんとする所はよく分つていた。男娼ならいざしらず、女性は女性本来のままに行動し、女性を認める唯一のものをフルに活動させるのが、生きて行く上でも、夫婦での生活でも理想なのであらう。その論理からみて、女性自身恐らくクリスを好み、A感覚を愛する人は絶無とはいわないが、極く稀れであると彼女は言い切るのである。

「でも、奇クだって、羽村京子の様に、それオンリーの女性だってあるんだぜ。最近羽鳥水江とか名前を変えたが」

私達はカメラを忘れて、すっかりクリスを中心にした論争になった。

「羽村さんが女性だつていう証拠があるの。辻村さんが彼女と本当に逢つたのなら別だけど、文通だけでは分らないわ。私がヘンと思ふのは、羽村さんが妊婦に興味あること。妊娠は女の業ですものね。生殖と母性本能と、苦痛と悦楽の代償よ。その妊娠に女性が興味もつなんてヘンよ。若し羽村さんが女性なりとすれば、彼女も三児かの母でしょう。自分でも妊娠して、その苦痛と妊娠期の精神不安定は充分味わっている筈よ。それを言及しないで、妊娠ばかりに興味ひかれるなんて、そんな女性はあり得ないわ。私も女だけど、妊

婦を見ると、女の業を感じて凄くイヤな気になるのよ。羽村さんが小野小町だったら別だけど、彼女が正常な女性なら、特にA感覚を好むのがおかしいと思うの」

忘れていた様なA感覚に対する論争が、思ひもかけぬ、美木乃々子より発言され、私も肯定せずにはおられなかった。

羽村京子も今は過去の人物である。今更云々して曝き立てることもあるまいし、私は羽村京子から、細かい字で、原稿用紙ぎっしり埋めた便りを、十数通りいただき、その数々のアドバイスから、女性であると自分にいい



きかせ、信じていたかった。『狂い咲くカンナ』以来、彼女の文を精読し、A感覚や蛙腹その他いろいろの羽村式造語を私も何の抵抗もなく使用して来たのである。このカメラ・ハント自体にもA感覚という言葉随分使っていて、クリスタールを語る時、私にとっては、羽村京子は忘却し得ない存在となっている。彼女をこうしてけなされても、私にとって羽村京子は今も神秘的な存在だ。現在心境の変化から羽島水江と改名したが、今の羽島よりも、私は昔懐かしい羽村にぞろぞろ郷愁に近いものと覚える。私のクリスタールへの開

眼も他ならぬ羽村京子であり、奇クへのクリスの未開拓分野への第一歩も羽村京子であった。その功績は高く評価したいのである。

私は美木乃々子に対して、前述した様なことをかなり綿密に語った。その開拓者に対し

て石もて追うが如き言辭は、内いささか不満だったのである。

「だから、女性がクスリが嫌いとは一概に云えないのだ。東浦ひかるだって、クスリに対して凄く反応を示すし、刺青の山原清子だってクスリに対しては無関心ではないよ。いやむしろ、愛好者といってもいいだろう。私は、梨花悠起子にも試みたが、あの刹那のA感覚に対する陶醉は決して、作為ではないよ。あなたの様に一概に否定は出来ないと思うね。成程、投稿者又、告白者のうちには男性もあるだろう、しかし羞恥と文筆の能なきため、投稿はしないが、隠れたクリス愛好の女性はきっと存在するに違いないと思うのだ。

奇クに発表する。クリス愛好者は、広い地域上では、ほんの氷山の一角だよ。隠れた愛好者は随分ある筈だし、男性の数に比例して女性でも同数の愛好者ありと見ても、不自然じゃないと、思うのだよ。女性の所謂性感帯は、人、ひとによって千差万別だ、アーヌスに陶醉を覚える人がいても、決して不自然ではあり得ないのだ、サドの『悪徳の栄え』を読んで見給え、そのプレイは殆んどA感覚に終始しているよ。オニヤケとか、キクザとか語因不明の言葉で表現しているが、何れもアーヌスをさしているのだ。日本に較べ外国で

は如何にA感覚への耽溺が多いか、一度向うの艶笑ものや、古典ものも、読んで見るんだな」

私も負けじと、しきりに我流の論理を振廻していた。その間、美木乃々子は私の話をきき乍ら、いつしかしらずしらずエネマシリンジを手にとって、もてあそんでいた。

「よく分つてたわ。『夢喰う虫もすきずき』ってわけネ。だけどヒヨコの私には、この気持分らないわ。愛する男性が現われて、彼が凄く好きになって、その彼から求められたら話は別だけど……。その時は、私、好きになる様努力するかも知れないわ。でも今の段階では無理よ。いきなり、浣腸されても、いやなだけ」

結論を下す様に言い切つて、乃々子は、手にしていたエネマシリンジを、ポイと投げ棄てた。もうこれ以上は無理だろうと私はその場の空気で察した。私の構想は実現するとすれば、先ずいちぢく浣腸、続いて浣腸器によるポンプの浣腸、エネマの液導入、イルリガートルの高圧浣腸ともっていきかかったが、いきなりイルリガートルに始めて、あとは使い損なつてしまった。しかし収獲はあった。美木乃々子がアブへの探求に、相当の関心をもっているという一事である。考えて見れば

最初の紹介者、T氏とその二号さんとのSMプレイをじっくり見聞した程の度胸のある女性であるし、かつて奇クで果し得なかった、道具立ての揃った拷問刑罰集を、比較的安易に撮らした彼女である。少々の事に驚かない芯の強さが、表面はおっとりとしたこの京娘から汲みとられて、私は意外な女性の一面を知り得たと思った。私の撮ったクリスタール・プレイの生フォトは恐らく、掲載出来得るようなシロモノではない。制約の誌面ではタカがしれているが、そのプレイの模様を、せめてこの行間からでも窺い知って欲しいと思う。京娘はさつさと衣服を纏っていた。私は疲れた体に鞭打って、道具類をユルユルと片付け始めた。

夏の夕陽は未だ高かった。都心には珍らしく、彼方の二条城の辺りから、かすかに日ぐらしの斉唱が聞きとれた。空腹を覚えて、ホテルの庭の片隅にある、食堂に足を向けた。大きな提灯が入口にかかっている、この食堂はホテル内の中庭にあるので、一般に利用が少ないのか、誰一人客はない。つくられた料理は、仲居達が次々と、ホテル内へ運んでいく。調理台を囲んで、寿司屋の様に料理台がしつらえられていて、それに向つて彼女と並ん

で椅子を占める。眼の前に客が置き忘れたのか、吸いさしのハイライトの箱とマッチが置いてある。悪気ではなしに無意識にその一本を抜いて口にくわえる。

ビールと幕の内を注文して、誰も居らぬのいいことに話はつづく。

「箕田氏が近いうちに撮りたいっていつてたよ」

「いいわ。いつでも」

「向井一也氏に何か連絡しようか？」

「そうね、逢つて見たいけど、青木順子さんとずっと一緒だし、その暇もないんじゃないかしら。あの時の気紛れよ、きつと。どちらでもいいわ、機会があれば逢うし、なければいいわ、それに彼に契められても、地方のミュージックを巡業する程、私、勇気ないわ。家でも許さないでしょうしね」

「お見合話ね。すると意志なさそうだけど、家では承知しないだろうね」

「お見合、則ち結婚とは限らないわ。もう少し、遊んでいたいわ」

美木乃々子は淡々としていた。私との二人の時間の間も、それらしい素振りもなく、といて別段冷たい女でもなかった。割り切つた感じ、というのが一番ピンとくる女性だっ

た。それが、紹介者のT氏とも交際し、T・S氏のカメラの前にも立ち、箕田氏へもOKする気軽さとなって現われているのではなからうか。ビールを奨めればさっさと飲み、幕の内をテキパキと平らげ、ついでに台上のハイレイトも一本抜くという様子は、ジメジメした処は微塵もなかった。

板前がひとり、しきりに私達を見ている。何をジロジロ眺めているのだろう。ヘンな奴

だ。私はにらみ返してやった。それに気遅れたのか、つと眼をそらした彼は、やがてオズオズ私の前に近づいて来た。「あの、済みませんが、そのハイレイト、私のです——」

ヘエ。私はギャフンとなって放々の体で食堂を飛び出した。合計ハイレイト三本無断で失敬したのだから……。

「ここで別れましょうか」

美木乃々子は、Nホテルの裏通りで、私にあっさり云った。うなづくと、

「さよなら、又ネ」

肩の辺りで手を振ってやがてスタスタと、何事もなかったかの様に長身をひるがえして軽やかに、ステップをふんで遠ざかっていった。握った手にうっすらと、縄目の跡がついているのも意に介せず、美木乃々子は、裏通りを右に曲って姿を消していった。

ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演

Mファン待望の超傑作集

Mフオト
最新作

M場面決定版

大手札印画紙焼付
各組十二枚一組 二〇〇〇円
八組全部にて 一三〇〇〇円

裸女二人の尻の下

十二枚一組 略号(まふ)
遅ましい素肌の臀部が男の顔の上に乗っかってゆく、全裸の美女二人から責められる幸福なるMモデル男の生態。

二女の戯むれと男

十二枚一組 略号(まも)
美しい蝶々のように二人の裸女が尻に敷いた男の上にて、戯れていたが、やがて尻の下でうごめく男をなぶるのだった。

美女から縛られる

十二枚一組 略号(まね)

男馬を乗り潰す女

十二枚一組 略号(まめ)
二人の肥った女を背中に乗せてハイドウドウ。いくばくもなく乗り潰された男は、勝気な二人の美女から辱しめられる。

痛烈ムチのご馳走

十二枚一組 略号(まれ)
後手に縛りあげられた男は、二人の裸女にとっては恰好の遊び道具である。男の肌にムチが炸裂してミミズ脹れが凄い。

首絞めで刺す止どめ

十二枚一組 略号(まむ)
いくら痛めつけても喜んでるM男に対しては、最後の止めとして遅ましい太股による首絞めで昇天させてやるのがよい。

汚臭と足舐の強制

十二枚一組 略号(まり)
女の肌にじかにつけていたパンティを頭にかぶせられ、口に押し込まれても、縛られている男はどうすることも出来ない。

二女の臀臭に泣く

十二枚一組 略号(まみ)
肉づきのよい二女の臀の下に押し潰された男の顔は、醜くひしゃげ、その臀臭をいやという程嗅がされている。

(読者原稿)

善子よしこの回想

山口 広



「栄養価の点から考えますと、人間は一日に炭水化物と脂肪などのカロリー源を二千五百から三千五百カロリーと、蛋白質を……。」ノートをとりやすい様に、区切りを細かくつけ、語尾を異様にあげる杉原先生の栄養学の講義が単調に続いている。料理の先生と云えば、テレビで有名な江上とみさんのように太った、見るからに栄養たっぷりの感じを持

たせる『おばさま』を想像するだけに、善子はこのクッキングスクールに通いはじめてから、神経質そうな、やせて眼鏡をかけた栄養学の杉原先生は好きになれなかった。好きでもない先生、無味乾燥な講義は当然身が入らない。

この先生はご自分の栄養を考えたことがあるのかしら、善子の気持は講義から離れてい

った。

まだ暑さの去らない九月はじめの午後の強い陽ざしがさし込んでいる教室の中で、大部分が善子と同じような未婚のお嬢さんが熱心に耳を傾けている。中には左の薬指に指輪を輝やかした新婚らしい人も混っている。

僅か週に二度しか開かれないのに、自然に着席する位置がきまってしまったのも不思議である。

左例の前から三分の二ばかりの席から、好きでもない先生の単調な講義が倦怠をさそった。特に親しい友達を作る気にもなれず、せいぜい軽く会釈する位が関の山といった、この教室の空気は、そんなになじめるものではなかった。

斜め前の新妻らしい人が熱心にノートをとって、テキストに目を移したり、先生の言葉にうなずきながら聞き入っている横顔が目に入る。しつとりと濡れたような肌、すっきりした襟足、清楚なよそおい、希望にあふれた眼差し、幸福な新家庭の味わいがにじみ出ている。いつ見ても幸福そうだ。

こんな幸福そうな人には、私のように変った性癖はないのだろう、緊縛された経験は、まさかないだろう。

じっと見つめる善子の瞳から、次第にその女、教室も、ぼんやりとぼけて、講義も伴奏のように遠のき、回想の中へと、意識がとけ込んでいった。

この秋の終りになれば、もう一年になる。私が、奇クの表面に、顔を出してから、そして、奇クによって辻村さんにお交際するようになり、いや、責められるようになって半年も過ぎてしまったわ。

はじめて高校の演劇部のお友達、康代さんに見せられた奇クが私のマゾを引き出してくれたんだわ。それから、奇クの読者になってもう四年にもなるわ。グラビヤを飾った梨花さん、水本さん、大塚さん、絹川さん、その他大勢のモデルの人たちの縄で、自由を奪われ、猿ぐつわに、呻いておられる姿を見る度に、体の芯まできゅーっと締められる思いがしたわ。色々の読物の中で、私のような若い女性が縛られ、辱められる様子を読む度に責められるヒロインに自分を置きかえて読みふけたの。

とりたてて、大きくはないが、建材卸商の老舗として知られている志村の家の長女として生まれた善子は、古風な考え方で躰は行きとどいているが、愛情ゆたかな両親に何不自

由なく育てられ、特別に勉強しなくても一流の高校に何ということなく入学し、そして卒業した。今は家にいて、茶道、華道、洋裁、そしてこの春からは料理と、女として一応のたしなみを持った『お嬢さん』で、恐らくはここ二三年のうちに結婚するだろうと、周囲の人から大切にされている。それが善子の今の姿である。知らず知らずのうちに、儉約をしながらも、身につける物、使うものは、すべて一流の品物であるような生活が身についている。「良家の子女」であるしとやかさを身につけた善子である。

私の心の奥深くに、縛られ、責められたいなんて願望がひそんでいたとは、自分ながら少しも気がつかなかったの。お家では何不由なく育てられ、無軌道なことこそしなかったが、特にきびしく躰けられた、おぼえもなく、理由のはっきりした不満もない私のどこに『マゾの血』が流れていたか、わからないわ。でも高校で、而も二年から演劇部に入っただのも、もっと子供の頃から好きだった小説の中や、テレビや映画の中で、悪者に捕えられたヒロインが、太い縄で縛られて苦しめられ、あわやという時に助けられて、という筋を自分で、劇の中で演じて見たいと思ったか

らかも知れないわ。

今から考えて見ると、娘は親に従い、妻は夫を助けるべきものである。それが女の道なのよ、という古風な母の教えが、そして自分でも夫にとって、本当に内助の功のあつい良妻である母の平素の躰が形をかえて、私の心の底に成長して来たのかも知れないわ。

奇クを知ってから、私はこんな世界がこの世にあるのか、とこわい様な、そして嬉しい気持ちで、奇クの虜になってしまったわ。特にグラビヤを飾る何人ものモデルの人たちのように、縛られ、転がされ、そして写され、おまけに何千人もの人の目につく形で本に載せられたら、どんなにか、羞かしいだろう。嫌だ、羞かしいわと思いつつも、二階の自分の部屋で、奇クを見る度に、私も縛られたい両手を高く背に括られ、息も苦しいぐらいに猿ぐつわを噛まされ、体も曲がるだけ曲げられてこんな姿にされたい。そう思いつつも私なら羞かしさで死んでしまうのではないかしら、と思ったわ。そう思いつつも、私にはモデルの人たちの勇気が羨しかったわ。

鏡の前で、自分で自分の口に猿ぐつわをかけ、胸に二筋縄をかけて、縄尻を背にまわしに手でつかんで、ポーズをとって呻いたり、

ベッドの上で転がったりしただけでも昂奮したわ。そんな縄を部屋に持って上るだけでも見つからないように、と苦労したものね。ふふふ…。

奇クを知ってから、それまでに感じた何か理由のわからないもやもやとしたものがすっかりなくなって、私はマゾヒストよ、と気がついてからは気持が却って落着いたわ。

倉庫で試した逆吊りのプレイも苦しかったわ。でもそんな一人のプレイでも、その時には、じーんと痺れるような昂奮があったわ。それも、今から見れば子供の遊びよ。

それは去年の秋も終りの頃だったわね。私が奇クを見てからでも、水本さん、東浦さん、関谷さん、そんな人が自分で進んでモデルになられたのを真似て、何度も破り裂いたあげく、勇気を出して、そう、そうよ、勇気を出して、読者通信に投稿したんだわ。奇クに引き出されたマゾの血がそうさせたんだわ。

辻村さんからお返事の来るまで、軽い後悔と、大きな期待、そして不安の入り混った気持は、毎日がこの大きな胸を締めつけるような、怖い気がしたものだわ。

辻村さんとお約束して、はじめてお会いしたとき、あの喫茶店に行くのを止めようかし

らなんて、何度も思ったわ。こんな朗らかな私でも凄く緊張していたわね。自分でもおかしい位。でも辻村さんって、太った眼鏡をかけた、気さくな小父さんって感じだったわ。奇クの挿画にある頬のこけた眼の険しい男の責め手って感じと全く逆だったわ。何でもまかせ切れる『叔父様』みたいな感じで安心したわ。でもこんな人が私をひしひしと縛れるのかしら、なんて思ったわね。

でも須磨の旅館で始めて辻村さんに縛られた時の昂奮は、服の上からだって、それまでの自分だけのプレイなんて、本当に子供の遊びだって思い知らされたわ。

父にだって肌を見せない私が、まるで催眠術にでもかけられたように、服も下着も全部脱いだ素肌に、たった今まで見ず知らずだった辻村さんに縄をかけられたなんて、自分でもおかしいみたい。

あぐらをかくように坐らされて縛られるなんて、本当に恥しかったわ。それよりも体を二つ折りにされた責めは、苦しかったわ。体が柔いのが自慢の私だって、思わず呻いてしまったわね。でも楽しかったわ。今迄は見たグラビヤのモデルさんだって、私みたいに首筋の後で足を括られた人はいなかったわ。冬

の海の打ち寄せる波の音が今でも聞えるわ。寒さも気にならなかったわ。

十日ばかりして送って頂いた、縄にもだえる私の姿を見た夜は、とうとう夢にまで見てしまったわ。眠りながらきつと呻いていたと思うの。

でも辻村さんって意地悪、私が気にして、太いウエストのこと、あんなに云ったりして。カメラハントにだって、わざわざ書かなくなっちゃっていいのに。それに、私のこと、『女獣』だって。そうよ、私は縄に憑かれた女獣だわ。がんじがらめに縛られて、息もたえだえに呻きたいの。

あの女獣のハントが載ってから、街を歩いていても、バスに乗っても、あの女獣が私のことだって知ってる人が多いのだと思うと恥かしい気持よ。だって全裸の写真まで載せられたんですもの。今日だってバスの中のあの男の人、私の方ばかり見てるんですもの。これが有名な女獣か、なんて顔をして、ウェストからヒップにまで視線をうつして。ぞっとするわ。あんな人、きらいよ。

もう辻村さんにも、何度も縛られたわね。グラビヤで見た時は、まあ、こんな太いロープで縛られたりして、なんてモデルさんに同

情したり、羨んだりしたものであったわ。でも本当は細い綱の方がきびしいものね。三度目の時だったわ。細引できつく縛られたのは。細引が見えない位くつきりと肌に喰い込んで跡が消えないで困ったわ。手も足も痺れて動かせなかったわ。辻村さんって、随分やさしいの。痺れた手足を温いタオルで蒸してマッサージしてくれたわ。

そうそう、あの港を見降すホテルでの逆吊りプレイも忘れられないわ。猿ぐつわをしっかりと噛まされて吊られた苦しみを報ぜられなくて、何度も——止めて——降して——つて云ったのに、辻村さんったら、写すのに一生懸命だったわ。降されたとき、縛られたまま膝に抱かれて泣いたわね。

辻村さんって、優しいのか、意地悪なのかわからないの。でも、あの気さくな叔父様みたいな人、好きだわ。もっともっと好きになりそうでこわいみたい。

縛られたい、呻きたい、悶えたいと思いがらも、何度も呼びかけて下さる松岡さん、SYさん、羽田さん、その他の多くの人にもお返事したいと思っていますの。でもとても勇気が出ませんの。お気持は嬉しいんですけど、何だか辻村さんに悪いみたい。私って、

はにかみ屋なのよ、きつと。

それにまた、ウエストがたるんでいるね。なんて云われたら、自分が可哀そうなもの。「栄養面でカロリーとか、蛋白質とかは、比較的注意される方が多いのですが、案外に忘れられるのが、ビタミンとミネラル成分でありまして……。」

また単調な杉原先生の講義が続いている。かん高い声が耳ざわりだ。

そう。あの女だって、私のように縛られたらきつと昂奮するわ。縛られたことって、きつとないわ。私は結婚するんなら、私の気持ちのわかる人に決めるわ。でもそんな人に会えるかしら。なければ仕方がないわね。こんな頭の芯まで痺れるような昂奮は、私だけの胸にそっとしまっておきたいの。……

いつしか回想の中を歩く善子の頬がほてって来た。しかし単調な講義の中で、善子の紅潮の理由は、誰にもわからなかった。いや、想像すらできなかった。

あとがき

私は、志村善子さんとも、辻村氏とも勿論一面識もない。ただ旧号のSMカメラ・ハント『しなやかな女獣』に強く心を惹かれて、夜乃探郎氏の真似をして、短いこの雑文をま

とめました。しかし所詮は亜流、とても及びません。

辻村氏のカメラ・ハントを裏返えしたこの短文を、志村善子さんに、ひそかな慕情と共に捧げたい。善子さん、健やかなれ、幸多かれ。

辻村さん、大分健康を回復されました様子、嬉しく思います。充分御自愛の上、すばらしいハントで奇クを飾り続けて下さい。

夜乃さん、アイデ（八月号）小説、梨花悠紀子」を無断借用しました。貴方の鋭鋒を向けなくて、笑って下さい。

〔訂正〕

○十月号「実録・奇譚クラブ」一五六頁下段右より十二行目△三十九年三月号△は、「二十九」が正。一五七頁中段右より十一行目△読者座談会「交悦に伴う責めの衝動心理」三十八年新年号△は、二十八、が正。

○十一月号掲載久我庄一の「アブ談義」二九頁下段左から十二行目『改造論』は△改造△が正。

○十一月号掲載久我庄一氏一〇八頁「文化的悪讃美論」という見出し文字は△文学的悪讃美論△の誤植につき訂正します。

初^{うい}陣^{じん}

△悦虐絵灯笼（その十五）▽

万 田 不 仁

陣 初

山路をえいえいと押し上ってくる大友勢を樹陰で待ち構えた秋月種実、筑紫広門の兵が狙い射った。

銃声が忽ち耳納山の静けさを破り、不意を打たれた大友勢の将士の怒号が弾丸に当たった者の喚き声や呻き声を圧して混乱の中にひびいた。

大友勢の将は、宗麟麾下の猛将立花道雪。彼は足が悪い為、屈強の足軽四名にかつがせた輿に乗って進んできたが、俄かの銃撃に乱れようとする味方を叱咤し、怖毛づく足軽を

「これよ、鉄砲玉は長く続きはせぬ。玉の飛んでくる方へ輿をにない込め、一步も退くものでない」

と励ました。道雪は白妙の練絹で頭を包み黒糸おどしの鎧の上に猖々緋の陣羽織を羽織っていた。

射たれながら大友勢は山道を急ぐ。秋月、筑紫方は大木を小楯にして、その陰から顔だけ出しては鉄砲を射つ。鉄砲玉の間を遮二無二駆け抜けようとする大友勢には手負い、死者が続出した。

「平兵衛よ、射て」

輿の上から道雪が叫ぶ。直ちに市川平兵衛が輿の前方へ駆け出て、左側の斜面の木陰にチラと見えた敵の射手を狙撃すると、見事その眉間に命中する。平兵衛は手だれの射ち手だ。が、秋月、筑紫方の鉄砲は三段構えの射撃で尚も大友勢を悩まし、無理に押し通ろうとする道雪以下の軍兵は僅かの間に相当の損害を受けた。

鉄砲玉に弾かれたように悲鳴を挙げて右側の谷へ落ち込んでいく兵もある。太刀や槍を閃めかして木陰の敵に向かっていく兵は顔中を口にした喚声を挙げる。射手たちも既に鉄砲を捨ててこれも刀槍を翳して迫ってくる大友の兵と随所に斬り結び、突き合っている。

「ええい、ひるむな、一步も退くな。敵の玉ははや尽きたぞ」

道雪は輿の上で抜き放った陣太刀を振って叫んでいる輿をかついだ足軽たちは、この勇猛な主人の声に鞭打たれたように赤銅色の膚を山の日に輝かせて無二無三に走っていく。

高島蘭丸は、棕の大樹の陰にかくれて、そんな道雪の姿を狙っていた。当年十七才、初陣の彼は配下の十名の射手たちが皆鉄砲を刀槍に替えて、大友勢の中へ突進した後、尚木陰に身をかくして、よき敵を狙っていた。右

手にはかねて山獺で手練の小筒があった。

蘭丸は道雪の輿の近づくのをじっと待っている。道雪の猖々緋の陣羽織は間もなく射程距離に入ったが、その輿のまわりには主を護る精悍な士がひたと付き添っていて、容易に狙いが定まらない。味方の兵がはやくもそこへ殺倒して激しい闘いが始まっていた。

一人の士の奮戦ぶりが蘭丸の目を奪った。その士は紫裾濃の鎧を着し、南蛮鉄一枚張の兜をかぶり、一間の手槍を縦横にふるって、輿に襲い掛かろうとする味方の兵を突き倒し、薙ぎ倒し、槍の柄で打据え、更には右手の谷底へ蹴落すなど、鬼神もこれを避ける武者ぶりだ。この士の獅子奮迅の間に道雪の輿をかっついで足軽たちは勢いを得てとっとと前進した。入り乱れて、戦う両軍の剣戟の隙を縫って、道雪の陣羽織の猖々緋が殊に目につく。

蘭丸は時こそ到れりと、小筒を射った。

「ぎゃあッ」

悲鳴をあげて倒れたのは敵将道雪ではなく輿の前棒の先になっていた背の高い足軽だった。他の一人もはずみに躓いて転び、輿はどすんと地上に前のめりに落ちた。

「しやッ、平兵衛あれを射て」

と、道雪怒って呼んだが、鉄砲の名手平兵

衛も今は後方の乱闘の中で太刀をふり回している。輿の周囲に味方は手薄だ。そこへ

「立花道雪殿と見受けたり、見参」

棕の木陰から躍り出た蘭丸は二尺四寸の太刀を振り翳して斬り込んだ。

がッと激しい音がして彼の太刀先は槍の青目の柄に弾かれた。勢い余って傾いた体を立て直す間もなく紫裾濃の鎧を着た士が漆黒の総面で被った顔の、黒く輝く目ばかりひたと蘭丸に向けて手槍の第二撃を加えようと迫ってきた。

槍と太刀と。手強く渡り合い、人まぜもせず秘術を尽くす士と蘭丸。弓手に走せ違い、右手に開き合い、槍は左右風車、乱傷無極と攻めかけ、太刀は獅子の洞入、蛛手開手と応えて、容易に、勝敗が決まらぬ。広からぬ山道、敵味方入り乱れ、悲壮な死闘は続いているが、道雪の輿はその間にも既にその場を隔り、一団の軍兵がこれに従い、一刻も早く猫尾の城攻めに、加わるべく強行軍を続けている。

「南無三、取り逃したか」

切齒した蘭丸がいら立って振り下ろした太刀が相手の槍の青目の柄を丁と斬り放つ。

「組もう」

甲高く叫んで相手は蘭丸の太刀風をかいぐって、どんと体当り。蘭丸も太刀を捨て、両者がしりと組み合い、ここを先途と振じ合い、押し合う。するうち次第に切岸の端にもつれ合い、どちらの足が滑ったのか、両者組み合った俤、ずるずるッと谷合へ転び落ちた。

★

灌木や杉の若木の生えている耳納山の斜面をごろごろ転げ落ちるうち、紫の鎧を着た士の兜の鍔が何かの木株にひっかかった。一瞬の兜の鍔が止まり、蘭丸はすかさず腰刀を抜こうとした。その右腕を相手は掴んで抜かせぬ。互いにひと揉み揉み合い、体を絡み合うと、士の兜の忍びの緒がふっ切れて、兜が木株に残った。

再び谷へ落ちる蘭丸の顔へ艶やかな黒髪がさ々と流れた。

「や、女か！」驚く蘭丸の上に総面から覗く黒い瞳が光った。

谷底の秋草の上で、女武者と蘭丸の組討はつづく。

天文十二年八月十九日、秋とはいえ、暑い日差しが耳納山を照らしていたが、谷底には崖の木立に日を遮ぎられて、ひんやり冷たい

空気が流れている。

蘭丸は少年の体力の限りを尽くして、女武者を組伏せようとした。初陣の兜首が女武者であることは縁起の良いことだった。岩石崩し、猪の股裂き、腸しぼり、奈落返し、そして墓潰しなどあらゆる秘術を女武者にぶつけた。しかし女武者は戦さ慣れがしており、組討の経験も充分らしく、漸く蘭丸が焦燥し息が乱れてくるに反し、余裕を持って闘っているかに見えた。

蘭丸は足取りにいき、上から潰され、女武者の豊かな尻に後頭を圧され、土を嚙んだが少年の体は柔かく反転して、逆に女武者を下敷きにし、すばやく腰刀を抜いて、女武者の喉嚨と胸の隙をひと刺ししようとあせった。彼は、女武者の意外に強い膂力、強靱な体を考へ、完全に馬乗りにならぬように一氣に首級を挙げることが難かしそうなので、先に喉元を腰刀で刺し、傷手にひるむところを首を掻く心算だった。

ひと刺し、ふた刺し、彼の右手に満身の力がこもる。が、その右腕は女武者の左手につきつく抑えられていて徒に腰刀は木の間から差込んでくる秋の日差に閃めくばかり。一層いらった彼は荒馬をあおるように一度腰を浮か

せて躍り込むような形で腰刀を女武者の喉嚨の隙に突き入れようとした。その時、女武者の体が大魚の跳ねる勢いで、一躍したかと思えると、その白檀磨きの臍当てをした長い両足の足首に蘭丸の首ががきと挟まれた。不覚ッ、蘭丸が必死に首筋に力をこめた途端、もう彼はいやというほど仰向けに女武者の上から落ち、後頭部をしたたかに地に打つけられていた。うっと思わず呻き、軽い脳震蕩を起こした蘭丸の赤い革具足の胸の上に女武者がどっかり馬乗りになり、彼のめまいの醒めぬ間にその両腕を左右の膝頭に敷き込んでしまったのは、初陣の少年より一日も二日も長のある一騎打の老巧さだった。

「無念なッ」めまいの去った蘭丸は必死に足掻いて窮地を脱しようと努める。両足で地を踏ん張り、腰の力をしぼり、また両足で何度も空を蹴上げた。女武者はいさい構わず左手の拳で蘭丸の鍬形の間には柿の実を配した兜を蹴ね飛ばした。

△首を掻かれる△蘭丸は目の前が真暗になる思いで、死力をふりしぼって足をばたつかせた。討死という武門では日常茶飯事の言葉が非常な現実感を以て頭を蔽った。

女武者は、そんな死物狂いの蘭丸の悪足掻

きを見下しながら何故か未だ腰刀に手をかけぬ。蘭丸にはそれをいぶかしむゆとりなどある筈もない。唯夢中で女武者の膝下でもう無茶苦茶に暴れている。

しかし、猛々しい獣も網をかぶせられれば次第に弱まってくる。反抗するだけ反抗すればやがて精も根も尽き果てる。蘭丸も漸く力尽き矢折れた感じで足掻きが弱まってきた。

「ああ、」

彼は絶望の声を発して、ぐったりした。

「お、女武者に組敷かれたのは無念至極、はや首を取れ、」

女武者は蘭丸の足業を警戒して、少年の金の丸を浮き出させた胸の上の方に乗っていたので、蘭丸は女武者の腿の間から物を言う恰好だった。

「ホホホ、いったん甲冑に身を固めて戦場に出れば男も女もありませぬ。女武者と組んで女首を挙げるのも男武者の立派な手柄であれば、女武者に組敷かれ、首掻かるるもいささかも不名誉なことではありませぬ」

こう言うと、女武者はその顔を隠していた漆黒の総面を外した。色白の目鼻立のきりッとしたひとだった。蘭丸はふと絶対絶命の危ふさの中で、平家物語の筆者が「色白う髪長

く、容顔誠に美麗也」と描いた巴御前の姿を想った。

「そなたは何才？」

優しく聞かれた。蘭丸は年少者や女人の着る軽やかな革具足だが、女武者は鉄の鎧を着ている、しっとりとした体重に、その紫裾濃の鎧の重量が加わって、藻掻くだけ藻掻いた後の虚脱と諦めに身動もせぬ蘭丸の胸板を重たく圧している。

「十七才。初陣じゃ、高島蘭丸。秋月種実の臣です」

彼の名乗りに頷いて、女武者は微笑を浮かべて、

「私は立花道雪の臣堀川右近亮の妻美弥」と名乗った。女武者は蘭丸の目に、よく解らぬが三十くらいの年嵩に見えた。

「はや、はや首を掻かれよ」

蘭丸は促した。彼は美弥という女武者の美

女性切腹（時代篇） 絵巻

四馬孝画

略号（えま2）

大判判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円
若き女性の切腹のイメージを時代風俗に求めて、その構想を縦横に発揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なリアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の姿を追求して貰いました。

- 一、落城の姫君、火中の自刃
- 二、武家の娘、覚悟の切腹
- 三、恋人に抱かれて切腹
- 四、介錯に落ちる女の首
- 五、死を賜った腰元の切腹
- 六、操を守る若妻の切腹

ここに掲載しました「えま2」「えま1」二組の切腹画は以前感光紙焼付にて分譲したものですが、今回御希望の方にのみ特に印画紙に焼付けて頒布いたします。

女性切腹（現代篇） 絵巻

四馬孝画

略号（えま1）

大判判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円
その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの口絵を発表して斯界に独特の新風を吹き込んだ四馬孝氏が、女性切腹をテーマに制作の意欲を燃やし、うら若き現代的な女性に絶対命の境地に追い込まれて、自らの手で自らの命を断たなければならぬ現代女性切腹の姿を、その哀婉に満ちた現代女性切腹の姿を彩管に托して、ここに華麗な絵巻が完成しました。

- 一、将校と女学生の切腹情死
- 二、女間諜ゆうべに切腹す
- 三、大和撫子、乙女の自刃
- 四、美女、雨中の腹立プレイ
- 五、夜会服貴婦人の切腹
- 六、女子大生の切腹自殺

貌と武勇に心打たれたながらも、こうして敵方の女に組敷かれている時間が堪えられなかった。女武者は未だ腰刀に手をかけずに何かためらっている風だ。蘭丸は急がしく思いをめぐらせて、その胸内を憶測してかッと顔が火照った。

「命乞いなどせぬ、助けて貰いたくはない」

彼は力んで叫んだが、女武者は笑って首をふり、尚何やら思案している顔つき。そして彼のびっくりすることを言った。

「のう、蘭丸どの、そなたは十七とか、はやひとり前の武者ではあるが……男女の道はわきまえておられるか？」

白い面に仄かに赤みのさした女武者の問いに蘭丸は全く愕いた。何ということを書く女か。彼は口籠り、

「知らぬわ」

吐き出すように応えた。が、直ぐに後悔した。十七にもなって、明日知れぬ戦国の世に女人ひとりの肌も知らぬ武刃一点ばりと思われる恥ずかしさだった。いったい南国の男女は早熟だ。彼の朋輩でも縁したたる前髪立のうちに腰元の誰れ彼れとひそかに逢うたり、元服早々妻を娶る者も尠なくなかった。それに野陣に女と戯れる好き者もある。しかる

に蘭丸は一人子の可愛さと、その美しい顔立ゆえに父親が前髪を落とすのを惜しがるままに少年らしい姿でいる。

去年の夏、具足の土用干の折り。磊落な父の左兵衛が鎧櫃に入れるおそくづを何枚か見せた。それは、父が基敵の浄観寺の和尚の許に逗留している京の絵師に依頼したものだった。絵の男女は平安朝や鎌倉期の風俗でややこしい形で絡み合っているが、蘭丸は自分の具足櫃に入れる絵を選べと言われると、あでやかに大きな姫と児前髪の少年を描いた一枚を取った。それがいちばん華やかに美しい出来栄えに見えたからだ。

「ああ、それはよせ、よく描けているが、逆さ組みじゃ。初陣のそちがまかり間違って、女武者に組敷かれるようなことがあってはならん」その時父はこう言って別の一枚に替えさせ、居合わせた母も、「まア、縁起でもない」と、眉のそりあとをひそめたものだが。

崖の上の戦闘は、もはやずっと山の上みに移ったらしく、喚声が遠く聞える。どうやら大友勢は強引に、耳納山を登りつめたらしい様子。

女武者は静かに言った。

「うら若い身で討死するも武士のならい。な

れど女人の肌身も知らずに死ぬるはあまりに哀れナ、どうじゃ蘭丸どの、私が教えようか？その後に首搔かれても遅くはあるまい、それとも敵方の女人の情けなど受けずに直ちに死ぬ方がよいか？」

蘭丸の体中の血がかッと燃え上った。

山上の戦さは尚続いているらしい。執拗に追尾する秋月、筑紫勢と大友勢の殿が激闘を繰り展げている有様が蘭丸の目に浮かぶ。

女武者は立って、蘭丸を引き起こした。そして彼の具足を外させ、次いで呆然としている彼に手伝わせて己れの鎧も脱いだ。その白綾の具足下にはさき程の戦いで、の返り血が滲みていた。

羞恥心と、それにも増す好奇心と、更に何としても抑えたがい屈辱感と、惑乱した心の蘭丸は真直ぐに瞳を張って己れを見下している美弥の眼差を見返す勇氣はなく、傍に目をやっていた。すると、秋草の間にさきに彼が跳ね返され後頭を打った時、取落した腰刀が空しく光っているのが目に入った。

腰刀は彼が右手を伸ばせばやっと届きそうな処にあった。それが、彼の心をまた掻乱した。今、あれを取って、不意打ちに女武者の下腹をひと抉りしたら——この思いつきに彼

は迷った。敵方の女、而も某という士の女房の情けを受けている自分、それに女は真に自分の若さを憐んだのか、生得多淫で、戦ささ中に少年の精気を弄ぼうとしているのか判ったものではない、彼の胸の底にぼつ然と黒い意志が動いた。

しかし、そんな蘭丸の心の葛藤など思っても見ぬのか美弥は薄っすら笑みをたたえて、少年の情感の高まるのを待っていた。出陣する女武者のたしなみで、内腿に濃く刷いた白粉の臭いが女の汗の臭いにまじって甘たるく少年の鼻を蔽うた。

交歓と言っても戦場の勝者と敗者、上位をとった美弥の体には、蘭丸のつけ入る隙はなかった。

源平の昔、越中の前司盛俊に組敷かれた猪股の小平六則綱はいったん降人となり、味方の人見の四郎の近づくを見て、勇を揮って盛俊を刺し、醜い手柄を立てた。蘭丸は平家物語にあるその一条も思い出し、美弥の虚を衝こうとする意欲をなくした。

美弥は、ぐったりした蘭丸を抱き起こすように立たせ、再び具足を着けさせた。それから己れも血に染んだ鎧を着た。とつおいつ思ひ惑った蘭丸を全く吞んでしまった態度で、

彼に手伝わせて。

二人は秋草の上に並んで腰を下し、ひと息
 いった。山の上で、どろどろと軍鼓がとどろ
 いた。遂に秋月、筑紫連合軍を打ち敗った大
 友勢の勝関が遥かに聞えた。

「女々しいが、私はそなたを討つのがつろう
 なった。戦は厭なもの……したが私も人妻、

蘭丸どのに身を許したことは夫に済まぬ。蘭
 丸どの少年ながら健気に私に立向かったが
 わが夫は、おとし勝尾の城攻めで膝を矢に
 貫かれた傷がもとで戦の用に立たぬ跛、もと

もと鉄砲の音におびゆる気弱な男であったが
 ……」

夕方の木洩れ日に染まった美弥の横顔に憂
 いの影が走った。

「はや、たそがれ、私はやはりそなたを討た
 ねばならぬ。そなたの若々しい命を憐んだと
 はいえ、蘭丸どの、首を掻かねば夫に済ま
 ぬ」

美弥は蘭丸を抱き敷くようにして、仰向け
 に倒した。そして全く抗がう意志のない少年
 の胴の上に馬乗りに跨り、その両手を横にひ

らかせ二の腕を己れの両膝にそれぞれ敷き抑
 えた。

美弥の右手に腰刀が光り、左手が蘭丸の顎
 を押し上げた。

「蘭丸どの、目をつむりなさい」

少年は微かに首をふった。彼はもう美しい
 女武者に組敷かれて首を掻かれることに自虐
 的陶醉にひたっているかのよう。高い空に
 屍臭に慕い寄る鴉の声が出た。

美弥は一気に蘭丸の首を掻き切った。

△おわり▽

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

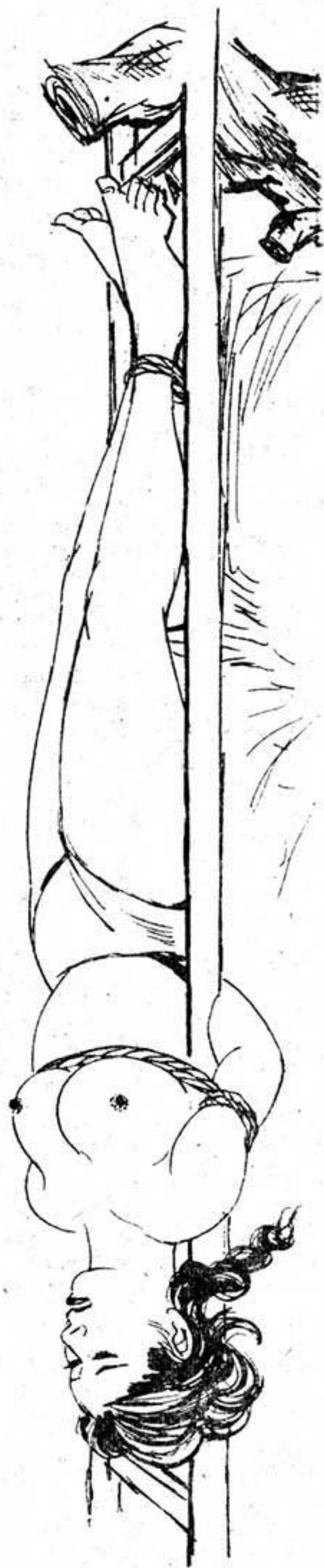
一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K 1	全裸刺青自慢緊縛 (山原)
K 2	恍惚たる責の境地 (山原)
K 3	苦悶の表情海老責 (大塚)
K 4	海老責にあえぐ女 (大塚)
K 5	全裸のぐるぐる巻 (玉田)

K 6	豊満な臀部を晒す (刑部)
K 7	厳しき縛りに酔う (山原)
K 8	荒縄で仕置される (美木)
K 9	土壇に観念した女 (美木)
K 10	ムチ打たれる女囚 (美木)
K 11	縛り人形を眺める (山原)
K 12	開孔器で鼻を弄ぶ (山原)
K 13	足首と首を連繫す (大塚)
K 14	後手の複雑な縛り (玉田)
K 15	裸縛りに恥らう女 (山原)
K 16	夫にされる鼻責め (増田)
K 17	緊縛にあう若妻姿 (増田)
K 18	猿轡で鼻を虐める (増田)

K 19	開股縛にあう女囚 (美木)
K 20	罪状を訊かれる女 (美木)
K 21	股間縛りの全裸像 (山原)
K 22	荷造り縛りで晒す (玉田)
K 23	革拘束衣で括らる (大塚)
K 24	庭木に立縛りなる (木村)
K 25	柱に晒される裸身 (玉田)
K 26	セーラー服しぼり (大塚)
K 27	高手小手首縄緊縛 (山原)
K 28	黒輝豊満刺青縛り (山原)
K 29	踏みにじられた女 (山原)
K 30	古墳にて吊り準備 (木村)
K 31	拷問にあう裸女賊 (山原)
K 32	ロープブラジャー (山原)
K 33	嚴重な後手縛猿轡 (刑部)
K 34	エビ縛りにあう女 (木村)

K 35	イルリのある風景 (大塚)
K 36	麗しき裸身を晒す (大塚)
K 37	亀甲縛り正面裸像 (刑部)
K 38	豊満乳房縛り上げ (山原)
K 39	全裸を投げだして (山原)
K 40	縛しめに哭く乙女 (木村)
K 41	エビ責め放置十分 (木村)
K 42	豊かな全裸を緊縛 (玉田)
K 43	観念アグラ縛り図 (玉田)
K 44	笑顔を縛る強烈さ (刑部)
K 45	猿轡の下にあえぐ (刑部)
K 46	縛りに典子の素顔 (刑部)
K 47	伸びやかな裸縛り (刑部)
K 48	エビ縛り刺青姐御 (山原)
K 49	立木より逆さ吊り (木村)
K 50	裸身の緊縛と羞恥 (玉田)



「痴人の糧」

洗 礼

山 本 一 章

アケミが重苦しい眠りからさめたのは、もう昼近くだった。手首と足首にかけられた二つの手錠が肌に当たって少し痛かった。横になった体をごろりと俯向きに動かして体を伸ばした。その時、毛布が少しめくれてさわやかな空気が肌に触れた。昨夜の出来事が夢のように思えた。

「よく眠れたかい？」

横に大山がいたのだった。彼はアケミの肩を抱えて体を起こして坐らせた。むしろが尻の皮膚をチクチク刺戟するのでアケミは体を

よじらせて毛布の上に載った。目かくしのままだったので何も見えなかったが、百合子のいる気はいはなかった。

「あのうオシッコがしたいわ」

蚊の鳴くような小さな声で、しかし甘えたように云った。大山は黙ったまま鍵で足の錠を外し、抱き上げて立たせた。そして納屋の外へ押し出すと、いきなり後から彼女の太腿をつかんで腰を落させようとした。

「イヤッ、ソナノイヤッ！」

赤ん坊か幼児のように扱われるのは余りに

惨じめな気持がした。全く自由を奪われていたのなら、羞恥心を諦めに置き替えることができたが、少しでも自分の意志の自由が残された、そんな姿は堪えられなかった。腰を振って、逆うアケミを見て、大山はニヤリとした。アケミの心理の動きを、読み取った大山は、彼女の白い、しかしところどころ赤褐色の鞭跡の残った尻を軽く掌で叩いた。

「せっかく、させてやろうと思ったのに。それじゃ勝手にしたらいい」

アケミは庭の隅にある柱の前に立たされ、

最初の日のように柱を背負って縛りつけられた。上半身には口にまできっちり急所、急所に縄が掛けられたが、腰から下は自由なままだった。強い日光が素肌の女をまぶしく照らし出した。ジリジリと肌を灼くような日ざしは、情容赦なくアケミの全身を包み込んでいた。口にかけてられた縄を咬んで彼女は尿意をこらえていたが、非情な時間は彼女の生理現象を徐々に強めて行くだけだった。

大山は少し離れた木蔭の石に腰を降ろして彼女を見守っていた。どんな恰好でその苦悶の原因を放出するか見ものだと思った。昨夜の排泄は劇的だったが、暗闇のバックのため夢幻的だった。しかし、今は白昼の下で、最も現実的な舞台が背景となっていた。一向に洩らしそうにないのに、待ちくたびれた大山は、犠牲者の傍に寄って、両手で突き出した乳房を握りしめた。ひねるようにねじって力を入れた。

「アアウウウ、ウアウウ」

彼女の神経がつけられた乳房の方に集中された時、溢れ出た液体が腿を伝った。次いで柱を伝って、足許のセメントが黒く濡れ始めた。自由な足を少し爪先立って開いた姿は滑稽でさえあった。

「バカだなあ、そのまま乾かすんだよ」

大山は少し興奮を覚えながら、アケミをそのまま放置して家の中に入った。

残されたアケミは濡れた下半身が、強い日ざしの中で熱くなり、蒸気をあげて乾いて行くのを意識していた。

「おや、いやだわ。くさいじゃないの」

百合子のはしやぐのような声が聞えたのは、十分経ってからだった。

「立小便したのね。どうだった？どんな流れ方だった？前へ飛んだ？」

「馬鹿いうな。そんな。そんなこと、自分でわかってるだろう」

大山の気のない返事だった。

「水をぶっかけて洗ってやりなさいよ。このままじゃ、くさいわ」

大山は長いゴムホースを物置から持ち出して水道の栓につないだ。そして、ゴムホースの先に金具を差し込んで百合子に合図した。

栓がひねられてしばらくすると、プツ、プツと音がして、勢よく水が金具から飛び出した。細い線を描いた水は縛られているアケミの体に当って砕け沫を撒いた。水は彼女の乳房を叩き腹部を打った。

水は少し冷たかったが、直射日光に灼かれ

ていた肌には心地良く感じられた。それより指で押すような水の圧力が全身を這ってゆくのが擦ったくて、閉じた足に力を入れ、口の縄を強く咬みしめているアケミだった。

水の指が乳首を押した時には、ピクッピクッと自然に体がけいれんした。最後にホースが顔に向けられ、事態は一変してしまった。それまでのかすかな快感が、苦悶に置替えられたからだだった。水は砕けながらアケミの顔を絶え間なく流れ、呼吸する度にゴボッゴボッと水が口に入り、鼻孔を詰まらせた。

縄を咬まされているために閉じることのできない口へどんどんと水が流れ込み、飲み込んだ水が肺を刺戟してむせかえった。苦しかった。しかし声を出すこともできず、呻くこともできずに、自由な足をバタバタさせるだけで、アケミはこの残酷な洗礼を受けていなければならなかった。

「もう止しなさいよ。死んじやうわよ」

百合子が見かねて云った。そしてふと大山の顔を見て彼女は一瞬恐怖を感じた。血走った目は憑かれたように白い犠牲者を凝視し、流れ落ちる汗を拭おうともせず、ホースを握っている大山の姿は狂人のように思えたからだだった。百合子は黙って彼からホースを取り

上げて、その頭へ水を浴びせた。

「おい、なにするんだ！」

怒った大山の顔は正気に戻っていた。大山は柱の前のアケミの傍に寄ると、彼女の目かくしをはがし、口の縄を解いた。

「きのうは、どんないたずらをされたんだ」

大山がいきなり叫んだ言葉を聞いて、百合子は彼が妬いているんだなと思った。

「……許して、もう許して！」

アケミは泣きながら訴えた。苦しかった。もうこのまま溺れ死んでしまうのだと思った程だった。だから水が止められ、口の縄が解かれた時、彼女はなぜか泣き出してしまったのだった。

「どうなんだ？どうされたんだ？」

執拗な質問だったがアケミには答えようがなかった。黙ったまま彼の目を見つめた。本当のことを云っても信じてもらえないことがわかっていて、さわられただけよ——なんて口に出す程彼女はすれてはいなかった。パーンパーン！彼女の頬が鳴って涙が飛び散った。じいーんと痺れ、意識が遠のくような烈しい平手打ちだった。二つ三つ四つ……息もつけなかった。

「アアアアーン、ワアーン、かんにん！」

アケミの泣き叫ぶ声は、切実な響をもっていった。大山はその妥協のない雰囲気酔っていた。

「もうそれくらいで、いいじゃないの。顔が腫れちゃうわよ」

見かねた百合子の声だった。彼女も少し感情が昂ぶっていた。

いましめられた白い女体に水滴が浮んで、それが強い日光を受けてキラキラ光っているのは凄絶な雰囲気似ず美しくしかった。生命のない彫像には見られない美が、そして若い肉体の反発力が、そこにあった。大山はじつと、そんなアケミの体を見めていた。

「あのう、くるしい、くるしいの」

喘ぐような声だった。水を吸った縄が恐ろしい力で、じりじりと肌を締めつけ、肉をねじり始めたのだった。それに気づいた大山は急いで柱の後に廻った。縄のかかった上膊から指先にかけて、皮膚が蒼白く色を失っていた。縄を解こうとしたが、湿った結び目は固く締って、とても、指で解くことができなかった。

「ユリ！早くナイフを持ってきてくれ！」

百合子が足早に家に入って行った。それを見送った大山は突然アケミの前にひざまづ

いて濡れた両足を抱き締めた。

「許してくれ！愛してるんだ。殺したい程好きだ！」

彼は涙を落しながら、アケミの小さな足の指に口づけをしていた。

「いいの、いいの。わたし、とても、仕合せなの。もっと、ひどい目に合わせて殺されたいの」

感傷的になった二人は泣きながら、自分で自分の言葉に酔っていた。それは平凡な恋人達の交わす愛の言葉のような誇張もなく、全身からしぼり出すような叫びといつてよかった。二人の非凡な交歓は、ほんの一、二分間で終わった。

百合子がナイフを持って、庭へ降りた時には、二人は既に離れていた。彼女が、その情景を少しでも見たかどうかはわからなかったが、彼女の表情も態度も、変ったところがあった。

大山はナイフでゴシゴシと縄を切った。縄が弛むとアケミは緊張感を失ってふらふらと倒れかかった。軽い失心状態だった。その裸身を受け止めた大山は両手に抱き上げて家に向った。体が少し冷たかった。

「親切だわねえ。妬けちゃうわ」

百合子がつぶやくように言った。

全身の束縛を解かれたアケミは畳の上に横たえられた。腕の疲れが残り、そして疲れ切っていた大山は赤くまだらになっている手首や腕の縄の跡を撫でさすってやっていた。そして先程口走った言葉を少し後悔していた。

可愛いと思う。しかし、この女は普通の感情で愛してはならないし、彼女に愛を求めてはならない。愛して肉体を求めて、すべての愛情が辿る過程を踏んでしまった時、女は凡庸な性の器官となるばかりではなく、狎れた雌は男から新鮮な感激を奪ってしまう。幾度か経験し、幾度か失望した女にアケミをしたくなかった。最も女らしく最も雌らしい生き方を強制するということそれは単純な性交からは生まれはしないと大山は信じていた。だからアケミに向って叫んだ言葉は、卑屈を意味したように思えたし、彼女の叫んだ言葉によって打ち負かされたような感じが落ちつくにつれて湧き上ってきたのだった。だから撫でている彼の手をアケミが、そっと握った時、彼は冷やかにそれを振り払った。目を閉じて仰向けに横たわった裸身は諦めたように二度と動こうとはしなかった。

○

その夕方、三人は神戸へ出て、レザニマルで食事をした。アケミは全く自由な体だったし、手首に残った縄跡も長袖のツープースでどうにか隠すことができた。レザニマル（正確にはレザニモーだが語調が良いという理由だけで大山がつけ名前だった）は空いていたし、料理も美味かった。アケミは餓鬼のように肉料理をむさぼり食った。

「疲れたでしょう？それにしても、よく入るわねえ」

「ええ、おいしいわ」

「大山さん、ここもやはり不景気そうね。階下はどうなの？」

「駄目だなあ。なんとか考えんといかんようだな」

「何か名案でもあるの？」

「うん、考えていることはあるんだが、どうも自信はないな。アケミ、もう一度踊りをやる気はないかい？できればアクロバットがいんだがなあ」

「踊りは好きだわ。でもアクロバットは難しいし、練習もしなくなっちゃ、とても、……」
「僕のために踊ってくれる？勿論充分に練習してもらおうから」

「ええ………」

「裸でやらすんでしよう？アケミさんなら、すてきだと思うけど、どう、やれるの？」

「……………」

アケミは大山が、普通の舞台での踊りではなくて、このレザニマルの地下で行われる秘密シヨウのようなものに自分を出そうとしていることを直感していた。そして恥しい気持ちが失われていたわけではなかったが、スポットを全身に浴びて幾人かの好奇の目に晒すということが、新しい刺戟を呼ぶのを感じた。それに大山のために踊るのだという理由が、勇気と犠牲の感情を強くゆさぶるようにも感じていた。

「どうだい、やってくれるか？」

大山は無心で食事をしている可憐な横顔を眺めながら尋ねた。

「ええ、自信ないけど」

アケミは肯定した。

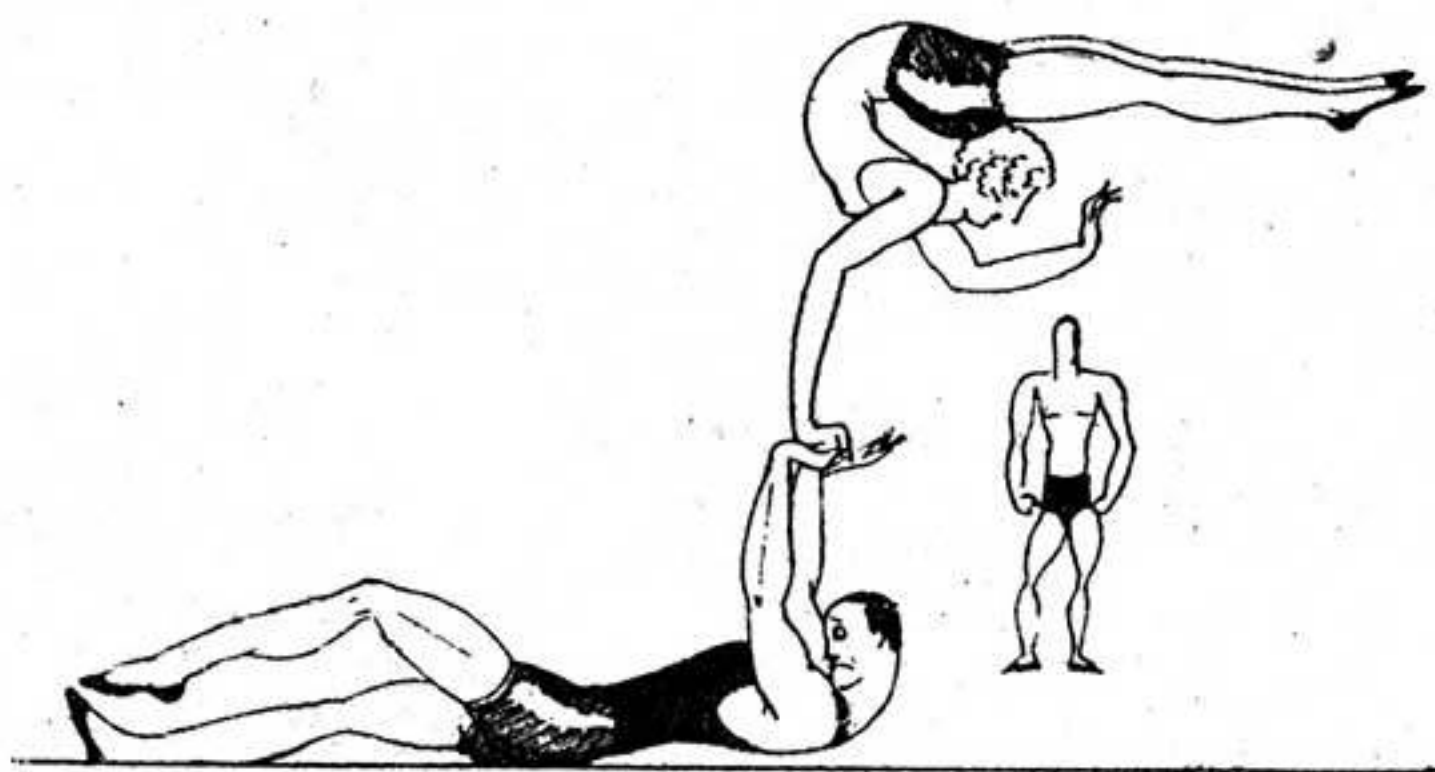
大山はライトに照らし出されるアケミの裸身と、その屈曲した姿態を想像してジーンと痺れるような胸の疼きを感じていた。それに自分の女の裸体を、他人に見せるということに、ぞくぞくとする刺戟を感じていた。

（変ったアクロバットを演出して、アッ云わせてやろう。そして彼女の美しい裸体に

☆ 耽美ふあんたじー ☆

「で か だ ん」

夜 乃 探 郎



目を血走らせる男達から、その代償をうんと出させるのだ)

身も心もすっかり自分のものにしきった女の裸体の魅力を、他の男達がうつつを抜かし、眺めているのを見るということは、大山のような男にとっては、たまらない刺激であった。

た。舞台の上で好色な男達の目を楽しませ、やんやの喝采を博している、あの女が、俺の女だという自負心もそうだが、それ以上に、大山の心をそそる何物かがあった。

やくざなヒモが、自分がポン引きとなって自分の女に客をとらせる、あの心理に一脈相

通じているようだが、この際の大山の気持は又それとも又違っていた。

その夜、大山とアケミは百合子と別れて二人だけで帰った。しかし、二人は一つの部屋には寝なかった。

(続く)

「お願いがあります。一晚だけ貴方のお身体をお借し願います。」

とつぜん、私は品の良い中年婦人によびとめられた。そう、私とは自称・耽美主義者でもある夜乃探郎という、しがたない夜の放浪者だ。

その晩は、月はあくまで青く、私は死にたい程に孤独だった。

——いつか私は、どこまでも続く郊外の道を女と一緒にあるいていた。

「わたしが、お仕えしているお嬢さまと、今晚、結婚して頂きたいのです。こんな事を見ず知らずのお方に申しでるのは、さぞかし狂っている人間のたわごとと、びっくりされると思いますが……」

そういうなり中年婦人は、そっとハンカチを取り出しまぶたをおさえたのだ。

「どうせ、私って男は、妻なく子なく金もなく、その日暮しの風太郎ですから、こんな身体でよかったら、いくらでもお役に立たしてもらいますが……結婚だけはいけませんね。もう、そんなことア、とっくの昔に忘れています」

「いまも申しましたように、一晚だけでけっこうなんです。明日になれば、どこへでもお帰りになってようござんす。お礼はいくらでも……」

私は小さな声でつぶやいた。△結婚か……
——ふと、社交サロンの女王のようにふるまっていたK子のが頭をかすめた。私の美少女好みに気付き、怒って実家に帰ってしまった……。それはいつのことだったか、もう遠い色あせた世界の出来事だ。……事業の失敗……この小さな漁港のある町に流れ着いてからも数年はたっている。

（人間八年ヲ取ルモノヨ。私ダッテ、イマサラ、セーラ服ヲ着テ……私ノ身体ニドウシテサワツテクレナイノ……。）

K子のヒステリックなさけびがよみ返り、急に私の気持をしめつけた。

詩人だ、ろまん追求だなど言っても、しよせんは薄汚れた一匹の野良犬にすぎないの

か。人並の生活も出来ず……おれはヘンタイの、性格破産者。年と気持が平行線をたどらない精神的な不具者。

……だが、はたして……

群小の家々を見下す崖の上に、赤いレンガ造りの西洋風の建物が佗しいたたずまいを見せていた。こわれかかった垣根に、名も知れない草花が生えしげっていた。

月の光線を受けて、それらの情景がまるで異国の土地をしのばせた。

玄関口にある角灯が淡い灯りを、あたりに投げかけていた。

中年婦人のさそうがままに、私は無言のまま家に入った。

黒光りする長い廊下を過ぎるまで、しーんとして人影は無かった。

奥まった部屋の前に立止る。その戸には、大きな錠がかけられていた。

中年婦人は、そっと私にささやいた。

「ある会社の社長さんのお嬢さまでした。名前はお許し下さい。いつもは静かに絵を描いておられるのですが、風の吹く晩とか、雨の降る日などは……。外部のおもわくもありますので、いっそ精神病院に、そんな話もあり

ましたが……でも、わたしは、そんなことおかわいそうで……。三年前にこのお嬢さまの父が……。そして昨年は母が……。わたしは、一生、お嬢さまにお仕えしよう……ハイ、わたしは乳母でもございましたので……」

「……………」

「それが、つい先日、わたしは医師から癌を宣告されました。せめて、このお嬢さまの晴れの姿を……」

人情を感じるには、もはや私の魂はすり切れている。生きていながら、すでに死んでるような、ただ夢だけが、そんなはかない毎日を送っている私には、他者のナミダはにがてなものだ。ただ、そのお嬢さんとやらが美少女であるか、どうかに関心を有することだった。

美少女につかれた生涯は、果てしのない砂漠を行くうらぶれはたでかだんの道でもあったろうか……。かつて私は、美女を憧憬するみにくい、ノートルダムのせむし男を、映画に見て、その哀れさに狂気のように夜更けの道をさまよったことがあった。一人の美少女を慕うあまりに殺人までも犯した小説『ロリータ』の主人公を、うらやましく感じたこともある……。

——青白い顔に、濡れたような紅いくちびるが、半開きになっている。そのあどけない少女を真近かに見たとき、私は、あーっ！と声を出すところであった。

それは、私が求めに求めていた幻の美少女でもあったからだ。△それにしても、あたりの空気は、異様だった。▽

少女は、私が部屋に入っても、表情一つ変えるわけでもなく、あらぬ方を見ていた乳母であったと称する中年婦人は、そんな少女の姿を、ただ静かに眺めているにすぎなかった。

窓ガラスが、かすかに音を立てた。風が出てきたようだ。

「ううっ、怖いようー」

少女が、とつぜん立上りおさげを振ってさげんだ。そしてけたたましい狂笑をあげた。

(人が変わったような動作だ。)

……その少女の身体のアたりから、ぷうんと汗くさい臭いがした。

「すみません。縛ってやって下さい。五分もたてば、静かになります。風が、出はじめる」と、いつもこうなんです」

中年の婦人は、一本のロープを私に手渡した。

……すごい力だった。この細い身体のどこにこうも……。

私は数度、はねつけられた。

少女の寝巻のえりが肌けて小さくこりこりしたような乳房が……だが、その顔は凄絶な美しさに燃えていた。

——何刻か過ぎて、きれいに化粧をほどこした美少女と私は、朱塗りの盃を前に坐っていた。

仮祝言といっても、薄暗い部屋につかのまのスリルを期待する花むこと、狂った花嫁と中年婦人との三人だけの奇なる宴^{うたげ}でもあったのだ。美少女は、ロープをとかれたばかりでそれに発作の後の虚脱状態というか、人形のようにおとなしかった。

「お嬢さまも、人並に……」

中年婦人は三々九度が終るなり、その場にわーっと泣き伏してしまった。

「ねエ、ばあや、これなんのことなの」

少女がはじめて、普通の言葉を出した。

中年婦人は、顔を上げ、微笑を見せて答えた。

「お祝言。君子さんも、花嫁さんになったのよ」

「おままごと、することね」

挿絵画家 募集!

○本誌の挿絵をより充実させるため、読者の方々の中から腕に自信のある方の応援を求めます。

○自作画をお送り下さい。個性的な本誌向きのカット、挿絵、口絵を求めます。
○佳作は漸次誌上に発表の上、反響の如何により逐次御依頼いたします。

(編集部)

少女はニッコリうなづくなり、

「おままごと、おままごと」

と、唄うようにいつまでも、その言葉をつづけた。

——その深夜。私は一つ布団の中に、無心にねむる美少女のえり元からこぼれる小さな乳房に、そっと口づけするなり、床を抜け出した。

……夢は儚かなきが故に、美しきもの。眼ざむれば、夜風の如くうすら寒きか。いと妖しきこの世ならぬ構図も、また幻の彼方に去って。

(おわり)

嗜虐の歴史

—「ソバイの記録」より—

三 原 寛

ソバイは、その長身を感じさせない、がっしりした体格、肩、胸には叩きつけた様な筋肉の塊が見事に発達し、それでいてチョコレート色の鞣し皮に包まれた全身は、豹の様に柔軟だった。

幼少より示した抜群の体格力量を見出されて、時のタプロム王の側近として召抱えられたが、タプロム王室の教育を司る高僧カーンについて学問を修めたといわれる。やがて、好戦的なペン女王の統治下に強大な兵力を誇り日増しに勢力範囲を拡げつつあったクメール王国と遂に正面切って戦乱の火蓋が切られ

る事となったが、ソバイは数え知れぬ戦斗に参加してその度に目醒ましい戦果を挙げて、その剛勇は敵味方に鳴り響いた。

ソバイは単なる蛮勇に走る事なく作戦面でも、その極めてすぐれた叡知により殆んど信じられぬ程の策略をめぐらして自軍の危機を救った事も数多くあるという。ソバイは又自軍の部下を非常に大切にし、その為に人望極めて厚かったが、皮肉な事にこれがソバイが女手一本で囚われの身となり一生をペン女王の鞭の下に呻吟せねばならぬ因となった。

ハンティスランの斗いは熾烈を極めたが鬱

蒼とした密林の樹海の中を敵陣深く潜入したソバイの一隊は此の戦斗を一挙に勝利に導くべき奇襲を前にして強行軍の後の泥まみれに疲労した身を休めて待期して居た。

ソバイは部下達を小休止させて置いて単身敵陣の偵察に出かけたが、ここでソバイにとっては彼の一生を根底から覆す程に左右した女性、敵方の女隊長スレイが登場するのである。ペン女王が女性である為に女性を多く要職に登用して居た事は、アンコールワットの壁画をみても、明らかであるが、スレイ隊長も、その一人であったのだろう。

スレイ隊長も恐らく単身敵情偵察中、偶然に休憩中のソバイの一隊を発見したものだと思われる。ソバイが自軍に帰りついた時、部下が全員その場に累々と死体を横たえて居るのを見て呆然と立ち竦んだ。

「どお？ びっくりして？、強いソバイ隊長さん」

樹の蔭から女が妖然と笑いかけた。

「心配しなくてもいいわよ。しびれ薬を飲ませただけだから一時間もなく息を吹き返すわ。この笛を吹かなければの話だけれどね。この笛を吹いたら、あたしの部下達が出て来てお前の家来達を皆殺しにするんだわ！」

「だ、誰だ君は？」

「スレイ隊長よ。皆、だまされて喜んでしびれ薬を飲んだわ。お前にも飲んで貰うわ。さ／＼その壺よ／＼おっと：剣に手をかけたりして、笛を吹いてもいいの？」

ソバイは進退窮した。

「このしびれ薬を飲んだら、部下達はどんなる？」

「助けて上げるわよ。お前さえ捕えれば、これ以上の手柄はないんだから」

「部下達を助けて呉れるって、どうして保証出来る？」

「おや、あたしを信じないのね？ 嫌なら止めていいのよ。笛を吹く事にするわ。特別のお情けで家来達だけでも助けて上げようと思つたのに、信用しないんなら」

ソバイはしびれ薬を、飲まざるを得なかつた。

気がついた時、ソバイは鉄鎖で巨木に繋がれて居る自分を発見した。

「おや、お目醒めかい？」

鞭を手にした女隊長スレイがぎらぎらと情慾の眼を光らした。

「莫迦な奴。笛を吸いたって、あたしの部下なんて、この辺りには初めからいやしないの

さ。あたしは一人で、偵察に出かけて来たのさ。まんまとだまされる所なんぞ評判程お利口でもないな。まわりを見てごらん」

今度こそ、辺りは血の海、本当の死体がごろごろと無残に横たわって居る。

「あたしは血を見るのが好きなのさ」

という彼女が一人残さず惨殺してしまったのだ。首を切り落された者、胴体を真二つにされた者、手足を切断された者、急所をえぐられた者、彼女の前に完敗を知ったソバイは氣力も尽きがつくり頭を垂れたが、ふと自分が彼女の前に衣服を剥ぎ取られた全裸を晒して居るのを知ると再び顔から火の出る屈辱を感じた。勝利に酔った女隊長は、全軍に勇名を馳せた大英雄ソバイを今や自分の思う様料理出来るという残忍な喜びに狂って居た。ソバイの情銳の一隊を全滅させ而もソバイを捕虜としたという夢の様な榮譽、それも自分一人の手である。ペン女王の喜びが目に見える様で、今から、ぞくぞくする程の女王の寵愛、榮達……得意の絶頂感、たった今の血の狂宴で一層興奮を駆り立てられた。

この男の生殺与奪の権を握って居るのは、今や自分唯一人である。誰も知らない。しかし今この男を殺してしまつてはならない。生

き身のままペン女王の犠牲に捧げてこそ、功績は倍加する。群衆の大歓呼の嵐に包まれて全軍の先頭に立って凱旋する。犬の様に四つん這いのソバイには首輪がつけられて、その鎖を握って居る。そうだ／＼スレイは自分の着想に酔った。

皆に知らせる前に自分が仕込むのだ。死を怖れぬ勇者と雖も最も残忍な肉体的加虐の前には何時かは屈する筈である。

彼女は薄笑を浮べてソバイの前に立った。

「お前は、あたしの犬になるんだ／＼」

鞭が空を切って振り上げられた。然し：鞭跡は不味い。女王様の犠牲に自分が先に傷跡をつける事は、許されない。何とか跡のつかぬ方法で責め苛むのだ。三日の間、彼女はあらゆるやり方でソバイを痛めつけたがソバイの意志は固かった。流石のソバイも非情な女隊長の残虐な責めの前に何度か呻き声を洩らしたが、彼女の意志の下に屈する事を肯んじなかった。も早、これ以外の責めでは彼の体に傷をつけねばならぬ事になるし、流石のソバイも三日間の地獄の様な責めに、これ以上続けては命を落してしまうかも知れなかった。ソバイを犬にして凱旋する事は実現出来なかったが、女隊長スレイは熱狂的な歓呼に迎え

られ、ペン女王の賞讃を受けた。

ペン女王はヴェトナム系の女性に特有のすらりと伸びた肢体、発達した胸、長い脚、そして透きとおった蛾細工の様に整った彫りの深い気品高い顔。足下にひき据えられたソバイが仰ぎみた女王は余りにも美しく冷たかった。しかし、ペン女王の眼差はねずみを与えられた猫のそれであった。ソバイの死刑は即座に決定され、恒例通り、翌日、斗技場に於いて女王自らの手で施行される事となった。

斗技場には超満員の観衆が詰めかけ、全裸のソバイが引き出されて来た。満場の拍手を浴びて愛用の革鞭を手にしたペン女王の、神技に近い鞭さばきが披露される。ソバイと雖も、素手、全裸で、而も、長い革鞭を思う様操るペン女王には齒が立たなかった。如何なる英雄といっても四肢の自由を奪われていない以上、空を切って打ち下され皮膚を切り裂く様に炸裂する革鞭を避けて見苦しく逃げ廻らざるを得ない。しかしペン女王の鞭はまるでそれ自体生き物の様にソバイの自由を奪って行く。逃げ惑うソバイの足にきりきりと巻き付いて引倒すと、ぴしっと小気味よく背中に処女鞭が喰い込んだ。

ペン女王の第一鞭を背中に受けたソバイは

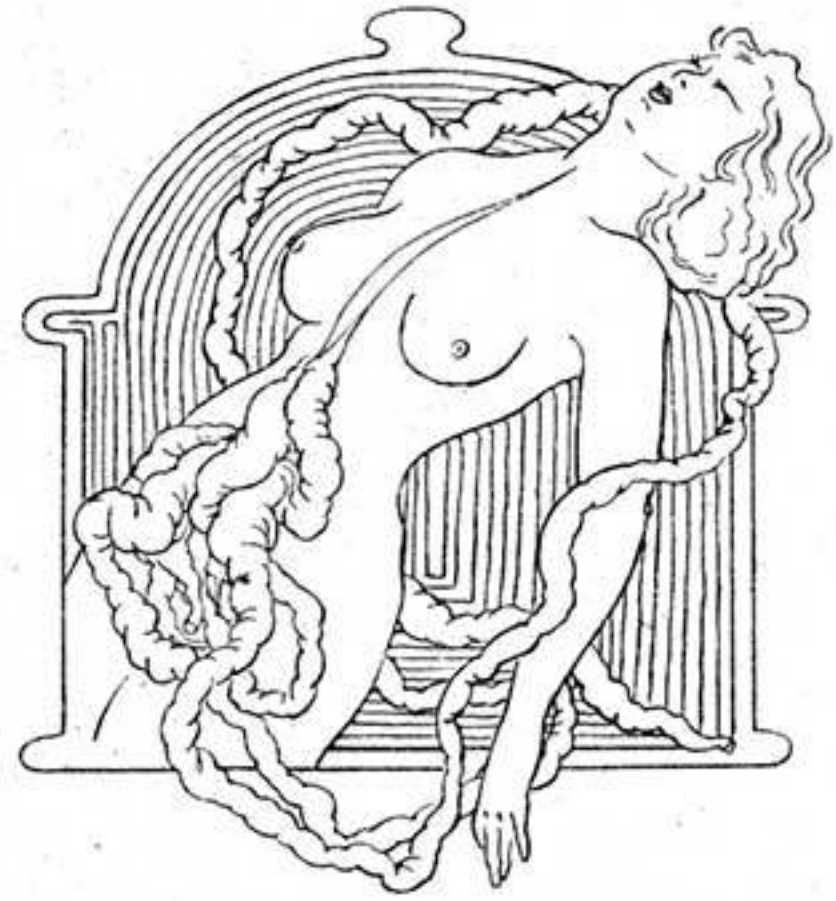
全身にずんとしびれる激痛にきゅーっと体が芋虫の様に収縮する。それ以後はもうペン女王の思い通りに鞭一本で踊らされた。縮み上った所を脇腹の一撃で海老の様にのけぞる。鞭の与える効果を十分に心得た女王はじつくりと、その犠牲の反応を堪能する。

のけぞって伸び切ったチョコレート色の腹を真二つに横断してぱしっ、堪らず悲鳴を上げて横転する所を肩からけさがけに一鞭入れると女王の予想通りソバイは四つん這いになった恰好でうろうろと逃げ出し満場の失笑を買う。ペン女王の容赦ない鞭の嵐に遂に失神して女王の足下にぼろ屑の様に横たわったソバイを踏みしめて尚も鞭を加えると大抵の捕虜は全身をずたずたに切り裂かれてここで命を落す。ソバイも遂には血と泥にまみれてその肉塊を斗技場の砂の上に横たえるのであるが、彼の強靱な生命力はさしもの試練に耐え抜き、ペン女王の鞭に生き残ったのである。

翌日、ペン女王の前に引き出されたソバイは今度は、女王の屈辱的奴隷として仕込まれるべく連日連夜、凡ゆる残忍極まる拷問を受けるのである。今は女王の側近く仕える女隊長スレイがいろいろと悪魔的な責め手を提案した。女王の居間からは手足を鉄鎖に繋がれ

たソバイの絶叫が夜を日についだ。凡ゆる苛酷な拷問の後に遂にソバイの命を奪う事をしなかったのはペン女王がソバイの不撓不屈の意志に敬意の念すら抱くに至ったからではなく、これ程苛め甲斐のある頑丈な玩具を気の済む迄使用してみたかったからである。

方法はあった。ソバイは床の上に仰向きに手足を大の字に固定された。女王はソバイの顔を跨いで傲然と立ちはだかり、女隊長はソバイの腹の上に後向きに大きなお臀をどっかと乗せて腰を下したがやがて彼女の指先が微妙な幻想を奏でるにつれ、ソバイの顔は上気し全身を奇妙にくねらせはじめた。スレイを傍にやった女王は下に廻って今迄スレイが手にして居た箇所彼女の白い大理石の様な足を当てた。踏みしめた足にぐいぐいっと力を加えると、やがてソバイの眼は哀願的な光を帯びて来る。ペン女王の冷い眼が見下す。遂にソバイはペン女王の美しいおみあしに屈伏し、女王に対しては如何なる命令と雖も絶対服従を誓わせられたのである。次の日、ソバイは再び斗技場に引き出され、衆目を浴び乍らペン女王の排泄物を口にする。



続・妊娠腹観賞会

高野原美

五番目に登場したのは、二十二才で九カ月の妊婦であった。

次々と妊娠腹と、その妊婦の演ずるマゾヒスティックなプレイに観客たちは、我れを忘れてもう夢幻境をさまよう心地がしていた。刺青をした妊婦の模倣とも云うべき妊婦の大きな下腹一ぱいに描かれた女性切腹の絵の見事に驚かされ、またまた余りにも動物的な妊婦の四つ這いの姿勢での浣腸噴水と云う思いもかけぬ余興に、観客たちは、ただでさえも脂ののった豊満な肉体、その演ずるマゾ性に官能をあやしく揺さぶられるのを覚えていた

のであるが、もう今ではそれが、最高潮に達し、最早や蕩然とした気分になっていた。

彼女は腰のあたりまでであろうかと思われる緑なす黒髪を肩のところから前に廻わして、その長い髪の毛で、裸身をおおいかくしていた。豊かな白い胸の隆起も、やや赤味をおびて走っている妊娠線の大きなお腹も。その彼女が音楽に合わせてからだを動かすたびに長い黒髪はゆれて、その間から豊満な白い皮膚がちらちらとのぞくのは、悩ましいかぎりである。腰には黒いフンドシが、きつく締められて白い肌と黒いフンドシのコントラストに観

客ははっと息をのむ。

妊婦と黒フンドシ、緊く締った布は、腰部の流れるような美しい曲線をその部分で断ち切り、大きい陥みをつくって下腹部——丸い小山の裾野を横に走っている。

黒い髪と黒いフンドシ、豊満、単に豊満なだけでなく乳房とお腹とお臀が異様に膨んだ白い女体。このコントラストに観客は、新鮮な妊婦の美を発見した。黒がかもしだす神秘的な壮嚴な雰囲気、今までの妊婦の雰囲気とは全く別の嚴肅な女の生理を感じさせる。

彼女は、黒髪を後に振って九カ月の美事な

妊娠腹を観客の前にみせると客席の方に歩を運んだ。観客たちは、その豊かなやや下に胎児が下って下腹の膨らみが大きくなっているお腹に触れ、その感触を楽しみ、眼で膨らみを追っている時、正面舞台には白い屏風が運び込まれ、畳がその前に敷かれ白い布がその上を覆った。妊婦に夢中になっていた観客たちは「切腹」とはや気が付いて胸の高なるのを覚えた。この眼の前の小山のようなお腹を見せている若い妊婦の切腹擬態が、これから演じられようと云うのである。

素晴らしい演出である。妊婦切腹は観客の大半が希望し見たいと願っていたことである。あの白い豊かな小山の下腹に刃を当てて切り裂く。

普通の女体切腹とは異なった趣きが感じられる。

お腹の中に自分の愛する男の種子を宿し、その出生を長い苦しい妊娠生活にも耐えて、そののみを念願して母親となる喜びを秘めて心の準備をして来た女性、その女性が突然切腹を命ぜられる。切腹は自己の死とともに腹の中の子供の死をも意味している。可愛い我が子の生命を自らの手で、断つことでもある。腹を切り裂く非情の刃をもった右手は二

つの生命をじりじりと死へ追いやりながら、苦痛に耐えて腹壁を切り裂き腹を左右に切り開いて行くのである。

母の苦痛は二重の苦痛となり胸を痛めさせる。子供の生命をも断つ精神的苦痛と醜く膨れ上ったお腹を男性の前に露出して、腹を切らねばならねばならない苦痛。

雄々しく立派に一文字腹を切るには、正常の場合の二倍の長さにも切り裂かねばならぬだろう。観客たちは、それぞれ好みの空想に浸っていた。

その間に、切腹の用意は出来て三宝の上には本物の短刀が置かれ、切尖を一・五センチ程出して紙が厚く巻かれてあった。勿論、危険を避けるために残りの刃の部分にはバンソ膏を幾重にも貼り、それ以上深く刺さらぬようにして紙が巻いてあった。

妊婦は、舞台の準備が終ると一度別室に行き白装束に着かえ、長い黒髪も白い紐で束ねて白足袋をはき静かに現われた。

照明は冷たく静かな落着いた色に変わっていた。

さすがに妊婦も、本当の短刀で偉大に膨れ上ったお腹を切るのであるから、やや青ざめた顔付きで切腹の座に坐った。

マダムはやはり白い着物で椅子に坐って、彼女の斜め右前に位置していた。

「貴女はただ今から切腹することに相成りました。立派に切腹して果てる自信はありますか」

「はい、もとより私より望んだ切腹でもあります。武士の如く立派に切腹して相果てますほどに、しかと、お見届け願いたいと存じます」

立派な言葉ではあるが、やはり声は上ずり少し震えているようである。

観客たちは息を殺して、甘い浮かれたような気持も消えて、どうなるのかじっと見守っている。

「では、お覚悟を！」

「はい、美事に切腹を！」

妊婦は着物の帯を解き、胸前を大きくひろげ静脈がくつきりと浮んだ乳房をみせると、そのまま両手をぬいた。腰紐が膨れたお腹が顔を出すのを守っているのを素早く解くと、着物をぐっと押しひろげながら腰まで下げると、足の付け根のあたりで、巻きつけて締めた。

彼女は、正座のために余計に大きく突き出している丸いお腹を右手で二回、三回撫で廻

し心を落ちつけていたが、やおら右手を伸ばすと、三宝の上の短刀を握りしめた。

普通の場合は、お臍のやや下一寸位のところを一文字に切り裂くようであるが、九カ月のお腹である。お臍から恥骨までの縦の長さが三三・八センチもある。お臍をとるお腹の囲りが九六・五センチと云うのであるから、お臍の下に着物から露出している部分は大きな面積を占めていた。

彼女はお臍の下十センチ位のところを三十センチ余り一文字に切る積りであった。左脇腹に短刀をあてがって大きく肩で息をしている。呼吸をととのえ、心をしずめると左手も短刀にそえて思い切って突き立てた。

弾力性もなくなって、ばんばんに張り切っている腹壁である。何んの苦もなく鋭利な短刀の刃は鈍いブスツと云う感触を残して腹壁に突立った。

「ウーン、ウーン」

激痛に顔をゆがめ歯を噛みしめて痛みに耐えている。お腹は、腹圧のためにキンキンに張って胎児が動くのであろう。お腹の型がゆがむ。彼女はしばらく痛みに身悶えして、そのままの姿勢でいたが、左手を短刀より放すと刀の刺し口の左脇腹に当てて右手に力を入

れて引き廻そうとする。

刃は腹壁に喰い入ったように動かない。彼女は、そんな筈はないと焦った。切らねばならない、切るのだ。

彼女の今までの切腹のプレイではお腹の皮膚に赤味があったミミズ腫れが出来るほど真剣なものを行ない、自分自身悲愴な気分について実際にお腹が切り裂かれて血が溢れ出ているような錯覚すらも感じる位であった。しかし彼女は、実際にお腹を切り裂いて切腹をやりたい。その時の苦悩に身悶えることに憧れと期待すらも、もっていたのである。

それだけに、今日の切腹は最も期待もし、立派に切り裂く自信も充分にもっていたのである。

焦りながらも、痛みをこらえて短刀の柄に左手を添えると思ひ切り右に引き廻した。激しい痛みを感じ、刀は右ヘググツと動いた。

彼女は激しく襲いくる激痛に耐えながら、ゆっくりと下腹部一面に拡がる刺すような痛みと、流れる血液の生温かい感触を楽しむように切り進んでいった。

大きく張り切った白い下腹はみるみる内に大きい口をあけて、流れる血で赤く染まっていった。皮下脂肪は黄色い塊の姿を見せて切

り口から押し出され、その下に筋肉がのぞいている。

丁度半ばほども切ったとき、彼女は激しく肩で息をし歯を喰いしぼり額には脂汗をじっとりとにじませて刀をとめた。激しい痛みが彼女をさいなむのであろう。苦痛に身悶えし耐えている妊婦の姿は、観客たちに満足を与え、その美事な妊娠腹が大きくパツクリと赤い口を開けて、流血が細く太く赤い条をつくって白い膨らみと対照的な異常美をかもし出している。

彼女は永い間、そのままの姿でいたように思った。

しかし、ものの一分も休んだであろうか。左手は血にまみれた短刀から離れて左脇腹に当てがわれ右手だけで右半球が切り裂かれていった。今度は左手が除かれたために、大きく膨れた九カ月の妊娠腹を無惨にも切り進んで行く状態が、観客にはつきりとうかがえた。

白い鋭い刃は皮膚と皮下脂肪をプリプリと切り裂き、刀を持つ手に重く鈍い弾力を感じさせて移動して行く。その直ぐ後から皮膚は大きく口を開けて血の赤い流線が一条、二条スツと走る。

もう彼女はただ最後まで思い切り裂くことだけしか念頭になかった。ズキズキと激しい痛みは襲い下腹全体が麻痺したようになり太腿も真赤に染まり白布にまで血液は流れて赤く染めていた。右手は、刀をしっかりと握りしめ、左手の指は皮膚を破らんばかりに左脇腹をつかんでいた。もう観客の顔は何も見えず、ただ強烈な切腹意識だけが短刀を右へ右へと引廻していた。

遂に白い大きく、膨満した半球は真一文字に、しかし、やや右下りの状態で切り裂かれた。

切り口からは、腹圧のために皮下脂肪は完全にむき出しになって押し出され、物凄く大きい切り口が美事にみられ、腹筋が赤くのぞいていた。もう切り口の下は真赤で血液凝塊が盛り上りをみせはじめており、血の生臭い匂いが客席にまで漂って、プレイとは云えぬ切腹の悲惨美をみせていた。

彼女は、切り終えると両手を前につき、激しく身悶えし荒い呼吸で、お腹は荒波のように動揺していた。

咽喉はカラカラに乾き、どっと疲れが感じられ目が廻うような気持に襲われ仰向けに倒れ伏した。

観客は、その壮絶な切腹プレイと妊娠腹の血にまみれて大きく口を開いた妖しくも美しい姿に見惚れ感謝していた。お腹が小山のようになり大きいくだけ、その迫力は一層強烈なものがあった。

マダムは、巻尺をもって妊婦に近づくと検視でもするように想像以上に物凄い切り口に一寸おどろきながらも、切り口を調べた。それによると切った長さは三四・二センチ、切り開かれた切り口の幅は、臍下で八センチにも及んでおり、いかに妊娠のために皮膚が伸び切っていたかを実証したのであった。

観客たちは、彼女の美事な真刀を使用しての切腹プレイに敬意を表わしつつ、そのすさまじい悲愴な美を眼のあたりにみて、これ以上のショーは絶対がないであろう。また悲愴な腹部を凝視しながら、もう一度、彼女の切腹プレイを最初から反芻するのであった。

(五)

切腹プレイによって汚されたフロアは美しく磨かれ塩をまいて清められ、いよいよ今日のショーのフィナーレを飾る佐藤京子の出演の時がきた。

ヌード・ミュージックでは、プリマドンナとして出演していたので舞台度胸は充分にで

きていたが、今日だけはどうしても心が落ち付かず、自分の出番が怖しかった。そのために楽屋にあてられた部屋にじっと座っていた。舞台との間の幕の隙間から度々顔を出して他の妊婦たちのショーをのぞいていたのであったが、彼女たちの余りにも物凄い演技には驚き、特に切腹して血まみれの状態で楽屋にかつぎ込まれた妊婦を見たときには逃げ出したいほどの思いに、かられたものであった。

幾ら金のためとはいえ、ここまでのショーをせずともとは思いつながら、自分に与えられた役を考えて身震いしていた。しかし、如何なる苦痛や羞恥にあってもお客様に期待に添うよう進んで努めると云う一札を入れているので、もう一步も後に引くことができないのである。

京子が舞台にあらわれると観客は思わず驚きの声を挙げた。この中の半数以上はミュージックホールでの京子のグラマーの肢態を見ているのであるが、その肢態は妊娠と云う生理的变化にもかかわらず殆んど変化を見せず流れるようなカーブを描いていた。ポリウラムのある豊かなからだは白く輝き艶をみせ、その中央部で大きく盛り上った腹部は観客た

ちの眼をみはらせた。臍より下が丸味を帯びてまん丸く突き出したベンベンたる九カ月の腹部であった。

京子は、舞台に現われたときから生れたままの姿で、ただハイヒールだけが唯一の身に付けたものであった。

白く透きとおる肌の乳房には青い静脈が走り、乳腺と脂肪が良く発育した乳房はブルンブルンと弾力性ある豊満な姿を見せて、大きい膨らみの丸い小山の上でやや垂れ気味に突出していた。その中央部の乳暈と乳首はやや暗色を帯びてはいるが美しさを十分にとどめていた。

観客たちは、特別に二頁分に印刷された妊娠前のグラマーの姿態と見比べ、また後のスクリーンに映し出された像と見比べて、その変化を目で眺めていた。彼女は、舞台中央の大きい貝の中に立ちヴィナスの姿そのままに両手は乳房と花羞しい場所を隠していた。

マダムは、その美しい姿を屈んで彼女の各部分を測りながら、うっとりとして見ていた。同じ女性であっても惚れ惚れとするほどの美しい妊娠美を描き出していたのである。彼女の腹囲が最も大きく形もまんまるに近く美しい妊娠腹であった。妊婦の美は西欧でルネッサ

ンス頃に認められて有名画家の作品が今日も残っているが、彼女の姿を彫刻にして残しておきたい位であった。観客たちは、誰しもがそれを願ったであろう。それだけに、前から後、横、下からとカメラのシャッターの音はせわしく鳴った。

観客たちが充分に鑑賞をおえると、マダムは荒縄を用意した。

誰でも希望の方は、京子を緊縛責めにくれと云うのである。緊縛には自信があった若い客が真先に舞台にとび上った。

マダムは、「ではお願いします」と云うと荒縄を渡して引下った。

「少々、手荒いかも知れないが、辛抱できますか」

ただ、その質問に対しては軽く頭を下げることで彼女は応えた。

「手をうしろに廻して下さい」

京子は、白い美しい両腕を、うしろに廻した。男の手によって、その両の手首は固く縛られ、左右から、廻された縄は胸を乳房の下、乳房の真中と厳しく巻かれた。荒縄は肌に食い込んで縄のところで大きい窪みをつくり、縄と縄の間で脂肪ののった皮膚は大きく盛り上っていた。乳房は弾力をみせて真二つ

に割られ大きく窪んで形をかえていた。

縄目が肌に食い込み泣きたい位の痛さである。縄目をとかれると彼女の白い肌には鮮かな荒縄の跡が赤く残って痛々しい。京子は、しきりに、その跡を気にしてマッサージしていたが、急に荒々しく男に手をとられ、うしろに廻され再び手首が縛られた。

予想していなかっただけに不意をつかれて「アッ」と思わず叫ぶ、縄は前に廻されて豊満な乳房の上下を縛り、きゅんと豊満な乳房は突出した。その縄の端は乳房の深い谷間で結び目をつくり眼鏡のように走り、荒縄の中で柔軟な弾力のある乳房は痛めつけられて根もとに窪みをつくって真直ぐ突出する。余った縄は大きい小山のお腹の上端をきつく一卷きして、小山の頂にきて臍の上でぐるを巻いた。

お腹を正中線に沿って走る荒縄は、白い肌を朱に染めさせ、歩行によって姿態が動揺すると縄はキリキリと痛んだが、一順して縄をとかれた時には、彼女の心はより刺戟的な責めを望むようになっていた。

彼女の心の変化を知ってか、次は逆海老吊りが宣せられた。妖しい心のときめきと緊縛責めで大きく丸

い肩と乳房で息をしていた彼女は、三度うしろに回されナイロン紐で縛られた。次に胸が乳房の上下に二巻三巻紐で縛られると、それらの紐の端はピンと、張られて梁に固定された。このままの姿勢で妊娠腹から下の部分を吊り上げて行こうと云うのである。

胸、手、太腿、足首の四カ所で縛られた京子は胸と手首を支柱として足の紐が引っぱられるにつれて足の方から次第にからだが出に浮んできた。体重の殆んどが胸に集って緊め

付けられ、そのために豊かな脂肪質の厚い胸が、そのまま横断されるのではないかと思われるほど痛む。

覚悟はしていても思わず「うーむ、い、いたい」と顔をしかめて悲鳴をあげる。その豊かなグラマーは、観客の方に後をむけて次第に次第に吊り上げられて行く。彼女は、早くも額に脂汗を流して歯を食いしばり耐えている。京子のからだは、水平に近く上げられ、腰で折れて腹を突き出した姿勢になっている

ため、何ら支えのない妊娠腹は、そのぼってりとした、膨らみを一層大きく突出させていた。

うつ伏せになった妊娠腹は、四つ這いになると観賞できるが、それらは較べものにならない程見事なポーズでの妊娠腹である。大きい豊かな膨らみは、このポーズが何んと云っても最高であろう。

縄目は遠慮なく肌を締め付け、もう息も絶え絶えで、お腹に力が入らず、ずっしりと腹部の重みを感じられる。身悶えするほど縄目は食い込む。「死ぬ思いで、もうこうなれば……」京子は苦痛に顔をしかめながら「このまま逆吊りにして下さい」と切れ切れの声を云った。

今度は男の方が驚いた。
「本当にいいのですか」
「ええ」

思いもよらぬ京子の言葉に、男は京子の上半身を肩でかつぐ様にして抱くと先ず胸の紐をとき手首の紐も解き放つと徐々に彼女の上半身を下におろして行った。それと同時に、もう一人の観客は脚の紐を引っぱり彼女のからだを上吊り上げていった。全身の血液が急に頭の方に逆流してくる様に感じ気が遠く

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。
一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。
一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。
一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。
一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

なりそうである。それ以上に大きなお腹の内容が胸の方に下って来て胸を圧迫するので呼吸が苦しくなる。

完全に男の手が、京子のからだから放れると、足首と太腿で吊り下がった六〇キロの豊満な妊婦の逆吊りが実現した。観客は、もう呆然として観ていたが、我れに返るとシャッターの音がしきりになるのであった。

豊満な乳房は重心を移しかえて肩の方に垂れて、ピンと突き出した美しい砲弾型を描き均整がとれ、丸い妊娠腹も胎児や内臓の胸の方への移動で完全な球形を描いて逆立ちした中央部でそびえていた。全身の血が逆流し胸が圧迫されて気が遠くなるのを感じる。

「降して、早く……」

逆吊りの危険は熟知していた観客は、なごり惜しいが、これだけの美しい妊婦を殺してしまつては大変なので急いで床に寝かせた。京子のからだはグッタリとなって全身の力を抜いて死んだように横たわる。丁度妊婦の死骸は、この様なものであると思われた。仰向けにされ全身の血の気を失い、やや右脚を立てて正体もなくグッタリ横臥し、妊娠腹だけが誇らし気に、その偉大な腹部をそびえさせて堂々たる球状をなして豊大な姿を見せて

いた。

「見事だったな、勇敢な女だな、臨月妊婦の逆吊りなんて、二度と見られるものではないよ……」

「これ程の見物は……。妖しいばかりの美しさだった」

観客は口々に賞めたたえた。

京子の疲労がなおると、再び観客の好奇心な眼、その手に肉体はゆだねられ、観客の思うがまま命ぜられることに従わねばならなかった。

舞台中央にベッドと着物、それから巻尺および骨盤計が運ばれた。京子は即席の産婦人科医による妊娠診断を受けさせられることになった。

京子は舞台の隅でパンティをはき着物を着た。

その間にマダムは、また京子の妊娠診断を希望する者をつのつた。男の禿げた六十位の好色な男がマダムによって指名され舞台上に上って来た。彼は用意の診察衣を着るとベッドの脇の回転椅子に胸をそらせて、どっしりと座った。

後のスクリーンに診察の順序と、その項目が貼り出されるのを横目で見ながら云った。

「では診察しますから、どうぞ」

京子は大きなお腹を突き出して男の前に立つて

「どうぞ、よろしくお願いします」

「ここで、お腹を見易いように帯をゆるめてベッドに横になって下さい」

京子は帯を解き、大きな妊娠腹の上下に巻きつけていた細紐もとると、さすがに着物の間からのぞく肌を見られるのは羞しいのか前をきちんと合わせた。

「さあ、そこに横になって下さい」

楽しみながら云った。

京子は、仰向けに横臥すると着物をきちっと合わせて男の手が、からだに触れるのを待った。

「先ず、最初はオッパイから見せてもらおうか」といいながら、着物の襟をつかんで大きく開くと、乳腺の良く発育した豊満な乳房があらわれる。

「女は、オッパイが出なければ駄目だから調べておこうね」

その豊かに盛り上った、乳房を大きくつまみ、その充実した弾性を楽しみ手を滑らせる。と親指と示指の間に乳首をはさんで圧迫した。粘りの強い乳汁が乳首の上に丸い玉をつ

くる。

「次はお腹を見ようね、あらあら、大きく膨れたものだね」

京子は太腿のところで着物を合わせて全身が裸になるのを防ぎ胸から腹にかけて大きく露出していた。裸の妊婦よりも、着物の間から盛り上って見える膨隆した妊娠腹は、動物的感情より人間の女の腹を強く感じさせ、今迄とは異った感じを味わせるものがあつた。乳房のすぐ下から小山のように球形に膨れ上

△お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の斡旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交歓は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いいたします。

○如何なる用件に拘らず、電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固く御断り致します。発行所に対するご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上、阿倍野局私書箱第十四号天星社宛お願い致します。面談又は電話連絡の必要のある方には、編集部から電話連絡の方法或は面会の日時場所な

ったお腹は、普通妊婦に認められる下腹部の妊娠線もみられず、京子のお腹の妊娠前の豊満さと弾力ある柔軟性を意味していた。腹の真ん中で隆起した臍から正中線に暗褐色の黒線が白い肌に見られる。お腹の上に屈み込んで右の耳を腹に押し当てた。胎児の心音を聞いたのであろう「子供は元気なもんだよ」と云った。

そのあと、用意の巻尺を手にとると京子のお腹を測りだした。

どお知らせ致します。勝手に直接訪問されたり電話されることは、固くお断りいたします。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼ご相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の許すかぎりつとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。

○分譲品に関するお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さい。尚未着などのご照会は、ご注文の月日、金額、品名をお書き願います。調査の上折返し御返事いたします。

○原稿のご送付（読者通信を含む）は第五種便（半分を開封にするか、封の中央一カ所をとめる開封便）を利用下さると、五十瓦につき十円にて送れます。但し封筒に第五種郵便と捺印又はペン書き願います。

先ず腰の下に手をまわして巻尺を入れるとお臍の位置で腹囲を測った。九三・二センチと観客に知らせるように大声で発表する。

恥骨から臍まで、下腹部の曲線にそって測る。二一・七センチ、普通の場合は十七センチ前後ということであるから京子のお臍は高い位置にあることになる。臍は高い位置ほど文明人だと云うことであり、解説づきで知らされる。恥骨から臍を測って子宮底まで三六・三センチの長さがあり、お臍が下腹部の膨らみのために、より高くなっている様子がうかがわれる。

今度は骨盤計を手にした男は、初めて手にする産科器具でもあり頬の筋肉をゆるめて両手で開閉してもてあそびながら「着物を脱いで立って」と命令した。

腰骨と腰骨の間二七センチ、太腿の最も外側にとび出た大転子間二九センチと次々と充分に判らぬまま図に近いところを測っては発表していった。

これで妊婦六名による妊娠腹鑑賞会は幕を閉じることになった。

京子は、客席に向って一礼をすると、大きいお腹を重たく垂れ白い豊かな臀部を振り、ゆっくりと歩いて行った。

— 耕土散筆 —

「落穂拾い」

(其の三)

と人 ひさ久 ふじ藤 やす保



11 刺青美女△玉取姫▽賛美

△忽然と現世に出現した謎の妖婦(?) 山原清子▽△豊満な肉体の背中一面に青と朱の妖艶な模様を画いて——▽「刺青美女」山原清子さんを迎えて△奇ク▽刺青界は今、近年にない充実ぶりを見せている。それにしても、

うら若い女性であり乍ら、これ程完璧な凄美優麗な刺青は正に「現代の驚異」と言ったら表現が大袈裟すぎるだろうか。何れにしても「驚嘆」に価する。このマニアの気持は、辻村さんが△めぐり合った謎の女▽と題して、初対面の感想を、昂奮覚めやらぬ筆致で書き続ておられる(39年12月号・カメラ・ハント)△観音様の化身もかくやと思わせる神秘と猟奇△辻村さんのこの言葉で、若々しい美肌を彩る妖しい魅力も想像出来る。

——女性!若く美しく豊かな肉体。そして見事壮美の刺青。確かに其処には言い尽せぬ「魔的要素」を秘め湛えている。

昭和前期(日中戦争前)私の子供の頃は刺青をした人を時々見掛けたものである。それでも、もう既に、「全身模様」というのは少く、年老いた、一見して遊び人といった風貌の人を二、三観たに留る。子供心に気味悪く何故か近より難い威圧を覚えたものだ。

若い(私と同年輩)ちんぴらやくざには、腕に文字を彫り込んでいる者が多かったが、その内の何人かは、徴兵検査↓軍隊という強圧的精神訓育に屈して、刺青除去の醜いヒキツリを残していたのを良く覚えている。女性の刺青も見た記憶はある。併し、二十世紀後

- 11 刺青美女賛美
- 12 刺青雑感△補足恋の文身他▽
- 13 露出スタイル
- 14 見せ度い見て欲しい
- 15 露出の心理

半のこの世代に、遠い昔の、十一代將軍家齊治下の絢爛と咲き誇る大江戸文化を背景にして、頽廃美に彩られた粋な芸者衆、その一人が突然に今——。兎に角、「驚き」の一語に尽きる。

若し今「現今変人奇人」を教え上げるなら先ず其の中の一点を飾り彩るのに相応しいといえる山原清子さん。（変人奇人の中には、辻村さんや芳野さんを始め奇クの常連の方々も入りそうだ）

残念乍ら現在までの処、私自身の勝手な理由から彼女の背中の「玉取姫」に拝顔の榮に浴していない。元来が女性の柔肌の汚れなき美しさを至上と崇める私だが、完成された刺青は、それが女性の肌であるという絶対的な条件から、その「魔と魅」混沌とする二つの偉力と神秘性にずるずると惹かれて行こうとする。山原さんがアブニストであることが、尚更に私を惹きつけ、何やら知らぬ刺戟性を……と予測期待する為でもあるのか——。

刺青をした女性……それは現代人のイメージに「女賊」Vとして写る。

美貌・肉体的魅力、加えて非情冷酷・惨忍な性。総て「女賊」Vの必須条件で、山原さんの愛らしいまろやかな容貌の中に、この凄味

が望見出来るのだが……（堪忍して下さい）

発刊年月を忘れたが、あまとりあ誌（或は人間探求）の旧刊に、故伊藤晴雨画伯の麗筆による「女賊捕縛」Vという、木版多色刷りの綴込附録があり三年程前まで私は珍重していたものだ（やむを得ぬ事情で友人に進呈。今になると惜しい。読者の中でお持ちの方もあろうと思う。葉書より稍小型、確か八葉だったと記憶している）

女賊に対する月明し。女対男の凄美極まる華麗絵巻きで、捕縄が絡まり組みつ解れつ組打ち。

自然に帯は解け着物は乱れ、やがて男に組伏せられて長い斗争も終る頃は、二人共下帯と腰布さえ露わで——。『これは飽迄芸術的観点から発表されたもので、従って至極純粋な意図で読者に提供するものである』確か誌社のこの様な註釈が加えてあったと覚えているが、わざわざそれを断わらなければならぬ程、その絵巻各場面は「女賊捕縛」V以上に

「男女の斗争」を髣髴させた。公刊誌上に発表するには余りにも大胆、正しく伊藤画伯の筆の冴えと感嘆して見続けたものだが、今、私はその女賊に山原さんを当て嵌めて見たいと思う。赤い布から露れていた白い肌は極め

て煽情的だったが、刺青美女と入れ替えて見たなら更に凄まじい妖氣が加わる。伊藤画伯の筆の跡を追いつ、その俣の姿を縄捌きの鮮やかな男（S）と共に再現することは「奇ク」Vの一つの義務の様な気がするし、恐らくS派垂涎フオトになる筈だ。

同じ状況でM派向き。女賊に絡めたつもりで捕縄が、何時の間にやら男（M）に巻きつき、完全な「女上位」で呻吟する。こういう場面を想起するのは、私だけでなくきっと沢山いらっしゃると思う。

刺青！それを熟視して見ると、彫師の腕にもよるのだろうが、日本女性の所謂餅肌、肌理細かくしっとり潤いのある「続の様な肌」こそ相応しく、図柄模様がその俣生きた肌に融け込んでいる。神秘性妖美は、その生ある肌、微妙な呼吸を続ける蠢動によってこそ始めて精気を発するのであろう。

山原清子さんの益々健やかであられんことを祈って止まない——。

12 刺青雑感

序でのことに、少し刺青史を探ぐって見よう。歴史の中でその言葉、意味の出て来るのは「魏志倭人伝」正確に謂うと、三国史・魏

書卷三・東夷伝・倭人の項Vが最初だろう。

男子Ⅱ無大小、皆黥面文身（中略）今倭水人、好沈没捕魚蛤、文身亦以厭大魚水禽、後稍以為飾、諸国文身各異、或左或右、或大或小、尊卑有差Ⅱ男子は大小となく皆黥面文身す（中略）今倭の水人、好んで沈没して魚蛤を捕え文身し亦以って大魚水禽を厭う。後稍以て飾りと為す。諸国の文身各々異り、左に右に、大に小に、尊卑差有りⅡ

大昔のわれわれの先祖（？）が皆、顔や身に刺青していたらしいのには驚くが、これは生活の為、（魚獲中大魚等の難を避ける）であり、見分を判別する為であり、そして又、飾装の為だったらしい（註・最近の学説では中国人の聞き書きによる誤りⅡ倭国を南方だとした固定観念の為Ⅱだともいわれているが）

中国側の記述をまたなくとも、古代日本に関する古文書中にそのいくつかを見出すことが出来る。併し、正直に言って私達はその様な刺青には興味はない。特に史上一時期は刑罰用に「入墨」として用いられており、それ等は私達の描くイメージとは程遠いもので、従って、刺青としてなら矢張り「江戸」その爛熟期に実態を求めねばならない。

最も盛んだったのは、文化・文政・天保時

代（註・一八〇四年～一八四三年）で刺青専門の図案家もあり、有名な画家、浮世絵師もその下絵を書いたらしく、歌川国芳・芳艷・芳虎らの名が知られているし、葛飾北斎もその実績があると伝えられている。（小説・飛竜無双ではドモの又平も下絵を書く）

今、当時を基準にしてその前後から少々探求を試みよう。先ず身の何処が一番多いか？

片腕（右又は左）が一番多い。次が両腕。

三位背中。以下、腹・胸・太腿・臀・性器・腋の下・顴・耳・頭という順になっている。全身悉くというのもあったらしい。

刺青の動機・理由というのいろいろあって面白いが、普通は、粹人・好奇・虚栄・意地といった対外感情によるものが多く、従って△展覧症V的要素を含んでいる。が、尚一層突込んで見ると、その根源にはアブノーマルな陰火が秘んでいるといえそう。大きな刺青は半年から三年余もかかるという（山原さんも）非常な苦業で余程意地っ張りでないとなえ切れない。男の場合、その意地を貫ぬくことで、仲間や其の他に一種の畏怖を与え見せることによって、威嚇的效果もあった様だが、女の場合は、毒婦等と後世に評せられる者以外は、一積の露出症的展示物、従って、

粹で鉄火で、という外貌とは別な、性的内部心理（被虐感情）が大いに作用していたものと思われる。良く施術中の女性の望見記として語り伝えられているものの中に『眉をひそめ、唇を噛んで苦痛に耐える若い女の表情は……』などというのが多いのも、苦痛は苦痛として、被虐↓愉悦↓恍惚といった内的感情の芽生えと、推移を物語っている様に思われる。

其の他の動機・理由を調べて見ると、

1、装飾目的Ⅱ前記の普通の場合に相当するが次第に珍奇を尊重する様になって来る。

2、記念の為Ⅱ巷間にいう△紋散らしのお玉Vなどはその好例。忘れない為のものなのだが、同じ意味でも怨情となると無気味だ。

3、迷信からⅡこれはやくざ渡世人に多かったらしい。花札やサイコロなど。又、宗教的なものも珍らしくなく甚だしいのは「卒塔婆」や「墓石」等を背負って濶歩していたらしい。

天保年間に好き者が集まつて度々「彫もの競べ」が行われたという記録があり、その中の奇抜模様の実態も今に伝わっているが、冗文かと思うので省略する。唯、矢張り、性器などの秘匿部位（痛覚も最大とか）のものが

珍重せられたことを書き添えておく。又八螭のお政Vの様に（螭が全身を巻き締めて、長い舌が淫猥だったという）蛇などを巻き締めて、その全軀が完全だと悶死する為、わざと胴の一部に疵をつけた、ということも訊いている。

最近見たもので、NET・TV八南海の冒険V（関西地方月曜8・00から）に変わった刺青が出て来た。タヒチ島近くの活火山のある島（名前失念）の土人だが、首下から胴、背も腹も太い筋輪が、びっしりとつまっている、見た目に異妖感があり、ところどころ輪が切れているので、丁度、易占に於ける算木を連想したもののだが、図柄としては、珍らしい。

何れにしても八刺青Vというものは、相手が女性ということになれば尚更、芳香の漂う様な雪白の素肌を、切尖鋭い細針を束ねたものでチクチクと挟り乍ら、色を入れ、華美な模様を画いて行くのだから、施術者は、言い知れぬサジチックな快感を満喫出来るだろうし、苦痛に耐え呻吟する女性は、甚だマゾヒスチックな感情の中で、目を細めていたのではないだろうか。（附記・此の項目に関しては山原さんの刺青については八サロン楽我

記40年1月号Vで辻村さんが故事来歴を詳細に発表していられます。又刺青に関してはベテラン研究家八目黒半平さんV方もお出ですので一筆）

八補足V恋の刺青

刺青の発達史というのを覗いて見たら

1、原始民族的装身用（例）現存するアイヌ婦人。

2、刑罰的標識（例）「刑罰図譜」に詳記あり。

3、情事的恋の刺青（例）遊女の心中立など、と記してある。其処で蛇足乍ら③について。

遊里に於ける遊女の恋愛は、幾分現代人に理解し難い部分もあるが、一般的に「身は売っても情は売らぬ」という観念思想の許で、特殊な形態があったらしく、その表現方法として所謂「心中立」のための刺青が盛んに行われたという。恋の刺青は即ち愛の記念であり永久不変を誓ったもので、それには皮下に色素の沈殿する刺青が、生涯消えないので男女間に流行したらしい。尤も多情な者はいろいろと方法手段を変えて誤間かし、かえって愛情の墮落となるのだが――。

兎に角、恋の刺青は貞操誓約の一方法として存在し、女性は往々、愛情の確定感と性的快感に喜悅した。といわれることから推察すると、矢張りマゾヒスチックな感覚が、情事の実態と重なって、苦痛即愉悅、という特殊な感覚へ移行して行くものと思われる。

（附記・この項に関して、昭和の初めに、文身者の種別、文身の種類、部位等に関する研究発表があり、当時の医学雑誌に詳細掲載されたということです。ご存じの方は誌上発表なさったら如何でしょう。きっと皆さんに喜ばれるでしょうし八奇クVに相応しい資料になると思います）

八補足V巷説紋散らしのお玉

或る本（註・性医学研究会の書）に、刺青お玉を極端なM例としてあるので加筆する。『お玉は貧乏旗本の娘で、十才の時、お寺詣りの帰途ならず者に犯され、その為町家へ養女に格下げ。併し、水際立った美貌で男達に騒がれたが、兇状持ち、梅津の藤五郎に惚れ、藤五郎はお玉の左腕に、当時流行していた刺青を彫りつけた。その藤五郎の紋どころを針で刺す痛みがお玉の情念を煽り、苦痛の快感を忘れることが出来ず、生来の浮気性と

刺青を増やすことの二筋道で、男を点々とし、その度に男の紋を体に彫り込み、年々百二百と数が増し、遂に彫る個所がなくなり、内股から秘所、耳朶、足の裏、指の又に到るまで隅なく刺青で埋まり『紋散らしのお玉』と江戸中の大評判」

姦通の精神的、刺青の痛感覚、実質性的快感、この三者一体の所産だという事である。

13 露出スタイル

表題「露出スタイル」Vという言葉は、誠に響良く柔軟で、麗わしく、悩ましい感じを与える。尤も此の場合、男性にとって女性の……という但し書を附けねばならないが、これは人体構成上の男性の特権？だと、先ず女性がたにお断りしておいて——。併し、逆に思考するなら、そういう男の視覚的欲情点を、女性がたは巧みに利用することが出来るのだから、一応、需要と供給という根本原則から推定すると、長短相半ばする、と勝手な結論を出しておく。

さて、昨年は（39年）あの有名な「トップレス水着」Vに大騒ぎしたものだ、これに関して、芳野眉美さんが「とにかく、夏は楽しいね」という結びで、当時の有識層の言を

詳細に発表していらっしゃる。（註・39年12月号濡れにぞ濡れし・C）

読んで見ると、△露出症Vとか、△自己陶醉症Vとかいう言葉が随所に出て来る。

野末陳平「僕の知ってる……高校出たばかり……きれいだというと、ペロツと見せる……羞恥心より発表欲のほうが盛ん……いまだき見せない娘さんは（以下略）」芳野さんは「同感」と仰言っている。

淡路恵子「——ビキニがいいと思うのは、オヘソが出ているところよね（以下略）」芳野さん、同じく「同感」

兎に角、この辺り男性たるもの総て同感というより外適当な返事がない。発表欲のお盛んな若い女性大歓迎などといったら、とたんに「Hね！」と叱られるかも知れないが、私はこの一文を読んでいるだけで楽しくなる。

今年は、ビキニスタイルとセパレーツが大もてだったらしい。見ていると、いたいけな幼児？まで、上と下とに別れた二つの布（模様は極めて華やか）をこ着装なのだから、男たるもの見乍ら、アレアレと慨嘆せずにはいられまいが、次代、更に次代の若々しい女性が、幼少より既に△露出V欲に……などと不逞な思索を走らせると、これから先が楽しく

なってくる。何れにしても40年の夏季の海辺は美麗スタイルで賑々しく、大変目の保養をさせて戴いたと、女性がたに謹しんで謝意を表さねばならないだろう。

今年は又、家庭の茶の間でも素敵なビキニを鑑賞させて戴けた。八月四日のスターの広場（関西TV午後7・30）で東宝女優の中川ゆき。スタジオNO・1ダンサーズと竹部玲子のモダンバレエ・グループを背景に、テレビでは類のない大胆な恰好で「スイムを行こう」を歌い、踊り、且つ跳ねまわる。誠にお見事で可愛らしいオヘソと共に、あの素晴しく柔軟な肢態をクネクネ動かし精力的に踊り廻るのだから、目を皿の様にして画面を睨んでいた方も多い筈。彼女は元来踊りが達者、若鹿の様な肢態をビキニで飾り、あの独特のセクシアルな声で歌い、更に踊っている最中に、ずり落ちて来る肩紐を気にして、何度も何度も、たくし上げるというおまけまでついて——。今夏のテレビに於ける（露出スタイル）の随一といつても過言でない。スターの水着姿では同じ番組の、中山千夏のボリユーム溢れる若々しい勇姿？も又見逃せない。中川ゆきと並ぶと本当に対照的で、普段の着衣姿では感じるこの出来ぬ魅力がある。

又伝え聞くところでは、遠い伊国の海岸で某女優が超ビキニ姿でイタリアアツ子を驚嘆させたという。ただでさえ小ぢな布切れなのに、写真を見ると、その小布は最小必要部を残して、其処此処に「窓」が明けてある。ご本人は風通しが良くてご満悦らしいが、見る方にとっては悩まし過ぎる様だ。何故かというど動く度、歩く度に「空気窓」が動いて正にハチラリズムの極致！。女性がたのハ発表欲は益々旺盛で、次々と新手の男性悩殺スタイルを考案して下さる。大変嬉しいこと——である。

14 見せたい・見て欲しい

△露出症▽或は△展覧症▽などという。漢字ならいいが医学用語にすると舌を噛みそうな発音である。何れにしても「見せ度い」又は「見て欲しい」という心理で「症」という名のつかぬ世間の常識程度でなら女性の方が圧倒的に多い。ということは、世の識者、つまり男性の大半が、或る限度まで女性の「露出心理」を認めて、というより男性本来の視覚による快よさ、その味覚を楽しんでいると言っても過言でないだろう。

兎に角、概念的に、男性は「鑑賞」するこ

とを欲し、女性は「誇示」することによって他の面での対男性劣等感を補い、魅惑することとで優位に立とうとする。

露出（見て欲しい）という希望は、全女性の本能なのか？、そう思う程、最近の女性方の肌は衣類からはみ出している。現代は△露出が通俗化して来ていると言ったら叱られるだろうか。併し、日常生活の周囲を見廻しても、スポーツ、ダンス、海水浴、種々のモデル等々。その趣味的欲望は簡単に満たすことが出来るのだから、もう△露出▽は「異常」の部分から、抜け出しつつあると、思うのだが——。

又、意味は異なるが「見て欲しい」を趣味的に考察すると「装う」ことも同じ様な目的に通じているといえる。

「見て貰う」ことを職業にしている人は随分多い。極端な例だが所謂「実演」と称せられるものを仕事にしている方々には立派な、「症」なのであろうし、ストリップの踊り子さん達にも「症」的な心理願望をお持ちの方が多いと思う。実際に、男性側になって厚顔しく言わせて貰うなら、その様な△露出症▽的願望を持っていて戴けないと、大いに困るのだ（変な理屈だけど）それ程、女性方の露

出趣味は、われわれ男性を潤して呉れる要素がある。確かに見ていて楽しい。時には悩ましくぞくぞくして来て、男の心は忽ち高揚する。

舞台上で舞い又は踊り歌う方。エプロンステージを新作の衣裳で飾って歩き姿態美を誇示する方。カメラの前でポーズを取る方々。奇ク誌上のモデルさん方も勿論、総てこれ、「芸術」いや、それ以上に、社会生活の上で必要な慰安の一部として、極めて安全な方法で△露出的▽欲望をより高度に昇華させているのだと思う。

女性は本来美しいもの、であり、美しくなければならぬもので、男性は又、到って鑑賞欲が盛んであり、時には盗み見（窃視）したがるものだから、其処には完全な「需要と供給」の形態が成立する。従って女性方は、せいぜい悩殺ポーズで男性を魅了す可きだ（これも変な理屈）

扱て、通常△露出症▽という、極めて強いSEXの香りがする。このSEX的な部分を加味すると、SM的な露出とは幾分異った解答が出て来る様だ。

SMに於ける露出。私は自分の知る範囲から推して、M派程強い露出欲と良くいう。

確かに『見られて羞しい』という心は『羞しくてぞくぞくする』感じとなり『恥態を曝す』被虐味と続き、その為に『見られ度い、見て欲しい』という、心の流れに連結している。これはM派の男女に共通している。S派の露出ということになると殆どが女性ではないだろうか。彼女は「誇示」する。凄まじい嘲笑を浴びせる。男の卑しさを軽蔑する。現実に彼女の全姿は、△露出▽こそ最も相応しい。S的男性ではそういうことは少い。自分を見せるよりも相手（被虐者）を他に見せて更に羞しめることを願う。

ところがSEXが絡まって来ると大分様子が違って来るから妙だ。SEX的露出ということになると女性よりもむしろ男性の方が多いのではないか。しかも男の場合、大抵露出部位は限られている様だ。兎に角女性に「見せたがる」のだ。或る統計によると、その場合の「見た」女性の反応は70〜80%が赤面して顔をそむけるそうで、10%ずつ位の割合で無関心と凝視があるという（男の露出欲の対象は若い女性が殆ど。若し年令別にしたならこの%は随分変わるだろうと思う）。

この男性の心理は厳密にいうと、女性の内感情にあるという Penis 羨望を過大評価する

為らしいが、実際は殆どの女性が当惑するだけで、それ以上の感情は芽生えて来ない。最近では、こういう男女の性的な感情も理解されて「見せる」男性も少なくなった様だが、私の家は昔、商売をしていたので、女性と店番をしている時など、特に夜など、釣銭を受取り乍らブラブラさせているのを見て、子供心に、『おかしなオッサンや——』と言って叱られたことが度々ある。この様なのは今から思えば愛嬌者の内に入る。始末の悪いのは痴漢的な△露出▽だ。満員電車、映画館等、被害女性数は多く、これは殆どの場合、攻撃的、つまりS的な要素を含んでいて、従ってSEX面に於ける男性の△露出▽は大半がS派である。

これに対して女性の場合はSEX的な部分に関係なく（尤も性感帯としてなら女性は今身悉くということになる）女性の本質的な比率と同じにM的な場合が多い様だ。唯、男性と違うのは、△SEX露出▽が極めて少い点。というのも、男性の表徴物と違って誇示するに相応しい、尤も「美的観」のある部分をちやんと、ご自分で心得ていらっしゃる為の様だ。

15 露出の心理

△露出▽心理については著名学者や研究家の書物や文献に非常に多く出ており、解説も症例も数多いが、其中で定説的な一つの奇異を見出すことが出来る。一種の逆説的心理移行なのだ。

要するに△露出▽願望の深い女性程、必要以上に神経質な位肉体を包み隠すという。

事例は次の様な性格を強調している。

1、内気（内向型）で極度に羞恥心の強い女性。

2、厳格な道德教育を受け窮屈な作法を身につけ、到って行儀の良い女性。

3、意外だと思える程の貴婦人。（外国に多い）

4、その他、女性本来の露出欲は往々にして

「潜在性」となり易い。

右の様な女性の状態を實際面から拾うと、
 Ⅱ百合の花のように下俯向勝ちで、鈴蘭のように純潔可憐な女性でも、当人の自覚がない無意識面では、秘めた部分を人の目に曝したい切願が多いⅡ△高橋鉄氏の書物より▽
 Ⅱ一生懸命にスカートを引張って膝が出ない

様にしている。それは彼女の無意識の内の動作なの、内部にある露出願望と、抑圧との闘い、心の中の葛藤なのだ。△フロイド研究に関する高橋氏の書物より▽

△夫人は折目正しく夏でも身躰みを忘れぬ潔癖性。その夫人が神経症になった。夫人に必要なのは解放感。即ち帯紐を解くことであり、夜、灯りの下で脱ぐことであった。正しい礼儀作法が身についているので、夫も同化して行儀が良く、それが夫人には耐えられなかったのだ。△性科学研究所の書物より▽

△始終チラッと覗く膝小僧を気にし乍ら「始めは随分羞しかったが、近頃では裸体になると自分に酔う様な気持なんです」△終戦直後のメリー松原と高橋氏との会話▽等々。

SEX面での△露出▽に少し言及すると、一時期評判になった△性生活の技術と心理△桜桃社38年刊村田広雄著▽に適当な部分を見出すことが出来る。

性的性格を分類して△露出症的性格に適する——▽という個所(註・この本、同じ様な分類で所謂異常性愛を十二型にし、それぞれ

愛撫の方法を説いています)

『自分の性感帯、特にその中でSEXに近い部分、或はSEXを見せたり見せ乍らのSEX行為を行い、それにより快感を助長する性格』『相手の前で、裸体になり、全姿を展示し、更にはSEX及びその周辺を相手の眼前に突つけて、その実態を眺めさせぬと性感が充実しない』そして「場面」をも展覧させた」と希う人々。(前項の例にした「実演」の方々もこういう心理なのだと思うが、私の知る範囲では、この種のご夫婦が随分多く、友人関係でも可成り数えることが出来る。

この場合、夫婦(SEX)という面が表面に出て強調されている様だが、同じ意味、同じ状況でSMを論じることが出来る。それ程SとMの間では△露出▽ということが、その嗜好如何に拘わらず、大きな要素、一つのポイントとなつて存在するのは何人も認めるところだと思ふ。その「症」的心理の可否は論外として、SMイズムに於ては「曝け出す」という実態が不可欠なのである。

人間の社会では、文明度が進むのと比例して、人類の露出發表展示欲が旺盛になるといふ。これは誠に嬉しく、心楽しい話ではないか。

◎本誌二〇〇号突破記念◎ △原稿募集▽

▽内容△

一、特異なる風俗文献誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。
一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文献的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。
一、SMの他、フェテツシュ、切腹、女闘美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。
一、形式は創作、小説などのフィクションも結構です。自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を發揮できるものを、お選び下さい。

▽規定△

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。
一、作品はすべて未発表の自作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。
一、枚数は一切御自由です。
一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。
一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。
一、御送稿は開封第五種便(五〇グラム毎に十円)にてお願い致します。
一、〇以上の内容規定にて、奮て御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

△奇ク編集部▽

△K・K時評▽

論壇ヶ原に伏兵出現！

△舌戦 新しい展開か▽

谷崎・江戸川各先生追悼エッセイ載る

……新刊十一月号の展望……

橘行司子



今回は鳴物をやめて、じっくりと腰を落付けてペンを進めてみたい。

本音を吐くと、奇ク・十一月号の△時評▽はいままでになくむづかしく書きにくいのである。木戸川健氏が「小説・箕田京二（続）」の中で将棋のことにふれている。勝負事というものは、先をよむことが大切である。△時評▽も毎回続けて行くとすると（ああなればこうなる。こうなれば——）という対象物の手の内、流れがある程度判らないとオセツカいも出来ないし、公平な第三者的な作品評も

生れない。△時評▽の、手前勝手な書振りほど、みにくいものは無いようだ。

はじめて行司子。軍配をにぎり登場したのが△奇クは読者の声の花ざかり▽新刊五月号を見て、本誌40・6月号からである。すでにグラビヤ及フォトは無く、それでもサロン、"マニヤ通信"では（六月号）山本達雄氏が△奇ク万歳！▽最近の充実——と、はっきり本文充実の線を要望打ち出していた。行司子は、五・六月号を見て判断したことは△読む雑誌▽への起死回生の妙薬は、大方マニヤの

声がいよいよ上り、奇ク論壇が活発になることこそ第一と推察、期待した。これは雑誌というより人生百般にも通じる虎の巻だ。その意味で△時評▽も、どちらもガンバレ！と幻対神酒論争に拍車をかけた。小説であれ、S M研究文であれ『共通の広場』たる本誌上がねむっているようでは、投稿者も書く刺激が薄れる、創作もされなれないと思ったからだ。夜乃探郎氏の『実録・奇譚クラブ』の一節にもあるように「新しい第二の全盛期に入る」ための口火を切った夜乃、芳野、木戸川、黒淵

賀集子、辻村、保藤、葉山啓、各諸氏ETCの声（種々なる投稿）マニアの（おおむね全般の）「何か近頃活気が、あるようですね」

（読者通信）40・11月号△万田不仁V氏の好意的なうれしい便りが裏付けしているような風潮と思っていた。このような奇ク論壇の満開の花盛りをへて、いよいよ十二月号あたりからは、通刊二百号突破記念のお祭りさわぎ？と幻・神酒チャンバラ？もめでたく五分と五分で落着き（その足跡は意義あるものとして評価される。）

——より巾があり、いっそう深い新鋭なる論壇と告白、SM小説陣ETCが、本腰入れられ本文充実の第二段階に突入するのが衆目の見る処、期待と熱望と行司子は軍配のふさをしごき、足元の石をしっかりとふみしめたのだ——。

△ここに思わぬ伏兵（投稿）が眼についたVかつて、約一年に亘る「百花撩乱期」昭和三十六年度の△奇クは如何にあるべきかノVの論壇は「読者通信」に投じられた、△東京・小林孝V氏の小文からであった、例え小文であれ、雑感であれ、投稿は（声は）大事にしなければならぬ。

◎奇クサロン（十一月号）24頁・「雑感」山

本一章氏。

◎読者通信 △大阪・白浜律子V

△神戸・Y K生V

の以上三氏の声は、いままで（この二、三カ月）あまりきかれなかった投稿である。その是否は（判決）オセッカイ専門の行司子には介入できない。

ただ、各氏の声を適宜抜粋させて頂き△幻・神酒党の御意見、如何に？Vとするのみである。（幻・神酒党の手打式もそろそろされて今度は新しい課題の下に、選手交代と考えるたのだが）どうも△舌戦、伏兵あって意外な方向に展開されるのでは？Vと行司子、頭の痛い今回の△時評Vのペンさばきである。

◎山本一章氏△特定の読者や寄稿者だけのオナニの場にするとは公刊誌としては自殺だと思えます。論評や評論もその意味からはバックボーンを侵してはならないと思います（極論すればそれらはすべて『読者通信』欄で充分だし、簡単にすべきものです。）K誌の現状は残念ながら淋しい限りで……V

◎白浜律子氏△少しマニアの方の個人的な、（私信）とも云えるのが多過ぎたのではないでしょう？今月号は殊に誌面をいつも占めておられる方々の個人的な、それでいて、あ

まり実のない文が目立ったと存じますV

◎Y・K生△福田久文先生。キレイ事のみで済まさない先生の、粘膜質なペンの愛読者です。変な議論に拘泥されず、独自の境地を開いて下さい。どうも近頃は議論が多過ぎるようですV

△「谷崎潤一郎の作品と三者関係」或る真面目なたわごと・須渾朔氏と「江戸川乱歩」の影の世界・久我庄一氏の寄稿には心して脱帽。その追悼エッセイ、二作の労を、ねぎらうのみ——。

十月号までチャンと天をむいていた軍配が十一月号を手に取り、その誌上を小手をかざしてみても、予想もしない論壇ヶ原の彼方にポツリ、またポツリと伏兵あって番狂わせ。今回の△時評Vをどう書き、どうまとめべきか、とにかく、おおづかみに（粗雑であるが、御許しを——）ペンを走らせ、個々の作品にあまり触れるよううがないことを——スミマセン。

◇ 『編集後記』の中に△拙速主義Vという言葉があるが、新聞・週刊誌などと違って月刊誌

は名の通り月に一回発行。これは当然、印刷などの関係も考えて（二百頁余ともなると）原稿〆切をよほど早くしないと定期的には出せない。編集企図も先を見、投稿作品もストックを十分にカク保して置くことが必要視される。だから、夏に出る号に春頃書いた随筆や、もはや忘れかかった社会トピックの解説などが、さもホットな読物と云わんばかりの書きぶりで発表されている事がある。（どこかきがぬけているような編集）これは、無理もないことで、おそらく、一般大衆誌の小説懸賞募集などは半年位の発表までに期日があるのは普通だろうか――。

だがギリギリまで、〆切をのばしておけば（頁数も十分にあるので）新聞、週刊誌などとは違った充分に読み応えのある、味のある読物が、しかも新鮮なインクの香りとマッチして、読者はよめることになるようだ。須渾朔・久我庄一の二氏のエッセイは、その一例であろう。

『花と蛇』続・団鬼六氏の原稿が滑り込みセーフ。十一月号を彩ることが出来たのは編集部（の神技である。編集後記によると、九月五日に団氏の原稿入手と記されている。二十五日発売（発送は二十日前後）。

――以上△拙速主義▽について、少しく頁を取ったのは、編集部が、最近になって如何にバラエティある、ホットな記事を、読者の声をジカに反映させよう、奇ク論壇を活気あるものにしようという本腰を入れた事がある。うかがわれるからである。（制約下、精一杯の努力）得てして新しい世界に脱皮・過渡期には、西部劇に、例えてみれば、ピストルあり、リンチあり、（賛否両論やかましく）そこから開拓されて、汽車も走るようになる。

理由は、いくらでも付けることは、出来よう。ただし、日和見的な地上（誌上）からはしおれた、花より咲かず、実のある、美しい（ろまん）本文充実、活気ある（むしろそのために混乱しがちだが）所から咲きほころぶことは、出版界（奇ク）を意味するだけでなく、万国共通の真理だと考えられる。

奇クは、とおく昔に、思いを馳せば戦国時代。近代にては、あの日本の青年期、明治の夜明けに、ガイトウするでは、ないだろうか――。△夢のまた夢▽という言葉がいま流行っているようだが、△幻・神酒論争▽ETCの奇ク論壇も、裏付けされた出版と表現の自由がやってきた暁。だれかが見て△本文充実▽読む雑誌に脱皮したと決定打された時、

やはり久我氏の言葉ではないが、語り草に残るべき、派手な？、チャンバラ？だったであろうことは、衆目の見る所では、ないだろうか――。

◇

「K・K△SM▽入門ユーモア講座」開設について――一言。

ここまで、ペンを走らせてみて、ふと、あることに気付いた。奇クの読者の対象はマニアであることはたしかだが、読む、理解する判断する。ナルホドと拍手カッサイ。

受け取り方、つまり失礼ながらレベルの問題である。現在の奇クは、本文充実に、論壇の活発さをいっそう盛上げるために天才教育を実施？その高級なる天才達に思う存分に腕を振るわせ研究を自由自在にさせていられるようだが（奇クは超高級なる世界唯一の大人の新しい風俗文献誌）奇クSM大学に特別研究科は設けても、ユーモア？入門講座を設けなかった不手ぎわである。

だから△特定の読者や寄稿者だけのオナニの場にする▽うんぬんの山本氏の不満も出てくるのは当然であろうか――（ただし、オナニとは、相手の無い一人作業？を意味表現すること△この公開状の性質は単に、

個人的なものでなく、あくまで奇クの一般読者の一人として発言しましたので「中略」第三者のこれについての投稿で広く、奇ク論壇として発展Vという八月号・芳野眉美氏への公開状、夜乃探郎から発展して行った幻・神酒論争それに附ズイするETCのチャンバラ？はオナニーという表現キメ付け方は、的ハズレと考えられる。(山本氏がこれらの論争

ETCを暗に指したと推測して)

単なるオナニー的オシャベリに、貴重な頁をさいたとするならば、これは編集子の見識の問題である。「読者通信」は個人的なお便り交歓の場。論争、評論は公的な場で、それらをハッキリ区別、編集掲載される編集長をもっと信じるべきだろうか――。

(山本氏の発言は、「雑感」どころか、放言

か、それとも鋭い編集批判か、とにかく重要な問題をはらんでいることは、たしかなようである)

一つ、幻・神酒党合併講師によるSMムーモア？学校入門講座を設けられては――新しい超高級風俗文献誌に成長する奇クの今後には是非共必要ではなからうか。

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

大好評注文殺到

キャビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

日本女性拷問刑罰集

木馬責め

三枚一組 略号(もと)

後手高手小手に縛られた女囚が三角木馬に跨がされて、その痛さに髪ふり乱して泣き叫ぶ姿――。

海老責め

三枚一組 略号(もに)

両足の拇指はくの字にそり反って激しい苦痛と羞恥に悶えぬく凄絶な女囚の海老責め。

笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)

白州の粗砂に引き据えられた女囚は高手小手首縄に絞られて竹のささらで、肩口を叩かれる。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)

白紙で目かくしされた女死刑囚は土壇に仰向けに横たえられてい。白刃一閃、哀れ女囚の腹は。

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)

柔かい脛に算盤板のギザギザが喰い込むのに更に膝の上へ伊豆石をのせて非人が揺さぶる痛さ。

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)

白州の上の女囚がどす黒い捕縄で厳しく縛られ非人の手で竹の棒を縄目に捻じ込められて呻く。

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もぬ)

腰の乱れを必死に防ごうとする真白い足を八の字に開かせて足首に非情の縄をからませてゆく。

白洲に悶える

三枚一組 略号(もは)

均整のとれた見事な肢体と肌、殊にすらりと伸びた脛と素足をあらわに投げだして悶える女囚。

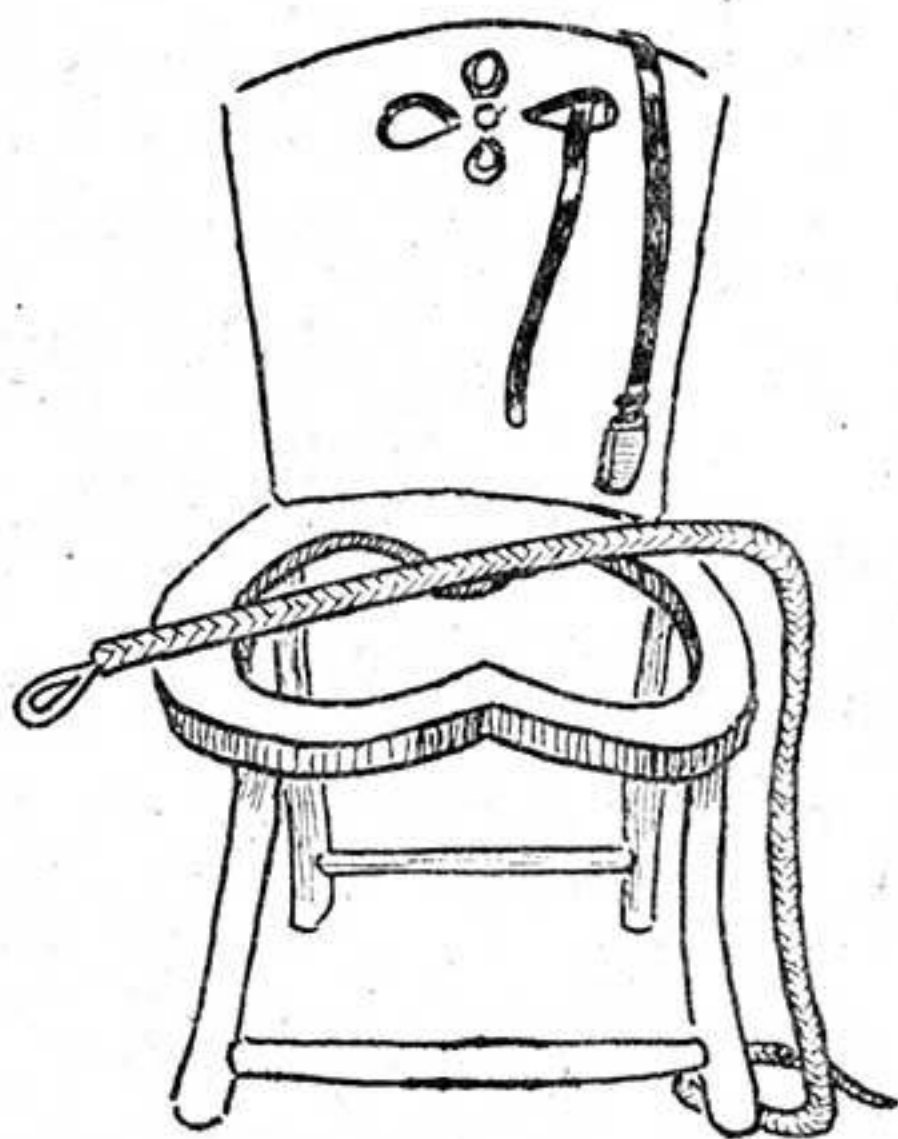
美貌で清潔感溢れる新人美木乃々子嬢の体当り演技と読者有志のセッ作成並に責役出演とによって完成された「日本女性拷問刑罰集スチール」は、発表以来、同好者の間で大変な評判を賜わりました。座右に置かれるスチールとしては是非一組、お求め下さい。

続

コンピエーヌのイヴェット看守

心痛たむ遍歴 〽第十五章そのかみのこと(十五)〽

西条操



「担当様。あたし、気分が悪いんですの。今朝から、何だかふらふらして……。休ませて下さいまし。お願い」

労役場へ追われる女囚人群の中で、一人が哀れっぽい声をあげた。ジョアンヌ看守長の瞳がキラリと光る。

「何だって!!何故、先刻看護婦さんの居る時に云わなかったんだい?薄野呂女だね」

「す、すみません」

「まさか、ズルけようと云うんじゃないまいね?」

きめつけながら女史はイヴェットに眼配せした。第三監房の三三二号、小柄で肌の綺麗な其の女囚は三十半ば、近寄るイヴェットをおずおずと見て、眼をすぐに伏せる。哀れっぽくうるんだ其の瞳には、物心地ついて此の方、虐げられて過ごした暮らしのために身についたズルさが潜んで居た。

「今日はムシユウダンベールは御休診だよ。ふん。馬鹿だねえ、明日にすりゃいいのに」すれっからの女囚が呟やく。調べて見ると、プルスは平常だが、少し熱がある様だっ

た。医務室へ連れて行くのは、少し様子を見てからでもいいだろう。何しろ女囚達と来たら、ダンベール医師に診て貰いたくて堪まらない連中が殆んどだ。其のためになら、我れと我が身を傷つけかねない程なのだ。

「そうかい。イヴェットがそう云うんなら、いいだろう。房で休ませておやり」

看守長女史はイヴェットの顔を立て、三三二号は何度も礼を繰返えしつつ、殊勝げに監房へ入って行った。

「あの子、何てったつけ?イヴェットか。ま

だ亭主はないんだろねえ、新米だけに、矢張りチョロコイこと」

ぞろぞろと追われる女囚の群の中で、三、

四人が流し目をイヴェットにくれつつ、唇を動かさずに囁き合う。

「ふ、ふ、ふ。あいつ、御飯だって綺麗に平らげてんのよ。うまくやりやがったわ。あの新米、亭主はなかるうけどさ、男は知ってるね。スカートの腰のあたり、なかなかイカす線だわ」

「ちくしょう、年がら年中、こんな不恰好な服ばかり、着せやがって、靴下穿きたいわねえ」

年期の入ったジャンヌが微かな唇の動きを見付けたが、面倒なのか舌打ちしただけだ。鉄階段の昇り口あたりで誰かが呟いた。

「あたい、どんなに辛らくても、嘘ついてまズルけるつもりはないわあ」

素つとぼけた調子の声はかなり大きく、どこか舌足らずだ。怒鳴りつけようとしたジャンヌが唇を『へ』の字に曲げて懸命に笑いをこらえ、あたりの女囚達も吹き出した。それも道理、そう言った女囚は若い三〇七号、偽証罪をも併科されて三年の女なのだから、嘘をつかないつもりが聞いて呆される。此の三

〇七号は少し足りない女なのだが、裁判の鑑定では、スレスレの正常と云うことになったのだ。

今日此の頃の舎内労役は既製服作り。中にはそうでもないのが居るが、先ず大抵の女囚が最も身を入れてやる仕事だ。安物ながらも華やかな色彩の婦人服を眺めて若い女囚は溜息をつき、幼児服を縫う子持ち女囚は鼻を吸る。一日みっちり九時間。額に汗して根すりへらした挙句に与えられる報酬は、一週間でやっと、コーヒー一杯の代金位のものだろうか。

手を休める女囚にはきびしい視線が飛び、横眼で窓外を見やる女囚は鋭い叱り声を浴びる。故意に仕事を鈍らせる者は髪を掴まれてゆすぶられ、眼に余まる者は立たされて容赦ないビンタを喰わねばならない。作業中に交話した者には嵌口具だ。看守長が常々云って居る通り、どんなことをしても規則は遵守させねばならないし、其のための設備や道具は完備して居る。大体の話が、ここへ来る様な女には、規則を守ると云う根性を強制的に叩き込む必要がある。今日も、午前中交話した女囚が四名居て、午後の労役場へ入るや否や、嵌口具の革具を固くかけて、締めつけら

れ、時々小鼻をふくらませては切なげに喘いで居た。

出獄者を告げる『家路』のメロディが流れて来て、女囚達の胸を掻きむしった。努めて平気を装おう女囚の顔にさえ、やる方ない悲哀の色が漂よう。考え様によっては残酷な行事だ。

「お前達には関係ないの。何をそんなにショげてるのよ？ キリキリ働くんだよッ」

ときめつけて居るのは、珍らしく巡視勤務に精を出すベルディーヌ看守だ。

「年季が明けりゃ、いやでも出してやるわ。早く出して頂きたいのなら、まじめに服役することよ」

ベルディーヌにビシビシ云われて、女囚達は眼を伏せた。唇を噛む者も居る。自由を奪われた身の思いが、今更の様に胸を噛むのだろう。

「あなた、なかなか交替なさらないのね。新米の中は大変ですのねえ」

中年の女囚がミシンの手の合間にチラと眼をあげて、巡視して回わるイヴェットに阿ねる様に云った。

「お黙りなさいッ」

イヴェットは凶星をさされて叱りつけた。

又物や針を使う労役の監視は、全く芯が疲れる。一時間交替が内規なのだが、新任間もないイヴェットは巡視勤務をずっと続けたままだった。強制される訳ではないのだが、そうなるってしまうのだ。嵌口具にそっと指をかけていじった女囚が居たが、イヴェットは見逃してやった。錠をかけてあるのだし、どうも出来る筈はない。首を振った、嵌口具の女囚は、低く呻いて諦らめた。小高い監視席には保安課直通の警報器がある。その警報器を手許にデスクで頬杖をつく婦人看守はマリー、階段を昇ってやって来たジャンヌを見て欠伸を抑えた。交替して席につきながら、ジャンヌがイヴェットを手招きした。

「イヴェット。ちょっと下へ降りなさい。あんな、駄目よ。もっとしっかりして頂戴」

ジャンヌは囁いて、きびしい眼でイヴェットを見た。降りて見ると、囚衣を剥がれた三二二号が後手錠をかまされて、広間で立ちうなだれて居た。独り監房のベッドに、横たわり、つい不埒な振舞に耽って居たのを、キャスリーヌに発見されたのだ。ジョアンヌ女史は午後のお茶とかで不在、補佐のフォンティヌがイヴェットを叱った。

「そりゃね少しは熱があることは認めるわ。」

けど、性根を見抜かなくちゃ駄目よ」

「はい。これから注意します」

「ベルトをかけて背を丸くさせておやり。労役忌避は大袈裟だから、まあ勘弁してやるとして、欺した罰に張り倒して、やったらいいわよ」

セックスに関しては、行為それ自体は勿論のこと、それに関連する話題や仕草等もきつい禁制の婦人刑務所だ。基本的な人権だとか何だかだと、他のことは口やかましい行刑監察委員や世間だが、食欲と並んで強烈な其の本能の抑圧には、案外口を出さない。ここへ来る様な女性には、其の苦痛も特にひどいことだろうが、それだけ云わば、いい修練になると云う訳だ。

少し腹を立てたイヴェットに、こっぴどくビンタされて、三二二号は大袈裟にヒュー云った。

「泣いたって駄目よ。折角休養させて上げようと思ったのに、どうして、そんなことをするのッ。ベルトよ」

「か、かんにんして下さいまし。もう決して致しません。ですからベルトはかけないで」哀願して身を揉む三二二号の眼前で、イヴェットはベルトの縦バンドの中央金具に黒く

重い手錠を結合して、見せつけてやった。そんなイヴェットをキャスリーヌがニヤニヤして眺める。そのキャスリーヌも手伝って、先ず腰のくびれに分厚い革ベルトをまきつけ、後ろで締めた。細目の縦ベルトを前から後ろへ回わし潜らせて締め上げてやると、三二二号は激しく身悶えして切ながる。結合された手錠が両腿の間で揺れて鳴り、二個の舟型鋼鉄環の位置が僅かに調節された。

「じっと出来ないのッ」

キャスリーヌが嗷鳴りつけ、後手錠を掴んでねじった。

「さあ、自分で嵌めるといいわ」

外した手錠を革ホルダーに納めながらキャスリーヌが命じて咽喉で笑い、イヴェットは女囚の後ろ腰でベルトの錠金具をガチッと鳴らした。女囚は手首を撫でながら、のろのろと両手を前に垂れ、膝を左右に開き、短く吊られた手錠を自分の両手にギリギリとかけ、嚙り上げて泣きじゃくった。

「もっと、きつくかけるのよ」

前に立ちはだかるキャスリーヌが、背を丸めた女囚の肩を見下ろして威丈高に命じる。

女囚は短い鎖を下の方でガチャつかせ、両膝を開いたまま腕をもだえ、自分の手錠を更

にきつく締めた。背後に、立つイヴェットにも、切なげに、動く両手の指先が見下ろされた。「ベルト」付属の手錠にはいろいろな型が使用される。入獄時に度胆抜くためのごつい旧式手錠や、看守達が携帯する普通の物も結合できるのは勿論だ。しかし、馬蹄鑲式の物は蓋が閉じてしまうと鍵が要るし、メッキしてある物は剥げる恐れがある。何しろ、両手をくわえて居ない時でもぶら下げさせておくのだ。それで、「ベルト」付属の手錠としては、メッキのない半環回転式の物が普通使用される。三三二号に今使用されたのもそれだ。そして、それは鑲が略々矩形になる様になって居て、かなりゆる目にかけても手首を回わせない仕掛になって居る。

両脚に両手首を挟み込んで立った三三二号は、情けなさそうに腰をよじった。そして、後方の舟型鑲を指先でまさぐる。しかし、手錠の鎖は短く手首は回わせないので、前方の舟型鑲には拇指の先が触れるか触れないかが精一杯と云う所。これでもう、此の女囚は膝を合わせることも出来ないし、落した肩や丸めた背を伸ばすことも出来ないのだ。

「さ、好きな様にしていよいよ。おいでッ」
突き飛ばされた三三二号は再び監房へ叩き

込まれた。ガニ股で歩む其の姿を見て、イヴェットは哀れに思いつつも笑ってしまったのだ。キャスリーヌは詰所へ戻ったが、イヴェットは第十一監房を覗いて見た。シモーヌとルーシーとミルドレーヌは規則通りに自分の寝台に腰を掛け、両手を膝に身じろぎもせず、こちらを向いてうなだれて居た。エドウィー・ジュはあわてて姿勢を正したらしい。イヴェットは、靴音を忍ばせて覗く意地悪さは未だない。

「一四七号ッ。おやめなさい」

鼻をほじくり続けるモニカをイヴェットは叱りつけた。自分の鼻を自分でいじるのが何故悪い、と云った顔で、モニカは口をとがらせ、不承々々に手をおろした。こんなのが一番カンに触れる。職務上嫌々ながら身につけて居る「人を縛る道具」を、出来るだけは使いたくないと思うイヴェットだったが、こんな一四七号みたいな小面憎い女囚は、ビンタの数発を喰わせて後手錠をかませておいてやりたい。

（せめて私達が見てる時だけでも、どうして素直に出来ないのかしら。捕縄かけて縛り上げてやりたい位だわ）

イヴェットは暫く覗みつけてやった末、ま

あまあと赦してやった。懲罰房からはクリスチーヌの唸り声と喚き声とが陰にこもって洩れ出て居たが、被懲罰女囚の人柄や成績によつては余り気にはならない様になって来たイヴェットだった。

女囚達にとっては無論のこと、監視者達の身にとつてもそれはそれなりに永い一日が漸く済んで、労役場から降りて来た女囚の群が広間に整列した。嫌が応でも強制される丸一日の苦役に、女囚達の顔には疲労が漂い、後手の両腕や肩や首を動かし、それでも今日の労役が終ったと云う気持ちからだろう、ホッとした安らぎの色が全身に浮ぶ。戻る所は鍵のかかった鉄格子の中、そして身動き一つすらがんに掬めの規則に拘束された一夜が待って居るだけなのだが、ともかく今日一日の刑は受け終えたのだ。

第十一監房の五名も引き出され、股手錠姿の三三二号も情けなさそうに背を丸めて立ち並んだ。一日といえども欠かされることのない身体捜検が初まるのだ。イヴェットは此の仕事が嫌だった。人格を持つ人間としては扱わないことにより、受刑囚の心身をコテンコテンに打ちのめす此の日課は、どんなに服役成績の良い女囚でも免れることは出来ない。

一日に一度は、自分の分際の程を骨の髄に思い知らされて、齒を喰いしばって哭くのだ。
（仕方ないわね、規則だもの。それに、万一の事故には代えられないわ）

イヴェットは軽く溜息を洩らして所定の位置についた。彼女の今日の担当は労役衣の検査、物入れと反対側の一面に立ったイヴェットは、整理番号を打った軽金属製ハンガーの群を点検した。

「身体搜検準備ッ」

フォンティヌが号令をかけると、全女囚が一斉に獄衣を脱ぎ初める。

「あんたも脱ぎたいかえ？」

ベルトに股間手錠姿で立ったままの三三二号を、近くの一人がからかいながら下ばきから脚を抜いた。全部の衣類を足許の床におき頭のネットも除って、其の上に載せ、革サンダルを足から外して脱ぐ。

「早くおしッ。毎日々々やってることだろ？ノロノロするんじゃないのッ」

はだして立って再び後手を組むのが遅れた数名に罵声が飛び、二、三人が張り倒されて裸身を揉んだ。特殊な生理状態にある数名も例外ではなく、恥かしそうに体から除って、床の囚衣の上にそっとおく。

「お前は、もういいんじゃないの？」

平然と見下ろしながらキャスリーヌが云い「い、いえ、もう一日だけお願いします。ほんとなのでございますから。はい」

中年の女囚が哀しいことを消え入りそうに哀願した。子供の三人も産み育てたのだろうか、其の女囚の乳房は垂れ下って居た。それは、女囚なら殆んどが泣きたい思いに駆られる数日間、部品の交換も証拠を調査された末のことなのだからみじめなものだ。用具を与えるのにも、意地悪な婦人看守は大声で具體的に云わせる。キャスリーヌなども若い癖に、気分によっては勿体をつけて、屈辱の想いに女囚の胸を搔きむいたりするのだ。衣類等を汚してもすればことで、舐めさせられんばかりにして浄めた末、済んでからヤキを入れられる。女性の身に課せられた業とも云える月一回の憂き目だ。それでもベルディーヌ看守あたりに云わせると

「その位のことは当り前よ。みじめで恥かしい思いをするのも刑のうちだわ」

と云うことになるし、ジャンヌ看守などは刑期中の中絶薬が、出来ないものか、とボヤク。早い話がベルトでもそうだが、懲罰を加えるにも、それを考慮に入れねばならないの

が面倒なのだ。イヴェットは、其の取扱いや処遇が甘過ぎると常に叱られて居た。

「今日の所は大目に見て上げるけど、明日からはモタモタおしでないよッ。槍が降ろうと火が降ろうと、毎日やることになってるんだからね。メソメソしたって何にもなりはしないよッ」

ルーシーがお尻をバシッと叩かれ、ミルドレーヌが頭を小突かれた。

「お前達はガクがあるんだから、ここがどう云う所なのか、自分達が、どうあるべきか、よく分ってるだろう。これッ、お前、何号だいう？」

「は、はい。三三二〇号です」

ルーシーが張り切った双丘をわななかせ、涙声で答える。今は中止されて居るが数年前までは、獄衣を脱いだ女囚達は右肘に番号札を結びつけることになって居た。或いは、又ぞろ復活されるかも知れない。

「ふん、三三〇号ッ。体を伸ばしてまっすぐに、チャンとお立ち。心配しなくても、窓からオス犬一匹だって覗いちゃいないよ」

ルーシーが一声囁り上げ、フォンティヌが号令をかけた。

「第一房。労役衣の格納ッ」

フォンティーンの声は、いつもながらキビキビと爽やかだ。第一監房の六名が衣類の一切合財を抱え上げ、素足に、床をピタピタ踏んで、イヴェットの方へやって来た。

「これ、お前、ここへおいで。後ろ向いて腰を曲げて」

広間の中央あたりに立ったベルディーヌが三三二号を呼び寄せて、真先に検査した。三三二号の労役衣は、既に午後からハンガーに吊られて居る。

「お、お願いでございます……」

「うるさいね。分ってるよ。少しでいいから解いてくれって、云うんだろ。駄目よ。お前は、今日はシャワー抜き。いいと云うまで周りを走っというで。ガタガタ云わないで静かに走るんだよ。それ」

ビシャリと、お尻を打たれた三三二号は

「か、かんにんして」

と一声泣いて、ぶざまな恰好で広間の周囲をヨチヨチ駆け初めた。ベルトがこたえららしく時々脚をゆるめ、大きく開いたままの膝と腿を悶えて腰をよじる。眺める女囚達がおかしそうに笑って居た。

イヴェットに監視されながら六名の女囚達は肌すり合って、労役衣と下着をハンガーに

掛け、革サンダルまでも吊り下げる。此のハンガーはなかなかよく考えられて居て、お仕着せの全部を格納するに過不足ない。

「三〇七号。それは何よ！もっとキチンとしなさいッ」

几帳面なイヴェットは叱ったが三〇七号はチョイチョイ納い方を間違える。少し足りないのだから無理もないが。女囚達はイヴェットの前でネットをひろげて見せ、再び両手を背に組んで広間へ去る。広間にはデスクが二つ、その各々に二名宛の検身担当看守がリストを片手に待って居た。次の六名が一列になってやって来、イヴェットはマスクを取り出して鼻口を掩った。女囚の一人が「ふん」と云った顔をして、イヴェットの制服を上から下まで横目で睨む。自分が裸なので、一しお口惜しいのでもあろう。広間のデスクのかたわらで行われて居る身体検検は、やられる身には泣きたい程だ。先ず大声で受刑番号と整理番号を唱える。ここでトチるとゴムホースの一発を覚悟せねばならない。制服制帽を一きわ入念に、着こなし、靴もピカピカに光らせ、化粧さえした、同性の検査者の正面に立ち、両脚を大きくひろげ両腕を高々と挙げ、そのままの姿で更に検査をお願いするのだ。

「身体検検を、お願い致します」

二つのデスクで、みじめな声が相次いで聞えた。

「誰が歩いていいと云ったのッ。走るのよ」

唖鳴られた三三二号がベソをかいて頭を振り立て、背を丸めた腰の真下の脚の間あたりで金具と鎖を鳴りきしませ、苦しく切なげな呻きをあげた。

「ま、まだ走るんですの？も、もう……」

「口ごたえするのかい。走れと云う命令なのよ。まだ初まったばかりよ、身検は」

きめつけたキャスリーヌは、ルーシーとミルドレーヌに近寄った。

「お作法をよく見習うことね。頭いいんだから一度見りゃ大丈夫だろうけど。これは、ケジメをつけるためにやってる厳肅な儀式なんだからね、トチるとひどい目に逢うわよ」

「は、はい」

二人の新入り女囚は絶え入る様に答えた。今はまだいいが、寒くなると此の儀式はこたえる。前後三、四十分はタップリかかる此の裸祭は、如何に凍てつく厳冬の日でも行われるのだ。高いコンクリート塀の外に暮らす人々は、その塀の内部で、こんなことが毎日行われて居るとは想像もしないだろう。

体の前側を上から下まで鋭い視線が撫で、顎がしゃくられると今度は後ろ側だ。腰を曲げて上体を倒し、膝を伸ばしたまま両手を床につく。みじめな身検の中でも最も情けない一刻だ。両脚の間から逆様に見える婦人看守の姿が、胸にこたえて恨めしくも憎いと感じられることだろう。けれども、その顔つきが検査者のカンに触ったりすれば、そのまま放置されて、次の被検女囚の捜検が初まって仕舞う。定められた、姿勢を崩すことはおろか、身動き一つしてもゴムホースが肌に鳴るのだ。

イヴェットの前でネットをひろげて検査を受け乍ら、女囚の一人が声もなく溜息をついた。広間のどまん中では、既にゴムホースの数発が鈍く鳴り、後回しにされた女囚が二人、四つ這いの腰を高く挙げたまま床を見詰めて居る。それを横眼で見やって吐息を洩らす女囚は女盛りの三十過ぎ、比較的従順で成績も良い女だ。鼻をシュクツと吸って、訴える様なまなざしでイヴェットをチラと見上げた。毎日のことながら、矢張り悲しいのだ。しかし、イヴェットにはどうしてやる力もない。巨大な怪物である国家権力、それを維持する法の一分野の行刑組織、そして其の現場

機関たる刑務所、彼女はその末端機関に属する下級刑務官の一員に過ぎないのだ。無言の悲哀を訴えた女囚はネットを指先に引掛けて持ち、すべすべと白い肩を落して素足に床を踏み、裸踊りの順番を待つ列の後尾に加わって並んだ。

「よし」

声が掛ると、大抵の女囚は四つ這いの姿勢から弾かれた様に立ち上がる。中にはヤケ気味の薄笑いを浮べて、のそのそするものも居るが、立ち上がった女囚は両腕を背に回わし、すぐ跪まずかねばならない。膝でにじって検査者のすぐ前に行き、膝立ちの姿勢で顔を上げ、口を大きく開く。鼻腔と口腔の検査が済めば、横を向いて耳の中を調べて貰うのだ。要領良く首を動かさないと、ビンタが飛び頭を小突き倒されてしまう。最後に髪を乱暴に引掻き回され、顎でしゃくられ、うなずいて頂ければ、どうやらお終いと、云うことになる。

屈辱に満ちた身体捜検を漸く受け終えた女囚が、膝立ちの腰を、そのまま踵に落としてキチンと坐り、後手のまま上体を倒して床に額をすりつけた。

「ありがとうございました。お手数をとらせ

ました」

みじめな言葉を、床すれすれの唇から振り絞る。ここで胸詰まらせて口ごもったりすれば、九じんの功を一きに欠くことになり兼ねない。隣のデスクの横で女囚の髪を掻き回わして居たベルディーヌ看守が、いきなり頬を撲りつけた。そして、デスクに腰を乗せ、見下ろしてきめつける。

「どうも其の鼻のあたりが気に喰わないわ。初めからやり直しよッ」

床に額すりつけてのお礼の言葉を受けたジャンヌ看守が、威丈高なベルディーヌの姿を横眼で眺め、苦笑いしながら床の頭を靴先で蹴った。乱れた髪を振り振り、膝でにじって退る女囚に入れ替わって、次の裸身が大の字にジャンヌの前に立つ。

「やり直しと云ってるのよ。何よ、その顔は!! 文句あるのッ」

ベルディーヌが呶鳴りつけ、もう一人の婦人看守がゴムホースで肩を打ち据えた。

「ヒーッ。は、はい……す、すみません」

よろよろと立ち上がった女囚は二、三步退がり、脚をひろげて両腕を頭上に挙げかけ、打たれた肩の痛みに低く呻いた。

「三三〇号。身体捜検お願い致します」

「駄目ッ。すぐにやり直すのが嫌なら、四つ這って待ってる？」

と、ベルディーヌは四つ這いの二名を顎で示す。

「あッ、すみません。三二〇号、身体搜検をもう一度初めから受けさせて頂きとうございます。御面倒ですが、お願い致します」

「そう云えばいいの。此の忙しい時に手間かけるんじゃないよッ」

ベルディーヌは、冷く云って顎をしゃくった。

ゴムホースを片手に歩き回るキャスリーヌ看守が、四つ這いで晒し者の女囚の尻をいきなり撲りつけた。僅かな身悶えを発見したのだ。喘ぎ呻いて走り続ける三二二号の脚がもつれ、悲鳴と共に肩と乳房が床を打った。

「騒がしいわね。お前は静かに走ってりゃいいの。お立ちッ」

キャスリーヌのゴムホースが背にはじけ、ベルト手錠の女囚はヒュー泣きつつ、死物狂いに身をもがいた。股手錠にされて倒れると、起き上がるのに一苦労だ。締め上げられたベルトが更に喰い込み、腰がよじれ悶え、金具と革具が鳴りきしみ、三二二号はやっと立ってク、ク、クと泣いた。膝を思い切り開

いて腰を落し、切なげに両腕を動かし悶えて下の方でガチガチ音を立てる。喰い入る鋼鉄環二個に仮借なく責め苛なまれて、一旦停めた腿は再び動かせない程の苦痛なのだ。

「さ、走るのよッ。命令に逆らう気？」

キャスリーヌのゴムホースと言葉に脅やかされて、三二二号は腰をゆすった。呻き声と共に腿を踏み出しつつ、脂汗に光る顔で支配者の同性を恨めしげに見やる。錠に鍵のかかった此の非情な縛しめは、どうもがいた所で弛みもする筈がなく苦痛が増すばかり、そして如何に哀願した所で解いて貰える訳がないのだ。背を更に丸めた三二二号は一步毎に泣き呻き、それでも命令のままに従おうと、死物狂いに、脚を動かした。腕を懸命に突張って、少しでも喰い込みを軽くしようとしながら、乳房をぷりぷり振り動かす。硬い革具がガツキと押え喰い入る腰骨の痛みに、今度は肘を悶えて腰ベルトを突く。腰が次第に低く落ちて、お世辞にも走って居るとは云えない姿、最初は面白そうに嘲笑って居たあばずれ女囚達も、眉をひそめて顔をそむけた。漸く一回まわった所で

「キャスリーヌ。三二二号を、立たせておやり」

静かに広間を眺めて居たフォンティーヌ看守が声をかけた。

「はい。三二二号ッ。お慈悲が出たわよ。ガマとアヒルのあいこのみたいなお粗末は、もういいって。そこで立っといで」

バタリと停って立ちすくんだ三二二号は、感謝の色を浮べて、フォンティーヌの方を見た。

「あ、ありがとうございます。フォンティーヌ様」

喘ぎながらそう云った三二二号は、肩の届く範囲で顔の脂汗を押し拭いた。ジョアンヌ女史だったら、とてもじゃないがトコトンまで走らせるだろう。検身を受け終えた女囚達は、六名宛一まとめになってシャワーを浴びる。シャワーの時間は三分間、温度は勿論室温で、唯十二月から三月までは二十度の微温湯が出ることになっては居る。どんなに冷たかろうとも三分間は浴びねばならないし、どんなにもっと洗いたかろうともそれ以上は駄目だ。何しろ規則なのだから。

但し、土曜日には、髪を洗わせて貰えるので、少しは長い。石鹸だけは先ず充分に使わせて貰え、ネットを丸めて体をこする。しかし、後ろ向くのはおろか、横向きになるのも

禁制で、体の前面を監視の視線に晒したまま洗わねばならないのだ。カーテンなどがある筈もなく、流し場の外へ水をはね散らしたりすれば叱りつけられる。隠匿防止の意味もあって、用便もそこで垂れ流すのだ。「シャワー、おわりッ」

号令と共に六名の女囚は流し場の端まで前進し、ネットを何度も絞って体を拭う。

「履き物は吊ったのね。労役衣の納い方をよく見ておくのよ。明日からお前達もここへ納うんだから」

イヴェットは第十一監房の五名を前に、特にルーシーとミルドレーヌの二人に云って聞かせた。先刻から、見せつけられて居る光景に、ルーシーとミルドレーヌは半ば茫然と打ちひしがれ、顔面は蒼白にひきつれて時々わななき、ネットを差し出してひろげる両手もわなわなと震えて居た。

担当の仕事を終えたイヴェットは、今度は物入れの前に立った。それを待って居たシャワー監視のマリ看守が号令をかける。既に二組目のシャワーも終わろうとする頃で、流し場の一隅にかたまって居た最初の組の六名が、濡れた肌を光らせながら急いでやって来た。走ることは厳禁だが、早くタオルで拭きたい

のだ。物入れから取り出したタオルで肌をこすりつつ、女囚達の体にホツとした色が漂った。これで、恥かしくも忌々しい日課も一応終わったのだ。

「あの中で何を云ってるの？ずい分と喚いてるじゃない？」

イヴェットは近寄って来たキャスリーヌに訊ねた。先刻から、意味の聞き取れない絶叫が、懲罰房から洩れ出て断続して居るのだ。「あれ？身検を受けさせてくれって喚いてるのよ、フ、フ、フ」

キャスリーヌは笑い、ゴムホースをビュウと振った。拭き終えた女囚達はタオルを惜しそうに戻し納め、房内衣一式を胸に抱えて所定の位置に並び、床において両手を背に回わす。タオルの一枚位はせめて身につけて居たいだろうし、早く房内衣をまといたくもある。けれども、タオルは土曜日にシャワー場で使わせて貰える外は持出し禁止だし、房内衣を着るのは全員が揃うまで待たねばならないのだ。

ベルディーヌ看守の前で、ルーシーが世にも情けない恰好をした。それを眺めて次の順番を待つミルドレーヌが、我を忘れて両手で顔を掩った。後ろ手を解けば当然反則だ。靴

音を鳴したキャスリーヌが無慈悲な一撃を腿のあたりに加え、のけぞったミルドレーヌが歯を喰い縛って両手を背に回わす。みじめさと無念さに、其の胸は、煮えて居ることだろう。彫りの深い知的な顔が歪み、苦痛をこらえて固く閉じた喉が激しくしばたき、大粒の涙がまつげに溢れた。ルーシーは堪えかねた想いを時々全身にほとばしらせて嗚咽し、屈辱の作法をトチリ通しだったが、流石にベルディーヌ看守も最初のことでもあるし、平手でピシャリと叩く位のことです許してやって居た。

「あ、ありがとう……ごさい……ました……」

「額が床から、離れてるよッ。馬鹿。薄ノロッ」

「は、はい」

膝を折った脚を床に悶えて、ルーシーは懸命に額をすりつけるのだった。

屠所へ曳かれる羊の様な風情でミルドレーヌが立ちすくみ、全身を染めて大の字、いや『火』の字の姿勢を取った。そして声途切らせつつ身体捜検を願う上げる。

「ふん。もっとひろげるんだよッ」

自然と近づいてすばまる両膝頭のわななきを見下ろしつつ、ベルディーヌが事もなげに

叱った。

「もっと、もっと。もっとだよッ。それで調べられると思ってるの？今まで、多勢の患：いや、女達にそんな恰好をさせて商売してた癖に、何よ」

油を売って居ても、ベルディーヌは流石に古株で、新人り女囚達のデータをいつのまにか掴んで居る。

「いくら恥かしがたって、口惜しがたって、それが通る世界じゃないの、ここは。自分のしたことを、考えて見るがいいよ。お前は、人並みに恥かしいなんて云える分際じゃないんだよッ。これッ又、膝をすぼめるッ。肘も曲がってるよ。もって挙げて」

背後から眺めて居たキャスリーヌが、又もゴムホースを尻にはじかせ、悲鳴が低く洩れた。

「何よ、眼なんかつぶったりしてて。私なんかおかしくって見ちゃ居れないと云う訳かい？それならそれでいいよ」

女囚ミルドレーヌは、恐怖のまなこを必死に見開いた。

「いいかい。お前が娑婆じゃ何様だったか知らないけど、私達此のバツジをつけてる者から見りや、受刑囚の一匹に過ぎないんだよ。」

よく覚えておおき。お前はね、懲役人。分ってるの！監獄が嫌なら悪いことしなきゃいいわ。文句があるなら、勤め上げてから、お云い」

ベルディーヌ婦人看守は襟のバツジを誇らかに拵指で示しつつ、途方もない罵詈雑言で女囚の心をぶちのめす。社会の上層に属して居た者には、同囚者からはもとより、刑務官達からも風当たりが概して強い。娑婆からの庇護の手も、届くには相当強力なものでなければならぬ此の非情の世界、しかも婦人官憲は買収するのに骨が折れると云う訳でもある。

それに、此の三八五号囚ミルドレーヌは五年の長期刑、最初に先ずドヤしつけて打ちのめしておいてやった方が、本人のためにも後々いいと云う次第だ。あばずれ女囚達は、そんなルーシーやミルドレーヌのさまを、さも小気味よげに眺めて居た。

広間の要所要所には婦人看守達が制服姿もキリリと立ってあたりを睥睨し、それに数倍する女囚の群が恰かも飼ひ馴らされた白い獣の様にしおしおと、少くとも表面だけは従順と屈伏を示して、支配者達の眼を窺いながら整然と動く。

(仕方ないことだけど、でも、どんなにか情

けない気持がすることかしら)

毎日見馴れた光景ながら、イヴェットは時々そう思うのだった。検身を受けるルーシーとミルドレーヌの風情の哀れさに、イヴェットの胸は微かに痛む。

(その中に馴れて来れば、そんなでもなくなるわ。でも、ちょっと可哀想ね)

眉ひそめて見やるルーシーの肢体が、いつの間にかミシュリーヌ奥様のそれになり、イヴェットは暗然と息を呑んだ。コモ湖畔の典雅なお邸、週一回の香水風呂に入るミシュリーヌの体を、イヴェットは常々洗って差し上げたものだ。イヴェットの喉に残るミシュリーヌ奥様の肢体は、あそこに這いつくばるルーシーよりも若々しい姿なのだった。

(ミシュリーヌ奥様が、あんなことさせられるの、とても見て居れないわ。ああ、おいたわしいミシュリーヌ様。考えるだけで、もう堪まらない。神様、どうか執行猶予にしてあげて下さいまし。私の命をお縮め下さってもよろしゅうございます。お願い)

女囚達の監視も上の空で、イヴェットはひたすらに祈るのだった。

「房内衣着用ッ」

フォンテーヌの爽やかな号令の声に、イ

ヴェットはハッと我に返った。再び掛かる号令に、囚人の群はいそいそと食卓に就く。規則とは云え可哀想に、三三二号は房内衣もまとなないまま、ベルトに股手錠姿で食事だ。前の方に坐わるルーシーが切なげに何か哀願した。

「何だって？先刻、シャワーの時に済ませるものよ。薄ノロだねえ。我慢おし」

嘲けられたルーシーは唇を噛んで身を震わせた。彼女の身にすれば、とても恥かしくてシャワーの時には到底出来なかったことなのだろう。

「あの新入り娘、ずっと室に居た癖にさ、何と云う馬鹿正直な女だこと」

用便時刻を守ったルーシーを、後ろの方で誰かが嘲けり、

「ま、こちらとは育ちが違うんだから仕方なからうよね」

もう一人が囁やき答えた。三三二号は、まともに腰掛けられる筈もなく、僅かに乗せた尻や腰を、絶えず動かし悶え、泣きべそ掻いて、皿やパンを舌で追う。隣りの女囚が暫く眺めては口許へ引き寄せてやって居た。下の方でガチッと縛しめを鳴らせた三三二号が、喘いで腰を浮かせつつ、パンを漸くくわえた

「ちゃんと坐つといで。又、走らせて欲しいの？」

近寄ったキャスリーヌが、ビンタを鳴らした。三三二号のひそやかな楽しみを発見したのも、此のキャスリーヌ看守だ。股手錠をもがく女囚は、眼前で見下ろす制服の娘を怨めしげに見上げたが、忽ちまづげを伏せて、皿のシチューに唇を寄せた。何だかだと哀れっぽい仕草を大袈裟に示しつつも、三三二号はそれでも器用に全部平らげ、コーヒーマで啜り込み、口の周りを舌で、舐めたりして居た。手を使わずに食事するのも何度目かのことで、はたで心配してやることもなく馴れたものだ。

「あんた、うまくやったと思ってたけど、まづかったわねえ」

隣りの女囚が囁いて、ネットなしで乱れ放題の髪を掻き上げてやる。

「ちよっとバンドをしごいてよ。腰骨が痛くて堪まらないわ」

「ああ、ここらね。いつもなら、きつく掛けやがるものねえ。ほんと、怨々しい道具だこと」

両隣りの女囚も経験者、三三二号の腰バンドの分厚い革を、腰骨あたりの下端だけ指で

しごいてやった。

重屏禁のクリスチーヌに、鉄扉の下方からパンと水が差し入れられた。マリー看守がスイッチをひねって視察窓から覗き込む。

「出してよう。お願いだから出して……」

クリスチーヌの喚きが、ハッキリと洩れ出した。

「あーら。今日、入れて貰ったばかりじゃないの？初日からそんなことじゃ、千秋楽まで舞台が勤まるかしら」

「だって、苦しくて、おそろしくてもう……」
重々しい鎖の音と共に、重屏禁の女囚は必死に訴える。

「苦しいのはアツタリマエだわ。それが嫌なら反則しなきゃいいの」

「あたし、何も反則なんかしてませんわ。ああ、苦しい。肩がもげそう……」

「おんや。抗弁したわね。理由なしに懲罰受けていると云うのね？官吏侮辱もいいとこだわ。覚悟はいいのね？」

「あ、あっ、そ、そんなこと……そりや、出戻って来たりして、後悔してますわ。又ここで暮らすのかと思って、ウンザリしてますの。それなのに……」

「それなのに何さ？大体ね、懲役喰う様なことをするのがいけないの。罪を犯してからウ

ダウダ云ったって駄目よ。曳かれ者の小唄、ごまめの歯ぎしりね。ま、好きな様にしていから、ゆっくり反省おし。暴れたきゃ暴れていいのよ」

マリー看守は壁のスイッチを消した。

「あつ、かんにん。助けてえ！ 気が狂って死んじまうわ。ほんと、死にそうに苦しいのよう」

「フ、フ、フ。死にたきゃ死ねばいいわ。誰も何とも思やしないことよ。」

視察孔の鉄蓋がガチッと閉じ、最後の一声が洩れた。

「こ、ころす気なのね。人殺し！ 鬼、鬼だわ、ちくしょう。自分が一ぺん入って見るという……」

ジョアンヌ看守長女史の太い眉がビクリと動いた。これで、クリスチーヌの重屏禁は二日延びたことだろう。

夕食後には、食卓での休憩時間はない。当番囚の後片付けが済むや、一きわ凜然とした号令がかかる。

「入房準備ッ」

女囚達は一斉に立って腕を背に、それぞれの監房の前に立並んだ。革サンダルも取上げられてはだし、整理番号順に一列縦隊に整列

して次の号令を待つ。鉄格子戸は開いたまま、だが、勝手に入ることも許されず、並ぶ順番を間違えてもすれば蹴り倒される。何しろ、鉄の規律のタガは、一瞬たりとも弛められることはなく、厳しい秩序の維持は刑執行のポイントなのだ。整列の仕方や姿勢の悪い連中が、張り倒されてヒーヒー云い鉄とコンクリートの監房を眼前にする女囚の群に観念の色が浮び、ややあつて号令が飛んだ。

「入房ッ」

女囚達は素足に床を冷く踏んで、次々と鉄格子を潜って入る。腕を背に握り合った肩を力なく落し、打ちうなだれて自ら檻に入る其の姿には、番号布を縫いつけた獄衣の背のあたり、やる方もない悲哀が切なく滲み出て居た。（丸一日、朝から晩まで苦しい労役をさせられて、そして檻の中へ入れられて仕舞うのね。味気ないこと。罪人とは云いながら、哀れなものねえ）

イヴェットは、眺めやりながら思うのだった。しかし、それが刑罰と云うものなのだ。罪に服する女囚達に、人並みの楽しみなどが与えられる道理もない。

監房の寝台は、奥が整理番号の一番、最も手前が六番だ。漸く監房内に戻って見た所、

女囚達の身から、規則の鉄タガが解かれた訳ではない。各寝台の横の床に、手前から奥まで、少しずつずらせてマークが打ってある。

女囚達は其のマークに素足を乗せ、鉄格子に向いて自分の寝台に腰をかけ、両手を膝の上にキチンとおいた。監房の前に立てば、六名の女囚達の体が鉄格子越しに一目で見通せると云う仕掛だ。

「休憩ッ」

号令と共に女囚達はホッと体をゆるめた。

三十分間の夜の休憩時間、立つことも横になることも勿論許されはしないが、腰掛けた位置のままなら少しは楽にしていし、何より嬉しいことには大ぴらに交話出来る。

第三監房で、三二二号が切なげに呻いて喘いだ。

「辛らいかえ？」

後ろの女囚が声をかけた。

「お前さん、要領が悪いからだよ。キャスリーヌの阿魔ッ子とベルディーヌの奴とは特に気をつけなきゃ」

「そうだよ。あの二人は眼が早いからねえ」「けどさ、いつも云うとおりだけど、そんな縛り方を発明しやがったのは、どこのどいつかしら。ツラをひんむいてやりたいよ、ほん

とに」

ボヤいたのは一番前の女囚だ。

「ま、男じゃないことは確かだね。殿方に相手にもされなくてクサった痩せぎす女だよ、きつと」

「あら、でも男にだって掛けるそうよ。うちのひとがこぼしてたわ」

「そうだってねえ。気の毒なことをするもんだよね。鎖がY字形になってるんだって」

「あーあ、男が恋しいわねえ。どんなのだったいいわ、今キュツと抱いてくれたら、そのまま死んだっていいわあ」

「えらく又、殊勝なこと。あたしは矢張り何だよ、こう云う風に、遅しくなくちゃね。」

ま、おメンの方は、此の際ぜいたく云わないわ」

「へ、へん、だ。あんた、亭主に逃げられたんだろ。口だけは利いた風なこと云ってるけど、しっかりおしよ。どんな亭主だったか知らないけどさ」

「何よ、あんなヘナヘナ男。なあに、出たら凄いのを見付けろさ」

「その前に、ベッドの丈夫なのを三個ばかり注文しときよ」

声の高くなった第三監房にイヴェットが靴

を鳴らせ、女囚達は肩すくめて黙った。こんな話題は禁制なのだ。

「担当さん、お願い。せめて手だけ解いて下さいましな」

哀願して、腰をもだえる三二二号を見やっ
て、イヴェットは無言で立ち去った。

「あの新米は、わりかし筋の通ったこと、し
かない様ね、その中どうなるか分ったもん
じゃないけど」

「でもさ、詰所に近い房は損だよ。面白い
話一つも出来やしない」

女囚達は再び話し合う。

「向うの端あたりの房だったらなあ。見張り
を立てときや好きなことが出来るよ」

「そりやそうと、今日の『直入』の二人は上
玉じゃないの。気を失わなかったのが不思議
な位だね」

「ベルディーヌの奴がシメてたわね。いい気
味。胸がスツとしたわ」

「ここへブチ込まれりや、王妃様も女中もあ
るものか。その点、ベルディーヌは癪にさわ
るけどスカッとしてるよ。娑婆の手が伸びて
来ると、ジャンヌあたりは怪しいけどね」

「ま、あたし達は裸一貫、奴等とサシで真剣
勝負するしかないさ」

女囚も古顔になると、婦人看守達の性格や
動静等を、かなり突込んで知る様になるもの
だ。

第十一監房では、モニカだけがぶつぶつ云
い続けて居た。今日の移監が余程気に喰わな
いらしい。

「お前さん。そんな大声出してるや嵌口臭カ
マされてしまふよ」

鉄格子から三番目のエドウィージュがたし
なめる。

「何さ、くつわなんか平チャラだわ。おばあ
ちゃんも案外弱気なのね。見損なっちゃった
わ」

モニカが振り向いて意気込んだ。

「ま、新しいうちはしおらしくしていた方が
いいんだよ。好きこのんで詰らない目に逢う
こともないじゃないか」

エドウィージュは年長者らしい思慮を示し
た。エドウィージュの後にはシモーヌ、そし
てミドレーヌにルーシーと並ぶ。

「びっくりなさったでしょう？」

シモーヌが背後の二人にポツリと云った。

「ええ」

ミルドレーヌが鼻を吸る。

「いろいろと聞いては居ましたけど、とても

そんなことじゃありませんのねえ。何んだかだと言いますけど、矢張り監獄は監獄なんですのね。こんなにされて五年間も、と思うと私もう……」

ミドレーヌはオロオロと顔を掩った。

「あら、仮出獄がありますし、何かで恩赦と云うこともありますわ。刑期一杯ってことはよくよくのことだと、云う話じゃありません？」

ルーシーが、これも涙声で慰さめつつ訊ねた。

「そうだいいんですけど。私、八年なの。

未だ一年も経ってませんのよ」

シモーヌが呟いて涙をこらえた。

「ほんとにお気の毒ですわ。で、お体の調子は今如何？」

ミドレーヌがいたわる。

「治療して差し上げることは勿論できませんし、それに私、もう……資格を剥奪されていますし……。でも、助言位はして差上げられますわ。変だったら、おっしゃって下さいましね」

「ありがとうございます」

丁寧な礼を云ったシモーヌは、そのまま膝に突伏して嗚咽を初めた。愛児の姿を想い慕

って居るのだ。

「何をメソメソ泣いているのッ」

回わって来た夜の当直に機嫌の悪いベルデイーヌが、呶鳴って鉄格子を叩いた。

「す、すみません」

涙を押し拭ったシモーヌは、それでも暫くは肩で嗚咽して居た。

「あのひと、ほんとに血も涙もないのね」

立ち去るベルデイーヌの背を見やって、ミドレーヌが唇を噛んだ。

「いえ、私が悪いんですわ。囚人なんですから、悲しくても我慢しなくちゃ……」

シモーヌは健気にそう云ってつけ加えた。

「あの、このこと、私が知ってることは何でもお教えしますわ。お訊ねになって下さいね。とても規則が沢山あって、私だって未だよく覚えてないんですけど。でも、知らなかったじゃ許して貰えませんか」

「ええ、お願いよ」

「助かりますわ」

ルーシーとミドレーヌは、救われた様に嬉しげに云ったのだった。

「休憩終りッ」

号令と共に、忽ち婦人看守が見回わって、交話をやめたか、姿勢を正したか、と調べ上

げる。監舎内に静寂が訪ずれ、巡視の靴音が或いは忍びやかに或いは高らかに、予断を許さぬ不規則さと頻度で鳴り続け、時々は詰所から笑い声が洩れて、鉄格子の中の女囚達の胸を搔きむしった。

静かになると懲罰房の呻きが監舎内隅々にまで届いて、聞く者の胸を締め上げた。重屏禁を喰った女囚が穴ぐらの中で如何に騒ごうとも大抵は一顧だにされず放置される。恐怖と苦悶の絶叫も、全身全霊をこめての哀願の言葉も、陰にこもって意味の分らぬ呻吟となつて、覚えある女囚は思い返して戦慄し、未経験の女囚は想像して、身の毛をよだ立たせた。被懲罰女囚が喚けば喚く程、他の者への効果があると云う訳だ。

夜の点呼は八時。この点呼が又、堪まらない儀式だ。

「点呼準備ッ」

号令と共に三、四名の婦人看守が通路に散って監視する。女囚達は鉄格子のすぐ内側の床に、脚を折って、横一列に坐らねばならぬ。三米弱の幅に六名が坐ると、後ろ手の肘がぶつかり合う程の窮屈さだ。殊に第三監房では、膝を閉じることの出来ない三三二二号がベソを搔いて坐りづらそうにモゾモゾして居

た。第十一監房は、五名なのでゆっくり坐れる。床に膝を折るエドウィージュを見て、シモーヌが溜息を洩らして脚を折り、ミルドレーヌとルーシーも打ちしおれて做った。

「背をまっすぐ伸ばすのよ。顔をあげてッ」
ベルデイーヌが鉄格子の外からルーシーとミルドレーヌを叱り飛ばす。

「不平たらしいツラでもそもそしていると、今日一日の刑を、受けたことにして頂けないよ」

モニカも呶鳴りつけられた。床の冷たさ硬さに喘いだルーシーが、獄衣の短い裾を脛に敷き込もうと無意識に身をよじる。

「コラッ。動くんじゃないのッ。もうお前はおべやスタイルを気にしなくてもいいんだよ。それで充分エレガントなポーズなんだから」

叱られ嘲けられたルーシーは、まっげを震わせて身を硬張らせた。

今夜の点呼はジョアンヌ女史自らが、キャスリーヌを従えて行った。きつい顔を更に引締めた女史は白手袋に威儀を正し、各監房の鉄格子の中央外側二米に、胸張って次々と立ち、威圧する様なきびしさで床の女囚達をずいといと見渡す。女囚達は膝を合わせ背を延ばし

て身動き一つ許されない。支配者の顔を見上げでもすれば不遜な態度ときめけられるし、さりとて眼を伏せれば、態度が悪いと叱られる。何しろ、点呼は重大な行事なのだ。ゆっくりと全監房を巡視した看守長女史は、はち切れそうなスカートの腰をゆすりゆすり、再び第一監房の前に戻った。大抵は向うの端の房から点呼を初めて、逆に戻って来て終わりと云うことになるのだが、今日新たに向う端となった第十一監房には新入りばかりだと云う配慮なのだろう。従うキャスリーヌがあわてて、持ったリストを重ね替えて居た。

豊かにくびれた顎が重々しくうなずくと、キャスリーヌが呶鳴った。

「第一監房。点呼はじめッ」

身じろぎ一つせずに居た床の女囚六名が、一斉に体を前に倒して床に額をすりつける。ネットに包まれた金髪やブルネットが鉄格子の根元すれすれだ。規則通りに、左手に手首を掴まれた右手の指先が、赤縞灰色の獄衣の後ろ腰六つの上で微かに悶える。其の鉄格子の内側を小気味よげに眺めたキャスリーヌが再び呶鳴った。

「今夜は一番からよッ。申告ッ」

右端の女囚がサッと上体を起して唇を舐め

諦め切った大声で叫んだ。

「三〇一号囚ッ。第一監房一番。特別衛生法違反、詐欺罪、脅喝罪。懲役三年の刑に服しておりますッ。受刑番号三〇一号でございます」

特別衛生法違反とは、つまり売春罪のことだ。それに詐欺、脅喝と来れば、先ず情夫と組んで美人局でもやったのだろう。それにしても三年とは、かなり悪質の常習犯だったに違いない。毎朝毎夜のことだからスラスラと申告し終えた三〇一号囚は、そのまま上体を倒して再び額をすりつけた。そして、冷たい床すれすれの唇を動かして神妙に叫ぶ。

「本日の刑を執行して頂き、ほんとにありがとうございました。お蔭様で、罪の償いの一日を送らせて頂くことが出来ました。ありがとうございますッ」

毎日のこととて左程にはもう感じて居ないのだろうが、それでも後ろ腰に乗せた手が切なげにわなないて居た。

それにしても、これだけの屈辱に満ち満ちたセリフを、詰まらず哭かずシャアシャアとしゃべれるまでには、みじめさに胸燃えて泣き崩れんばかりの何日かが、あったことだろう。そして又、云わされる言葉通り理屈を云

うならば、夜は刑執行を受けなくてもいいのか、と云うことにもなるのだが、そんな屁理屈をこねて見た所で仕方がない。要するに、受刑囚の心身を屈辱の想いに、ドップリと漬け、其の自尊心を一片残らず抉り取り、分際の程を骨の髄にまでトコトン叩き込んでやるのが狙いなのだ。

「三〇一号囚」

看守長の声を頭上に浴びた女囚は

「は、はいッ」と答えてビクリと震えた。

「髪の毛がなっていないよ。もっとキチンと包むんだよッ」

キャスリーヌが鞭音を鳴らして鉄格子に寄り、床のプラチナ・ブロンズを蹴る。

「分ったの？此の髪の毛のことよ」

「は、はい。申し訳ございません。気をつけます。お赦し下さいまし」

「なんなら、もっと短く切って上げようか」

「お、お赦し下さいまし」

三〇一号は肩と腰を床に悶えて哀願した。

罪を犯す様な女性には躰けが肝心だ。囚われの姿は姿なりに身だしなみをきびしくしてやるのも、慈悲と云うものかも知れない。それに、キャスリーヌにかかると、ほんとに容赦なく切り取って仕舞いかねないのだ。頭上を

立ち去る靴音を聞いて、三〇一号はホッと肩を落した。

ジョアンヌ女史がうなずくと、キャスリーヌがリストをチェックし

「次ッ」と呶鳴る。隣りの三〇二号囚が身を起して喚き出し、三〇一号は勿論額をすりつけたままだ。

第十一監房の床に坐わるルーシーが其の声を遠く聞いて

「あ、あんなこと云わされるのね。ああ……」

微かに呟いて息を呑み。大粒の涙をもうこぼしつつ唇をわななかせた。齒を喰いしばったミルドレーヌが低く呻いて頭を振る。

「シーッ。黙って、じっとして……」

シモーヌが、やっと聞き取れる声で囁やきたしなめた。

通路に立って全監房を監視する三名の婦人

看守達は鋭い眼を光らせて、時々手帖を出してメモを取ったりする。点呼中の反則を発見

して後でヤキを入れるためだ。ただでさえ、

やかましい反則だが、点呼中の反則は特にきびしい。それを知る女囚達はどんなあばずれの札つきでも、朝晩の点呼と身体搜検の際には神妙だった。

「第一監房、終わりッ」

キャスリーヌの号令で六名の女囚は一斉に身を起す。勿論、全部が終わるまではキチンと坐ったままだ。第二監房が済み、第三監房の六名が額をすりつけた。

「三一九号囚。第三監房四番ッ、強盗罪ッ。懲役二十年の刑に服しております……」

ルーシーとミルドレーヌとシモーヌが息を呑んだ。朝晩の点呼をこうして毎日やらされて居れば嫌でも同囚達の罪状と刑期が頭に入ってしまう。エドウィー・ジュは自分の罪状と刑期に較べ合わせて見る様な表情で、鼻の頭にしわを寄せたりニヤリとしたりして居た。

「次ッ」

「は、はいッ。三二二号囚、第三監房五番。窃盗罪。懲役三年六カ月の刑に、服しております。受刑第号三二二号でございます。ウ、ウッ」

「おしまいの掛け声はいらないよッ。やり直しッ」

「は、はい。すみません」

三二二号は同じことを叫び直す。

「おや？それだけかい？」

「あッ。は、はい。反、反則致しましたのでベルトと手錠をかけて頂いて居ります。御面倒をかけて居りまして申し訳ございません。」

懲罰具には異状ございません」

「ふん。大分トチって気に入らないけど、しよつ中云うセリフじゃないから、ま、いいだろ。ちよつと立ってお見せ」

残間しくも哀れに滑稽でさえある姿を調べられた三二二号は、再び坐わってすりつけようとした額を床にしたたか打ちつけた。キャスリーヌは思わず歯を見せたが、流石は看守長女史、きびしい表情をゆるめもしなかった。

第八監房の第二番、三六〇号は第二級殺人罪。二十五年の刑期を叫ぶ其の声は未だ若々しかったが、どことなく虚ろでヤケ気味の響きさえ感じられた。シモーヌも矢張り第二級殺人罪だが情状が異なるのだろう。三六〇号の声を聞くシモーヌの顔には感謝の色が漂って居た。

第十監房の点呼が初まる頃には、ルーシーとミルドレーヌは顔面蒼白、額に脂汗さえ滲ませておののいた。思いやる屈辱もさりながら、床に折った両脚の苦痛が激しいのだ。ジョアンヌ看守長が腰をゆすって、遂に第十一監房の前に厳然と立った。号令を待たずに、モニカが機械的に額をすりつける。歩み寄ったキャスリーヌが、其の赤毛頭をコンと蹴った。

「誰の許しでそんなことするの？勝手な真似をおしでないよッ」

精一杯のレジスタンスを示したつもりのもニカは、顔をクシヤクシヤに歪めて身を起した。

「第十一監房。点呼はじめッ」

エドウィージュとシモーヌがサツと上体を倒し、ミルドレーヌとルーシーは戸惑いながらもそれに続く。動作が無器用にギコチないのは、馴れないせいもあるだろうが、こみ上げるみじめさに身も硬張るのだ。今度はモニカが一番遅れて、又もキャスリーヌの靴先が鉄格子の間に飛ぶ。身動き一つ許されずに鉄格子の内側で額をすりつけ、外からの足蹴を甘んじて頭に受ける気持がどんなか、此の制服の娘も一度自分のこととして考えて見るがいい。罰則はないが、受刑囚を足蹴にすることは禁じられて居る。イヴェットは、無論そんなことをしたことはなかった。

「三一〇号ッ。額が離れてるよ。三八五号もだわ。そら、今度はお尻が浮いてるよッ」

キャスリーヌは新米囚二人を叱って面白そうにいたぶったが、足蹴の方は頭上の鉄棒に加えたのだった。

「さあ、一番から申告ッ」

上体を起したルーシーが身を揉み、声もなくク、ク、と泣いた。

「申し上げることは分ってるだろ。知らないとは云わせないよッ」

「…は、はい…三一〇…号囚…第十一監房一番…」

かすれた声をルーシーが絞りげた。

「それから？おや、忘れたの？なら、もう一度裁判所へ連れてって上げるわ。そのモードで鎖付きでね。自動車は危ないから勿論汽車よ。どう？フ、フ、フ」

唇をパクパクさせたルーシーは、破けた様な声をほとばしらせた。

「重過失致死罪、贈賄未遂罪…道路交通法違反。懲役二年…の刑に服しております。三一〇号…囚…です…」

「全然なっていないね。贖罪觀念ゼロ。やり直しッ」

ジョアンヌ女史は太い声で冷然と命じた。「ふむ。ま、一応いいことにしよう。そうしなきゃ先へ進まないからね。あたしゃ、もう立ちくたびれちゃったよ。卵酒の熱いのを飲んで、早いとこベッドに入りたいんだよッ。さ、お次はどうするんだい？」

三回繰返したルーシーを見下ろして女史は

欠伸をした。

「は、はい。あ、あの……本日の刑を執行……」

身を起したまま、ルーシーが夢中になって叫ぶ。忽ちキャスリーヌがきめつけた。

「馬鹿ッ。そんな恰好で、お礼を申し上げるつもりなの？どこの乞食小屋で生まれたんだい？」

蒼白だったルーシーの顔はいつしか首筋まで紅潮し、限度に來た屈辱の念に我を忘れた若い女囚は、後ろ手の腕をほどいて髪搔きむしった。

「あら、反抗する気？して御覽よ。ママや彼氏が助けに來るわ。ホ、ホ、ホ」

狂おしく身を揉んだ女囚ルーシーは、娘の声とは思えない程の太い呻きを洩らし、わななく両腕を再び背に回わした。

「ホ、ホ、ホ。ちっとは口惜しいのね。当り散らす女中達が、見当らなくて、お気の毒なこと」

再び太く呻いたルーシーは、鉄格子の外のキャスリーヌ看守を恨めしげに、世にも怨めしげに仰ぎ見たが、睨みすくめられて忽ち圧倒され、悶えた上体を投げ出す様に床へ伏せた。錠のかかった鉄格子の内と外、服装と姿勢の差異、そして相手は自分と同一年位の同

性なのだ。女囚ルーシーの全身に渦巻くみじめな劣等感、彼女がしがみつく教養や自尊心と激しくせめぎ合っていることだろう。やる方ない無念さが背骨を貫いて走り、針の様な悲哀感が胸を刺す。人間の世界から隔絶された絶望感が全身を冷たくおののかせ、女囚ルーシーの胸にはやがて諦めの想いが滲み透って來た。睨に溢れた涙が床に滴たる。又しても噴き上げる口惜しさに死んでしまいたい程だ。しかし、新入り女囚の社会での垢を洗い流し、其の教養だとか自尊心だとかを完膚なきまでに打ち崩して、罪を悔い改める氣持を芽生えさせてやるのが刑務官の仕事なのだ。

「何とか云ったらどう？懲役人の癖に、どこまで図々しい女なの、お前は？」

キャスリーヌは遂に女囚のブルネットを蹴った。途端、ルーシーの唇から血を吐く様な言葉が洩れ初めた。これからの毎日、朝な夕なに繰返さねばならない屈辱の言葉。眉一つ動かさないで居た看守長女史は何思ったか、一回で許してやった。面倒臭くなったのだろう。ルーシーは其の若々しい体を獄衣に包んで、死んだ様な風情で、そのまま身じろぎもなかった。ひよっとすると、無念さの余り

氣を失ってしまったのかも知れない。

「次ッ。立派なところを見せてよね」

三八五号囚のミルドレーヌは、時々声が震えはしたが、己れを抑えて冷静だった。それならそれで又小面憎く感じるのか、看守長女史はカッチリ二回おさらいさせた。シモーヌはいと神妙に、エドウィージュはふてくされと思われない程度でお経の様に、そして又モニカは途方もない大声で喚き立てた。

「よろしい。起きなさいッ」

五名の女囚を、睨み渡したジョアンヌ女史は、又してもルーシーとミルドレーヌの前に立った。

「明日からは懲役人らしく点呼を受けるんだよ。性根を入れてやらないと、コンピエーヌ駅前の広場でリハーサルさせるよ。いいかい、みんなもよくおきき。お前達の心掛け次第で、私達は鬼にもなるし天使にもなるんだからね」

最後の一睨みを与えて去った女史は、今度は懲罰房の前に立った。キャスリーヌがスイッチをひねり、視察窓を開く。途端、クリスチーヌの喚きが洩れた。

「ゆ、ゆるして……お願い……」

「ふむ、元気だね。尤も、まだ初日なんだか

らねえ」

看守長女史は、獄中獄に苦悶する女囚の姿を見下ろして点検した。

「点呼だよッ」

鉄扉をガンと蹴る。

「は、はい。二八六号囚、第十一監房第…」

「何番なのッ。整理番号がないのなら、うちの者じゃないのね。保安課の怖いおばさん達のとこへ、おっぼり出してあげようか」

鉄枷と鎖の音がきしみ、二八六号は泣きながら漸く点呼を終えた。

「これの革手錠をかけたのは誰だっけ？あんなだったかしら」

「はい。私です」

キャスリーヌ婦人看守が踵を鳴らせる。

「うん。なかなか、しっかり掛けてあるわ。

全然ゆるんでないし、手首の固縛位置もいいね。イヴェットはどうも困るよ、ジャラジャラしてて、ちっとも緊め上げやしない。よく教えてやってよ、誰か稽古台に使ってさ。ついでに窄衣もね」

「はい」

キャスリーヌは小鼻をうごめかせた。

「こう云っちゃ何ですけど、イヴェットはまだ甘い夢を描いてるんですわ」

「そうだね。あんたも初めはそうだったよ。ま、それもいいけど、いつまでもそうじゃ困るからね」

被懲罰女囚の苦しげな哀願をよそに、看守

長女史はこぼした。こぼされて居る相手のイヴェットは、明日の二十四時間勤務に備えて今日は早々に帰宅し、ここにはもう居ない。

「ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ手をゆるめて下さいまし、もう、肩がバラバラになってもげそうなんです…」

「うるさいね。二、三日すれば骨が曲がって丁度よくなるよ」

「お願い。ゆるして下さいしたら何でも致します。心を入れ替えて、まじめにやりますわ。ほ、ほんとうでございます…」

「ふん。じゃ、今まではまじめじゃなかった訳かい」

嗚咽に混って革具の軋む音が聞える。

「そ、そんな…。看守長様。刑期を終えまして、女中奉公させて頂きます。お給金なしで年季奉公させて下さいまし、何なら一生でも…。ここを、ここを出して下さいまし。このとおりでございます…」

鎖が重々しく鳴り、獄中獄の女囚は額をすりつけたらしい。

「ふん、何を寝言云ってるの。お前みたいなボケナス女に女中が勤まるかい。明日からはもっと気の利いたセリフを考えるんだね」

「お、お慈悲を…お慈悲でございますッ…」

「おや？お前、さっき喚いたじゃないの、私達は鬼だって。鬼にお慈悲を願ったって、どだい無理さ」

電灯が消され視察孔が閉じられ、哀願の聲が一オクターブ低くなって、意味の分らぬ呻きとなった。生々しい重屏禁の苦吟の様を全女囚にタツプリ聞かせた看守長女史は、未だ床に並んで坐わる女囚達の恐怖と怨嗟の眼に見送られて、ゆっくりと室へ引きあげる。ベルディーヌ婦人看守がそばに寄り、リストと鉛筆を差し出した。女史は碌々見もしないでサインして返す。点呼中に反則した女囚のリストだ。革ロープやゴムホースで勝手次第に打ちのめしても其の場限りのこともあるし、そうかと思うとビンタ一つ加えるのにも看守長のサインを取って記録に残すこともある。そこらの区別は曰く言い難しでデリケート、新米のイヴェットには、未だよく呑み込めない。

今、看守長がサインしたリストの反則女囚は九名、懲罰種類の欄はいずれも「叱責」と

なつて居た。勿論、理由は「点呼中の姿勢・態度に厳正を欠いたがため」だ。「叱責」と云つた所で刑務所のこと、体罰であることは云うまでもない。ベルディーヌが番号を呟鳴り上げ、観念して鼻白んだ九名の女囚は腰を僅かに浮かせた。痺れた脚に顔しかめつつ、にじり寄つた鉄格子の外へ両腿を突き出す。

鉄格子には床から一尺の所に横棒が走り、其の横棒と床との間で鉄棒一本を挟んだ両腿を思い切り外へ出すのだ。勿論両膝は折つたまゝ、両手を背に、胸、腹を鉄格子にピッタリとつけねばならない。よほど痩せぎすの女囚でない限り、両腿の付根には両側から鉄棒が喰い込み、横棒に上から押えられて足首を立てることが出来ない寸法。さりとて足首を寝かせれば、床に埋め込んだ鉄の角材が胫を責める。痺れ切つた脚をもがき腰を悶えつつ両腿を突き出して行くと、挟んだ鉄棒が獄衣の裾を押えてたくし上げて行くと云う仕掛だ。第十一監房のモニカを含めて八名、十六本の腿が二本宛むき出しになつて、鉄格子の外側四十センチの床を膝頭でこすつた。第七監房の三五二号は相当なデブ女、いつも飢じがつて居る癖に痩せもせず、鉄格子の間からは膝の頭を覗かせるのが精一杯。彼女だけは後ろ

向きに膝で立ち、鉄格子に背をつけてふくらはぎを外へ出した。体重のかかる膝頭のあたりを床の鉄材に乗せ、上体をまっすぐに後頭部を鉄格子に押しつけて、懸命にバランスを取る。背に回した手で鉄格子を握ることは許されないのだ。規格に、外れた体をして居ると、何かにつけて苦痛が多いし、情けない思いもさせられる世界だ。同囚達に向けた三五二号の人の好きそうな顔は、悲しそうに歪んで居た。

じろりと見渡したベルディーヌ看守が声張り上げる。

「お前達は、改悛の情を最も示さねばならない点呼時、それも看守長殿じきじきの点呼だと云うのに、定められた姿勢を崩したり傍き見をしたりして、一体懲役を勤める気があるのかい。お帳面につける叱責をするから、有難く受けなさい」

点呼時の反則は些細なことでも記録されて服役成績に響く。仮出獄を鼻で笑う女囚にした所で娑婆恋しの念は同じこと、屈辱の儀式を神妙に受けて反則しまいと脂汗を浮べるのも先ずは道理だ。

冷笑を浮べたキャスリーヌが、上衣の内側からゴムホースを抜き出し、二、三度素振り

してウォーミングアップした。先ず、一房の三〇七号。

「か、かんにんして……」

少し足りない三〇七号だが、打たれれば矢張り痛い。舌足らずの哀願を無視した一撃二撃が、むき出しの腿に、はじけた。彼女は二発。

「よし。いいわ」

三〇七号はヒュー泣きながらも体をホツとゆるめ、舌足らずの声を張り上げる。

「御叱責、ありがとうございますッ」

がっくりと額を鉄格子に打ち当てた三〇七号は、両腿に残る薄赤い痕を見下ろして鼻を吸つた。ベルディーヌが指を四本示した。次の女囚は程度がひどいので四発だ。苦痛と恐怖に堪えかねた膝が僅かに浮いてもがき、蹴り飛ばされた膝頭に一発が追加された。「叱責」の受け方が悪いと、容赦なくおまけがつく。

「何よ、そのツラは。膝を開いてッ」

精一杯にひろげた腿の内側をしばき上げられて、三二九号のすれっからし女囚が呻き泣いた。

順番を待つ女囚達は腿を固く合わして哀れにおののく。

「それは何と云うザマなの？半分しかツン出てないよッ。命令に逆らう気？」

順番が近づくと、どうしても膝がにじり退って仕舞うのだ。

「しっかりおし。叱責、位何よ。上手に叱られる様になれば、人を叱るのもうまくなるわ、フ、フ、フ」

キャスリーヌは嘲笑って三四〇号の額を突き飛ばした。三四〇号囚は背任と私文書偽造で一年六カ月の実刑を喰った端正な女、二流の上ぐらいの会社の元秘書課長。後ろざまに倒れながらも背の両手は解かず、懸命にもがいて起き直り、齒を喰いしばって腿をにじった。意地にでも、洩らすまいと耐える其の腿に、これも意地になったキャスリーヌのゴムホースが力まかせに炸裂し、遂に悲鳴が糸を引いた。三五二号は足裏に各一発、そして可哀想にふくらはぎにも一発宛を喰い、鉄格子に巨軀を打ちつけて泣き叫んだ。尤も、ふくらはぎを力一杯打ち据えられては堪まったものじゃないし、二、三日は足が立たない。キャスリーヌもかなり手加減してやった様だった。モニカは最高の八発。さしものあばずれ娘もネをあげ、鉄格子に胸を揉んで唸って居た。

九名の「叱責」の間に又も反則した女囚が三人、今度はベルディーヌのゴムホースを受けて苦悶した。要領のいいのが自慢のエドウィー・ジュもその一人、避ける術もない痛撃に腿を曝しつつ、隣で息を詰める三人の女を忌々しげに見た。ベルディーヌ看守はゆっくりとゴムホースを揮いながら、三人の新入り女囚を鋭く見やる。ルーシーとミルドレーヌの三名は、硬張らせた体を身じろぎもせず、恐怖に見開いた瞳で真正面を見詰めて居た。

「叱責おわりッ」

二十四本の腿とふくらはぎが懸命の動きを精一杯に示しつつ、モゾモゾと監房内に消えた。

「疲れたわ。でも、いい運動ね」

キャスリーヌが右腕を回わしつつ云う。

「バストが大きくなるよ」

「あら、いやだわ。右ばかり大きくなるんじゃない」

「第十一監房以外、点呼おわり」

ベルディーヌの号令と共に女囚達は床にうごめきよろけ、這う様にして寝台に戻って行った。「点呼準備」の号令から計ってタップリ五十分だから無理もない。隣の第四監舎では未だ「叱責」もたけなわと見え、鈍い音

と悲鳴が窓を洩れて居た。
「キャスリーヌ、御苦労様。もういいわ、一服しといで——」

キャスリーヌは肩を動かしつつゴムホースを片手に、詰所へ消えた。

十何名もの女囚に各数発宛、続けざまにゴムホースを振るうのは少しばかりえらい仕事だ。それで、その役目は大抵若手の婦人看守にお鉢が回わる。イヴェットとても例外ではなかったが、彼女には此の役目がむごく嫌だった。むき出しの腿を答の下に曝らした女囚が鉄格子の内から見上げる眼を感じると、その哀れさに腕が鈍るのだ。イヴェットにとっては全員が上司であり先輩である。彼女は常にハッパをかけられ通しだった。
(紀律の保持は最も重要なことなのよ、仕方ないわ)

そうは思っても、時には辞めたくもなるイヴェットだった。

自分達だけ残された第十一監房の五名は、流石に不安におののいて居た。特にルーシーとミルドレーヌの二人は、恐怖の余りに失禁せんばかりだった。毛布を抱えて現われたベルディーヌとマリーが、鉄格子の間から女囚達の膝に投げ与えた。

「番号を確かめるんだよッ。いいね」

つぎの当った粗末な毛布は灰色で二枚ずつ「粗末に扱ふと承知しないよ。お前達はくたばろうと出て行こうと構やしないけど、その毛布はずっと使うもんだからね。社会の方々の税金で買ったものだよッ。分った？」

「は、はい。ありがとう存じます」

シモーヌが丁寧に頭を下げ、他の四人も見習った。

「三五五号ッ」

「はい」

「毛布を汚したり破いたりしたら、どうなるか、お云い」

「はい。重屏禁一週間、引き続いて寝具なしの独房暮らし一カ月です」

「馬鹿、それは、最低だよッ。それに、みな『以上』がつくの。それと文通面会の禁止六カ月以上よ」

ルーシーとミルドレーヌは声もなく震え上った。デスクで操作されて、全監房の窓が閉じ、更に鉄蓋がガッチリと閉じられた。一房から順々に、婦人看守二名立会いで本錠が掛けられて行く。監房の鉄格子戸には仮錠と本錠とがあって、戸を閉めれば自動的に仮錠がかかる。房内からは絶対手が届かぬ様に鋼板

でガードされた把手が壁にあり、仮錠は鍵なしで開閉できるのだ。本錠は、鉄格子戸の一部をなす鋼鉄箱内に装置されており、開けるのには勿論のこと、閉めるのにも鍵が要る。家庭には先ず絶対に用のない程に大きな平型の複雑な鍵だ。仮錠がかかる音もそうだが、本錠の掛かる金属音はヤケに大きく響く。

「三一〇号ッ」

ベルディーヌ看守が呟鳴った。

「は、はいッ」

「三八五号ッ」

「はい」

「坐り心地はどう？絨氈の上にあぐら掻いてるよりはシャッキリするだろ」

「は、はい……」

「二人とも、お立ちッ」

二人はのた打ち回って身悶えした。

「立て、と命令してるのよッ」

鋭くきめつけられたルーシーとミルドレーヌは、泣かんばかりにヒューヒュー云った末、漸く立ち上って喘ぎ、よろよろとよろめいた。「フッフ。両手は離さなかったのね。感心感心。ちゃんとお立ちッ。そうそう。立て、と云うことはね、まっすぐ立って身動き一つしないことよ。よし、坐って。馬鹿ッ、ボケナ

ス。さっきの様に坐るんだよッ。キョロキョロしたって椅子なんかないの。ホホホ。何、泣いてんの？」

二人の新入り女囚は額に脂汗を滲ませて呻く。

「額を床につけて。フラフラするんじゃないの。お尻が踵から離れると承知しないよッ」ミルドレーヌが床に呻いて、後ろ腰の両手を握り締めた。

「よし。身を起して。お立ち、命令なのよ、モタモタすると……」

ルーシーが泣き出し、ミルドレーヌの奥歯が微かに鳴った。

「何とか立てたわね。何と不器用な女達だこと。そうして坐ったり立ったり額をすりつけたりするのが、懲役人の基本的動作なの。分った？分ったらお坐わりッ」

ミルドレーヌもク、ク、クと泣き出した。

「ほんとにまあ、そんな不器用な癖して、よく人を殺せたものね」

二人は涙を流して嗚咽を初め、シモーヌまでが肩震わせ初めた。

「な、なんと云うひどいことを、おっしゃるの？そんな……そんなことまで……」

「何だって！三八五号ッ。口答える気？刑

務官抗弁は、脱走並みの重大事犯なのよ。分ってるの？」

ベルディーヌ婦人看守は床をドンと蹴り、鉄格子をガンと叩いてきめつけ、勇を鼓して立てようとした三八五号の頭もガクリと垂れた。眼には見えない何物かに抑えつけられた様だった。番号を打たれた囚われの身の悲哀を、胸にじっと噛みしめて居るのだろう。そして、己れの犯した、罪の深さを反省したのか、シモーヌを含めて三人の女囚の肩が力なく落ちて垂れた。

「昨日までお前達が居た世界とは、ちっとは違うってことが分った？ 娑婆でのことはたった今、すっかり忘れておしまい。名前だって忘れた方がいいわ。犬や猫でも名前があるけど、お前達は番号だけよ」

ベルディーヌは、なおも女囚の胸を抉って掻き回す。

「額を床におつけッ。そうそう。フッフ、どうお？ 命令に絶対服従すると云うことが、どう云うことなのか、ざっと分りかけて来た様ね。性根を入れておやり。痛い目にも逢わせたげるけど、お慈悲だってないこたないのよ。分った？ 分ったかと訊いてるのよッ」

「は、はい」

ルーシーとミルドレーヌは血を吐く様な声で答えた。施錠担当の婦人看守達がやって来て、鍵をチャラチャラ鳴らせつつ錠箱に差し込む。ガチツ、ピシーンと鋭い金属音が胸に泌みて響いた。

「第十一監房、点呼おわり」

ベルディーヌ達は詰所へ去り五名の女囚達は這う様にして寝台に辿り着いたのだった。詰所前のデスクに頑張る当直看守が電話器を取り上げる。

「第三監舎、収房完了。二十時五五分。異状ありません」

刑務課の当直官への報告だ。ジョアンヌ女史は夙に姿を消し、婦人看守達も夜勤の三名を残して帰り支度、詰所には和やかな笑いが起った。コンクリートと鉄格子と錠の中へ女囚達を閉じ込めてしまえば、制服の彼女達の一日の仕事は終りだ。檻の中の女達がどんなに切なかりうと悲しかろうと、それは当然のこと、知ったことではない。今夜の夜勤はベルディーヌとマリーとキャスリーヌ。デスクをおっぱり出して、ソファで、コーヒーを啜る。女囚達の就寝は九時半。点呼後は交話禁止だが、手薄となればひそひそと話し合う。第十一監房では、エドウィージュが腿をさす

りさすり、忌々しげにぶつくさ云って居た。モニカはもうケロツとして、早く横になりたそうな様子。撲られつけて居る此の娘には、減食や禁食の罰が最も利き目あるだろう。シモーヌが体をねじって振り向き、新米二人に毛布の整頓要領を教えてやった。

「あんな風にして点呼を毎日やるんですの」

思い出しても胸熱くなるのか、ミルドレーヌが声震わせて呟く。

「ええ。どう云う訳か、此の四月頃から床に坐らせる様になったの。それまでは立ってやらされてたんですけど」

「あんなことを毎日二年間もやらされたら、私、脚が、曲っちゃうわ。ああ、もう死にたい」

ルーシーが歎いた。

「私ね、額を床にすりつけるのが、とても苦しかったものよ、何しろお腹が大きかったんですもの。で、私だけはそうしなくていいことにして頂けましたけど……」

「少しは思いやりもあるのね。でも、どうしてこう痛めつけなくちゃならないのかしら」

ミルドレーヌが嘆息して云う。

「社会から隔離されてるだけで、充分にもう苦しいのよ。それなのに、撲ったり蹴ったり

床に長いこと坐わらせたり……。そして、鉄格子の外から、云いたい放題のことを、云ったり……」

「私、番号で呼ばれるのが堪まらないの。犬でも猫でも名前があるのに……。それに、あの身体捜検。私、さっきはもう、殺されてもいいから、とまで思ったわ。額をすりつけるのと身検さえ勘忍してくれるなら、二年が三年になったっていいと思う位……」

ルーシーが啜り泣く。

「まあ、お二人ともそんなに思い詰めたって仕方ありませんわ、最初だから無理もありませんけど。私だってそうでしたわ。けど、段々と馴れて来て諦める様になって来ましたの。いくら思ってた所でも何ともなりはしませんことよ、刑務所へ入れられてる囚人なんですもの」

「でも、でも、あんまりだわ。いくら囚人だからって、全然人間扱いしてくれないんですもの。獣だって、もう少しましな扱いされてるわ」

「私、鉄格子の音が堪まらないの。錠のかかる音を聞くと、胸に釘を打たれる様だわ」

ミルドレーヌが顔を掩った。

「お気持は分りますわ。でも、お二人とも辛

抱なさらなくちゃ駄目よ、どんな口惜しい目に逢わされてもね。これからいろいろと憂き目を味わさせられますわ。これが懲役なんだからといくら思っても、どうにも我慢できない思いもさせられてよ。どんなこと云われても、どんなことをされても、口答えはおろか申し開きもさせて貰えないんですものね。でも、仕方ありませんわ、懲役を受けてるんですもの。ともかく悪いことをしてお裁きを受けたんですものねえ」

「そうでしたわねえ」

ミルドレーヌが深い溜息を吐いた。

「でも、そうは思っても、こんなに痛ぶられて踏みにじられると、折角罪を償おうと決心してるのがグラついて来るわ。そして、そんな目に逢わされた挙句、やっと刑を終えたって、前科者だと云われるのね。そう思うと、世間の人達をみんな呪い殺してやりたい位」

「私、この女看守達の顔を絶対に忘れないことよ。きっと復讐してやるわ。あのおしゃれな課長も、指紋採ったりした娘達も、それに今日ここへ私達を連れて来た奴等もよ」

ルーシーが齒がみし、エドウィー・ジュが振り向いた。

「ふん。お嬢さんが啖呵切ってるじゃない？」

誰でもそう思うよ。でも、娑婆の風に吹かれた途端、そんなこと忘れちゃうものだよ。不思議なものでね。復讐とやらをやらかしたって話は聞いたことないわ」

エドウィー・ジュはお目見え泥棒の常習犯、刑務所は初めてだが、拘留刑は何度も喰って居る女だ。

「後ろのお二人さんはね、拘留所でトレーニングしてないから余計こたえるのさ。保釈なんかして貰って、お邸からじかに来るからだわ。ザマあ見ろ、と云う所ね」

「そうよ、いい気味だわ。ここじゃもう、家柄も学校も通用しないわよ。金持だって貧乏人だって同じ。楽なところじゃないけど、その点は気持ちいいわ。あんた達、今までいい目をして過ぎてたのよ。うんと絞られてヒュー泣くといいわ」

一番前に坐わらせられることになったのが又不平らしく、マットをむしったりしてふくれて居たモニカが、素足を床に摺って嬉しげに云う。此の娘は生まれ落ちた時からの孤児だ。ルーシーが、何か云い返そうとして黙った。

「ね、シモーヌ。もう、お話しちゃいけない

んじゃなかったかしら？」

ミルドレーヌがモニカを無視する様に云った。

「ええ、そうよ。でも、此の時は大目に見て下さる様ですわ。あ、それから云っときますけど、私達も番号でお互いに呼び合わなくちゃいけませんのよ。名前で呼んでるのが見付かると、二、三日嵌口具をかけられますの」

「そんなことまで！飽くまでみじめな思いをさせようと云う訳なのね。情けないこと」

ミルドレーヌが又も嚙り上げた。

「そりゃまあ、今時分は大抵なら大目に見てくれるさ、少々のおしゃべりならね」

エドウィージュが割り込む。

「けど、睨まれてたり、奴等の気分次第じゃすぐ懲罰と来るよ。あんた方お嬢さんや奥様は氣をつけた方がいいね、奴等は太抵貧乏人の娘だから。フフフ。ま、そうは云っても、先ず大丈夫さ。もう、三人しきや居ないし、一人はすぐおネンネしちまうよ。今頃はソファにひっくり返って、コーヒー飲んでやがるさ。ほら、聞えるだろ？ちくしょう。ちょっと、一四七号さん。氣をつけててね。油断させといて不意打ちと云う手があるからさ」

「まかしといて。けどさ、おばちゃん。モニ

カと呼んでよ」

「そんなら、あたしのことも、おばちゃんとお呼びでないよ」

監房内に暫し沈黙が流れ、詰所の笑い声が聞えて来た。

「お水の一口だって自由には飲めないのね」

ルーシーがポツリと呟く。

「でも静かね。あそこの呻きも聞えないし。あのひと死んだのかしら」

「あの女が重屏禁位で死ぬものか。自分でオツパイ舐められないものかと考えてるよ」

エドウィージュがせせら笑う。

「モニカ、あんた男知ってるかい？」

「あーら、馬鹿にしないでよ。男のためにこへ来ちゃってるの。ああ、思い出しちゃうじゃないか。切なくさせないで」

「お見それしたわ。そうお、フフフ。でも、ほんと静かね。ああ、味気ないこと。手がひとりでに動いちゃうわ。静か過ぎて氣が狂いそうだよ」

エドウィージュの身の動きを見て、シモーヌが眉をひそめた。

「おばちゃん、じゃなかった、エドウィージュ。見付かるとベルトだわよ。何してるか、見なくたって分るんだから」

前を見たままモニカが鼻で笑う。

「そうは云ってもねえ。あんたもあたし位の年になりや分るよ。ウウツ」

「ね、あんなもので締めつけられて何日も暮らして、どうかかなりはしませんこと」

エドウィージュの背から眼をそむけたシモーヌが、後ろへ恥かしげに訊ねた。シモーヌにはベルトの経験は無論ない。

「そうですわねえ、まあ外傷だけで、内部器官には大して影響ないと思いますわ。勿論、いいってことはありませんけど」

ミルドレーヌが科学者らしい冷静さで答える。

「でもほんとに残酷なことを考えるものね。あんなところで手錠かけるなんて。あんな縛り方があるとは知らなかったわ。体の害より、あれじゃ精神を荒廃させられますわね」

ミルドレーヌの云うことは少し難しい。ルーシーが身悶えして両腕を絞った。

「私、こんな世界があるとは想像もしなかったわ。刑務所って、少しきびしい学校の寄宿舎位のもんだと聞いてたのに。弁護士さんもそう云ってたわ。それなのに、實際は生き地獄じゃないの！ああ出たいわ。お腹も空いたし咽喉も乾いたし……。でも、鍵がかかって

るのね」

入獄第一日目だと云うのに、ルーシーはもうそんなことを云い出した。

「そんなこと云うと大変ですわ。逃走の意図あり、とか云われて……」

シモーヌが注意した。

「ベルトはまあ何ですけど、重屏禁で云ったかしら、あれはひどいと思いますわ、私。きつと体を害なって仕舞うわ。入れられてる人のこと考えると、ぞっとするの」

呟くミルドレーヌにシモーヌが答える。

「ほんとですわ。私、洩れて来る呻きを聞くと、胸がつぶれてしまいそうですわ」

「それに、あの革の鞭！私、見てて気が遠くなったわ」

ルーシーが怖気をふるった。

「さっきのゴムホースだって残酷ですわ。革鞭みたいな痕はつかないけど、却って奥の組織を痛めますわね。あなた、失礼だけど撲られたことおありなの？」

「ええ」

シモーヌが弱々しく答える。

「ここでも二回撲られましたわ、ホースで。革鞭は知りませんが、ゴムホースなら拘置所で既に受けましたの。ほんのちょっとした

ことでしたのに散々撲られましたわ」

「まあ、それでよくまあお腹の赤ちゃんが。

あら、じゃ保釈にならなかったんですの？妊娠してらしたと云うのに」

「ええ、でも私、殺人罪なんですもの」

シモーヌは答えてまづげをしばいた。又しても沈黙が漂い、エドウィージュが身繕ろいをゴソゴソした。

「あーあ、未だおネンネさせてくれないのかしら。奴等の時計止まってるんじゃないの」
 することを要領よくし終えたエドウィージュは、恥じる色もなく不平をこぼす。

「静かだねえ。犬の声一つしやしない。他の房の連中、まさかお規則通りに黙りこくってる訳じゃないだろうに。この連中は案外お淑やかなんだね。二監のアンナおばさんは詰所のラジオの音を、大きくしてくれたもんだよ。ここにや、そんな気の利いたのは居ないんだね。きつとイヤホンかなんかで聴いてやがるんだわ。お心使い御苦労様なこった」
 ブツくさ毒ずきながら、エドウィージュは手の指をマットでこすり拭う。

「マルセーユの拘置所で拘留喰った時はよかったねえ。窓の外がすぐ塀でさ、その外が何と盛り場さ。窓の鉄蓋閉めたって、ジャズや

タンゴが嫌でも聞えて来たわ。ちくしょう、ここは何よ、まるで古いお城か尼寺みたいじゃないの」

エドウィージュはばやくが、娑婆の音やたずまいを鉄窓に聴くのも切なからう。

「あたいはね、こう見えたってグッとデラックスなのよ。場末の盛り場なんか飽き飽きしてんの。ああ、もうちょっとでガッポと頂けたのになあ。マルタンの薄馬鹿がドジ踏みやがって。矢張りミカエルと組みゃよかったんだわ。ちくしょう、出たら今度はうまくやらなくちゃ。広いお庭のある大きな家を買って住むのよ」

「フッフ、モニカ、何云ってるんだい。もうお望み通り、大きなお家に住んでるじゃないの。尤も鉄格子があるけどさ。お庭だって広いわよ」

エドウィージュがひやかした。

「あなた、御家族は？」

シモーヌがミルドレーヌに、おずおずと訊ねた。

「主人と二人暮らしなの。子供が欲しかったけど、紺屋の白袴とやらで。でも、今となつては、その方がよかったわ」
 ミルドレーヌは顔を掌に埋める。

「主人が気の毒で……。会社も辞めなくちゃならないし。ほんとに申し訳なく……。でも、でも……待ってて、くれるって。誓ってくれたの。ああ、あれは今朝のことだったのね。もう何年も経ったみたい……」

「まあ、そうですの！」

シモーヌは一瞬顔を歪め、羨望と嫉妬の色を走らせた。彼女の不貞な良人は彼女を捨てたのだ。

「じゃ、昨夜はお宅にいらしたんですのね。それじゃ一しお……」

「そうなのよ」

ルーシーが嚙り上げる。

「自殺しやしないかと、みんなで心配してたわ。今朝、家を出る時には、ほんとに舌を噛みかけたの。でも、なかなか死ねないものねえ。検事局へ顔を出したら、いきなり手錠かけられたわ、パパやママの見てる前で、そして、さよならを云う暇もなしに引張って行かれて……出頭時刻に二分おくれたと云って頬を撲られたわ。あんまり情けなくて涙も出なかった」

若い女囚は思い出して嗚咽した。

「三人そろって服を脱がされて……そして又、手錠嵌められて。革ロープで数珠繋ぎにされ

た時には駆け出しそうになったわ」

「縛られるのは仕方なかったけど、ひどいのよ、駅から汽車に乗せるんですもの。看守さん達は大声でポンポン叱るし、多勢の人がジロジロ見るし。手錠は荷物で、何とか隠せても、革ロープは隠し様がありませんもの。恥かしくて情けなくて、死刑になった方がいいと思っただわ」

「私はもうボートとしちゃって、どんな気持ちだったか思い出せない程よ。あれでもう、罪の償いは充分にしたわ。ああ、でも、これから二年あるのね」

ミルドレーヌとルーシーは交々云って悲嘆に暮れた。

「まあ。近頃は晒らし者にして連れて来るんですのね。私はずっと護送車で来ましたわ。私、罪は悔いてますけど、晒らし者になるのは辛抱出来ませんの。街なかを歩かされたら脚が動きませんわ」

聞いて居たエドウィージュが振り返って鼻を寄せた。

「何云ってんのさ。三人とも人殺しの癖に。鎖チャラつかせて街の溝掃除でもやらせて貰うといいよ。性根が据わるわ」

奥の三人は云い合わせた様に唇を噛み、眉

上げかけた面を伏せた。事情は如何であろうとも、三人は殺人の罪を犯した女達なのだ。エドウィージュが勝ち誇って肩そびやかす。通常なら、殺人罪の囚人の方が、威張るものだが、此の第十一監房では逆だ。靴音を耳敏く聞きつけたモニカが叫び出した。先刻からしめっぽい話ばかり聞かされてむしゃくしゃして居たらしい。

「担当様ア。奥の三人たら、ベチャクチャ話しばかりしてますわよう」

飛んで来たのはベルディーヌ看守。房内を鋭く一べつするや、いきなりモニカを叱り飛ばす。

「告げ口するんじゃないのッ。馬鹿もん。他人のことはどうでもいいんだよ。お前はお前なりに規則を守って反省してりゃ、それでいいのッ。分ったかい？二監じゃどうだったか知らないが、ここは其の流儀なんだよ。少くとも私と看守長とはねッ」

モニカは鼻白み、エドウィージュは讃嘆の眼を輝やかす。嗚咽も恐怖に吹き飛び、身を硬くしておののいて居た奥の三名も、何かホッとした思いを被支配者の本能として感じたのか、安堵の吐息をひそやかに洩らした。

(未完)

＜唯一の体験＞

洋子のこと



山口 広

私が奇クに顔を出させて頂いてからもう半年になります。その間、何人もの方々の御親切な御批判やら、中には点のあまいおほめを頂いたり、恐縮しています。

私が創作を書いたのは、もう二十年も前敗戦の混乱の頃に、二十前の多感さから組織した同級生の同人雑誌に投稿させられた短いものが数編あっただけです。内容も今では記憶していないほど幼稚なありふれたものであった、きりです。その後、二十年して、何を思い立ったのか奇クに投稿しはじめて半年、もう四百枚餘りも原稿用紙を使い、丸まっちい字を並べました。

私は職業がら（申し上げませんが）無味乾燥な事柄を、簡潔に、明快に、横書きで、冗長にわたらないようにまとめる、しかも欧文の方が多という平常の習慣が、無意識に出してしまい、自分が意気込んで書いても脱稿するとセンスのなさが表れるという結果です。

処女作と云ってよい『革の盛装』以来、山本達雄氏の評にあるように、「この文章もうまくないし、設定もまずいし、必然性に乏しい」雑文が次々に出来てしまい、しかも奇クの誌面を浪費させてしまいました。編集部の御好意によるものです。

以前、『革の盛装』のまえがきに「何分に

も実際のSMプレイの経験も少なく又、文才も乏しいので、云々」と書きましたが、少ないむしろ唯一の経験をお報せしましょう。

もう七、八年になりますか、私は若い時から運が悪く、金と暇が一致しないので、その機会が少なく、残念ながら、ネオンの巷には足を踏み入れたことが少ないのですが、忘年会の帰りに、一杯気嫌で立ち寄ったのが、阪急三宮の北側の、通称『ネクタイ横丁』のサロンへ僕の家です。

ようやくアルサロという言葉になじみはじめた頃です。ホステスも十人ばかりの小さいサロンでした。六時過ぎ、まだその店はすいていました。その時、本番についたのが『洋子』というホステスでした。他に、乙羽信子に似た可愛いホステスが居たので内心がっかりしましたが、洋子は一六〇糎ぐらいでポリウムある体に、鼻が小さくて、くしゃくしゃした顔がのっていました。眼がきれいなのが印象的でした。

ありふれたとりとめのない話を、むしろ私が聞き手にまわってビールを楽しみました。踊ろうと、誘われても能なしの私は断るだけでしたが、歌でも歌おうと誘って古い歌をはじめたのです。当時でも古かった『夜のプラ

ットホーム』などを上手に歌いました。

「もっと古いのがいいな」

「そうね。それじゃ女学生時代のね。ま、年がわかってしまうわ」

今でもメロディは垢ぬけていて、戦争の暗さを忘れさせた『空の神兵』がその頃のヒット『黄色いサランボ』が流れ、ミラーボールの光が渦まぐ中を高らかに歌われた。

藍より青き大空に、大空に、

忽ち開く百千の、

真白き薔薇の花模様、

見よ落下傘、空に降り

……………

いつか私も唱和していました。洋子の体にふさわしい声量豊かなアルトに、私のやや外れた太い声がよく調和したと思います。

まるで軍歌集のようなデュエット？が続き私は顔や容姿に関係なく洋子が好きになってしまいました。

それから三カ月に一度位、洋子に会いました。彼女が清水の生れで、今は母親と二人で明石に住んでいて、以前は神戸で最も大きい企業、K重工に勤めていたことがあり、『のどじまん』でも鐘三つ鳴らしたことがあるほど歌が巧いこと、等々、聞かされました。

一年余り経ったところです。友達とスタンドで一杯引っかけてから帰りに寄りました。

「いらっしゃい。なあんだ山口さんか」

「僕で悪かったな」

「ちがうわ。久しぶりで来て下さって、洋子嬉しいのよ」

「それはどうも。どう、近頃元気かい」

「ええ、お蔭様で。あなたこそ、お忙しいの

今日は遅いわね」

「うん、いつも金と暇が一致なくてね。今日

日は少し遅くてもいいんだ」

「本当？嬉しいわ。でも奥様が待ってらっしゃるわ。早く帰っておあげなさいよ」

「いや、今日は里帰りだから帰って寝るだけでいいんだ」

また軍歌が始まり、そして昔話が始まりました。そして夜が更けるにつれて、話がはずみ、おきまりのコースを歩みました。そして程遠くない山手通の伊豆ホテルで一夜を過ごしたのです。

「あのね、山口さん。私のお友達、この間ね愚連隊にいたずらされたのよ」

「ふーん、どんな？」

「手と足を括られて、おもちゃにされたの。ひどいわ」

「悪いことをするな。でも女の人って、本気で拒んだら、どうにも出来ないって云うよ。足を縛ったら困るだろうな」

「ううん、ちがうわ。こうして別々に括らるのよ。そうしてお口をふさがれたら、抵抗できないのよ」

洋子はわざわざ起き上り、足を前に投げ出して坐ると、両手首を足首の外に合わせた。思いがけぬ話が出て、私は急にそれまで忘れていた奇クの緊縛を思い出した。その頃の奇クには、川端多奈子さんがまだ活躍していた頃でした。

「そうかな。洋ちゃんも縛って見ようか」

どきどきしながら私はさり気なく誘った。

「いやよ。そんなの。こわいわ」

口では拒みながらも手は足の外側に並べたきりでじっと私の顔をみつめていた。私はいきなり浴衣の紐をとると右手と右足、左手と左足を別々に緊く縛った。

「いやよ。いや、そんなことしないで」

洋子は口では拒んでいるが、手向いもせずそれどころか、縛りやすいように足を上げさえた。手足を揃えて横倒しになりながら、

「こうされたら、もう駄目だわ。お口をふさがれたら自分ではほどこけないのよ」

洋子は、自分一人でわざと身を悶えた。眼は陶然となって、次第に紅潮して来た。

「お口をふさいで」

タオルが口を覆った。しかし洋子は満足しなかった。

「こんなのだめよ。いくらでも、物が云えちゃうのよ」

幾分ぐもっているが、大きな声を出す。

「お口に噛ませるのよ」

タオルが唇を割り、頬をくびった。

「むむ、うわ、うむ」

今度こそ呻きが言葉を奪った。

あいにく、浴衣の紐は二本しかなかった。

二本をつないでも緊縛にはほど遠い遊びしかできない。

両手を背に縛ると、胸に一卷きと首縄しかかけられない。手に重点をおけば足が留守になり、足をねらうと手の方は間が抜けてくる。洋子のボリユームのある体はとも二本の紐で、ひしひしとは縛れなかった。足を後に折って、逆エビの形に括って、無防備の洋子の体を擦ったのも一つの経験であった。

不自由な体で、紐を引きちぎるような勢いで激しく悶えた。

不覚にも、私はビールの酔が、させたわざ

であると思い、洋子がマゾの性癖を持っているのではないかと云うことに気がつかなかった。ただこうした、プレイが愛の前技であった。紐を解いたとき、

「ひどいわ。私、縛ったりするの大嫌いよ」

洋子は私の膝の上でにらみつけた。しかしその眼は決して怒っていないかた。

指切りまでして再会を約束したのに、それから間もなく、誰にも告げずに、洋子は八僕の家Vをやめた。

「洋子さん、止めたわよ。知ってらっしゃるくせに。私がお相手するわ。ほほほ」

二三度顔を合わせた若い娘が笑った。

これが私の乏しい経験の全部です。この乏しい経験から、グラビヤ（今はなくなりましたが）を見たり、或いは毎号を飾る辻村さんのカメラ・ハントを見る度に、これだけ長い縄をよくも巧みに捌かれたものだと感じし、縄の長さも想像することができるようになったのです。

洋子に教えられた縄のかけ方が私の創作のところで顔を出しているのです。

洋子は顔は似ていませんが、体つきは桜井葉子さんと大塚啓子さんの平均ぐらいの感じでした。

洋子さん!!八僕の家Vに居た洋子さん!!何処に、どうしているんだ。幸せに暮しているだろうか。（山口広）は、勿論奇クの筆名だ。この文を見る機会があれば、是非連絡してほしい。私の勤めはあの頃と同じだ。今度会うときは長いロープ、細いのと太いのを持って行くよ。パイプの嵌口具も作った。君がマゾヒスチンであることに気がつくのが遅かったか。今度は長い縄で、縄目が肌に埋るほど強く緊縛プレイを楽しもう。

その後は特にプレイのパートナーを求める気もしないで、平凡な家庭でひそかに奇クを開き、満されぬ性癖をなぐさめる日が続いています。読者通信に見られる勇気を羨みながら。そのはけ口が今年に入ってから数編の創作なのでしょう。

★代理部分譲品について★

○本誌上に只今広告してありますものは全部在庫しておりますから、お申込み次第直ちにお送りできます。○お申込みはすべて（阿倍野局私書箱第14号天星社）宛でお願い致します。○御希望の品名は△略号Vをお書き下さるだけでよろしいです。○従来取扱っておりまして八切手代用Vは都合により当分の間中止したいと思しますので御諒承願います。



浣腸の方法

—H診療所にて—

みや・ベ き み こ
宮 辺 紀 美 子

女子高校生の時、偶然に手にして、大へんなショックだったK誌を、最近再び手にして今、衛生検査技師をしている自分が、こうなつたのも、あながち無関係ではないと思うにつけ、病院の当直の時間を借りて、ちよつと書いてみたくなりました。

自己紹介をさせていただくならば、今年の十月で満二十二才になります。ある私立の学園を出て、しばらく赤十字病院の検査課におりますが、大きい病院というところは、何んといひましても、職場でも人間味は少なく患者さんの尿だの、血液だのが運び込まれてくる地下の検査室で味気のない仕事をもくもく

と続ける計算器のような立場にありますと、時折りカードを持ってこられるインターンの若い先生方に、いろんな病気のことを伺ったりしているうちに、病気や人間のことに興味を持つようになりました。

ある先生の御紹介で、アルバイトで小さい診療所の検査技師兼見習看護婦というようなことで、一週間三回、当直を勤めることになりました。ここでの体験を少しばかり書いてみようかと思いますが、もう半年近くなります。私としては、浣腸をこよなく愛する女性の方々を思いながら書いております。そして私もその一人なのです。

浣腸——誰が考えたテクニックで、誰が思いついた訳語なのか存じませんが、私達浣腸をこよなく大切にされる者にとって、何と気恥しい、それでいて何かなつかしくも秘めやかな楽しみのこもった言葉なのでしょう。

理くつは——医学的な理論は看護技術に載っています。——ともかく現実には世の中で、一人だけの楽しみとして、或いは二人以上のより大きな楽しみとして案外頻繁に行われているようです。病院で、外来、病室、処置室、医院の診療台で、救急室で、往診の家庭やホテルで、会社の医務室や学校の保健室で修学旅行の旅館の一室で、時には汽車のお手洗いで、お医者さまや看護婦さんの手で、或は家庭でやさしい、お母さんの手で、娘や子供達に、時には夫の手で妻に、或いはアパートの一室で病むお友達に。時には、ホテルの一室で、秘やかな二人だけの楽しみとして、場合によっては、身体検査のために、或いは時には罰として、SMの手段として、それも、イルガリートル、エネマ、グリセリン浣腸器だけではなく、イチジクあり、坐薬ありで多彩を極めていることでしょう。

目的も、この他食事を拒む女囚に対する栄養補給のためなどという場面や眠らせる目的

のこともありました。

一人で施している方は、更に多いと思います。いずれにしても、人間やその心理の複雑さのすべてが、この浣腸ということに含まれているといって過言ではありません。私も、このすべての場合を経験してみたいと念じております。

「若い女性は病院で行われる浣腸という治療に、異常な迄の関心を寄せている」というのは、今では浣腸する立場にある私の、一人の女性としても、おそらく本当だと思います。しかし、病院の外来で、実際に浣腸する機会は、現実には稀です。腸閉塞のような場合はともかく、単なる便秘に治療として行われることは皆無といってよいでしょう。

女性、ことに若い女性では、便秘そのものでかなり激烈な症状を呈することもあり、又下腹部痛の時には、診断のために、腸内音を除くという処置の必要な場合は、もちろん、ありますが、何んといっても、いろいろな飲み薬が現われたこと。健康保険の処置料としては、わずかに三十円そこそこに過ぎず、着物を脱ぐのにさえ時間がかかるのに、説得して迄、時間をかけて強行するという余裕がないのです。

昔のように小児科の患者さんですら、お腹をこわした位ではやりませんし、お年寄りが浣腸とさわぐ割には、疫痢、ひきつけといっても、すぐ浣腸ということにはならないようになっていきます。しかし、先生におききすると、やはり診察や治療には速効性があり、効果が確実に一番面倒がないのだから、出来ればもっとやりたい手段のようです。

「肛門を診ない医者は本当に患者を診る医者とはいえない」と先生もおっしゃいますが、直腸指診は指サックを用いるのに、保険では点数が請求出来ず、日本の習慣ではやりにくいことだと先生同志で話してらっしゃるのを耳にしたことがあります。でも、これが夜間のように、患者さんがぼつりぼつりと来られる時は別で、先生も熱心に診られる方もおられます。尤も大体は時間外だからと、簡単な診療で追い返えす先生も少なくありません。

私はこんな時——特に、若い女性の時など——私の方から、先生や患者さんに浣腸をすすめるのが大好きです。でも一度されると、二度と来なくなる方と、却って親密さを増して来られるようになる方とあるようです。

高校生位の子は、病院で浣腸されるのは死ぬ程つらいものらしいのですが、やさしく説

得するのが私の役目で、付添いの母親と二人で押さえつけるようにして処置した後、顔色がよくなって帰って行く女の子を見ると、良かったと、ほっとすることが少なくありません。でも、相手がごうまんな令嬢風の女性であつたりすると、つい、いじめてやりたくありません。そのとき、言葉づかいは、いつもより、ていねいにするのがコツです。

浣腸を美容の手段としてらっしゃる方も、私の当直の日によく見えます。栄養士の久子さんもそうで、時々便秘したといつては、私のところへ来ます。彼女は体格がよく肥っていて、大きなお尻を出されると、私の方が圧倒されそうにさえなります。

一番苦手はお年寄りです。浣腸が好きで病院に見える方は、結婚された方に多いようです。多いといっても、一カ月一回、出合う位ですが、まさか健康保険の安いことを知ってではないと思います。若い女性の方でも、いろいろで、素直にすぐ処置を受ける方と理くつをこねて、わがままを言い張る方といらっしゃるようです。

男の方で健康保険の住所とずい分離れたところから見えて浣腸していく方がいらっしやいます。マニアなのでしょう。男の方は

あまり我慢強くありませんし、私も苦手なのですが、患者さんは女性の手で施してもらいたがるようです。外国製のお薬を持って来られ、これを使って下さいという方も時にはあります。本で調べて見ますと、外国では注射も腕を嫌い、お尻にすることが多いらしく、薬や注射好きの日本人から見ると、おかしい位ですが、実際にお尻から入れる薬がかなりあるようです。

「私 の 心 境」

――探郎ではなく私のオシヤベリ――

よるの・たんろう

『実録・奇譚クラブ』及、『論評・奇譚クラブ』を執筆したのは単なる懐古趣味や、ドンチャカさわぎのみでなく、より奇ク誌上共通の広場と親しみ易いマニア（読者）との交流の場としたかった、その願いが秘められていた。一部の読者から批判が出て感じられた事

風邪薬でも（日本ではバリオメールという小児用のがあります）心臓のお薬でも、腰痛や鎮痛用の坐薬があり、かなり常用されているようで、日本でも、一部出ていますが売れ行きは、余り良くないようです。その反面、イチジク式の浣腸が外国にはなく、ごく最近アメリカで出たものは、それを持ったナースや母親と子供を配した宣伝広告が雑誌に出ております。私も、もし外国に行く機会があっ

たら、是非小さい病院に行って、診察や治療をしてもらいたいという夢があります。私自身が浣腸されたのは、実は極く最近のことで又自分で処置したことはありません。もし浣腸というムードを望まれる方があったら、私でも、その御希望を満たす自信があります。どうぞ、赤十字病院内郵便局宛、局留でお便り下さいませ、毎月月初めが好都合でございます。

を持ってきてもまに合うような没個性的な文章が現在が多すぎる。編集者と作者と読者との関係は、あまりにも商業化された雑誌界にあって遠く冷めたすぎる。△近頃、読物雑誌が従来の編集方針から脱脚出来ず、マンネリ化を来しつつある△ことは、近代資本主義社会の余波が売らんかなという出版社とゴルフがオトクイな職業作家と、読み捨てが習慣、おしつけられた読者との間から生じた悪循環からだと考えられる。

これを打破するには、夜乃探郎ならば、夜乃探郎より、書けない、その作者のむんむんした体臭が感じられる文章とジカに受け取れる（賛否はともかく）読者と、既成の出版常

は、（私を指していると推察する？）これす

べて私の文才の至らぬ、不始末とおわびしたい。しかし、紙背に徹する方々の好意ある声も他面、感じられた事はうれしく思った。

一般大衆雑誌の小説・論評・etcをよんでみると作者ナニナニ氏は、他のナニナニ氏

識をブチコサンとする（そのために、不手ぎわはあっても）編集子の激しい熱情が必要だ。私はそう信ずる。個人が集められて社会は形成される。生きた作品の、その第一歩は（完成のことを言っているのではない）まず自分を描くことにあり、自分から見て最も刺激のある読者（投稿者）にむけられ、そこから、進歩されると思う。作者不在の、どの対象にむかって書かれていくか判らない、色彩不明瞭なユウレイ的文章はいくら個人的なと評されても、いまの私には書けない。（ただし、現在の執筆態度が、最上だとは過信しない。）未完成である。実はないかも、知れないが、文の道に賭ける笑って泣いて——奇クと心中しかなない男一匹、マニヤの信条は持っているつもりである。

去年あたりの本誌と比較して、いっそう大方の読者の共通の交流はなされ片寄らないバラエティな編集になりつつあることを信じるのは、私の思い上った手前みそ的な独断でもあろうか。いままで筆を持つことをようしなかった、よむだけのマニアが、（保藤久人・葉山啓etcの各氏を筆頭に、いま続々とマニアの投稿、発表されつつある。）その傾向は止まることなくより動的である。何を持つ

てマンネリを象徴するような△一部とか、目先とか、個人的な△という声が出されるのか理解に苦しむのである。

芳野氏の十一月号・△ガン作・マニアのノート△など、冒頭、個人的どころか、読者への返書のオンパレードではないか。（三頁近く使っている。最近の返書は、千差万別と見る）。正直の所、あまりにも近頃のミンナしてペンを取ろう、発表しようの、おにぎやかさに、下足番を買って出た（そう自任する）私など、圧倒されて？、ペン陣から逃げようか——とも思っている位だ。

△レギュラー△とか△職業作家△とか、△芥川賞・直木賞△などという言葉が大きいな私の気持を、ワカッチャくれないのかな！『実録・奇譚クラブ』を書いて、私はマゾヒスト・古川裕子にホレマシタ。その華々しい登場と、あざやかな退場ぶりにだ。夜乃、いや私は、書く度に、はじめて投稿するんだ——という刺激をみずからもたせて、けしかけてペンを走らせる。編集子は常連などとホメテくれるようだが、私が誌上に登場してる限り、一読者いつもマニア一年生である。かりにも先生など、まちがっても私をよぶような読者が出て来たとしたら私はバカ！とどなるね。

だれかが云った。△文化とは一銭にもならない事を熱狂的にやることだ△と、過去に、現在も、それを信条、狂信している、私にとって、——職業作家ののさばらない、クソ面白くない道徳ぶった投稿者の皆無であろう。下手に水をさすような、陰險な読者が無いと思っただから、奇クに一眼ばれた。お好きな放浪も、書く時間にあてて、生活している現状だ。誌上では美少女と、デイトする時間もなく、カワイコちゃんときっすする、プレイするひまもない。（それでも、K・Kという素晴らしい永遠の美少女が出来たからうれしいのだ）

——どうも、何か私の行動が一部から誤解されてる？ような気持があることを、十一月号を手にして気付いた。私は、一晩、泣きあかした。△去るべきか、とどまるべきか△と、苦悩した。

ピエロは、ユカイであるだけ、ナミダと感情に弱いのである。△ああ、去るべきか、とどまりペンをにぎるべきか△じゃまものは、消え去るべきか……。

（おわり）

× × ×

秋色の中の雑感

保藤久人



「なぜ△奇ク△は

△同人誌△であらねば

ならぬのか——？」

◎フィクション△信条△生誕

一九六五年七月上旬の或る日、箕田京二は最早や親しみ過ぎて自己の分身に成り切っている△編集長の椅子△にゆっくりと腰を落付けた。煙草を啜える。大きく吸込み勢良く吐出し乍ら目を閉じた。万感の籠る瞑想暫し。

七月——。普通なら梅雨も明けて快晴の日々、うだる暑さの魁けの様な日が続くのに、今年は又、一体何という涼しさなのだろう。異常というより異妖であった。

(天変地異でも起ろうというのか——？)

(今日の日まで、その様なことを考える愚しさも暇も、俺は持合せていなかった筈なのに——) 風がなかった。煙草のけむりが彼の閉じた瞼の辺りを、霞む様に、モヤモヤと流れる。彼の表情は深沈として、言い知れぬ哀愁が漂っているかの様に見えた。

——変異は、今正に起ろうとしていた。いや、編集長自らが起そうとしていたのだ。突然、彼は大きく目を瞠き、部員の一人々

々に移してから自分の身近かに招いた。

彼の表情から寸前の沈痛さがなくなっている。大きく強く、信念ともいう可き決意！

それは、△編集長△である彼が自らに言い聞かせる為のものでもあった——。

一枚の紙切れが彼の手から部員の前に差出された。それには彼が兼ねてから痛恨の中で草案した文字が男の涙を隠して綴ってある。太いペン字で大書されたそれ……。

(五箇条の御誓文) 但し、王政復古を意味するものではなかった——。

彼の信頼する部員達は△編集長△の示す紙切の文字の一字一句をも見誤るまいと厳しい目を走らせて行く。読み終った者はそれを隣

の者に手渡しして、じっと△編集長▽を見た。

（——何かいい度いのだろ。言って呉れ、言
って呉れた方が俺は——）

だが、誰一人、何も言わなかった。

彼は部員某を見た。

「条例についての解説。あれを、扉と対にし
て呉れ！」

彼はそう言って、つと立上り窓から外を見
た。今日も夏空は望めそうもなく、うっとう
しい雲が厚く重々しい——。

——奇譚クラブの変異はこうしてとうとう成
立し、昭和四十年九月号、即ち△通刊第二〇
六号▽の『本誌の信条』が出来上ったのだ。



当然、反応がある可きなのだ。読者の攻撃
の矢表にも立たねばならない。

新刊発売と同時に、直ちに、その応答はあ
った。だが、予想していた程の、厳しさがな
い。それがかえって箕田京二の奥の心に突刺
って来る。「存続」という絶対的な「大義名
分」に対しての「自己の信念」に悔ゆる気持
はなかった。併し……

（俺の選んだ方途は誤まっているのだろうか
——？）ふと、そんな危惧さえ湧く。

（皆、遠慮して呉れているのだ……きつと。

読者に俺の心が判って貰えたのだろうか？。

——俺の気持！いや、そんなものはどうだっ
ていいのだ。兎に角、続けなけりや、ならな
い。続けて行く為に——）

△奇譚クラブ▽は変貌した。『見る雑誌』か
ら『読む雑誌』への漸進的移行を念願し乍ら
一九六五年七月二十五日に到って、殆ど決定
的ともいえる『同人誌』形態への宣言を外に
向って公示した——

（これで良かったのか——？いや、これでい
いのだ！）

箕田京二のデスクには『小説・箕田京二』
と表記した木戸川健の原稿が拡げてある。

黒枠に囲まれた『死亡広告』

だが彼には、その黒枠の文字よりも

……これがノンフィクションであるべき筈が
ない……という傍題の方が気になるのだ。其
処に「一つの心」が潜んでいる様な気がして
ならない。併し、全文を読み終えて最後のク
ダリ——『K誌は、私の生命です。——サヨ
ウナラ』甘えては不可ないと自戒し乍らも、
彼の心の何処かがホツとするのだった。

◎木戸川氏の△世相診断室▽の中

『奇譚クラブは次第に△奇譚▽の名に恥じつ

つある。こんなものが△奇譚▽であるべき筈
がない……』『K誌は風俗誌である……』

十・十一月号の『小説・箕田京二』の中
で、木戸川さんはきつとこのことに触れたか
ったのではないだろうか。併し編集長△箕田
京二▽に対しては到底発言不可能であった。
だが、△奇譚クラブ▽に対してなら——。

木戸川健さんは、もう自分の担当の様に
なって仕舞った△世相診断室▽の中で、始めて
真正面から「本誌」にペンを向けられた。



『奇クはマニア誌か、同人誌か？』これは過
去も現在も、度々、人々の口に登る言葉であ
り、読者の間での一つの重要な部分であり、
当然起る可くして起る「問題点」なのだ。

嘗つて、『奇クは同人誌』と指摘されて驚
いた、という、編集子の言葉もあった。

『本誌の信条』Ⅱ御誓文Ⅱの第三項は、同人
誌であっても良い、という意味にもとれる。
「風俗文献」を標榜する△奇ク▽なので、本
来の「雑誌的」な部分を排除しなければなら
ないのか？真実に「同人誌的」であって良い
ものであろうか？

『最早や△奇譚▽でなく、実にまともな話で
ある……ようなものが多くなった……』

木戸川さんのこの言葉を私は肯定する。そして双手を挙げて賛意を示し度い。このことは私も『●通信のいろいろ』（九月号）の中で触れたし、現在の△奇ク▽を開いて見れば誰方にも納得出来ると思う。兎に角、SMに特別の関心のある方以外には、さっぱり面白くない、というのが実態ではなからうか。



本当にこれで良いのであろうか。これ程縮まっていないと、現今の社会に出歩けないのか。此の俚では自己を中心にした狭い視野の中に凝り固って、仕舞うのではないか。私は△奇ク▽に投稿するに際して『明朗なSMを——』と常に呼び掛けている心算だ。自分だけであってはならない。実質的にSMは個人感情の所産には違いないが、個人といえども同じ人間……その心なので、当然人間としての共通点が見出せる筈なのだ。私はそれを、現実社会から拾い出して訴えることを、先ず最初の目標にして、今日に及んだ。これは実に、私にとっては、『現実』から『幻想』への勇飛の一つの足掛りともいえるし、実際に人間の△性▽（SEX）程、複雑で怪奇なものはなく、時には妖気さえ漂って来る。奥深く、尊く厳しく、凄まじいもの。

明示することは不可能なものではないだろうか。人々は知った様に思っているだけで、その実、深奥は到底掴み出すことの出来ぬ不可解な部分が存在する。

「判っている——」と仰言る方を、極めて人間的な視観で『不幸な方』と言えは極論的に走り過ぎるだろうか。

この人間の不可解な部分を、人間共は自らの『思考・発想・技巧』即ち△文芸▽∥絵・小説・其の他芸術という名のものによって表現明示しようとする。当然其処には『幻想』もあろう。併し、現実社会、生々しい人間も存在し、誰もがそのテーマに取組んで人の心に訴えようと呼掛けているのだ。

SM・風俗文献・アブ研究・即ち△奇ク▽……本誌にも必然的に、この風潮がなければならぬ。堅苦しい文章だけが文献ではないのだ。風俗とはもっと生ぐさい人間の生活である筈なのに、今の△奇ク▽には、それが欠けてはいないか？風俗誌という名前に恥しくないのか？

木戸川さんの仰言る様に△奇譚▽という名は、今、空間をさまよっている——。



『現実』は尊い。実態なのだから大切にしない

ければならない。併し『現実』だけでは息詰まり窒息しそうで其処に人間にとって『夢』への必須条件が存在する。倣令それが、SMという特異分野であり、『異質的』と観念視されていたとしても、結局は同じ人間なのである。△奇ク▽の読者も△奇譚▽の中にその『夢』を求めている筈だが、それは△奇ク▽の読者だけではなく『人間の心』を知り度いと思う『世の人々』も求め得度い質のものでそういうものでなければならぬ。

夢……それも夢想では不可ない。空想でも意味がない。幻想でなければならぬのだ。そしてこの『幻想』を表示し得るもの……それが『小説』なのだ——。

小説を読むということは、『現実』と『幻想』の二極を両立させる人間にとって必要な憩いとも言える。

出版業というのは、人間に精神的な休養を与える為の、一つの社会事業ではなかったのか。従って社会事業は普遍的でなければならぬ。

……五箇条の御誓文……の中に閉じ籠っているれば次第に自己の殻の中（自意識で異常と嫌悪し、排他的に陥り）△奇ク同人▽の中へは形良く納まって行くことが出来るだろうが其

処に果して発展があるのだろうか。これは、正に人間として極めて不幸なことだと思う。併しさて、ではどうすれば良いかという結論は私に出せない。今後の奇クを愛する人々の大きな課題になると思うが――。

唯一つ。今暫く「同人誌」的であっても良から『読む雑誌』への体裁・充実を望み度い。

『読む雑誌』……それは、研究誌・文献誌・風俗誌であると同時に、『雑誌』なのである。

現在の形態なら『雑誌』という文字は冠せられない。『読む風俗文献研究誌』なのだ。つまり、絵と写真のなくなった『SMマニア誌』であり、多少位の気(け)のある(SMの)人々は遠ざかって行く様な気がする。

それ程「風俗」も「人間」も「現実」も、「幻想」も乏しい。△奇ク▽を愛する人々、更に愛そうとする方々にとって、これ程寂しいことはない――。

◎人間の読み度い小説とは――

木戸さんがご指摘の様に『中間雑誌』と称せられるものや、『単行本』になったものの不真面目さに少し言及して見よう。

この種に関する疑義は十一月号に驚く程多く出ている。久我さんの△アブ談義▽。山本さんの△雑感▽其の他読者通信でも――。

大先輩のとやまさんも△白い廃液▽の一部を紹介していただけるし、辻村さんも△棺の中の悦楽▽の映画化を楽しみにしていただける。

世の中の大家と称せられる作家の中で、異常性を扱っている方は随分多い。忍法小説もその例なのだ。そして、それがベストセラになる。この異常現象を一体、どの様に理解したら良いのか？兎に角、△ファニー・ヒル▽の様なY文学ではないのだ。

どれもこれも、人間の心の妖しさ、その欲望の一端をチラッと覗かせているのに過ぎないのに――。

『オール読物九月号』に富田常雄の△お馬▽というのがある。

……人生の下り坂に向いつつあるホステスが強いられた奇妙な性生活……

『お志保は三十八才になる。六十過ぎた隠居の世話になった。――彼は全裸になりお志保の裸身を四つ這にして跨がり彼女の臀を平手で叩く。つまりお馬！嘶きと共に後足で蹴ることを強いられ、お志保は教えられた通り実行した。そして……隠居は睾丸を蹴られて死

んで行く。残されたお志保は――』

人間的な哀愁がある。これこそ「風俗＋異常」奇クにこそ相応しいもののなのだ。

宇能鴻一郎。戸川昌子。黒岩重吾。梶山季之。柴鍊氏や山田忍法氏は勿論、競って挙げて特異な妖しい世界を掴み出そうとし、実際にそれが果されている。それなのに、『風俗文献』と自負する本誌には、極めて僅少なのは、どういうことなのだろうか――？

おまけに加えて、『小説現代十月号』などその挿絵の半分近くは「裸体」なのだ。これを一体、どの様に解釈すれば良いのだろう。

前記△白い廃液▽は『調査資料(秘)』という三部作。(註・虚栄の館。甘い樹液)その殆どが、SEXとSMを扱ったものである。

サジスト。マゾヒスト。フェチシスト。同性愛。それにSEXが絡まって来る。

……高慢な映画女優が主人公の足を犬の様に舐め、女奴隷の様に……犬がチンチンをする様な手つきし、顔を足の甲に押つける。

……同性愛の女が主人公を知って変貌し、哀願し『――命令されたなら貴方のオシッコだって飲んでみせます』と狂おしくなる。

……金髪のグラマー(男性米人)は今彼の下腹部に狂おしく唇を押つけている。

……スカートやコルセットを剥ぎ取られ床の上に落された。ロープを取出して輪をつくり片方の足首を、ついで手首に。更に片足も。

……女優のはき古した下着がセリ市に。

これ等は皆、△三部作▽の内容の一部であり、明らかに△奇譚クラブ▽の領海侵犯なのである。世の中には、こんな馬鹿々々しい本末顛頭が実在する。黙視するのは如何にも無念極まりない。

これに対して私は△奇ク▽関係の方々（自分も含めて）を責める気持は少しもない。

私が強調するとしたなら、それは「人間」にでなく△奇譚クラブ▽という雑誌に対してであろう。

そして同時に、其処に「小説作法」的な、関係する総ての人々が反省しなければならぬ部分があるのではないか。

十一月号の久我さんの『文学的悪讚美論』△小説・花と蛇・にふれて▽を熟読しよう。

私などには出来ぬ相談である。併し、非凡な皆さんには可能なのではないか。

文の結構・文章技法・発想・表現——その辺りにこそ△奇譚クラブ▽が真に親まれる為への『読む雑誌』への道が開かれている様に思う。△奇譚▽への救いでもあり△同人▽から

拔出す活路なのではなからうか。

◎△奇譚クラブ▽に……

この一文をここまで書き進めてふと私は自分を省みる。編集の方々、寄稿家の皆さん、愛読なされる皆さんに対して申し訳ないという気持がある。併し私は今、△対奇譚クラブ▽にペンを向けているのだ。

世評は厳しい。その上、SMという風俗は公衆の面前で、何を何と……と、求めることも、意志の表示も許されない。兎に角、常識外、非現実観点の部分に属する。併し、人間同志の問題なのに、とふと思う。

反社会的、非道徳的であったとしても、健全な社会の一員である我々は、自然と備った人間としての限界、感情の抑制も、理性も又培かわれている筈なのだ。大人なれば、精神的病患者でない限り自己に責任を持つことも可能な筈だといえる。

その、自己の責任の範囲内に於ての、「人間の心」——感情（SM）は生かされても良いのではないか——。その様に私は思う。



気付いたことなど——二つ三つ……。

▽木戸川さんの文中で、私も真面目な一人に

加えて戴いて恐縮しております。本当はきつとそうではないのでしょうか。時に言うように自称「SM的SEX派」なので、書くものも、もっともっと「人間・風俗」を含めて生ぐさいものを書いて見たいと思います。唯、私の様な幼稚な筆では不可能なだけ。又、万一書けたとしても発表は駄目。従って掲載可能な範囲で留めて仕舞いますが、それもこれも、作文的技巧欠如ということになります。

▽私達は余りにもSMという言葉に、馴れ過ぎていてではないでしょうか。簡単に意味が通じるので、ついSとMで表現しようとするが、そういう行き方も、一考を要する様に思えます。

サジスト・マゾヒスチックなどという言葉も成可く遠慮して、矢張り美辞が必要の様です。『マゾヒスチックな感情』と書くより、『いじめられて響く心』の方が、見た感じの文字面が良く、『真裸身』よりも『まるはだか』又は『生れたままの』という活字の方が視覚的に、刺戟が少い。久我さんの仰言る様に、これからは「表現新語」がどんどん産れて来ることでしよう。

▽目的の為の方法は、総て自分達で創り出して行かねばならない。これが今の心境です。

『ア・ロハ』

—— テメエガテメエの葬式を出し

テメエの靈に対して

慎んで哀悼の意を表する

『故木戸川 健』氏の

心イキと鼻イキと生イキ——

木戸川 健



A 真理

『書きたいから彼は書いた事だ。そしてハジ
を書きたくなかったから、彼は去った事だ』
(黙って去りやあ、イイ男だったのに。——
箕田京二)

B お通夜

辻村隆「彼が誰でも俺達には関係ない。そ

れより、読者間にルールのないのが問題だ」
夜乃探郎「やたらに、私信を公開し合った
りするから——。これじゃあ大物は近づけな
い」

芳野眉美「大物じゃあない——しかしSM
を理解しようとした、これは認められる」

団鬼六「ぼくは評論家ではないかと思っ
ている。それも野球評論家だとニランでいる」
万田不仁「相撲評論家ではなからうか」

久我庄一「いや、政治評論家だろうよ。所

詮、頭のおかしい評論家のいつてる……」(彼
の文章は、時々カットされる)

橘行司子「結局は、オフザケなんだ。しか
し、堂々たるオフザケだ」

山本一章「トンマな野郎さ」

そこで、一同協議の末、彼の改名は△評論
院釈頓馬居士▽ときまる。

C お経

ナムタラカンノトラヤアヤア
天にまします、我等の父よ
ナムミョーホウレンゲキョウ

△騒動宗▽と△加素力▽と△総科学会▽がゴ
ツチャになって、大変芸術的な読経になる
が、仏さん、たくさん驚いて、眼を覚まし
た。

「俺は、無神論者なんだ。ホットケノ」

そこで、彼の宗教は△ホットケ教▽ときま
って、そんな宗教は日本にはないので、一同
再び協議の末「友よ、好敵手」と生前仏さま
にニラマレていた、彼芳野眉美が初代ホット
ケ教の教祖ときまって、下半身に紫の衣をま
とう事になる(オワカリかな?)

D 前 衛

お寺のトイレットの隣の八世相診断室Vで盛んに哲学している男、葉山啓。美歌夫人がトイレットから出てくる。とやま・かずひこがスグ入る。スグ！

「お寺にトイレットのある限り、既成道德の破カイは出来ないのだ！」

と葉山啓、大声でささやいて、前につんのめる。

半年後の日本非常識協会の、TV映画『前ムキの姿勢』の発想は、実に、そのシュンカンなされた。文部省主催芸術オマツリ参加作品の中で、農林大臣賞を受賞されたほどの異色作であった。彼、眼を白黒させて、感激を語る。

「K誌を読んでたおかげです」

E 精神貴族

食って、寝て、性交して、寿命がくれば死ぬだけの話。ホントにつまらない話ですからそのお話をもっと面白くするため、努力しようじやありませんか。そこで、故木戸川健氏は、そんな事をいったお方を攻撃して、大変オモシロかった。

麻生保「麻生はちっとも面白くなかった」

黒淵嬰一「俺は天才であるに違いない」

と、雲を見つめて、泣きながら笑う。

黒淵賀集子「結局は、ゴーイング・マイ・ウェイなのね」

『註』八ホットケ教Vの教条は、ゴーイング・マイ・ウェイで、そういった人、辻村隆は八ホットケ教Vの八花も実もある院Vの校長先生である。

F 遺 言

麒麟児久、保藤久人、三原寛、栗瀬長、の八ホットケ教Vの誇る四人の流行歌手によって八評論院釈頓馬居士Vの遺言状がうたわれる。オハヤシは高野原美、福田久文、宗川一子、ブラスバンドは、須渾朔、湯谷照夫、小泉正、海野美津男、田代俊夫。オハヤシのシキシャは、奮斗士好太、バンドのオシショウサンは、黒田寿。そこへ持って来て、剣持逸人、黒井珍平、安田隆夫、兵頭庫一の念仏が入り、更に又、宝塚二三夫、東山映史の詩吟が入るといふから、これはもう、とんでもない事になる。脱線もここまでくれば、芸術である。西条操が八想う琴Vをひいて開幕。さて、その遺言状であるが――。

『美柳輪生様――ぼくの八世相診断室Vにはよくあんたが顔を出してくれるので（連作、Mフォト）診断しない訳には、いかなかったよ。編集部もたんと人が悪い。いつも全裸ですが、お風呂に入る時は、着るんでしょうか？九月号の馬上の御婦人はノーパンでしょうか？眼をつむっておられるのは、ぼくのお思想に反逆しているんでしょうか？――以上、お答えは結構です。診断出来ました。アナタはMである。（木戸川センセ）』

『夜乃探郎先生。アンタもたんとお人がワルイ。アルバイトに八マンガVを書いておいでだったとは。特に二番目はヒット作である。この人物ただものじゃない。ピエロといっている奴にピエロはいない。政治家であるに違いない。スッテンコロリン、と落選した夜乃市長であるに違いない。嗚呼、夜乃探郎先生。――マイッタ！全くマイッタね。アンタが何ものであると、本ものである。さし絵は本当にケツ作です。ホント。（健ちゃん）』

『箕田京二編集長殿。――長い間、楽園をお騒がせして申し訳ありませんでした。しかしK誌には、私のような行き方もある、という点には、充分御留意下さいまして、対良識社会に今後どう接触して行くか、御参考の一助とも

なれば幸いです。私の発言は、ほとんどが良識社会むけのもので、何故そうしたかといえ、K誌の読者の中には、SMに無理解で只刺激のみを求めて読む、良識人が意外に多いからなのです。その中には、悪書追放運動の先頭に立っておられる方々もおると私はみえています。彼等は、私の発言で何かを感じた筈です——。横浜の根岸線に、日本でただ一つの広告の無い駅がございます。国鉄は自慢にしているのですが、乗客には余り評判がよろしくない。清ケツすぎて、眼のやり場に困ります。とに角、全体に活気がない。△広告のない駅▽とは、道徳が勝ちすぎた社会のサンプルみたいなものです。——とも角、良識というのは大勢の人々の公の意見なので△私▽の意見が別にある場合が屢々で、それが人間だと思ふのです。つまり、公人と私人とは違ふので、K誌は私人の雑誌として存在価値が確かにある。だから、私は△私人▽として書いたので△木戸川健先生▽とか、ただものではないとか、又、サントリーがどうかとか、謎めいた事をいわれては大変迷惑なので、かくは、こういう葬式を出す次第になった訳なのです。私人△木戸川健▽は木戸川健なので、ホットケ、といいたいのです。私は

決して怒ってはいませんが、どなた様にも御迷惑のかからない中△木戸川健▽を殺した次第なのです。そこで最後に一言、△私人▽に△公人▽をおくべからず、これが、△私人雑誌▽K誌の憲法第一条でなければならぬと思います。公開状もその意味で反対したのです。夜乃さんほどの人物が何故△後悔状▽とシャレなかったか、だったら、私は只微笑したただけなのです。全く悔やまれます。くどいようですが、これは△私人雑誌▽のルールです。夜乃氏は充分シャレの出来る人なので△後悔状▽こそ本筋でした。——これで、一応去りますが、又、いつか、別のペンネームで、今度は本腰を入れて書いてみたいと思っています。その節は、よろしく御指導を御願ひ致します。

猶、十二月号はありがたく頂戴いたしますが、一月号以後は横浜の連絡先にお送り下さいまして、私には配達されませんので、御留意下さいますよう御願ひ致します。次の連絡場所は、十二号を御贈呈下さいました折御連絡いたします。(木戸川健)』

G 特に彼への遺言

十月一日、記。

「二、三年前、もつと前かな、知っているみたい」

「人生経験から、そう思うの？」

「皆様が、そうおっしゃるのよ。Sさんだって、おっしゃってた。——たしかに、お会いしたような感じ」

「感じだけでしょう。ムードに支配されちゃあいけない。とりわけ、女はムードによわいから——」

「そうかしら、ウイスキー召し上がる？」

「ホンモノ？ホンモノはどこか違う筈だ」

「でも、お染バーじゃあ、サントリーをジョニー黒だといって、出して、わからなかったそうよ」

ウイスキーの話である。話は飛躍していない。彼女はS氏から私のことをトリチガエテ聞いているはずであった。くどくど説明する必要は無い。何故なら、私はS氏を知らないし、従って、まして、彼女を知る訳がないからである。二人は、初対面であった。

それだけの話である。講談や、アンデルセンの童話とは、何の関係もない。

H 昇 天

ア・ロハノ。(嗚呼、イイキなもんだよ)

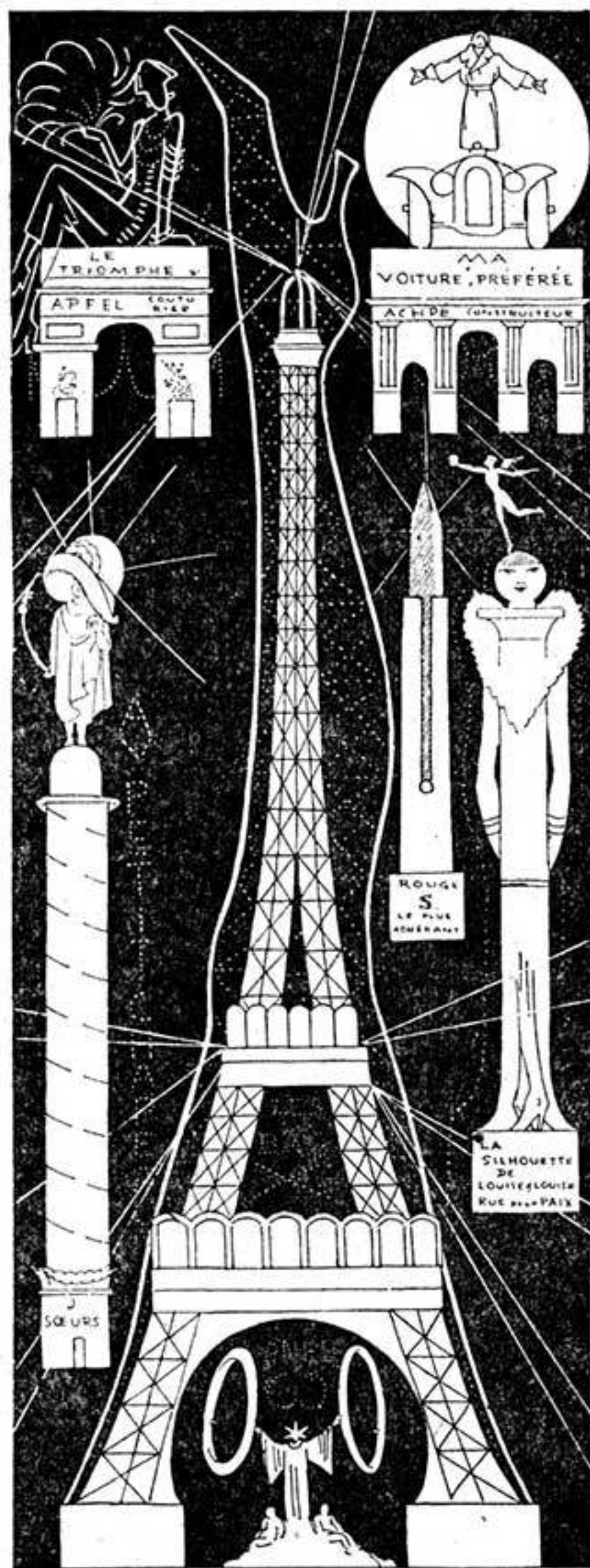
奇ク・フィクション劇場

「探郎SM版・

アチャラカ

パノラマ島奇談」

「夜乃探郎」



—この一篇を—

江戸川乱歩氏に捧ぐ—

「タイトル・バック」

原作・パノラマ島奇談 江戸川乱歩

脚色（KK的読物化） 夜乃探郎

主 役

△SM版・新造役名△

可目羅S男

美食 無限

辻村 隆

とやま・かずひこ

△助 演△

△原作名△△SM版・迷称△

人見 広介 根久太留助 芳野 眉美

菰田千代子 悩 麻姉子 森山美歌夫人

北見小五郎 西大 六郎 箕田 京二

（怪田編集長との二役をする）

ギロチン番台

羞恥 大説

怪剖OK子

卵投嵐先生

他「奇譚クラブ」メンバー・オールスタ

ーキャスト

黒田 寿

団 鬼六

羽鳥 水江

木戸川 健

探郎口上

（懐しの「空にさえずる鳥の声……」のジン

タの音につれて『奇クフィクション劇場』司会者 夜乃探郎氏登場)

長篇探偵小説『パノラマ島奇談』。——お、この題名のなんと血沸き肉躍るせつないまでに胸に迫ることよ。

さて、

満場のマニア諸兄弟よ。この、「パノラマ島」のストーリーはよくご存じのこととは思いますが、「容貌の酷似を利用して死人が蘇生したと見せかけ、自己を抹殺した上、のこされた巨万の財を意のままに蕩尽する。故人の妻の胸中に疑惑の念がきざしたのを察してこれを始末するが、結局主人公の犯罪があばかれるという」。

——一応探偵小説的仕組みとは相成っていますが、ここで特記すべきは「パノラマ島」という華麗な人工楽園が誌上に絢爛たるロマンを再現していることではありません。

いま、

おこがましくも

「探郎私家版(アチャラカ式SMのドラマ)」を發表致しますのは、司会者たる、夜乃探郎も、この『パノラマ島奇談』に若き日の耽美な思い出を持つ一人ではあるからでもあります。

では、モデルとなった皆様方よ! (妄言多謝) むしろ微笑されんことを——。

△参考▽●江戸川乱歩『パノラマ島奇談』

大正十五年十月より昭和二年四月まで「新青年」に連載

●『奇譚クラブ』昭和四十年一月号〜十月号まで

開幕前のアナウンス

——時は現代——

「S県はM郡の南端、O湾が神酒洋に出ようとする海上に、径七キロほどの小島が浮んでいます。この『沖の島』は全島、T市の富豪名家のものでしたが、数年前、にわかに大規模な造園工事が始められて、近隣の注目を浴びました。ところが、殆んど完成に近づいた頃、当主と夫人が相前後して世を去ると、自然は忽ちすべてを荒廃に導き、鬼気せまる哲學的超芸術の残骸をさらすばかりとなりました。この不可思議のかけには、当事者のほかにはだれ知る者もない、妖美な珍奇?なSM的なドラマが秘められていたのです。

幕ひらく

——外は雨であった。卵投嵐先生は、顔を上げ大股にあるきだした。『セントラル劇場』のネオンが、三々伍々、家路につくストリップ・ファンの背に別れの色彩を投げかけていた。△人生は、何んといったってユーモアとペースだ。華やかな、そして笑いあるストリップ・ショーの影にただよう哀愁は、まさにロマンだ。それから比較して、風船狂野郎の持つてまわったようなシャベリ方は頂けない。ユーモアどころかポンチ絵にもなっていない。だが、人ごとではない。『芸術的に観てやろう』など、踊娘のアソコを見ながら、紳士のエチケットである。ともあれ彼女たちもおれも救われるなんて思うのも、現代のドンキホーテでもあろうか。▽

卵投嵐先生は、いつか泣きながら『ロックの歌』を口ずさんでいた。それは楽屋で、ラーメンを食べながら、ストリップ芸術論を戦わせ、果てはぶん殴り合いになった過ぎ去りし青春のうたでもあったのだ。

一台のハイヤーをとめ、嵐先生は乗った。

「旦那、どちらまで」

「浅草」

雨にけむるK国道を、車は無然とした嵐先生をのせて疾走する。

「アジャ―！」と、彼はつぶやいてみた。運ちゃんか「何か？」と前方を見たまま、ききかえした。

「いや、ひとり言だ」——そして嵐先生は腹の中で「パー」と言った。

浅草の星の下に、冗談ではじまり、真剣になり、そして冗談で終った恋の一頁。……そう、その時からだ。人生とはユーモアとペーソスだと、おれはほろにがい哀しさの中でさとしたのだ。嵐先生は、にがい煙りをふうつと吐いた。

『よしの』というネオン・サインが夜の街を見る嵐先生の眼にチラリと映った。

「止めてくれ！」

彼はどなった。

「まだ浅草までは……」

「いいから、ここで止めるんだ」

『よしの』の前で根久太留助がぼう然と立っていた。嵐先生を見るなり「水ですか」と太留助は言った。

「ぼくは、未だ何んともいってませんよ」

嵐先生は微笑して見せた。そして「芸術診断室を受け持つ、卵投嵐です」と自己紹介した。

「ヒャー」と太留助は飛上った。

「いま、いま菊編集長が、わざわざ大阪から来られたばかりです。それが又鶴見から貴方が……」

その時、よれよれのコートを、まとった一見、こうもりをおもわせる口元がとがった中年男が、幻の如く音もなく出現した。

「風船狂野郎です」

太留助はもう一度「ヒャー」と飛上った。

「嵐先生、太留助さん、塩の代りにご遠慮なく生卵をどうぞ！」と風船狂野郎はニヤリとした。

高級酒、よしの特製『神酒』はどうも口に合わない？嵐先生と風船は、もっぱらジンフイーゾをのみつつ珍誌『菊』の話のあれこれに話が咲いた。会ってみるとだれもが菊が好きなのだ。なんのことはない「貴様と俺とは同期の菊」だ。ああ泣かせるネエ。（それこそユーモアとペーソスだ）

「江戸川乱歩が死んだ」——だれともなく言葉がもれ、話題はもっぱら乱歩の作品に移った。

飲む程に酔う程に、風船氏は幻にあこがれる。

いつしか、パノラマ島は仮設SM劇場前の大広場に風船狂野郎は立っていた。

パノラマ島はSM祭の真最中

パァン！大音響とともに花火が闇空にひろがったと思うと巨大な虹の橋となって華麗な色彩が点滅する。やがてそこから妖しき香りをはなつ小雨がパラパラと降ってきた。金や銀モールで飾られた展望台で今宵のSM祭の主催者・パノラマ島の王者・根久太留助は、かたわらにはべる悩麻姉子夫人をかえりみて歌うような口調でささやいた。

「麻姉子よ。ごらんない。あの虹こそ聖なる神酒の象徴。この小雨こそ菊・モデル陣が産出した液体をカクテルした物だ」

スッキリとしたえり足をみせた和服姿の彼女は、ふと太留助の言葉に疑惑を感じた。蘇生前のまだ健康だった頃のM的な夫は鞭で打たれることを好んだが、水は、このまなかつた……。この男は？——

——そんな二人を中心として虹の花火を合図にいよいよ菊誌・怪田編集長総指揮の下に、（アイデアと資金は太留助提供が多々あることは言うまでもない。）SM祭は火ぶたを切った。

◎

SM劇場では菊・レギュラー・メンバーS男特出による『花のSMファンタジー・緊縛コンクール』がはじまった。

第一回プレイ・責めるは坂野腹美氏・お相手は八啓子散華Vでいっそう油の乗ったマゾ女性のNO1・超塚啓子嬢。

彼女は上着を脱ぎ、スカートのファスナーをはずすと手早く脱ぎ去り、胸飾りの美しいレースの付いたバイオレットのスリッパの紐を丸やかな肩からはずすと、足もとへ滑らせ、ブラジャーとピンクの薄いパンティ一枚になって立った啓子は、

「王様の好みのままに」と腹美氏にニコリ笑ってみせた。その時、ベレー帽をかぶった羞恥大説先生が、紫地の色褌をもって舞台上ってきた。

「これは『花と蛇』の静子夫人着用のものですわい。まず余興にこれをして、一つカッポレでも踊られてから、腹美氏に全裸股間縛りをされたら、どうですか」

場内、そこから拍手が上がった。

「浣腸はどうした」という声がした。

「いくらなんでも、ここは万座の中だぞ」

とはね返ってくる。

「羞恥こそプレイの最高責め！」

とドナル声もした。

審査員席から、可目羅S男氏が立上った。

「モデル陣は、十人や二十人でないのだ。こんな調子じゃ、とても一晩では終らん。それにモデル達も、この会場だけでいつまでも独占するわけにはいかない。ぼくだって見るだけでは、この腕が承知しない。ようし、舞台も広い。モデル嬢を全部出場させてS男全員で責めてみるか」

すぐ可目羅氏は、隣席の怪田編集長に相談をかけた。

「『酒池肉林』という言葉があるが、羞恥乱賞か。これは面白い」

怪田編集長はケラケラと笑った。

人混みの中で、風船狂野郎はつぶやく。

「SM・また、楽しくスリルあるものよ。だが、この群衆にもまれ孤独あるペーソス如何にすべきやV風船氏は、会場を離れ、そこだけいやに陰気な原っぱに近づいた。

青い豆電球が二つ三つ、おぼろな灯りをあたりに投げかけていた。

竹で組んだかこの内では、二本の柱が立つ断頭台の下で、黒い頭巾に眼だけ光らせた

一人の男が、刃をトイシでゴシゴシと磨いていた――。

背筋がぞくつとした。それでどもりながら風船氏はたずねた。

「あの、その、SM祭には、処刑もあるんですか？」

黒頭巾の男は「ヒイヒイヒイ」と不気味な笑い声を上げつつ答えた。

「ラストをかざる大切な式典でさア。あんたこの私を、知らんのですか、ギロチン番台です。SM時評の橋行司子には、これでも斬首のペンさばきの名人芸がみとめられて八努力賞Vまでもらってるんですよ」

そして又、イヒヒヒヒと、ふくみ笑いをした。

その頃。根久太留助は麻姉子連れで気嫌うるわしく、つまようじなどを使いながら女の裸体でくまれた人魚橋を渡り、大理石で造られたトルコ風呂に足をむけていた。

花火は五色の花弁となって万華鏡さながらに、いつはてるともなく夜空にパラダイスを描きつつづけていた。その合間をぬって鞭打ち影絵とか、キク・バンザイなどの文字が浮彫りになる仕掛花火も、小高い丘で打上げられていた。どこからかアナウンスされる声が、

涼しい風に乗ってきこえてくる。

「さあ、さあ、『芸術診断室』長・卵投嵐先生特別出演のユーモアとペーソスあるストリップ・ショーだよ。笑って泣いて、ほろにがい二時半のお楽しみ」

『耽美地獄』の前では、しかめっ面した苦賀正一氏が「お湯の中でもこうりやSMの花が咲くよ、コリヤ、コリヤ」と、森繁節調でしぶいのどを入湯している裸女たちのお乳のあたりを見ながらきかせていた。彼女たちはすべて猿ぐつわをされ後手にくくられていた。——どこからともなく現われたたくましい裸女の行列が、無言のまま円陣をつくった。

「麻姉子、これが私たちの乗物なのだ」人肉の運台は、中央に太留助と麻姉子を包んで宝石が散らばる花の山々をめぐりはじめた。

「なんて、ロマンチックなサディズムです」と

麻姉子は、よくしなる黒光りする鞭で女どれいのお尻を、乳房を、背をうちつつ「ホホホホ」と気持よさそうに笑い声をあげた。

しばらくして、麻姉子は、きっと太留助をにらむなり

「やはり貴方は源三郎の性格とは違います。源三郎は……」と口走った。

「江戸川乱歩先生の『パノラマ島奇談』は、ここで、貴女の首をしめることになってますが、私は優雅な生活をしてきた男ですから、そんなことはしません。ただし」と、太留助は言葉をやめ、舌なめづりした。

「現在の生活を主題にした、生活に立脚したSM現代小説とは、——思想とはなんだ、芸術とは、いや陽気なニヒリスト。ああショパンの夜想曲変ロ短調第九の一、いやいやモーニンウィズヘイゼル（ヘイゼルと共に呻く）か」etc太留助一流の神酒超哲学が、ポンポンポンとまるで機関銃の如くくちびるから飛出すや、さすがの麻姉子も怪気？に当って「ウーン」とその場に倒れてしまった。

「お前を生かしておいては、おれの夢が挫折する」

そうもん絶せる麻姉子の青ざめた顔を見る太留助の胸の底は、一度でよいから直接的に神酒拝受をしたかったVという悔いが波紋のように広がって行くのだ。相も変わらず火花が光の金粉をふりそそいでいる——。

火花と言え、巨大なひっくりガエルが仕掛され光絵を彩る丘のふもとでは、いまこそ晴れの生胎解剖を受けんものと、大方マニアの期待の中に、ネオン輝やく、白塗りの特設

『武烈・芸術館』に入る怪剖OK子の姿があった。手術台にくくりつけられあちこちに注射を打たれ……鋭利なメスがキラリと光り……もう、私はマナイタの蛙だ。どんなにこの日を待ってたか、……お腹がズバリと切り裂かれるVOK子は強烈な自虐心理にぶるうと身体をふるわせた。

「もし、もし、記念のために落していかれませんか」

美食無限氏が、彼女の背に声をかけた。「どうせ、浣腸されて捨てられてしまう。これが最後という時の生命のカタマリはまさにばくにとつては貴重なたべ物ですよ。おお、黄色な宝石」

菊誌にとつても、前代未聞ともいうべきマゾ女性NO1・超塚啓子嬢をはじめ東京からはるばるはせ参じた無四花悠紀子・刺青姐御丘原清子・etc諸嬢のモデル陣総出演による責める者ベテラン・可目羅氏。腹美氏etcによるパノラマ的一大緊縛プレイはここに盛況裡に終りを告げんとし大舞台狭しとばかり、股間縛り・足挙げ椅子責めやら猪吊り・二つ折エビ責めなどetc数え切れないモデルたちが悦虐のうめきをあげていた。

夜空に火花・地に縛られモデル群・そして

S男たちの熱っぽい、サディズム的な眼が一杯。

—その中で、怪田編集長はSM祭の成功を顔一杯に現わし幾度も幾度も、汗をぬぐい可目羅氏に「よかった、よかった」を連発していた。

「他の会場も報告によると大分『哀れなどれい展示会』etcお盛んのようなが——、ところで編集長、根久太留助君はどうしたろう？パノラマ島の王様が姿を見せなくては……」と、可目羅氏はとっせん言った。

—その根久太留助は、パノラマ島特設SM放送局より全島のSM同志にむかって臨時ニ

連続Mフォト組写真

二人の女性の餌食 略号「ほや」

大手札三十六枚一組 六〇〇〇円

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名
M男性……Mモデル志願者M・H氏〕

男性をいたぶることについては定評のある山原清子が他に一名のアシスタントの女性を使って一人のM男性を、こてんこてんに虐めしめる有様を順を追って、刻明に写真化、マゾファンのおぼろげなくぞくぞくする場面ばかりを集めました。

ユースを発表する所であった。係員・サクラとボタンとカブ子の諸嬢が、その前振れとして、王様お好みの『サクラサクラ変奏曲』や『アメアメ降レ降レ行進曲』などetcのパノラマ・レコードをかけはじめた。

「麻姉子はこの国の女王となって、私の他だれ人にも姿を現わさない」と根久太留助は宣言した。すべての破綻は悩家の財力によってつくることが出来ると思ったからである。

全島をSM・カーニバルの狂気が覆い、もはや底抜けのドンチヤカさわぎが地上に完全に実現することになった。そう根久太留助は信じ勝利の歌をさげんだ。——その時、モジャモジャになっている髪の毛をさらにモジャモジャにするために引き掻き廻しながら、眼鏡をキラリとさせ、木綿の着物によれよれの兵児帯を締めた男が現われ、ボンと太留助の肩を叩いたのである。

「ご存じ西大六郎！」と彼は言った。ところが、太留助のかたわらで相も変らず「いく、いく、サクラ、いくう」と鼻を鳴らして甘い声を出している生れたままの優雅な姿でいるサクラ嬢や、チントンシャンなど口ずさんでいるボタンを見ると「ホホウ」と眼を細め、「ロープは無いかい、カメラはどこか」とう

ろちよろはじめた。

「大六郎さん、こまりますね。貴方は迷探偵となってるんですからね」

司会者・夜乃探郎氏が登場した。

「私の考えているストーリーでは、これからこの太留助君を相手に、一世一代の菊的SM珍推理をごひろうするクライマックスを貴方は受持っている。そこから太留助君の自殺となる」

大六郎は、そんな言葉はどこ吹く風。ますます「ホホウ」を連発し、面倒くさそうに夜乃氏にむかって、

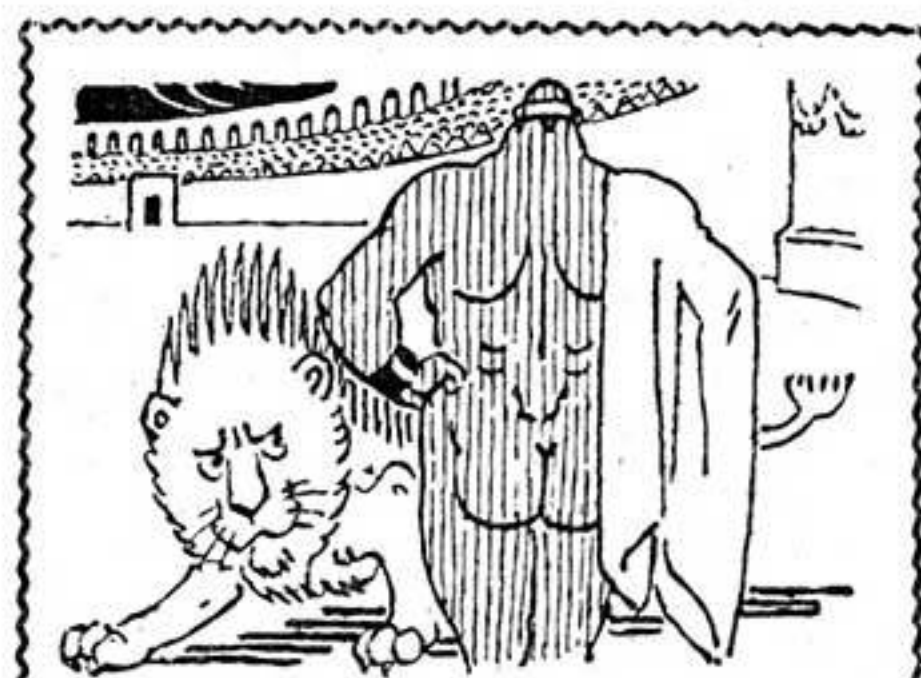
「珍推理より、プレイの方が面白そうだ」

……「プレイね」

夜乃氏がそうつぶやいた時。あの幻の世界が消えてテーブルの前に放心したような風船狂野郎が坐っていた。

『よしの』のマスター、根久太留助が近づいて「風船さん、もう大分夜も更けてきましたよ。卵投嵐先生は、とっくにお帰りになりました」と、言葉をかけた。

「眼ざめれば、パノラマ島変じて現実なる都会の夜は、いっそうペーソスを感じるか……」風船狂野郎は、風船の如くフラフラと表に出たのである。



雲は天才である

— 黒淵嬰一氏へ —

木戸川 健

△SMより見た世界史シリーズ▽とギリシャ神話再編成△アリアドネ▽、大変苦勞して読ませていただきました。そして、感動しました。苦勞して、読んだ価値がたしかにありました。

芳野眉美氏などが、これだけのものを書く必然性がない、又、人間不在である。という点で批判されましたが、たしかにそういう見方も出来ます。しかし、あなたには、これだけのものを書く必然性があったのでしょうか。芳野氏の△神酒▽に、私たちが余り必然性を感じないと同じように——。黒淵氏の△世界

史シリーズ▽にも、必然性がないという事はなかった。

私は、読んだのです。だから、自信を持って批評出来るのです。

あなたは、作品で勝負された。総てを、作品に賭けてこられた。私はK誌の読者の一人として、これを受けましょう。従って、カチューシャの、いや、賀集子夫人の書かれたものは、この際ぬきです。つまり、賀集子夫人には同情しても、あなたには同情しないという意味です。

これだけ確実な文章が書けながら、反駁文

を夫人に代筆させるなんて、私は許せないのがあります。断じて——。

実に、正確な安定したセンテンスである。そして、驚くべき、かたよった知識である。その知識を、あまねく披瀝したかった。あなたが書かれた動機、及び必然性は、そこでしょう。私は、そう解釈しました。

ただ、驚くべき、かたよった知識が惜しむらくは遠いお国の、遠い昔の出来事にあったという事です。私には、まるで知識はありません。片仮名の人名や地名を追うのに、勢一杯でした。大部分の読者も同様でしょう。

それを御承知で、あなたは黙々として書かれ、地図までもそえられた。(八月号、殉教の娘バジリカ) 驚くべき、プライドです。

K誌という密室的な雑誌の中で、黙々として、これだけの大仕事をなさっているあなたに、私は敬意を通りこして、驚異を感じております。正直な気持です。大方の読者も、多分、私と同じ気持でしょう。

もう一つ、正直な気持を加えますと、私は当初、これは原書を翻訳されたものではなからうかと、誤解しました。翻訳ばかりやっている、自分の文章が書けなくなるのです。原書にたよる事になる。依頼心が生じます。

しかし、そうではないとわかり——惜しむのです。これだけのものを、書かれながら何故、御自分を作品の裏にかくしておしまになるのか。エクセ・ホモ。（見よ、荆棘の途行く人）

芳野氏の発言に対しては、怒ってしかるべき筈です。そして、多くの読者は、その怒りをこそ、黒淵氏に期待していたのです。実は芳野氏自身も、期待していたに違いないのです。

怒るという事——それは発奮に通じます。人間はみな、けなされて怒り、ほめられて嬉しがり……、しながら成長して行くのです。子供のころと少しも変わっていない。ただ、子供のころは、抵抗と保護の対象が、両親であり、学校の先生であって、はっきりしていたものが、大人になれば、誰が抵抗し、誰が保護するか、その対象がはっきりしないという違いだけです。抵抗保護の対象の、はっきりしない事を、社会に出たといいます。

K誌は、社会の縮図である、とお考えになれば間違いはない。SMマニア、という限られた集団ではあるけれども、互いに、抵抗し合い、保護し合いながら生きている。△マクロ的△などと、難かしい事をいう人もいる。△字が下手で悪筆なので△などという人もいる。△ばくは二十二才です。十二年前からK

誌のファンです△と、引き算の出来ない人もいます。色々な人がいるのです。芳野眉美さんがいたって、ちっとも不思議ではない。そして、黒淵さんが怒ったって、ちっとも不思議ではない。

一人、△狷介孤高△ぶる事はないのです。第一、K誌のものが、一般社会から、見れば△狷介孤高△な存在なのですから、その中で△狷介孤高△というのは、おかしいではありませんか。嗚呼玉杯に△焼酎△受けよ。

怒れ！黒淵嬰一。

表題（雲は天才である）を、あなたに捧げます。ある日、雲をごらんになって下さい。驚くべき、かたよった知識をお持ちになっておられる、あなたは天才なのです。ローマ帝国やギリシャ神話を語らせたならば、日本であなたの右に出る者はいないでしょう。そこに、あなたの自信がある。しかし、ローマを語るに、多くの友はいない。そこに、あなたの△孤高△がある。しかし、ローマは一日にして成らず。

だから、雲をごらんになって下さい。あなたが精魂こめて書かれた、悲運の皇女アンナ・コムネナも見たであろう雲の、孤高な雲の上には、天が在る。広大な宇宙が在る「姫よ！」（賀集子夫人の事です）王（あなたの事です）の怒るのは何時か？」

「K誌内の雑事は、其方（私の事です）の専権（？）に属する。よいように致せ」

麻生保氏とは、別の意味で、これを書きました。反語ととられると意味がないので、はっきりいましょう。苦労して黒淵さんの作品を読んだから書いたのです。あれだけのものを読ませて、私に発言させないという法はありますまい。

最後に、再び問う。

「姫よ！王の怒るのは何時か？」

賀集子女史Ⅱ十月号△コンスチチューション△は、芳野氏に対して△コングラチュレーション△でしょうね。違いますか？

それから、貴女を通じて、嬰一氏に二、三質問いたします。

一、トロフィー（戦勝記念品、優勝杯）は△トロイ戦争△から来ていると思えますが語源の意味をお知らせ下さい。△トロイの馬△と関係がありますか？

二、これも、語源の意味ですが、ギリシャ伝説の英雄アキレスと△アキレス筋△とは関係があるのですか何故そうなったのか——。アキレスが△トロイ戦争△で、足を痛めた？その辺りを、くわしく。

三、神話と伝説の違いについて——。嬰一氏の私見で結構です。

御回答、お待ちしております。（九月十二日記）



ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野眉美

A 白浜津子さんの

読者通信を拝見して

書いて良いことと、悪いことがあります。

無視したり、話さないで、そのまま忘れてしまったほうが良いこともあります。これから書くことも、この部類に入る「悪口」かもしれません。編集長も耳が痛いかもしれません。でも、生意気な甘ちゃん、こういう意見もあるのだと、聞き流して下さい。

商売柄、種々な奇妙な性癖（常職的な性生活から考えれば）の人達と知り合いになります。どうみても「奇クの種類」であり、その「実行派」だと思うその人達に、

「奇クを読んでいる」

ときくと、返事は多くは同じなのです。

「読んでないよ」

とそっけない。

「どうして」

「つまらない」

大阪の「奇ク」に対して、東京に「風奇」

がありますね。「風奇」は誌面の半分を「男

の同性愛」にさいています。ところが、ゲイ

バーに行つて

「風奇、読んでいる」

ときくと、返事は前と同じです。

「あんな子供ダマシ、つまらないわ」

ときた。

両誌とも、残念ながら「性生活の実行派」

にあつては、あっさり

「つまらない」

でかたづけられてしまう。

我が「奇ク」は、SMの風俗文献誌ではなかったのかなと、ヘンな気持ちになります。SMを自分の性生活にとりいれていらつしゃる「専門家」諸氏（プロのことをいっているのではありません）に意外にソッポをむかれていゝという事実は、かなり多いのではないかと思います。

「綺麗ごとで、表面的で、物足りない」

投稿者の一人として、もう少しホメテクレよ、といいたいけど、

「雑文ばかりじゃないか」

といわれると、沈黙するより仕方がない。

「得るところがない」

というのです。

彼等の求めていることはわかるのですよ。

上手に云えませんが、実生活にSMを求め、実行し、同化させるSMのテクニックを「奇ク」に発見しようとしているのであって、甘っちょろい空想や誌上での遊戯や、過去の思い出ではない。

彼等が読みたいのは、強烈な現実の告白文や手記であり、学術的なSMの歴史や評論であり、文学の一種類としてのSM小説にほかならない。

こんなことを書く気になったのは、十一月号の読者通信で、大阪の白浜律子さんの意見を拝見したからです。即ち、

「少しマニアの方の個人的な(私信)とも云えるものが、多過ぎたのでは、ないでしょうか」
「やはり派手さはなくても、文献、告白、手記、小説などの、実に関するものがほしいございました」

「個人的な、それでいて、あまり実のない文が目立ったと存じます」

同感です。常連の投稿者の一人として、非

常に耳が痛いお言葉でした。

現在の「奇ク」は、雑文が主流で、あとはすべて支流になり、アンバランスが目立ちます。これでは「専門家」でなくとも、あきられてしまうのではないのでしょうか。

同人雑誌的傾向も結構ですし、読者の誌上参加も歓迎すべきことだと思いますが、やはり限度があるのではないのでしょうか。

白浜律子さんの通信を読んで、この限度がすでに越えている、かたよりすぎているように思えてなりません。常連のマンネリ化はさなければなりません。

文献、告白、手記、小説、評論をひっさげた投稿者が、どうしても、出現しないのでしょうか。現在の「奇ク」に必要なのは、学術的な研究室であり、告白や手記を主体とする読者の投稿者たちであり、SM小説の作家であると思います。

事実、現在の「奇ク」の投稿者の実力は、(私もその一人ですが)そう強力とは、オセージにも申せません。ここに「奇ク」の弱点を見るような気がします。

久我庄一氏には失礼ですが、十一月号の、『文学的悪讃美論』にしても、久我さんともあろう方が、あんな、子供ジミタ評論を書く

のかと、なんだか、がっかりしてしまいました。かえって、久我さんの限界を見せつけられたような気がします。

かつての沼正三氏の評論とまではいかなくても『悪讃美論』なら、題名を納得させるだけの論評がほしかった。

批評や評論はコワイですよ。他人を批評するつもりが、自分の無能をサラケダス結果にもないかねませんから。

『花と蛇』を「読物」だと、断言したのも、『花と蛇』の文学的な評論がほしかったからでしたが(『花と蛇』は勉強するところが多く、種々な方達の意見もほしかったので)夜乃探郎氏はローカイですから、あっさりと逃げてしまわれたし、今のところ、期待は裏切られたようです。

「奇ク」を読んでいて、そこに、満たされるものが感じなくなったら、私は「奇ク」を読む必要が無くなるでしょう。そして、現在の「奇ク」には、白浜律子さんと同じ意味で、私は不満なのです。

「一部の読者や目先の現象や、周りの声にだけ囚われず、いつも広い見地から冷静に編集されることが、奇クの真の発展につながると存じます」

という白浜律子さんの意見に、全面的に賛成し、この件に関しては、あらためて、編集長にお願い致します。

読む雑誌としての、「奇ク」を私は求めます。

B 映画「花と蛇」を観て

封切りの初日に（東京は九月七日）映画の「花と蛇」を観に行きました。

小説の「花と蛇」と映画の「花と蛇」は違いますから、その意味ではあまり期待しないほうがよろしいですよ。

（十一月号『奇クサロン』の魔猿生氏の「映画通信」と同感です、参照して下さい）

最後に全員が死んでしまうという、道徳的な映画ですから、青少年対策本部や文部省も喜んだでしょうし、映倫の審査員も「ホウ助罪」で送検されなくて、ホツとしたことでしよう。

映画の性風俗の規程って、なかなかむづかしいですね。

「性関係の取扱いは、結婚及び家庭の神聖を犯さないように注意する」

とか、

「色情倒錯、または変態性慾に基く露骨な行為を描写しない」

とか、

「寝室の描写、または凌辱描写は観客の劣情を刺激しないように充分に注意する」

くわしくは、週刊新潮九月十一日号をどうぞ。

団鬼六氏も、八月号の『鬼六談義』で「ピンク映画なら、ピンク映画に徹すべきだ」と書いておられますけれど、その「徹する」とともに、映倫規程と同じく、なかなかむづかしいようです。

ピンク映画ときたら、役者が下手で、ストーリーが陳腐と決まっているのに、女の裸が見たいから（俺も見たいけど）ピンク映画は今や花ざかり。

わずか数分の女の裸体シーンを見るために満員であろうと（全くよく入っていますね）なんであろうと、ストーリーの馬鹿さかげんにはうんざりしているのでしょうけど、汗くさい頭と頭に首をだして、画面をニランディル男どもの忍耐力のサマジイことといったら、それでこそ、その忍耐力があったからこそ、祖国日本は敗戦の悲運から這い上って今日の復興を迎えたのでありましょう。

役者が素人で、セリフを云わせればギョチナイことがわかっていいるのだから、役者にセ

リフをしゃべらせなければいいのにね。

そういえば『蛇魂』というピンク映画、登場人物は海パンの男とビキニの女の二人だけセリフをひとこともしゃべらなかったから、とてもよかったよ。画面が美しかった。やっといイトコロにきて、せっかく息を詰めて画面をニランディルのに、それなのに、ヘンな声をだされると、本当にガッカリする。

セリフを無くすだけでなく、顔の表情だって、普通のシーンも、二人で抱き合って、イイワってステキなシーンでも、同じ顔なんだから、いっそのこと、役者の顔なんてうつさなければ、観客が勝手に空想するから、かえって興奮して、レツジョウをもよおして、奥方様の顔が見たくなって、家庭の神聖が保たれるのではないかしら。

「花と蛇」の女優の中では、火鳥こずえさんが、S的で魅力がありました。

C 異性なれ

「異性なれした男女の肉体関係には、すべて深刻なところと、ふざけたような所がある」
武田泰淳「森と湖のまつり」から。

D ワルプルギスの夜

日生劇場九月公演俳優座の「ファウスト」を観に行った。メフィストフェレス千田是也（私が行った日は、千田是也が左足を骨折してピンチヒッターに松野健一が起用された）ファウスト平幹二朗、マルガレーテ岩崎加根子。演出千田是也。第一部全曲上演は世界で今度が初めてのこと。

「どんなものにぶつかってもめげずに、自分の行動で運命をきりひらいていく」ファウスト的人間「こんどの上演では、なによりもまずそれを推したい。自分の活動で運命をきりひらくというのは、この疎外の世の中ではむづかしいことです」

「私の『ファウスト』は、この作品のヒューマニスティックな面を、人類の歴史をつくり出していく人間の讃美を、強く押し出して行きたいと思っています」

と千田是也は云っています。

『天上の序曲』でのメフィストフェレスの言葉は面白い（公演では、第一幕第二場）

「私は、人間がどんなに苦しんでいるかを見るだけです。この世界の小さい神さまはいつも同じたちで、最初の日のように奇妙です。あなたが人間に天の光の影をお与えにならなかったら、人間も少しはましな生活ができた

でしょうに。人間は、それを、理性と呼んで、もっぱらの動物よりも動物らしくするために使っています。だんなの前の恐縮ですが、私には人間が、足の長いバツタのように思えるんです。年じゅう飛んだり跳ねたりして、すぐ草の中にもぐって昔かわらぬ小歌を歌うバツタのようにね。草の中に年じゅう寝ていればまだしもですが。どんなごみの中にも鼻を突っこむんですからね」

「まったく、だんな、いつものことながらあすこはほんとにひどいですよ。苦しんで暮らしている人間を見ると、かわいそうになります。私ども、あのみじめな連中をからかう気になれません」

「私は死人なんぞにかかり合うのは、もともときらいですからね。一ばん好きなのはふっくらした、生きのいいほったです。亡者にゃ、るすを使います」

『天上の序曲』で、メフィストフェレスは、だんな（主）と、ファウストを、どちらが奪うかという賭けをし、「ファウスト悲劇の第一部」が始まる。

主の言葉。

「人間というものは、努めているあいだは迷うものだ」

「よろしい、おまえにまかせよう。あの霊をその本源から引きはなして、つかまえることができたなら、おまえの好きな道へいっしょにつれておいてみい。だがな、おまえがこう白状せずにいられなくなったら、恐れいるのだぞ。よい人間は暗黒な衝動に駆られても、正しい道を決して忘れるはしないものだ、と」

千田是也は、メフィストフェレスの役割をこう説明しています。

「つまり彼が単なる悪魔ではなくて、人類の進歩をうながすその矛盾の一つなんだ、ということがよくわかる」

ファウストの前にメフィストフェレスが現われる『書斎』の場面（第一幕第五場）

ファウストが新約聖書を訳している。

「初めにロゴスありき」を、

——こう書いてある「初めに語ありき」
ここでもつかえる。だれの助けをかりて先に進む。わしはことばをそれほど高く値づみすることはできない。霊の正しい示しをうけているなら、わしは別に翻訳しなければならぬ。

こう書いてある「初めに意ありき」

軽卒に筆をくださぬように、最初の行をよく考えよ。万物を造りなすものはここであ

ろうか。

こう書かるべきではないか、「初めに力ありき」

だが、こう書きくだしているうちに、もうこれではならぬという感じがおこる。霊のたすけだ。不意に名案が浮かび、安んじて、こう書く「初めに行ないありき」。

こう書いたとき、ついて来たむく犬がみるみる大きくなり、正体を現わす。

「いったい、きみは何ものだ」

「常に悪を欲し、かえって善をなすあの力の一部です」

「そのなぞめいたことばの意味は」

「私は常に否定する精神です。それも至当です。なにゆえなら、生起するいっさいのものは、ほろびるにあたいするのですから。してみれば、なにも生起せねば一だんとよかったですように。そこで、あなたがたが罪惡だ破壊と呼ぶもの、つづめて云えば、惡とお呼びになるいっさいのものが、私の本来の成分です」

と自己紹介するメフィストフェレス。

ファウストは、メフィストフェレスと「賭け」をする。(第一幕第六場)

第二幕は、メフィストフェレスに、若返り

の薬を飲ませられ、マルガーチに恋をし、メフィストフェレスの仲介で、抱擁し、やがて破局をたどるファウストを追う。

グレートヒエン(マルガレーテ)の悲劇、懷疑と信仰に就いて。

「ファウストは、グレートヒエンのいっさいの意義が無邪気な単純さにもとづいていることを、たやすく見ぬく。彼女からそれが取りさられたら、彼女は自身としても無であり、ファウストにとっても無である。だからいま彼は、直断的な信仰のいっさいの裝飾を取り出し、それによって彼女を飾ることに喜びを見いだす。それは彼女によく似あうし、彼女はそれによって彼の目にいっそう美しくなるからである。このことから彼は同時に、彼女の魂がますます強く彼の魂に結びつくという利益を受ける。まるで子供のように、彼女はしっかりと彼にしがみつく。彼にとって懷疑であるものが、彼女にとってはいつわりのない真理である。しかし彼がこのように彼女の信仰をきづき上げていくあいだに、彼は同時にこの信仰の基礎をくずしている。なぜなら彼はしまいにはみずから、彼女にとって信仰の対象、神になってしまつて、人間ではなくなるからである。しかしファウストは彼女を

精神のより高い領域へ連れてはいかない。なぜなら、まさにそういう領域からこそ彼は逃げだしているからである。彼は彼女を感性的に欲し、そして捨てる」キルケゴール「あれかこれか第一部」より。

さて、最高に面白かったのは、第三幕第二十三場の「ワルブルギスの夜」で、惡魔の宴会。舞台でのクライマックス。

「メフィストフェレスはファウストをグレートヒエンから引離し、そこへ連れてきて、もつとはげしい肉の世界。官能の享樂に誘ひこむ。——と、普通にはそれだけした解釈されていませんけれど、こうした「惡魔の宴会」というのは實際にあったことで、これは当時の領主や教会の権力下に弾圧されていた当時の民衆、農民のいわばエネルギーの發散、民衆の健康な性の解放です」

と千田是也は書いています。

「夜宴は四月三十日から五月一日にかけての夜(いわゆるワルブルギスの夜)に開かれるが、これは異教の祭礼の名残だ。夜宴には、領主や上流階級の婦人も参加していて、仮装からそれと見わけがつくし、貴婦人たちは十七世紀になると、現実の夜会に出席するときと同じように仮面をつけている。惡魔は上流

ゲーテ「ファウスト」河出書房世界文学全集
集高橋健二訳と、「ファウスト観賞ノート」
を参考にしました。

E 聖少女

倉橋由美子「聖少女」新潮社は美しく優雅で面白い。

父娘、姉弟という二組の近親相姦の物語です。

「わたしはこの小説のなかで、不可能な愛である近親相姦を、選ばれた愛に聖化することをころみました」

と倉橋由美子は書いています。

「いま、血を流しているところなのよ。パパなぜ、だれのために？ パパのために、そしてパパをあいしたためです」

「いま、ほんとに血を流しています。痛くてすてきな気もち。いつからだったか……あのときは、一滴も血をみないですんだのに。でもこれはたしかではありません。パパの武器にほんのわずかに血を塗ったことに、あたしが気がつかなかったただけなのかもしれない」
「ねえ、あたしって、おいしかった？ 死後硬直みたいになってますかった？ あたし、パパを完全にあいすることができなかったわ」

というような、感受性の強い綺麗な文章です。主人公は『未紀』という少女。

「つまりぼくは妄想を分泌するアラジンのランプをこすっていたわけだ、そのぼくのまわりにひろがりはじめた月の量みたいな妄想のなかにはLがいた。だが気がつくとう入口のところで本物のLが、じっとぼくをみつめていた——ぼくはみられていたんですよ、あのはずかしい儀式をね、はずかしさで頭から血を噴きそうだった、そこでぼくはLにとびかかると、兵隊が蜜地の女を強姦するような手口でLを襲った。するとLは妙なしかたでふざけて半分の抵抗をしながら裸にされていったけれど、これがぼくの儀式に荷担する意志をあらわすものだということは、ぼくにもすぐわかった。Lは、自分が姉であったためか、丸木舟を操縦するような工合に、ぼくにまたがってしまった」

「愛シテイルといったんです。しかしこれはいつてはいけないことばだった」

姉のLと関係したKという第二の主人公の話。

「この愛のなかには、人間の、就中、現代日本の青年の持つ、凡ゆる欲望、凡ゆる衝動、凡ゆる妄想が住んでいて、そのお互いが互い

にとって比喻のような関係が絡まりあっている。そしてその錯迷が、そのまま作者のフィクションの構造となっている。作者は幾つかの嘘を、いかにも女性的な狡さで組み合せながら、人間性の新しい真実を、いわば虚像として表現してみせる」。

と感心しているのは、中村真一郎の批評。

とにかく、読んでいても、感覚的で、新鮮で呪文にあったみたいで、すばらしい。

近親相姦という主題にとらわれなくても、充分に楽しめる文学作品です。

ただ、欲をいえば、十五六、十七八才の少女の、性に対する、好奇心を、その肉体の成長、変化から、もう少しほりさげて書いてくれた部分があってもいいと思った。特に父親に対する憧憬を、肉体上からも、知りたかった。そこまで求めるのは無理なのかもしれないが、こういう小説は、えてして、精神的遊戯になりやすいものだから。

(おしまい)

× × ×

× × ×

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歓 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	脐そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外的後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外的逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上的若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ (東浦)

本誌二〇〇号突破記念原稿

アリアドネ

黒 湊 嬰 一

ビブリオテーク
△希臘神話の再編成▽

ラビリンス

筆者がアンブロシア及びネクターなる物質名詞を使用する場合は必ず希臘神話に於ける神々の食物及び飲料という原義を意味するのであって、奇巧的偶意ではない。

申し訳ないと思うが、筆者は斯かる物質に興味がないというより寧ろ極端な嫌悪を感じている。併し止むを得ない事情の為、甚だ上品ならざる問題を論ずる事にしよう。

迷宮がエヴァンスに依って発掘された時、水洗便所が発見された事は余りにも有名である。イギリス人はその直前迄、此の衛生設備の発明者として誇っていた。丘陵の斜面に建てられた大宮殿は、高低に依る水圧差を利用

して上水道を敷設し、浴室、洗面所、便所は銀管の蛇口から冷水又は熱湯を噴射するようになっていた。一方、下水は土管で海に導かれていた。便所にも壁画や彫刻があり、陶製便器にも色彩の焼付があった。

此処迄なら何の考古学書にも、クレテ島の旅行案内にも書いてある。読者も御承知であろう。問題は其の構造と配置と数である。

偉大なる迷宮の各階平面図を手にして、前記設備を近代高層建築に於ける同種施設と比較する時、若しもクレテ文明の担当者が現代人と同じ生理観念を有したならば、迷宮の住人は大部分が女性であったと結論せざるを得なくなるのである。但しこれは筆者の独断であり、斯かる論議は趣味にも合わないから、

この位にしておこう。

迷宮は東西百八十米、南北百七十米、中庭を除く一階の床面積は二万四千平方米。

堅固な石基礎の上に列柱を建て、平屋根を支えている。此の建築原理は古代世界に於て他に類を見ないものである。斑岩や色大理石を素材とし被覆や接着に金銀、青銅、真鍮、珠玉を無制限に使用し、内部は芸術的に価値の高い壁画、彫刻、装飾に満ちていた。発掘された宮殿墟を見たH・R・ホールは「迷宮に較べるなら、エジプト王の諸宮殿は色彩だけ美事な堀立小屋に過ぎない」と言った。

一階だけで百余室。中央に、広大な中庭を置き、其処に叢林、池泉、清流があり、広い開口部を持つ諸室は充分な採光と通風を以て

その周囲に配してあり、回廊は幅広く、天井は高かった。諸門や玄関には、衛兵詰所があり、若い貴族女性が剣楯を持って当直していた。階段下には武器庫、諸倉庫には数百輛のチャリオット、二輪馬車、家具調度、食器祭具類があり、地下室には葡萄酒やオリーブ油の大甕が並び、大小の広間には銘木、象牙製、銀張り、貝細工の卓や棚が整然と置いてあった。

特筆すべきは壁画で、天井は渦巻を主とした幾何学模様が多かったが、壁は千年の技術を誇る絵画で飾られていた。その色彩は発掘当時も、画家が今筆を擱いたと思われる程に鮮明だった。対象は花鳥、水棲動物、人物が多く、自然は巧妙に模式化されて特徴を表し人物は大胆に理想化してあった。女性の腰の太さが頸と同じであったり、眼が口の四倍あったりしていた。画題は自然の園や平和な航海場面が多く、戦闘や狩猟の場面は一つも無かった。島の生活は平和的だったようだ。

此の大宮殿は着工以来二千年間、休みもなしに増築され続けた。一部には地震損壊や老朽建直しもあったが、原則としてクレテの国運と共に拡張の一途を辿った。平面も立面も複雑極まるものになったのは此の為である。

宮殿内には海神や地母神の分院を含んでい

たが、平素は少数の王族、神官、政務官、管理者及び配下奴隷が住むだけだった。併し祭礼時にはクレテ王国の全貴族を収容して大宴会を開く事が出来た。その大広間は二階にあり、最近ダイダロスの設計で増築した部分である。よく磨いた輝石の表面に雲母を貼った床。銀張りの柱。貝を埋め込んだ天井。壁の一面は百合の咲く野、小鳥と蝶、クレテ風の青年男女を描き、他の一面は海洋、船、飛魚、蛸、貝、海藻、亀を表してある。この大広間では今、径十キュービットの円卓を囲んでミノス大王の一族が王太子夫妻の帰還を歓迎する宴会を開いていた。

ミノス五十二世ラダマンテウスはゼウスの如き子福者だった。戦場と同じく閨房に於ても勇者だったらしい。

王后パーシファエーとの間に、王子アンドロゲオース、グラウコス、デウカリオン、王女クセノデイケー、アカレーと計五人の子供を儲けた。

その後でアツティカから連れ帰ったカルキオペーをクレテと名付け、第二夫人に採り立てて王子カトレウス、王女アリアドネ、ファイドラの三人を生ませた。

カルキオペーは九年前に死んだので、代り

にアツティカ娘パレイアを第三夫人として四人の王子を得た。エウリュメドン、ネーパリオン、クリュセース、ピロラオスである。

パレイアと同時に側室になったデクシテアには子供が出来なかつたので、その妹エウクシノミアが代って第四夫人になり、王子エウクサンティオスが出来た。

長男アンドロゲオースは二十年前に死に、その妻も間もなく世を去ったが、遺児アルカイオースとステネロスは成長してパロス島に常駐していた。

次男グラウコスはアンティオペーと結婚したが未だ子供が無かった。

三男デウカリオンはメラニツペーと結婚し息子イードメネース、娘クレテが出来、他に庶子モロスが居た。

長女クセノデイケーはアシュナロスの所に嫁ぎ、母親と同名の娘クセノデイケーが生れていた。

其他の子供は未だ結婚していなかった。

以上の他にミノス大王の母エウローペが八十才で健在だった。

即ちミノス大王の家族は紀元前一四九七年現在、母と妻妾三人、子供十二人、子供の配偶者三人、孫六人、計二十六人で構成されて

いた。今日円卓の座に着いているのは、その内十四人だった。

主人席にミノス五十二世と王后パーシファエーが居た。

向い合った主賓席に三十七才の王太子グラウコスと二十九才の太子妃アンティオペー。

国王の右隣に三十二才の第二王子デウカリオン。その妃で二十六才のメラニッペー。夫妻の子供で七才の息子イードメネース。九才の娘クレテ。十五才の庶子モロス。

王后の左隣に第二王女アカレー。

次に亡きカルキオペーの遺児達。第三王子カトレウスは今年十三才。空席一つ隔てて第四王女ファイドラは今年十才。

最後が三才の第八王子エウクサンティオスを膝の上に坐らせた第四夫人エウクシノミアで以上十四人である。

缺けているのは、

シチリヤに嫁いだクセノデイケーと、その夫アシユナロス。及び二人の間に出来た娘のクセノデイケー。これは仕方がなかった。

第三夫人パレイアとその息子四人。これはパロス島に居た。王后パーシファエーに遠慮してクレテ本国に置かなかったのだが、これが同時にカルキオペーと同じ運命を免れさせ

る効果を持った。

故アンドロゲオースの息子二人もパロス島に居てギリシャ本土に対する前進基地を守っていた。

八十才の老母エウローペも居なかった。尤もエウローペは有名な人間嫌いで、六十年間天文台から一步も出ようとせず、気に入りの奴隷を側に置くのみで、先王の死後はミノス五十二世の家族でも特定の者以外は会おうとしなかった。

もう一人、重要な人物が此の席に居なかった。カトレウスとファイドラの間に空席があるという事は、当然出席を予想された者の不参を意味した。空席の位置から見ても、それは第三王女アリアドネのものに違いなかった。

牡牛や鷲を浮刻したコップ型の金盃が傾けられた。果汁で薄めた葡萄酒だった。イードメネースも小さい盃で相伴した。幼児エウクサンティオスさえも、母親のエウクシノミアの盃に一口触れさせられた。これはクレテ貴族の礼儀らしい。正餐では始めと中程の二回だけ乾盃し、あとは適量を個々に嗜んだ。併しクレテ人は決して泥酔はしなかった。(葡萄酒を飲む国民は概して紳士淑女であり、米や麦の穀物酒を好む人種は乱酔族が多いのだ

そうなる)

獣肉は香料で処理してあった。香料は、薄荷、印度胡椒、セロリ、月桂樹皮、セイジ、タイム、コリアンダー等。獣肉は羊を主として豚、鹿、兎であり、調理法も油で処理したものや、急な高熱で焙ったもの、長時間煮たもの、燻製等、種類は甚だ多かったが、一つ宛の量は少く、一口位を貝殻に盛って供された。他に家禽類の切身が銀の串に刺してあり鵜や鶉其他の珍鳥は麦粉の軽焼菓子に詰められていた。孔雀の脳、駝鳥の眼も、椰子の新芽のような珍奇な類と共に盛合せてあった。牛の肉は無かった。儀式以外に牛肉を食用としないらしい。

クレテ貴族は鳥獣類を多食しなかった。平民は羊肉を多量に消費したが、貴族は淡泊なものを好んだ。穀物やパンの類も余り食べなかった。一方、乳製品や卵料理、魚貝類は種類も量も豊富だった。牛酪や乾酪、クリーム煮等は特に発達していた。海草の旨煮も数種類あり、蟹、蝦、蛸、雲丹等の海棲軟体類は一般的嗜好の対象だった。魚貝は種々の加工程度に於て供された。生鮮に近い状態のものもあった。甘味料は蜂蜜だが、近代の砂糖と違って相当な貴重品であり、平民以下は常用

出来なかった。飲料は果汁、天然炭酸水、乳酸飲料等だった。新鮮な蔬菜類は愛好されたと同じく、供給も大きかった。原生アスパラガス、天然西洋松茸、錦太根、甘藍類、野生アークアザミも、その中に含まれていた。

クレテ島は果実が豊富だった。当時此の島はバナナも椰子も産した。葡萄と無花果は特に多く乾果にもされ、無花果の如きは奴隷の副食物として穀物と等量が支給された。(ヴェントリスの解説による)今日の宴席には柘榴、波旦杏に加えて各種の柑橘類が並んでいた。尤も此の柑橘は現代の如く品種改良されてなく、形は小さく味も酸味が多かった。

クレテ王国の楽人は、自由民の芸術家であり、歌手も同様で、宴席で踊る者の中にも多くの貴族娘が居た。

グラウコスがアツティカから連れ帰った新しい人身貢納は宴席の周囲に並べられた。

七人の少年は頸環から腰の後に吊った青銅棒の両端に両手首を繋がれていた。

七人の少女は革紐で後ろ手に縛られ、その手首は頸の環に吊られていた。

少年達は獣皮一枚で腰を包み、少女達は植物性の短い単衣で肩から腰迄を掩っていた。頸環と頸環を繋ぐ鎖は外してあった。その代

り、全員に腰縄が掛けられ、一人宛制服に本武装の婦人警官が付き添い、縄尻を把っていた。彼女等は楯と槍を持たず、短剣と答だけを帯びていた。

此処でもテセウスが注目の的になった。彼の後にだけは特に二人の武装女性が並んで、尊敬と警戒を表していた。

王后は食事の合間にアケーヤ人の子供達を見廻し、検分した。テセウスを注視する時間が一番長かった。一方、十四人の中ではテセウスだけが昂然と顔を上げ、パーシファエーを見返した。アカレーは明らかに感嘆の態度を表した。太子妃アンティオペーはアカレーを嫉妬するような眼で見ている。太子妃の方が三才年長なのだが、第二王女の方が宮中席次が高いので止むを得なかった。

「テセウスを選んで連れて来たのは良い判断でした」

食事が半ば進んだ時、王后パーシファエーは一同に向って言った。

「海神に捧げるにしても、これ程の容姿と体格を備えた者は今迄に見た事ありません。神も御嘉納なさる事でありましょう」

王后は静かな語調で、当然の事とでも言うように語ったが、アカレーとアンティオペー

は殆んど同時に顔色を変えた。

「テセウスを海神に捧げるかどうか、それは何うでもいい事です。この少年を放置したら次の九年以内にパラースを亡し、全アツティカを統一するかもしれぬ。エーゲウスだけなら九年に一度の貢納を課されても平静にしているではありません。テセウスを連れ去った事はアツティカが再び叛く芽を未然に摘み取ったわけであり、その判断こそ褒められなければなりません。あの子を撰んだのはグラウコスですか、アンティオペーですか」

王后の質問に対し、王太子夫妻は顔を見合わせながら暫く黙っていたが、やがてグラウコスが無然と答えた。

「何方でもありません。テセウスが自分から望んで犠牲に加ったのです」

大王も、王后も、王子も王女も、愕然として一瞬呼吸を止め、次いで一斉に吐息を洩らした。

「何と申されました」

パーシファエーが改めて聞き返した。よく解っているのに聞き返さなければならぬ気分になったらしい。アンティオペーが傍から解説を加えた。

「一悶着を覚悟していたのですが、テセウス

は自分から手を伸べて鎖を受けました。何でも、エーゲウスの方がテセウスを引き止めようとして種々頼むのを振切り、王には民の苦患に先立って憂うべき義務があるとか言つて七人の最初の者になったそうです」

皆の眼が拘束されているテセウスに向けられた。テセウスは何も聞えないかの如くに傲然と立っている。クレテ語は解らなくても、此の場の雰囲気は感附いただろうに。

「立派な男です。しかし恐い男でもありません。海神に捧げるのは惜しいが此の俚にもならず、如何に処置するか早急には決しかねますが、結論が出る迄は鄭重に扱わねばなりません。蛮族であるにしてもアッテイカの王エーゲウスの王子なのですから」

王后は金盃を一息に傾けながら言った。

「承知致しました」

アカレーとアンティオペーが同時に返事した。そして顔を見合わせた。二人共テセウス等の管理は自分の仕事だと思つていたし、且つそれを望んでいた。王太子妃アンティオペーはテセウス等をアッテイカから連れ帰った責任者であり、アカレー王女は警視總監として陸上の全監獄を管掌していた。

王后は少しだけ当惑の表情を見せたが、す

ぐに職務配分を裁定した。

「わたしとした事が、責任者を決めるのを忘れていました。テセウスとその他アケーヤ人の子供達は迷宮の附属監獄に監禁しなさい。その監視や世話にはアカレーの仕事です。但しアッテイカから連れて来たのはアンティオペーですから、海神の大祭で皆の縦覧に供する任務は王太子妃に願ひましょう」

太子妃と王女は共に不満そうな顔で、互に相手を牽制するような視線を交しながら、パーシファエーに一礼して承諾の意を示した。「二人はわたしの両腕です。協力し、分担して行かなければなりませんよ」

王后は念を押した。聡明にして年の功もあるパーシファエーは、此のような場合には冷徹で理性的だった。

宴の空気が少し白けた。王后は無理に話題を転じた。

「アリアドネが居ませんね」

今、始めて気が附いたような顔で言った。「お姉様は大祭に備えて牡牛の舞を練習して居られます」

十才のファイドラが賢しくも言った。併しこれは精神の鎮静を終わっていないパーシファエーを刺戟する結果となった。

「牡牛の舞も大切な行事でしょうが、アリアドネだけが踊るのではありません。王族貴族の女すべてに参加が認められているからにはアリアドネ一人が参加しなくても大祭に支障はない筈です。それに引換え本日のお饗宴は王太子が始めて単独指揮を執り、一艦一隊を率いて海外に遠征された記念すべき御帰還を、王族一同で祝う大切な催しです。牡牛の舞云々は此の席に出る事を嫌った口実でありましょう」

王后は激しい語調で言った。平素からカルキオペーが生んだ子供達には緊しく接しているのだが、今日は殊に不快を表していた。

「併し牡牛の舞も王太子殿下の御覧に供する為なればこそ、王女様は練習にお励みかと存じます。それに牛跳びは、間違えば生命に関する危険なもの。アリアドネ様の母上カルキオペー様が亡くなられたのも牛が原因と伺つて居ります。それに踊る前は肉食や葡萄酒を絶つのが掟なれば、仮に此の席に出られても、御食事は殆んどお出来になりません。あれこれお考えの上で缺席なされたものと推察致します」

ミノス大王の第四夫人エウクシノミアが控え目な態度で、しかし主旨は明瞭にアリアド

ネを弁護した。エウクシノミアはテミスキラ出身。即ちパーシファエーと同郷で、以前は王後の侍女だった。姉デクシテアが強い性格を持ちながらも王后には絶対服従しているのと異り、妹の方は王后と性格が合わなかった。ミノス大王の末子エウクサンティオスを生んでからは時々王後の意に反する事を言うようにもなった。常にミノス五十二世に迎合する傾向があり、今日の事もミノス大王がアリアドネを可愛がっている事を知っているが為の発言だった。年齢は十八才。名義上はアリアドネの義母に当るが、一才しか違わないので姉と呼ぶ方が妥当な位だった。そしてエウクシノミアは教養に於ても体技に於ても比類なきアリアドネに心酔していた。それは畏敬に近かった。

パーシファエーは氣に入らなかった。勃然と怒った。乃至怒った風を装った。

「お黙りなさい。わたしに対する僭越は許しませんが、アリアドネを弁護する事は太子殿下への無礼です。お退りなさい」

エウクシノミアは慄え上った。ミノス五十二世が見かねて仲裁した。

「今日は祝宴の佳き日だ。そう荒立てなくてもよいではないか」

だが王后は譲らなかった。

「軍艦の上やパロス島でなら別ですが、クレテ島、殊に此の迷宮ラビリンスの中ではわたしが主人です。クレテ王国の掟をお忘れなきよう。女共の取締りはわたしの責任ですから」

エウクシノミアは席を立て平伏し、床に額をつけて丁寧に謝ると、幼児を抱えて悄然と出て行った。三才のエウクサンティオスは卓上の料理に未練があつて泣いていた。

「アリアドネは、あとで緊しく叱っておきましよう」

パーシファエーは追い掛けるように、半ばはミノス五十二世に聞かせるように言った。

「アリアドネも余の娘だ。余り虐めてくれるな。罰するにしても大競技が終つてからにして貰いたい」

これが大王の精一杯な要求だった。宴会が果てた後、アカレーは八人の親衛隊を呼び入れた。テセウス等を引き継ぐ為だった。此の八人はアカレーの手信号だけで、機械のように動いた。アケーヤ人の少年少女は忽ち青銅の鎖で頸環を連結され、二列縦隊で引き立てられて行った。

迷宮ラビリンスの附属監獄入口は宮殿一階の廊下を行き詰めた奥にあり、巨大な青銅の二枚扉で遮

られていた。迷宮全体が丘陵の中腹を掘った地下にある事になる。女の門衛四人が扉を開くと、灯明りに照らされた玄武岩質の六角形柱状節理が見分けられた。洞穴は先が幾つにも分れ、深さは底が知れなかった。

此の大洞穴は迷宮やクノス市を建設する際に玄武岩の柱を伐り出した跡である。露頭に随つて良質の石材だけを掘り取った為、内部は複雑な迷路を形成し、出入口は、一箇所しかなかった。迷路の末端や両側は多数の獄室が作られ、坂や階段が縦横に伸びていた。洞穴全体が牢獄を成し、各房の格子、複雑極まる迷路、只一つの牢門、武技練達の女性門衛という四重の障害は凡ゆる脱逃を不可能にしていた。

大監獄ラビリンスは迷宮と歴史を同じくした。二千年に亘つて迷宮が増築されると等しく、それに必要な石材が運び出され、その穴が新しい牢舎になった。大監獄は全体が地下にあるにも拘らず、鐘乳洞と違って内部は乾燥して居り細い角柱石を巧妙に打ち抜いて人は通れなくても通気や採光には役立つ穴を幾つか開けてあったから、獄室は極度の非衛生環境ではなかった。

クレテ王国は警察国家ではなかったから、

此の巨大な監獄組織は、常時必要ではなかった。此処は、神殿や宮殿用として特別な忍従を要求される奴隷達を教育する施設だった。その組織と機能は警視總監たるアカレーの管掌下にあった。

二十人程の獄吏が整列した。勿論全部女性である。体格は優れていた。併し容姿は立派とは言えなかった。寧ろ醜女が多かった。

「近日中に海神の大祭が行われます。それ迄に此の子供達を調教しておきなさい。鞭を用いたり傷をつけたりはなりません。食物は規定量を与え、身体は綺麗にし、健康に注意する事。アケーヤ人ですから手足に油を塗る事も忘れないように。これだけを厳守するなら、あとは何をしてもよろしい」

アカレーの訓示を聞いて、獄吏共は微笑した。但しそれは愛嬌のない、醜怪な微笑だった。アカレーは粘土板に書かれた牢舎使用状況を詳細に勘案し、誰を何処に入れるかを決定し、且つ獄吏を配分した。少年の担当を命ぜられた者は歓喜を隠そうとしなかった。少女を貰った連中は、失望と憎悪の表情を示した。テセウスだけが別格扱いで、アカレーが自分で掴み、離そうとしなかった。

主洞は奥に入ると共に、無数の支洞に分れ

た。所々に灯があり、要所には石室の詰所もあって二人宛の番卒が当直していた。しかし長い通路や階段の大部分は無照明で、洞内の地理を知らない者が通行する事は不可能だった。

六人の少年達と七人の少女達は右左に、或は長い石段を上や下に、引き離され、暗黒の奥へ連れ去られて行った。一人一人に二人宛の獄卒が附いていた。アカレーは一人の親衛隊も連れずにテセウスを引立てた。テセウスの両手は青銅棒の両端に繋いであったが、これは警戒の為よりも他の女獄吏に対する遠慮の為にあるようなものだった。他の皆が別れ別れに遠くなってしまうと、アカレーは何の躊躇もなしに鍵で鎖を解いた。

「俺の手を自由にしてもよいのか。君を縛るかもしれないぞ」

テセウスの方が驚いた。

「縛りたければどうぞ。でもわたしは武器を持っているし、腕の力も幾らか自信がありますから簡単には縛られませんよ」

暗闇でアカレーの顔は見えないが、多分挑発的に微減していただろう。

「此方へどうぞ。用心して。床に裂目があります。十歩進んだら右に曲って、階段を上り

ます。石段の数は二十五」

アカレーはテセウスの手を握って導いた。

「テセウス。貴方がその気になれば、わたしを縛って武器を奪う事も出来そうですね。だけれど今更遁げたりする位なら、始めから七人の一人として犠牲に加ったりはしないでしよう。それに此の地下道は始めての者には絶対に解らない迷路です。貴下は餓死するよりは時機を待つ人です」

テセウスは黙っていたが、内心ではアカレーの隙のない計算に驚嘆した。

上ったり下りたり、螺旋状に廻ったりして行く事暫し。行く手に薄明りが見えてきた。人工照明ではない。確かに太陽光である。腕より少し太い位の穴から赤い光が芒と漏れて来る。穴は相当な長さのようだった。光の中に先を遮っている青銅の一枚扉が見えた。

「神殿に送る奴隷を、調教する専用の牢舎です。鍵はわたしだけが持っています」

アカレーは、銅扉を開き、室内の油皿に灯を入れ、中から鍵を掛けた。内部は二重の室より成り、奥は格子に隔てられた獄舎、手前は比較的広い室で、水槽、滑車、索具、薬品罐や奇怪な形状の金属製品、皮革類が雑然と置いてあった。

「調教用の責道具ですよ。貴下が使いますかそれとも、わたしが使いたいですか。」

アカレーは横目でテセウスを見ながら言った。しかしテセウスは何の反応も示さず、真直に奥の格子扉へ歩み寄った。

「何か、して欲しい事はないのですか」

アカレーは焦れったように言った。

「仲間達がされている通りにして貰いたい」
テセウスは自分で格子を開き、壁に打ち込んである青銅環の前に立った。

「よい覚悟なこと。敢て従順とは言いますまい。テセウス程の者が何の底意も無しに縛られるとは考えられませんから」

アカレーはテセウスの両手を広げ、壁の青銅環に鎖で固定した。

「クレテ王国は男を大切にする国。それに、率直に言つてわたしはテセウスが好きです。好きだから独得の方法で可愛がってあげましょう。でも、その前に頼みたい事があったら言つて御覧なさい。聞いてあげますよ」

アカレーは存分な皮肉を籠めて言った。

「ミノタウロスとかに捧げる順番を決めるのは誰だ。教えてくれるか」

テセウスが漸く核心に触れた質問をした。

「ミノタウロスの正体が何かは未だ言えませ

ん。併しそれは毎年一人の生身が必要とします。最初の年は男の子。次の年は娘。九年を周期として男五人、女四人です。貴方達は十四人ですから病死する者がなければ男二人、女三人が残ります。この順番を決めるのは、わたしの母で国王の後パーシファエーです」

アカレーは我意を得たりと答えたが、
「それは都合がよい。早速頼んで欲しいものだ。ミノタウロスに捧げる順番の第一位に必ず俺を選んでくれるようにと」

アカレーは突き離され、度し難いという表情で傍を離れた。去りながら言った。

「わたしはミノス五十二世の次女。クレテ島の警備を預るアカレーです。二十六才だけど未だ独身です。今に必ず無視出来ないようにしてあげますよ。今日はお母様の所へ行かなければならないけれど、明日からは遠慮しません。貴下は丈夫な身体をしているが、心の方と同じ位強いかどうか試して見ましょう」
扉が閉り、鍵の掛る音がした。

「アカレーと言つたな。第二王女如きに安売りは出来ない。俺の狙っているものは、もっと大きいのだぞ」

テセウスは両手の鎖を鳴らしながら独り言を言った。

アカレーが地母神^{ガイ}の分院に到着した時、王后パーシファエーは神蛇^{ビュッ}に生餌を与えている処だった。足なくして歩む蛇は大地の化身であり、世界を巻き固める大蛇はオリエントに普遍的な信仰である。

「アカレー。テセウスと楽しみ中を呼びつけた程の用事が何であるかお解りでしょうね」
王后は大蛇を膝に登らせながら言った。

「アリアドネの事と存じます」

アカレーは重苦しい空気を感じ、幾分赤面しながら答えた。王后は重々しく頷いた。
「子供だと思つていたアリアドネは其方^{そなた}にとっても油断のならない敵に成長しました。此の九年間、アリアドネが事故を起すよう念願しない日は一日たりとてなかったのに、猛牛を相手にしながら遂に一度も危険な目に遭わず、クレテ随一の牛跳び名人と言われるようになってしまいました。口惜しいけれど、わたしの若い頃も、あれ程には、行きませんでした。それにアリアドネは天文、歴史、詩文の諸学から建築、造船、製菓の技術に至る迄智識を極め、十七才の身で貴族青年には勿論、女からも愛される不思議な魅力を備えて、その周囲は何時でも生命に代る程の者が沢山集まっています」

「確かに。アリアドネを計ろうとする時に用心しなければならぬ者はエウクシノミアや乳母の^{オケワヌス}コルキュネ。妹の^{オケワヌス}フアイドラ。海神の巫女達」

「それだけではありますまい。わたしの見る処ではアンティオペーもその一人。ダイダロスにイカロスの父子。其方の信用している部下八人の中にさえ、アリアドネに心酔している者が居ます。モルパディア等」

「アンティオペーやモルパディアもですか」
「職掌柄それに氣附いていなかったとしたら怠慢ですよ。近頃は国王陛下もアリアドネを可愛がって居られる御様子。結婚を希望する貴族青年は数が知れませぬ。カルキオペーのように、牛に殺されたと言ったら疑われるのはわたし達でしょう。と言って、今度の大祭でも牡牛の舞の優勝をアリアドネに持って行かれたら、陛下は必ず^{オケワヌス}海神祭祠の実権をあの娘に譲られるでしょう。アリアドネはすべての青年に支持されて抜き難い勢力を固めるに違いありません」

併し王后は口で言う程に困った表情はしていなかった。

「今日の不遜を罰する意味で、大祭の期間中^{ラビリス}迷宮の附属監獄に監禁しておきましょう。す

ぐ行つて縛つて来ます」

アカレーは剣を握つて性急に言った。

「アリアドネが出場しなくては青年達が満足しないでしょう。クレテ島内での女の権力は法律で保証されているものの、男に叛かれたら終りです。如何に男が騙され易いと言つても見縊びつてはなりません。アリアドネの希望を失墜させる手段は、あの娘が得意としている牡牛の舞を、陛下や青年達の前で失敗させるより他に無いと思います」

「アリアドネが牛跳びを仕損う事など、有り得るでしょうか」

パーシファエーは硝子の大罎を取り出しながら例の凄い微笑を見せた。

「今度に限つてそれが起るのです。わたしの妹^{ヘカデー}キルケーがアイアイエの島で女王でありながら薬学を極め、魔法使いと迄言われている事は御存知でしょう。このパーシファエーは軍事や政治を主に学んだので、妹程には薬の知識がありませんが、それでも無智な者を驚かす位の事は出来ます。御覧なさい。材料を整えるのに三年。^{ヘカデー}闇黒女神に祈願しながら調合に一箇月。出来上った薬がこれです」

^{ヘカデー}闇黒女神はアルテミスにもペルセフォネにも変る地下の女神で、魔法の守護神である。

「氣味の悪い薬ですが、中味は何ですか」

「三年飼つた黒羊の肝臓、犬脳、蝶鮫の寄生虫、がまの眼、梟の内臓、大鴉の嘴、亀甲の粉、印度胡椒、モカ地方に産する豆、光草、キナ樹の皮、コルキュスの茸、コカの根、鰐鰂貝の搾り汁」

「もう沢山です。とても聞くに耐えません」

「そのような氣の弱い事ではいけません。未だ三十種もあるのですよ。煮詰めて火竜の^{サラマンドラ}体液と王蛇の^{バジリスク}血で練つたものがこれです」

「どうやら即効性、遅効性を取り混ぜた興奮剤のようだ。」

「これをアリアドネに飲ませるのですか。そんな手段はありません」

「慌てないでよく聞きなさい。これを四等分し、その内三つを牛の餌に混ぜ、三日続けて黒苺に食べさせるのです」

「そうすると牛が何うかなるのですか」

「この次が大切。競技直前に黒苺の頭に傷をつけ、残つた薬を塗り込むのです。牛は競技場の真中で、突然狂い出し、突き掛るでしょう。多分アリアドネが、背に乗って居る時にね」

アカレーは驚嘆した。改めて、赤黒い泡立っている魔法の薬を眺めた。

「恐しい薬です。母上様でなければ作れないでしょう」

「不勉強なのは其方です。アリアドネは、この位の薬は簡単に調合出来るでしょう」

「アリアドネが、誰に習ったのですか」

「エウローペ様です。あのお方もアリアドネがお好きと見えて、天文、易占、薬学の智識一切を伝授なさろうとして居られます。油断はなりません。早くアリアドネを処分しなければならぬ理由が此処にもあるわけです。薬を仕掛けるのは、必ず其方が自分でしない。親衛隊の中にさえアリアドネの味方が居るので、他人に任さないように。そうすればアリアドネは陛下と青年達の眼前で、確実に名声を失い、多分生命も墜すでしょう」

ヒュペリオン

既に三十輻の二輪馬車は伝令を乗せて全島に飛び、海神の臨時大祭を布告していた。

紀元前一四九七年五月一日。大競技場とその附属建物は全部の自由民に開放され、迷宮の門はすべての貴族を迎える為に開かれた。

クレテ風に着飾った貴婦人や平民の女が続々集まった。壮丁の大部分は国外や海上に居たが碇泊中の艦船からは数千人の男達が幸運な

在港を喜びながら上って来た。水兵や船員は悉く賓客であり、同時に審判官でもあった。鄭重に上席へ招待され、粘土板と尖筆を渡された。これは投票用紙である。

ミノス大王夫妻。王太子グラウコス。第二王子デウカリオンとその子イードメネースが群衆の歓呼に迎えられて入場し、天蓋附の貴賓席に着座した。カトレウス。モロス。エウクシノミア母子等は一段下の席に入った。

観衆は貴族や平民の壮丁。五十才を越えた男や三十一才以上の女。十五才以下の未就労者等で約三万。若い女性も妻も各部門で働いていた。王族もその例外ではなかった。彼女等は競技の主催者であり、運営責任者であり、或は自ら参加する演技者だった。

第二王子デウカリオンの妃メラニッペは進行係の責任者として、入場門の脇の詰所に居た。王族なるが故にクレテも列席者の貴族青年に飲食物を配る娘達の指揮者として迷宮の調理場と観客席の間を往復していた。十才のファイドラは粘土板の採点表を集計する係に擬せられていた。

第二王女アカレーは警備主任であり、武装を固め、例の親衛隊八人を連れ、揃いの軍服を着て、競技場内外を見下す楼上に居た。

王太妃アンティオペーは、アケーヤ人の少女少女各七人を観衆の縦覧に供する名誉の役を与えられ、貴賓席下の芝生に居た。

七人の少年達は青飼の太鎖で手を前に縛られていた。鎖の長さは肩幅に等しかった。

七人の少女達は細い革紐で後ろ手に縛られていた。手首と頸環を繋ぐ綱はなかった。

少年少女各一人を、アンティオペーの部下の武装女性一人宛が警護していた。アンティオペー自身がテセウスを担当して先頭に立った。彼女は武勇の性だったがグラウコスの妻で、地位も文官であり、アカレーのような強剛な側近を持たなかった。今日の役に用意した六人の武装女性は行政部の官吏で、武器の使用には熟達せず、身長も平均値程度の者が多かったから、アンティオペー自身を除けばアケーヤ人の子供達と較べて体格も歩調も見劣りがした。併し迷宮の附属監獄で如何なる調教が行なわれたものか縄尻も把られていないのに羊のように従順だった。不規則な二列縦隊で場内を一周した。テセウスだけが常に昂然と顔を上げ、観衆を逆に見返していた。アンティオペー等がテセウス達を曳き廻している頃、競技場西側に続く練習場ではアリアドネが練習後の汗を拭いていた。髪を固く

鬘に纏めてその上から銀の網を掛け裾の長い衣裳は脱いで活動的な運動着を着ていた。クレテの軍服に似ているが、遙に薄い半透明の亜麻布で、背中で締めると身体に全く密着し、腕と脚は剥出しになった。且つ膚色とよく似た配合色をしていたから、遠見には裸体と見紛う事さえあった。原色を使用しないのは牛の神経を刺戟しない為であり、袖や裾や襟を附けないのは牛の角に引掛る懼れある部分を除く為だった。背に紅色の大外袍を掛けていたがこれは装飾と保温を兼ねたもので、何時でも片手で脱ぐ事が出来た。クレテ風の衣裳を着たアリアドネは優雅で、繊細な感じさえしたが、今見る露出した四肢や薄物一枚の下に窺える胸と腰は意外な程に発達していた。よく伸びた脚線と緊った筋肉には、恐るべき強靱性と驚くべき柔軟性が隠されているに違いなかった。

アリアドネは突然立ち上がった。疾駆して来る二輪馬車チャリオットの音を遠くから敏感に聞きつけていた。馭者に手を振って自分の所在を示しながら呼び掛けた。

「コルキユネ。此処ですよ」

三十半ば位の小柄な女性馭者は門外に車を留め、アリアドネの前に駆け寄ると中腰で地

に片手をつき、丁寧に一礼した。

「王女様。只今戻りました」

コルキユネはパーシファエーと同じくコルキユスの出身。余り高い身分でないので地名に因ってコルキユネと呼ばれた。王后に命ぜられてアリアドネの乳母となり、成長後も監視役として第三王女の身边に侍ったが、純情なアリアドネに次第に惹かれるようになり、今では馭者や更衣係の如くになっていた。

「御苦労様でした。で、イカロスの容態は」

「王女様に感謝していました。もうすっかり元気になって、今度の大祭にはアリアドネ様の舞に劣らぬ芸当を見せると迄言っていました。何でもダイダロスが新しく作った機械で空を飛ぶのだとか」

「それは結構でした。でもイカロスが無理をしなればいいのですが。それにしてもアカレーは酷い事をする方だこと」

既に入場を促す喇叭が鳴っていた。初級の踊りを覚えた巫女と、角の生えていない仔牛が四門から続々入来し、群舞の渦巻を繰り展げつつある。

走り回る牛の前で転回しつつ踊り、牛を引き寄せながら足を揚げて下を潜らせる。縦列を成して順次跳び越え、横隊を組んで一斉跳

躍、牛の背から背に飛び移り、その間に所定の旋回、側転、輪舞を織り込んで優雅に、然も躍動的に踊り続ける。管楽器と打楽器が爽快な譜を奏し、観衆の懸声も次第に熱狂してきた。

青銅の缶鼓が合図を鳴らすと舞踊娘達は各人一頭の牛を追いつながら一斉に四門から退場した。入れ替りに現れたのは撰り抜きの美少女十人。身体に密着する肉色の運動着に原色の外袍マントを靡かせ、横隊で、競技場を突っ切った。貴賓席前の芝生で一斉に側転し、倒立転回し、更に短距離疾走から空中転回を打って着地すると同時に敬礼した。十人の動作に寸分の相違もなかった。

正面から十頭の牛が曳き出された。角から胴にかけて金糸銀糸を飾り、何れ劣らぬ大牛である。クレテの牡牛は海神オケウノスの象徴。その目前で踊るのは神聖な奉納舞という事になる。

「デクシテア」

観衆の中から呼び声が掛った。最員の連中であらう。パーシファエーの侍女が外袍マントを脱いで舞いながら進み出、それに応じて一頭の牛が放たれた。壮丁の観客は一斉に粘土板と尖筆を振り上げた。

牛は馬と異り鞭で調教する事が出来ない。

停止するか、疾駆するかに従い、人間の方が動作を揃えなければならないが、その判断は難しかった。然も牡牛の舞は高度の規定問題を幾種類か要求している。牛の一定距離以内で所定の舞踊を行い、側方からの開脚跳越、正面からの倒立転回、其他熟練と危険負担を要する課題が全部果されなければならない。その上に、各人が自ら得意とする自由問題を七種加え行うことになっていた。

採点には嚴重な基準があった。規定問題を消化する早さと正確さ。躍動の大きさ。自由問題の難易等で加減される。数千人の投票に依るから、少数の最良や買収は役に立たなかった。減点の最大なものは危険に際して逃げる事で、これは失格に近く、着地の姿勢如何がこれに次いだ。(余談だがクレテ人の計数能力は線文字Aより見て、数千単位に加算乃至その平均が可能であつたと思われる)

デクシテアは疾走する牛の背上で半旋倒立を行い、数秒間その姿勢を保って群衆の喝采を博した。併し彼女の後援者はパースファエーであり、特に操作し易い牛を選んであつた事は、見る者が見れば解つた。

二番、三番と大差ない演技が進んで、四番目の娘が、規定問題の最中に片腿を角で擦ら

れた。血を見た牛は兇猛になり、観衆は騒いだ。併し此の少女は跛を曳きながらも規定問題だけは為し終え、絶賛を浴びながら定位置に戻った処で昏倒した。場内係の女達が負傷した少女を運び出し、興奮した牛を連れ去つた。次の演技が終つた時に伝令が全治二十日間の旨を場内に告げ廻り、すべての者が漸く安堵した。

七番目がアカレーの親衛隊の一人モルパデアアだった。体格は十人中で最も優れ、動作に力量が溢れていた。技術が際立って巧妙なわけではないが、身長が得点に寄与した。牛の雙角を握って倒立転回を見せ、次いで牛の背を蹴って前方屈伸跳躍を大きく打った。動作は正確であり、着地した時、牛は遙か後方を疾走していた。拍手が沸き、最高得点が予想された。

これに刺戟されたか、八番目の娘が高等技術を欲張り、牛背で開脚前方転回を三度行なつて片手を滑らせ、側方に落ちた。牛は急旋回して少女の脇腹を突いた。場内係の女達が駆け集った時、牛は既に固い蹄で不運な少女の顔を踏碎きつつあつた。興奮を感染させない為に牛は場外に逐い出され、重傷の娘は亜麻布で掩って運び出されたが助かる見込は

無かつた。

「失敗^{しま}つた。思わぬ手違いです」

貴賓席に現れたアカレーが、パースファエーの傍で顔色を変えた。王后も唇を噛んだ。惨劇を見た九番目の娘が貧血を起して卒倒したのだ。娘達の最後がアリアドネ。牛は一頭繰り上つて予定してあつた黒苳から外れた。アリアドネは既に観衆の期待に應えて側転を打ちつつあり、牛はそれに向つて放たれた。牛を換える隙はない。

ミノス五十二世は手放して声援を送っていた。王后は苦い顔で眺めている。傍に居たアカレーは何を思ったのか慌だしく消えた。

アリアドネは、牛が眼前に迫る迄踊り続けた。そして思い掛けないう後向きの伸び切った姿勢から軽く跳躍し、牛の角を掴むと実にゆっくりと後転倒立を見せた。

パースファエーはアリアドネの視線が踊りながら常にテセウスの方へ向いている事に氣附いた。テセウスもアリアドネを眼で追っていた。何事にも動じない筈のテセウスが、今度ばかりは明らかに感動の色を見せていた。それ程にアリアドネの姿態と躍動は素晴しかった。危険に身を曝しながら、アリアドネは微笑しているように見えた。

アリアドネの身体が大きな弧を描いて半旋し、左右の手で雙角を持ち替え、牛角の上で身体を水平にした。全身が角の上に浮いて見えた。牛と共に競技場一杯を驚走した。

規定問題は忽ち消化した。牛が嫌って頭を撓ね越えつつ所定の動作を為し終えた。牛が反転再来するを充分に引き寄せ、鮮やかな空中転回を打って牛背に立った。牛が背を揺するに合せ、アリアドネは牛を大きく蹴って大きく宙に舞い、開脚転回、側方転回、屈伸転回を連発した。アリアドネが一回転する毎に大歓声が沸いた。然も当のアリアドネは旋々たる間からテセウスに視線を送った。

だが、此の時、予期せぬ不幸な事態が起った。疾走中の牛が何かに驚いて急に停止しようとし、蹶いて転倒した。砂塵の中に牛の四肢が空を掻いた。アリアドネは空中で二回転し牛背の高さで正姿勢に戻ろうとしていたから、角を避けようとして膝と片手をついた。彼女自身の責任ではないが、これは重大な減点を意味した。立ち上って熱狂していたミノス五十二世は落胆の色も隠さず、吐息と共に音を立てて坐りこんだ。

王はアリアドネ一身を眼で追うのに忙がしく、牛を転倒せしめ且つアリアドネの着地を

失敗せしめた真の原因が、彼女の直後に迫る迄気附かなかった。観衆の大部分も同様だった。突然狂い出した十番目の大牛が疾走中の牛に突き掛りつつあった。猛牛黒苺が。

アリアドネが鞠の如く転った。恰も衝き飛ばされた如くに見えた。併しこれは自ら横転して角を避けたものだった。未だ起き上れずにいた牛が黒苺の角で一刺に殺された。

七頭の牛が場内狭しと暴れ出した。興奮が感染したのだ。舞踊娘達は枯葉の如く追い捲られた。その秘技は辛くも身を以て遁れるだけにしか役立たなかった。

場内係の女達が数十人走り出た。投縄、鳶口、鉤鎖、格子等を持ち、七隊に分れて牛を追った。六頭の牛は、比較的容易に抑えられた。併し肝腎の黒苺は手に負えなかった。何人かを突き伏せ、蹴倒し、踏潰し、縄を持った俥の者を曳き擦り廻した。

アカレーは此の事を予期していた程の迅速さで黒苺に迫り、槍を把って阻止しようとした。併しアカレーの手腕を以てしても牛の強さは論外だった。槍の柄は折れた。アカレーは慌てて剣を抜いたが黒苺の角は楯も撓ね飛ばした。クレテ随一の女勇士が剣を構えながら逃げた。

横合からアリアドネが駆け出した。両手に紅の外袍マントを持っていた。これは只さえ興奮している牛を一層怒らせるものだった。

「構わぬ。牛を殺せ。弓手隊前へ。誰か余の弓を持て」

ミノス五十二世が王座で狼狽していた。

アリアドネは外袍マントを黒苺の眼前に旋えし、猛牛を自分の方に誘導した。そして飛ぶような早さで走りだした。黒苺がそれを追って駆けつけた。人と牛が一体となって貴賓席近くに殺到する。と見る間にアリアドネは地を蹴って跳躍し、外袍マントを地に残しつつ観客席に高々と飛び上った。黒苺は物凄い音を発して塀に頭を打ち当てた。

「美事だ。アリアドネ」

ミノス五十二世は、弓を手にながら叫んだ。黒苺は昏倒したか、角を折ったか。

併し砂煙が消えた中から猛牛は血に染りながら再び現れた。前よりも一層狂っていた。アリアドネを見失ったので目標を貴賓席下の一群に変更した。其処にはテセウス等十四人が縛られていた。

アンティオペーは剣を抜いてテセウスの前に立ち塞がった。顔面蒼白。勝目はないのに拘らず、体面だけが彼女を踏留らせた。

だが、アンティオペーの身体は、後から突き倒された。両手を鎖で繋がれているテセウスだった。倒れた二人の傍を猛牛が駆け抜けた。それを見送りながらテセウスはアンティオペーを組み敷き、素早く鍵を抜き取ると自分の鎖を解き放ち、猛然走りだした。逃げるのか。否そうではない。テセウスは黒苳の後を追っていた。

黒苳が方向を転じようとした時、テセウスが追いついて尻尾を掴んだ。牛の驚走が止った。怒った牛はテセウスに突き掛った。エゲウスの王子は巧妙に角を外し、遂に正面から双角を掴んだ。

テセウスと黒苳は暫し揉み合った。巨人と巨獣が静止して見えた。黒苳が通常の状態だったら、テセウスも只では済まなかっただろう。併し牛は疲れていた。その上、先刻の衝撃で相当に参っていた。猛牛は遂に倒れ、四肢を空に揚げて横転した。

アカレーは漸く親衛隊を組織して此の場に駆けつけていた。アンティオペーもテセウスを追って近くに在り、他にも多数の武装者が人垣を作りつつあった。アンティオペーが素手で飛び掛り牛の罌丸を締めた。これは急所である。アカレーが二又鉾を伸べて牛の頸を

抑え込んだ。脚一本に数人宛掴み掛った。黒苳は遂に、取り押えられた。全観衆が歓喜した。アカレーもアンティオペーもアリアドネも讃えられた。テセウスを賞揚する声が最も高かった。

黒苳は連れ戻される途中、競技場の中央で倒れた死んだ。死因は、脳出血と発表された。更に驚く可き事が起った。テセウスはアンティオペーに伴われて貴賓席前に帰った。ミノス五十二世が賞詞を授けようと進み出たがテセウスは見向きもせず、表情すら変えずに手を差し伸べ、アンティオペーに対して元通りの拘束を要求した。そしてそれが当然と言う如くに鎖で縛られた。

「メラニッペー。観衆を沸かせなければなりません。ダイダロスの余興を出させなさい」パーシファエーが沈滞した空気を察して転換策を指示した。間もなく、会場を見下す丘の上に奇怪なものが現れた。それは巨大な蝶の如く、又鳳のようにも見えた。但しその中央には一人の少年が両手を拡げて、恰も縛られているみたいに見えた。

何事か、とすべての者が注視する内に、粹組の蝶は風に煽られて空中に浮揚し、遙かな天空から宙を飛翔して競技場の真中に舞い下

りた。全観衆が天馳ける神の技に驚嘆した。「イカロスではないか。遂にやったな。ダイダロスの空を飛ぶ機械とはこれだったのか」

ミノス五十二世が感心して言った。

原始的な滑空機である。人力を動力とし、翼の一部を動かして揚力を加減するが、羽搏いたり上昇したりは出来ない。後年ドイツ人オットー・リリエンタールが製作した人力飛行機や、岡山の人で表具師幸吉が実験した翼と同種のものであった。但しドイツの例も日本のそれも、共に失敗して墜落している。「ダイダロスとイカロスを呼べ、何か褒美を遣そう」

ミノス五十二世は競技場中央で翼を外しているダイダロス父子を見ながら言った。

丁度此の時、牡牛の舞の採点が集計されて来た。大王の期待にも拘らず、アリアドネは着地の減点が大きくて三位に留り、モルパデアが一位を、デクシテアが二位を得た。

筆者の描写する牡牛の舞はワルタリの名作からの転写ではない。クノスス宮殿で発掘された壁画には牛背を倒立転回する女性と見物人が明らかに認められる。

余談だがワルタリが「エジプト人」を書いた一九四五年は未だ線文字Bの解読が行われ

ず、此の為クレテ王国はミノア時代とミケネ時代の混同がある。筆者はミノア・クレテ時代末期はワルタリが書いたようなエジプト第十八王朝末期と同じでなく、第十八王朝初期と同時代だろうと思っている。

ミノス五十二世は所定の三賞を授与した。併し残念そうな色は隠せなかった。大部分の観衆も同様だった。パーシファエーは此の空気を迅速に察知した。

「大衆の総仕上を飾る為に、イカロスの妙技をもう一度見たいものです」

ダイダロスとイカロスは玉座の間近に控えていた。命を受けてダイダロスが進み出た。

「恐れながら、此の翼は極めて軽く作ってありますので一度使ったら相当な整備を要します。且つは先刻から風向も変り、危険にも感じられます。何卒本日もう一度飛ぶ事は御容赦下さい」

併しパーシファエーは技術的な意味を理解しなかった。

「イカロスは何うですか。飛んだら今日から自由民にしてあげますよ」

イカロスは誘惑を覚えた。盲目的勇気を振作した。

「お父さん。僕もう一度飛びます。ガレスレイブ 撓漕奴隷

にされたら確実に死ぬでしょう。飛び損って死んでも同じです」

ダイダロスも息子の自由と生命を賭ける気になった。杵組に亜麻布や羽毛を張った翼を持って父子は丘に登った。ダイダロスはイカロスの手足に翼を結附けながら言った。

「何度も教えた事だが、余り強く羽搏いてはいけない。翼は極めて脆いのだから。好便な向い風を得ても高く上り過ぎてはならない。必ず失速墜落する。低きに過ぎても駄目だ。競技場の平地に達しない間に樹に引っかかるだろう。丁度よい高さを飛ぶのだよ」

イカロスは一々頷いた。軟風を待ち、丘の斜面を駆けながら地を蹴った。翼と身体が軽く宙に浮いた。心地よい緩滑降。

併し人為を以て神の技術を冒す行為は天譴を招いた。ボレテス 北風神が翼を煽った。イカロスは

思わず迎角を大きくした。グライダー 滑空機に於て最も注意すべき急上昇が行われた。ダイダロスは次に起るべき失速を察して眼を掩った。一瞬の後、イカロスの姿は既に見えず、地に墜ちて砕け散った翼が空しく散乱していた。オケウヌス

海神の大祭は何か不穏な将来を予告するように、幾多の悲哀を生じつつ閉ざされた。

ダイダロスは泣きながら一人息子を火葬に

した。王女アリアドネだけが顔を覆って秘そかに手伝った。

「王女様。聞いて下さい。イカロスだけが私の生命だったのです。憐れな老人は生涯の終りになってたった一つの生甲斐を奪われ、もう生きる希望も無くしました。私は世界中と神々と、王后様を呪います」

聡明なアリアドネは慰めても無駄な事を知っていたからダイダロスに気休めを言わなかった。老人と共に歎き、ダイダロス以上に悲しんだ。実際にもこれが最も効果的な手段だった。アリアドネは血に塗れたイカロスの顔を綺麗に洗い、傷口は軟膏を塗って隠し、化粧を施した後、薪を積み重ね、頂上に死屍を置いて火を点じた。火葬の火は一晩中燃え続ける筈だった。

「わたしは迷宮ラビリンスに帰ってないとなりません。他にも済ませておきたい事があります。明朝又来ますから一緒に骨を拾いましょうね」

アリアドネは身を翻えして駆け去った。

星が輝き始める頃、アリアドネの白衣は宙を飛ぶような早さで迷宮ラビリンスから北へ、山道ヒュペリオンを上っていた。山上には天文台を兼ねた太陽神の神殿があった。白色に輝く球状の大神殿は機械的な音響を発しながら、太い回転軸の周囲

を緩速で運動していた。

「アリアドネですね。もう来る頃だと思っていました。お這入りなさい」

姿は見えないが天上から響いて来るような声がした。長い管を通して来る特有の声である。同時に回転軸の下端が音を立てて開き、螺旋状の梯子段が現れた。

太陽神殿は巨大な天球儀の形を成し、床が地平線に相当した。回転軸に接する部分に象牙製の椅子があり、太陽神の祭祠長エウローペが掛けていた。アリアドネの祖母でミノス五十二世の母に当り、今年八十才。長い白髪が床に届く程垂れている。アリアドネは神秘的な畏怖に打たれて床に平伏した。

「アリアドネよ。わたしの可愛い孫娘よ。何か酷い目に、遭わされたものではありませんか。危く殺される処だったとでも、言うような、怪しい空気が立ち騰っていますよ。何時もの二人に虐められたのでしよう」

エウローペは威厳の中から穏やかに、やさしく問いかけた。アリアドネは、微かに頷いた。気丈な娘なのだが、此の祖母の前でだけは虚勢を張らなかつた。心内のすべてを晒け出して啜り泣いた。

「よく解ります。わたしもミノス五十一世ア

ステリオスに誘拐されて来た身ですから、若い頃は今の貴女と同じような境遇でした。クレテ全島がアリアドネにとって牢獄のようなものです。泣きたい時に泣けるのが此処だけなら、何時でもやって来て存分にお泣きなさい。わたしも泣きたくなったら星を見て悩みを打ちあけたものです。その為に星の言葉が解るようになったのですが」

エウローペはアリアドネの顔を膝の上に引き寄せ、焦茶色の長い髪を手でそっと梳き流した。十七才の慟哭が小刻みな振動になって伝って来た。

やがてエウローペは手巾を出してアリアドネの顔を拭いた。

「気持ちが落着いたら、太陽神を礼拝しましょう。心を清浄にして、わたしの言う事をお聞きなさい。今日こそ貴女の将来を決める運命の糸を解いてあげますから」

太い回転軸の一部が枠状の神棚になり、紫の幕が下りていた。壇は象牙、柱は珊瑚で、屋蓋の金板には天然色の虹が描いてあった。アリアドネは床に平伏し、エウローペは祈禱文を称えた。アリアドネが顔を上げた時、既に三重の幕は抜かれて雲の如く四周に集り、金色燦然たる黄金の太陽円盤が現れていた。

「ずっと前に進みなさい。太陽神は光明と善と正義の神。御神体を見なさい。貴女の心が映っているでしょう」

アリアドネは金鏡を見凝めた。すると全身に重苦しい圧力が感じられた。四肢が痺れるような気分に見舞われた。頭の中が真空になるようで、鏡の映像が芒と霞んだ。注視するとその顔は二十才半ばの婦人に変っていた。

「お母様」

アリアドネは思わず進み出たが、後からエウローペに抱き止められた。祖母の声とは異なる、天上か地底から響いて来るような別の声が聞えて来た。いや、聞えるように思った。

「アリアドネ。覚えていますね。九年前にパーシファエーとアカレーの手にかかって果てた貴女の母カルキオペーです。併し仇討を頼みに来たものではありません。あの二人には間もなく、それ相当の天罰が下るでしょう。でも同じ二人がアリアドネの生命を狙っているのを知っては黙って居られません。闇黒女神の許しを得て忠告しに来たのです。アリアドネ。危難を避けて身を隠しなさい。クレテ島を去りなさい。遍歴の旅に出なさい」

カルキオペーの声が次第に細くなり、遂に絶えた。同時に鏡に映っている顔も遠くなる

ように縮小し、点の如くになって消えた。

「お母様」

アリアドネは自分の声で覚醒した。

「闇黒女神の許した時間が終わったのです。併し今聞いた事を忘れてはなりませんよ」

今度は確にエウローペの声だった。鏡の顔

もアリアドネ自身に戻っていた。

クレテの三神は地母神、太陽神、海神である。

地母神は祖神で、基本神。太陽神は最高神。海神は最強神として知られた。太陽神が

鷲を使者とし、黄金円盤を以て崇拜の対象とする如く、海神の化身は牡牛であり、その象

徴は、武力の表現でもある双刃戦斧だった。又、地母神は蛇とされ、大地を巻き固め、口

で自分の尻尾を咬えている大蛇の形で知られていた。その他の神々は三神の何れかに従属

する劣級神だった。「お立ちなさい。星に記されている貴女の運命を見せてあげます」

エウローペはアリアドネを促して天井を形成する巨大な天球儀を見上げた。

太陽神の殿堂は青銅の金骨を以て数百の経緯線を作り、水圧を動力として恒星日に等しい周期で回転していた。丸天井の内壁には

数千の真珠が天界の諸神、即ち星辰をその座

と大きさに等しく飾られていた。中でも昂頭

は七粒の金剛石で示され、天狼星は巨大な水晶、

銀河は月光石の一枚板で作ってあった。天球儀の財宝的価値は恒星天だけでも測り知

れないものがあつたが、それ以上の惑星体系を更に加えなければならなかった。

太い金条を以て黄道が敷設され、太陽神の黄金球が十二宮を機械仕掛で通過するように出来ていた。白道は銀線で作られ、月神の銀

球は半面が黒く、二十八宿を訪れながら盈虚するようになっていた。クレテ人は日月が円

盤でなくて球体である事を、少くとも天文学者達は知っていたらしい。この他に真鍮の軌

道が四本、不規則な螺旋を描いて黄道の上下を這い廻り、四大惑星神が天上の現位置に等

しく鎮座していた。その神体は何れも無量の価値を秘めた宝玉だった。学問を司る木星神

は碧玉。工芸技術の守護神土星神は琥珀。農

牧水産の教化者水星神は緑柱石。戦争で勇者を励す火星神は紅玉。その何れも鶏卵大の直

径があつた。アリアドネは六神を象徴する諸天体像に向つて、所定の拝礼を行った。

「彼方に新しく作られた軌道と、その上に在る神様は誰方なのでしょう」

アリアドネの指した天球上の一角には、赤銅の環と黄玉の球が見られた。

「貴女に見せたかったのです。天界に新しい神が誕生されました。星の御姿を採って急速に大地へ接近しておられます。木星神と土星

神の間から現れたのは今から何百年の前でしょうが、彗星のように消えかけては又大きく

なり、この数年の御成長は驚く程で、どうやら他の惑星神の中に加ろうとしておられるよう

です。神々は既に地上の仕事を分担されておられますから新しい神の受持たれる職務は

無いのにとおもっていましたが、最近になって漸く新しい神の意味が解りました。今迄の神

々は力や技をお持ちですが愛がありません。世の中で最も大切なものは愛です。新しい神

は愛を授けようと誕生されたに違いありません。併しこの神が座に着かれる時には、必

ず古い神々との間に争が起ります。天界の秩序も四大元素も地上の王国も揺れ動くで

しょう。既にイダ山の神は唸り、大地の底でも神々が叫んでおられます。アリアドネよ。

わたしの智識を傾けても新しい神の行動を計算する事は困難でした。併し近頃やっと解りました。二年以内にこの神は大地の上に御姿

を現し、天一杯に拡がり、古いものすべてを

打ち碎かれるでしょう。さあ外へ出なさい。
新しい神を拜ませてあげましょう」

アリアドネの聡明を以ってしてもエウローペの神秘的な言葉は理解し得なかった。(エウローペが予言し、筆者が後述する天界の動乱はヴェリコフスキーの所説に基く。但し彼はこの事件がエジプト中王国末期に起ったとしているが、筆者はエジプト第十八王朝初期に改めて現在の年代学を尊重した)

エウローペとアリアドネは回転軸の中に仕掛けられた螺旋階段を伝って北極方向から天球儀の外に出た。末端は観測用の諸機械を備えた天文台に続いていた。

「金牛宮を御覧なさい。釣鐘星^{ヒュアダス}の上に新しい星が見えるでしょう。昨年末迄は見えるか見えないか位の小さな星だったのに、もう北辰程の大きさになっています。今に木星よりもいや月や太陽よりも大きくなって全天を占めて了うでしょう」

誕生した星は禍々しい血の色を呈し、乱れ髪のような尾を二本長く曳き、妖しく天の一角に踊っていた。エウローペの断言にも拘らず、あれが愛の神などとは到底信じられなかった。

「アリアドネよ。一番大切な事を教えます。

人は皆、その運命を星に記されているとは、わたしが今迄に教えた通りです。しかし貴女自身の運命は今日迄見てあげませんでした。見ようにも、貴女の星が見つからなかったのです。それが漸く解る時が来しました。貴女の星はあの新しく誕生した星です。アリアドネよ。わたしは既に天文も、地理も、化学も、音楽も、知る限りのすべてを貴女に伝えました。カルキオペーの霊が指示した処に従ってクレテを去りなさい。貴女の安全は太陽神^{ヒュペリオン}にわたしが祈ってあげます。太陽神を崇拜しなさい。新しい神は太陽の御子だからです」

「ああ、エウローペ様。わたしはクレテを去って何処へ行けばよいのでしょうか」

「新しい星の示す地へ。わたしが教えた数学と観測技術で、あの星を追い続けなさい。あの星は東をさして動くでしょう。止る所迄貴女は行かなければなりません。クレテを去って貴女は凡ゆる艱難辛苦に曝されたいと思います。何んな境遇に落ちてもあの星の観測だけは怠ってはなりません。アリアドネよ。貴女は生涯で遂に現世の幸福を得られないかも知れません。併し必ず後世の人から神として崇められるようになります。わたしの奉持する太陽神^{ヒュペリオン}の黄金円盤も、パーシファエーの地母^{ガイ}

神の蛇連環も貴女が祭祠する時が来ます。貴女はクレテの神々を奉持し、東に去って平和なクレテ王国を再建するのです。太陽の昇る地に理想郷を築くのです。それが新しい神から授けられた貴女の運命です」

エウローペの声は静かだったが利刃の如くアリアドネの肺腑を貫いた。

夜半近く。

アリアドネは呆然と、精気を抜かれたようになって迷宮^{ラビリンス}の私室に帰って来た。戻るなり寝台の上に身を投げ出した。夜着に着替えようともしなかったし、蛇口一つ捻れば熱湯が噴出する浴槽に入ろうともしなかった。燭台に灯を入れる事さえ忘れていた。両手で頭を抱え、深く考え込んだ。

だが、アリアドネの鋭敏な聴覚は、忽ち闇の中に人の呼吸音を聞き分けた。

それも一人ではない。

「誰です。其処にいるのは誰？」

アリアドネは撓ね起きて叫んだ。

「誰もいないものです。帰りが遅いので心配しながら待っていたのですよ。真逆牛跳びで三位になった位で自殺するような娘ではないと思っていましたか」

これはパーシファエーの声だった。

「海神の巫女が時間外に放浪してはなりません。イカロスの葬儀や太陽神殿などに行っていたのではないと思いますが、わたしの職務上調べさせて貰いますよ」

確かにアカレーである。二人共、顔は見えないが存分な皮肉を籠めた声だった。

「済みません。牡牛の舞を失敗したので、原因を一人で反省していたのです」

アリアドネは灯を点じながら謝った。

「其方は王太子殿下の御帰還を歓迎する祝宴を無断欠席しましたね。それから神聖な黒莓を殺しました。三つ目に海神の巫女でありながら迷宮を勝手に出ていました。只では済まない事は御存知でしょう」

パーシファエーとアカレーは室の隅に作られた椅子の作用をする壇に掛けていた。アリアドネは、その前の床に坐って手をついた。

「悪い事を致しました。許して下さい」

だがパーシファエーはアカレーを促した。

「闇黒女神の前で訊問しましょう。引立てなさい」

アリアドネは地母神の分院に当る王後の私室に連れて行かれた。真鍮製の巨大な蛇が祭壇を取り巻いている。これはアリアドネにとって初めての場所だった。

「迷宮の附属監獄を使わないのですか」

アカレーが不思議そうに聞いた。アリアドネも同じ事を考えていた。アカレーの管掌する大監獄には責道具が何でも揃っている筈なのに。

アリアドネ自身、今迄に何度か迷宮の附属

監獄に幽閉され、僅かな口実で責められた経験があった。アリアドネの強靱な体力と、それ以上の精神力は何時もそれに耐えた。今度もアカレーの恒例の折檻だろうと幾分かは甘く見ていた。

「王族内部の問題です。公開しない方がよいでしょう。その方がアリアドネ自身の名誉を損わずにも済みましようし」

パーシファエーは、何時もの物凄い微笑を口辺に浮べた。

アリアドネは裾の長い白衣を剥奪された。

下から牡牛の舞に着ていた運動服が汗と埃に汚れた尽で現れた。王后は顔を歪めた。

「何と身嗜の悪い娘でしょう。正装の下にこんなものを着ているなんて。アカレー。着替えさせるには及びません。この尽で縄を掛けないさい」

アカレーはアリアドネの両手を背に廻し、腰に帯びていた革紐を解き出して、慣れた手

つきで縛り始めた。

余談だが古代地中海世界で最も普遍的な縛る材料は皮紐だったと思われる。ホメロスの詩に於ても戦士が革紐を身に巻いて用意していた事が記されている。

アカレーはアリアドネの手首を高く吊り上げ、肩から脇へ襷状に引き廻した。身体に密着する亜麻の運動服は表面が滑らかだったから不用意に縛ると緩んで抜ける懼があった。腕力自慢のアカレーが顔を真赤にして締めつけるのは必ずしも憎悪ばかりではなかった。アリアドネは一呼吸毎に胸に喰い込む無情の縄目に唇を噛んで耐えている。

その間にパーシファエーは、祭壇下で何か操作していたが、アリアドネが上半身を隙間もなく縛られて了った頃、祭壇の一部が音を立てて開き、地下へ降る石段を現しかけていた。闇黒の底からは異臭が吹き上げた。

パーシファエーが先に立って石段を下りながら壁の燭台に灯を点じて行った。アカレーが縄尻を把り、アリアドネを追いつけた。アリアドネは優れた平衡感覚の持主だが、両手の自由と上半身の知覚を失っているのです、急な階段で幾度も安定を無くしかけた。

下りきった所に異様な形相をした闇黒女神

の小像と祭壇があった。その続きの室には空気が抜き、大釜、爐、数十の大甕、鉢等がありパーシファエーが、魔法の薬を煉る所と見えた。奥には廊下が続き、両側には小部屋と扉があったが、扉の上には、クレテ文字で奇怪な名詞ばかりが彫ってあった。蛇、蜂、墓等々。これは蟻酸や毒汁や燐化合物を得る資源であろう。気丈な筈のアリアドネが唇を紫色にして戦慄した。

アリアドネは湿った洞穴のような所へ引き立てられた。パーシファエーが点じた灯に照らされて、白い物が洞穴の両側二列に遙か向う迄並んでいるのが見えた。崩れかけてはい

るが確に人骨だった。

「地母神の祭祠長は背いた巫女を処判する権限を与えられているのです。二千年の間に、歴代祭祠長が此処で屠った娘達がこれだけの数になったという次第。アリアドネもこれから聞く事に正直に答えないと、この地底で骨になる迄放置される事になりますよ」

パーシファエーの声が陰惨な響きを以って洞内に反響した。末端近くの白骨は新しいのもあり、何れも両手を、後腰の辺で組んでいた。中に一つ、無惨に砕けた肋骨を晒した髑髏があった。

「これが生前はカルキオペーと言われた者で

す。牛に突かれて死んだので、こんなに壊れてしまいました。表向きは火葬にした事になっていますが」

アリアドネは洞穴の少し広くなった所で足首と膝を縛られ、更に両手足を背中の一箇所に纏めて固く引き締められた。アリアドネの並外れた柔軟性だけがこの責苦に耐え得た。アカレーは太鎖を以ってアリアドネを天井の鉤に吊り上げた。美しいアリアドネは脂汗を流しながらパーシファエーの眼の高さで揺れていた。

「其方、エウローペ様の所へ行っていましたね。エウローペ様は他人を仮眠させて幻を見せたり、誰の声でも真似てそれを地の底から聞かせたり出来る方です。アリアドネに何を見せましたか。何を教えましたか。クレテ王国の将来について何かを発見された筈です。アリアドネだけには、それを教えたに違いありません。隠さずに申しなさい」

パーシファエーは正面から睨みながら言った。一切を見抜かれてアリアドネは驚いたが傍で聞いていたアカレーは一層驚いた。

「エウローペ様が、そのような重要な事をアリアドネだけでは話されたのですか。何としても聞き出さなければなりません」

現在在庫『本誌既刊号、特集号、限定版』案内

○臨時増刊号「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号「文献」

○限定版写真集「豊満と清楚」

女性緊縛グラフィック集

頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

頒価 一〇〇〇円 略号「美4」

○限定版写真集「女性刑罰拷問特集」

日本版

頒価 一〇〇〇円 略号「美5」

○限定版写真集「緊縛美女艶姿百態」

頒価 一〇〇〇円 略号「美6」

アカレーは腰帯から筈を引き抜いた。

「黙っている所を見るとエウローペ様の所へ行った事を認めるのですね。解っているのですよ。エウローペ様は金牛宮に現れた彗星を見せて何かを予言されたでしょう」

パーシファエーはアリアドネを振子のように揺すり、楽しそうに眺めた。アリアドネが唇を噛んで無言の抵抗を試みるのに対し、寧ろそれを望ましい状態であるかのように弄んだ。聞き出すよりも責める事自体が目的らしい。灯が織り成す陰影の縞が揺れ動き、激しく鳴る答音に、アカレーの気合と、アリアドネの押し殺した呻き声が交錯する事暫し。

「無駄のようですね。搦った位で何でも白状するようなアリアドネではない筈です。鍛えてやるようなものですよ」

パーシファエーは微笑しながらアカレーに指図した。アカレーは鎖を緩めてアリアドネを床に接する位の高さに下げて固定した。

「地母神に訊問して戴きましょう。アリアドネのような娘はアカレーと雖も人力で屈伏させる事が出来ないと思いますよ」

パーシファエーはアカレーを促して立ち去った。アリアドネは薄暗い中に取り残され、鎖を中心にして床に僅かに触れながら緩回転

を繰返している。九年間鍊え抜かれたアリアドネの柔軟且つ強靱な身体は斯かる責苦にも耐えて未だ鮮明な意識を留めていた。

突然、アリアドネは流れるような、逼うような音を聞いた。微かな音だが次第に近附いて来る。逆吊りに近い姿勢なので方向が確認出来なかった。不自由な身体を振って仄明るい方を見ると、漸くその正体が解った。黒い大きな棒のようなものが真直に伸びて来る。尖端には赤い火焰が踊るようにも見える。巨大な神蛇^{ビトン}だった。パーシファエーの命令通りに動く地母神の大蛇だった。

アリアドネも蛇には耐え切れず洞を劈くような悲鳴をあげた。併し手も足も動かない。宙吊りの位置から遁げる事も出来ない。顔は床に接する高さで、大蛇は一直線に迫って来る。両眼は妖しく輝き、舌は踊り捲ねる。「パーシファエー様。何でも申します。助けて下さい」

アリアドネの絶叫に答えるものは、洞壁の反響ばかりだった。遂に、蛇はアリアドネの頸に、胴に巻きついた。アリアドネの頭が垂れた。背に握り締めていた指も動かなくなつた。今は慣性で揺れるのみ。

「気絶したようです」

何時の間に戻って来たのか。アカレーだった。傍にパーシファエーもいた。

「もう二、三回蛇責めを繰返してから白状させましょう。尤もエウローペ様が何を教えたかは余り問題ではないのです。彗星一つ位で大騒ぎする事もないでしょう。但しアリアドネを床に下すと眼が醒めた時、自分で縛を解くかもしれませんから吊った俚^{ヒナ}にしておくがよろしい。この奥迄救いに来る者はないでしょうし、第一アリアドネが此処に幽閉されている事を知っているのはわたし達二人だけの筈ですが、用心の為に神蛇^{ビトン}を残して番をさせましょう」

アリアドネは床から高く蛇の届かない高さで、気絶した俚吊られていた。神蛇はその直下で輪を描き、宙の美女を見上げている。消えかかった灯が僅かな光を投げ、両手は背に足は揃えて固く縛られ、長い髪の毛が崩れて肩や頬に流れ落ちたアリアドネの影を黒く洞壁に映していた。

美少女は身動き一つしない。

と、突然、壁の一枚岩が揺れた。微かな音を立てて横に滑った。大蛇は鎌首を抬げた。

(続く)

「最新版」女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙(9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G 12	全裸しぼりと浣腸器(玉田)
G 11	浣腸器に脅びえる女(玉田)
G 10	恐怖のいたぶり(新井)
G 9	手吊り全裸さらし(玉田)
G 8	全身ガンジガラメ(大塚)
G 7	煙草責と荒縄緊縛(大塚)
G 6	縄に羞らう裸しぼり(長野)
G 5	敷布に悶える白い肌(玉田)
G 4	一糸まとわぬ晒し者(玉田)
G 3	豊臀と足首と後手縛(玉田)
G 2	アグラで縛られる(玉田)
G 1	顔面から全身厳重縛(東浦)
G 38	柔肌は縄にくびれて(玉田)
G 37	裸を誇りの椅子縛り(玉田)
G 36	写真に埋れた全裸姿(大塚)
G 35	美貌と豊胸を誇る女(長野)
G 34	典型的な股間しぼり(大塚)
G 33	足でなぶられる鼻(大塚)
G 32	踊子の緊縛ポーズ(絹川)
G 31	肥り肉を晒らす女(東浦)
G 30	逆エビと浣腸器(大塚)
G 29	緊縛裸身を誇る足(長野)
G 28	白肌は縄にくびれて(大塚)
G 27	革の猿轡で責める(新井)
G 26	机の脚に縛られる女(新井)
G 25	肌につき刺さる荒縄(大塚)
G 24	豊胸に黒紐の輝やき(長野)
G 23	後手縛全裸椅子跨ぎ(東浦)
G 22	縛られて鼻を任す(大塚)
G 21	二つの乳房アップ(長野)
G 20	足首と後手首と縛り(玉田)
G 19	椅子に縛られた全裸(玉田)
G 18	諦観の後手しぼり(玉田)
G 17	責写真に埋れた緊縛(大塚)
G 16	黒フンで縛られる女(玉田)
G 15	そりかえる鼻の頭(大塚)
G 14	美しき全裸強調縛り(大塚)
G 13	踏みつけられる美貌(大塚)
G 39	全裸の肌は縄まかせ(玉田)
G 40	女囚哀歎(宇治)
G 41	女囚の縛られ姿(宇治)
G 42	オシメカバー縛り(大塚)
G 43	庭の見える部屋にて(大塚)
G 44	トイレを前にして(大塚)
G 45	荒縄と豆絞りの猿轡(大塚)
G 46	裸身の美を誇る縛り(長野)
G 47	後手逆エビ強烈鼻責(大塚)
G 48	股間縛り全裸重量感(大塚)
G 49	厳重荷造縛りの全裸(玉田)
G 50	全裸正面強烈亀甲縛(木村)
G 51	全裸胴絞め首縄猿轡(木村)
G 52	後手首縄膝頭一括縛(木村)
G 53	全裸後手吊り晒し(玉田)
G 54	後手吊り全裸の美(玉田)
G 55	椅子に跨がされた女(新井)
G 56	後手縛りで寝室へ(絹川)
G 57	色魔に脱がされる(新井)
G 58	不安定な台上股間縛(大塚)
G 59	無抵抗の裸いじめ(大塚)
G 60	両手吊りの猿ぐつわ(新井)
G 61	可憐ないじめられ様(大塚)
G 62	責めぬかれた表情美(大塚)
G 63	強奪されたパンティ(大塚)
G 64	後手縛全裸の美しさ(大塚)
G 65	猿ぐつわの婉な表情(新井)
G 66	手吊り足縛り仰臥(新井)
G 67	目かくしのハリッケ(大塚)
G 68	首枷のさらしもの(大塚)
G 69	木馬責め斜め後姿(大塚)
G 70	木馬責め斜め前姿(大塚)
G 71	革全頭マスクと手錠(大塚)
G 72	火あぶりにあう女(大塚)
G 73	長髪垂らし全裸縛り(長野)
G 74	豊満を誇る露出癖(長野)
G 75	白肌で縄にうそぶく(長野)
G 76	縄にもだえる美女(絹川)
G 77	美貌をいためつける(絹川)
G 78	首吊りの責め(新井)
G 79	両手開き吊り顔虐め(新井)
G 80	全裸後手足首連繫縛(玉田)
G 81	蒲団上に転がった女(遠藤)
G 82	首縄開股強烈縛り(木村)
G 83	巨大な臀部全裸後手(大塚)
G 84	膨隆見事な乳房責め(長野)
G 85	ヤンチャ娘開股縛り(長野)
G 86	全裸でしやがむ後手(玉田)
G 87	豊満裸身を誇る緊縛(玉田)
G 88	美麗の全裸に厳重縄(玉田)
G 89	後手縛り裸立姿晒し(木村)
G 90	奴隷の裸身を捧げる(木村)
G 91	白布の猿轡と白肌責(木村)
G 92	六尺禪巨大臀部虐め(大塚)
G 93	裸身を晒す両手縛り(大塚)
G 94	全裸アグラ坐り縛り(玉田)
G 95	白肌に映える光の縞(玉田)
G 96	臍乳房強調喰込む縄(大塚)
G 97	股間縛り全裸の膝立(大塚)
G 98	台上的緊縛裸身像(長野)
G 99	反りかえる緊縛裸身(長野)
G 100	膨大な臀部を眼前に(大塚)

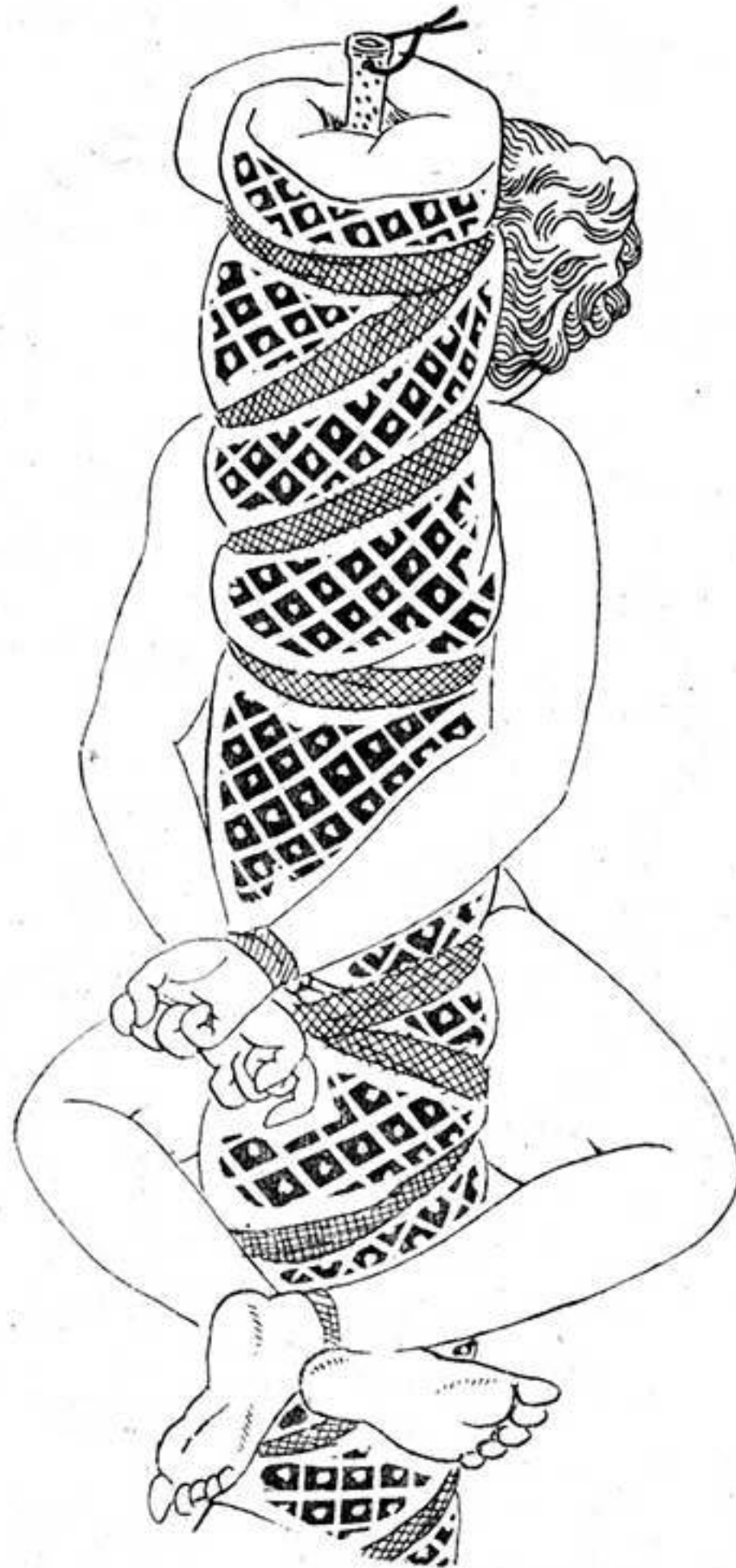
赤裸々な告白記

夏彦蛇行録
なつ ひこ だ こう ろく

堀

夏

彦



めざめ

冬眠から覚めた、蛇よろしく、忘れられた

頃、又そろりそろりと、動き回ることにしよ
う。私の中篇小説『妄執』や、随想『深夜の
独白』を掲載していただいてから約一年、じ

っと自分の穴に閉じこもり、ただ毎月の奇ク
発売日のみを楽しみにノーマルな社会生活を
送ってきた。私は冬には弱い。深夜ペンをも
つ気がおこらない寒がりやの無精者になって
しまう。

しかし、頭脳や私の性癖は深夜になって、
めまぐるしく活動する。あの矛盾する性格の
二面性に苦悩しつつ、又それが唯一の楽しみ
でもあるのだ。枕もとのスタンドの光を頼り
に、積った慾念や妄想、そしてクリスタマー
ニアとしての夏彦の身近の僅かな変化を漫然
とノートに吐出してみたい。

奇クの最近と夏彦の祈り

読者通信や所謂投稿家諸氏がそれぞれ立派
な御感想を発表されているが、夏彦の正直な
気持を云うと、最近の奇クは確かに物足りな
い。先輩ぶる訳ではない。確か本誌は昭和二
十六年創刊だと思いが、あの頃の特大号の三
百頁を越えるポリウムとグラビヤの豪華さ。
昔をなつかしがるようでは、夏彦もとしをと
ったかな。（註、奇クの創刊は二十二年）

でも、いろいろ迂余曲折があって廃刊にな
ったと思ったら、又白表紙になって現われ、
兎に角今日まで続いていることだけでも素直

な気持で喜ぶべきだろう。踏まれても踏まれても根強く生きる雑草の強さ——それは編集者諸氏の努力もさることながら、全国に散在する夏彦のような読書子の蔭の聲が大きく響いて、未だに命脈を保っているのだ。と云って過言ではあるまい。

夏彦が奇クを愛読した頃はまだ大学をでて間もない頃だった。それから十数年、サラリも社会的地位もどうやら人並に上ったが、考えてみれば間もなく四十、気は若いつもりだが、否でも応でも、中年と他人に云われるとしになってしまった。これは冷厳な事実だが、心の底からひしひしと寂寥さがしみて悲しいね。

そんな悲しみを忘れさせてくれるのが深夜の空想の領域と、読者通信にでる仲間？たちの呼びかけの中にひたる時だ。だから夏彦にとってグラビヤがなくてもいい（分譲品に頼めるから、今後は）今の様式でいいから、せめて読者通信欄を充実させて、末長く続刊してもらいたいと祈るのみである。

腹いっぱい、食べさせてくれとは、申しません。（自由な表現）
綺麗な着物を、きせてくれとは、申しません。（グラビヤ）

立派な屋敷に、住まわせてくれとは申しません。（ページ数）

ただ生きるに必要なパンと、寒さをしのぐ着物と、

雨露をしのぐに必要な小屋を、私の生きている限りお与え下さいまし。

（芥川が『侏儒の言葉』の中で同じようなことを云っていたっけ）

夏彦の性癖を分析する

どうせ明方まで眠れそうもないから、ここで俺自身をできるだけ客観的に、そして俺のアブの要素をたどって見よう。勿論俺は学者でもなし、心理学にも疎いから、ごく常識的にである。

よく通信欄など見るとS何％M何％と自己紹介しているが、俺はそう確りと割り出すことはできない。然し俺の育ってきた過程を考えると、主流をなすのはS的要素らしい。

縛りにも興がないとは云えないが、鞭打のような烈しいのは好まない（勿論関谷夫人の苦痛にゆがむ表情など美しいとは思うが）抵抗する女性が力つきてぐったりなった状態とその表情を最も美しいと感ずる。だから女闘美は好きだ。しかも敗者の哀れな姿に堪らな

い魅力がある。無情に可愛く愛撫したい気持ちに駆られる。

次に女性の好みだが、余りふとった人は嫌いで、どちらかと云うとやせ型がいい、モデルで云うなら梨花さんとか、杉さん加茂さん絹川さん、限界では大塚さん東浦さんあたりまでである。

因みに家内はやせ型に属すると思う。

女性のからだの中で美しいのはやはりヒップの線だ。姿勢では俯伏せに寝たところが一番いい。何故ならそれは期待と屈服と諦観を想像させるし、ヒップの曲線が最も強調される姿勢だからである。そしてその期待は大きく開かれた菊花の露出という点で極点に達する。そこに無限の羞恥があり、凌辱が展開される。

私の性癖はその一点に集中される。

然り夏彦の関心の焦点はAnusであり、責めの目標なのである。あらゆる器具が用いられ、責めにもだえる筋肉の動きと苦痛と恍惚との綾なす、複雑な表情を把えることが、ふるえる程の喜びなのだ。もうこの辺になると夏彦の乏しい筆力では表現できないが、この世で最高の美であり、快楽と云う外はない。器具もガラスが一番好きだ。非情な冷たい

感じのそれが、花芯に挿入されるまでの雰囲気と表情、許しを乞う美しい声、——そこまですが頂点で、薬液を入れ終って苦痛にも代える姿態、——排便と共に次第に、下降線をたどる。「妄執」にも書いたが、夏彦にはコブ口趣味は殆んどないのだから……。

さて、ここまで赤裸々に自分を描いてみると、どうやら夏彦のアウトラインが浮きだしたようだ。

まあ云って見ればS傾向の強い、しかも軽症のクリスターマニアと云うところでしようかね。

ところが、大体のクリスターマニアにある傾向らしいが、M的要素も、皆無ではないようだ。

例えば睡眠薬をのまされて、自由を失った夏彦がどぎつい化粧をした年増に全身をなぶられ遂にAnusに止めを刺されると云ったような設定や、魔女の不思議な力に迷わされ、高手小手に縛られた夏彦が、両肢を思い切り開かされて数々の責めを受けるといふような想像が毎夜のように脳裏に浮ぶのだから……。

人並に強いて評価するならS七〇％M三〇％というところだろうか。

女斗美ファン+浣腸マニア=夏彦

ただしプラスアルファの小要素は広く含まれているものとして、こう自認しよう。

妻との壁を破る

専門学校出で堅実すぎる程の良妻賢母型の女房と結婚以来、夏彦は十年を越えても、そんな性癖を満足させる機会をもたなかった。

いや持とうとしなかったのかも知れない。精神的にも肉体的にも健康すぎる程健康な妻に、私のアブ性を知られるのを、極度に懼れたのかも知れぬ。

若い頃は共稼ぎで妻に経済力があり、人格的に隙のない妻に内心威圧を感じていた故もあるう。何度かの所謂倦怠期にもお互いに自分の趣味(夏彦は刀剣、妻は和歌)を生かす態度を粧って、兎に角乗りきってきた。粧っていたのは夏彦の方だけだったろうが、妻はSEXには興味は余り示さない方(?)であり(註、不感症ではない)、フォアプレイとして、その性癖を試みることは決してアブではないと、自分に云い聞かせて納得するのだが、実際には照れ臭くて、平凡な起承転結に終始してしまうのだった。

ところが、ひよんなことから急に大胆になり遂に壁を破ったのである。一月下旬、上司

であり、個人的にも尊敬するM部長宅に夫婦で遊びに行った折、酒がでて部長の奥さんも話に加わり、SEXが話題になって部長夫妻のきわどいことを平然と坦々と云う雰囲気。さそわれて我々も自然にひたっていった。それは夏彦の照れ臭くて云えないことを部長夫妻が代弁してくれているようなもので、大いに我意を得た思いであった。

妻もいつになく(無理にすすめられた酒も手伝って)積極的に質問までして、しきりに感心して聞いていた。

さらに興がのったのか部長が「いいものを見せてやる」と消えたと思ったら、大風呂敷をもって現われた。まず例の秘写真が大きな桐箱の中に、小封筒ごとに分類されてぎっしり。「さあ奥さんも、じっくり、ごらん下さい。幸い今日は子供もいないから、後でフィルムもお見せしますよ。君達夫妻の幸福のためにね」と温和な顔で部長がいう。奥さんも平然と「まあまあ、おめかけ趣味よりいいと思って好きにさせているんですよ。私はもう見あきましたけど、初めのうちはかなり刺戟がありましたわ」とつけ加える。

妻も割合、平気な顔で小封筒から出しては

眺めている。

実は夏彦もそれに類した写真は数十枚。いつのまにか所蔵していたが、部長のそれと比較すると量といい、質といい貧弱なものだった。

見せられた中に縛り、器具での責め（女性同志）同性愛（女性三人）動物と人間などレパートリーに富んでいる。所謂四十八手式のもの、ありきたりで役者がちがう位の興味しなかったが、前記のそれらには私にも刺戟があった。

更にそれから見せてもらった八ミリ（十巻位あったが写したのは六本）の中で、貞操帯をした女性を乱暴に責めて侵すもの、ベッドに大の字にしばりつけ、鞭打ちアクロバッチングな姿勢で行うもの、女性同性愛でこけしを用いて責め合うものなどが、深く夏彦を捉えた。中でもワンカットだが Anus 責めとそれを用いたゴイッスがでてきて、ドキリとさせられたし、それを妻に見せたのは大きな収穫だった。

社員旅行や宴会の三次会などで、かなり八ミリは見なれているつもりで夏彦だが、部長宅で見たような、刺戟に満ちたものはなかった。

帰途、駅から家までの暗い道で、決してあいうことが変態だとは云いきれないということ、フランス人などの間ではアヌスコイツが普及していること。夫婦の間でマンネリズムを打破するため、いろいろウォアプレーを行っている知人の例話など冗談めかして、しかも熱心に説いていった。表情には決して出さぬ妻だが、時々もらす溜息が心に動揺を与えていることは確かだと思っただし、夏彦自身、今夜こそはという気持から少なからず興奮していた。

寝床に入ってから、私は更にビールを運ばせて妻の来るのを赤子が母親の乳を求めるような気持で待った。十時半をまわって住宅街の夜は寂としている。妻が入ってきた。寝巻に着換える動作を横目で探りながら、不意に後から妻をだき寄せた。

「だめ、今あれなの」
意馬心猿の気持である、俺にはガックリきた。

「フランス式でいいわ」

しばらく沈黙がつづいた後、妻がかすかな声でいう。夏彦は再びとびおきて妻をだきしめながら新婚当時よろしく――。

「何でも話せる。どんなことでも許してくれ

るのは、お前だけだ。何をしてもいいね！」

妻の手に力が入り、同意を伝えてきた。

「用意するからチョットまって」

書斎にかくしておいた、三〇cc 容器、消毒薬、それに妻の化粧箱からクリーム、ルージュ、白粉、その他の小道具を運んだ。

薄目をあけて、それらを見た妻の目に一瞬おそれと疑惑を発見した俺は

「お前の一番美しいところは腰の線だ、知っているかい、そこを一層美しく化粧してみたんだ」

妻をしずかに、俯伏せにし、衣類をぬがせた。三十三になったばかりの双丘はまだ充分張りをもっていた。

残りのビールを口うつしにのませ、器具に吸い上げた。

便意を催さない程度にゆっくり、もう一本追加したが妻は殆んど苦痛を訴えなかった。

――その夜、夏彦は遂に妻のもう一つの聖地をおかした。それは全く初夜のような新鮮な気持だった。

翌朝、食卓で顔を合せた時、すっかり冷静で常識的な表情に戻っている妻を見て、夏彦は再び近寄り難い妻の姿勢を発見した。同時に太陽の下における夏彦の心も三六〇度回転

して、とりすました表情で会社に勤めねばならない複雑な心の痛みを感じた。

然し長年も続けた夏彦の欲求を一夜に満したことは、大きな厚い壁を打破ったことには違いなかった。

ところがその後も一度破った壁だからと、再三それを行うことを夏彦は望んだが、妻はかなり強くそれを拒否するのである。

昔の羽村京子の所謂、A感覚の序の口でさえ、彼女は否定しているのだ。女としてそれが正常であり、V感覚を通じて夫の愛情を確認したいのは当然だと思いつつ、俺は又満たされない、裏切られた気持を味った。

他人には良妻の見本のように云われ、悪い気持もしないことがあるが、夏彦の心の奥底には妻の選択を誤ったという感じと、時には憎しみさえ覚えている。ああ俺はやはり、かなり重症か？

夏彦の性歴

夏彦の幼児期は浜町河岸の花街に近い商家で育ったが、いつごろからA感覚にめざめたのか確りしない。ただ、よく昼間、家人のいない友達の家に四、五人で集まり所謂「お医者さんごっこ」をしたのを覚えている。女の

子もいたのだが、それについては、印象が薄く、ただフランス人の男の子の美しい皮膚と薄紫色の可愛らしい花芯だけが、妙に鮮明に印象に残っている。

小学校に行くようになってからの記憶は、かなり確りしている。主に近所の女の子が対象であったが、印象に残るだけでも五指に余りあるのだから、かなりその頃から素質はあったのだろう。

フロイド流に云えば幼児期のSEXの対称はanusであり、成長するに従ってP及びVに移向するものらしいが、その意味では夏彦などは一種の發育不全型なのだろう。しかし理屈をこねるつもりではないが、人間一人一人肉体的素質もちがうし、育った環境と異った肉体的体験の中で、美に対する主観も、SEXにつながる好みも、独自のものが生れてくるのではなからうか。又それでいいと思う。食うこととSEXは人間が動物である以上、いかに精神的な活動やスポーツで昇華させようとしても、しきれるものではない。我々戦中派は、それをこの目で見、体験してきた。芸術家たちはやはり堂々とSEXを肯定し、それぞれの自由な表現方法で、独自の目で見極めたものを発表すべきである。

政治や、法律のごとく、人間性の単なる皮相のみを把えるようなものに拘束されて、何で本当の美を表現することが、できるかといいたい。

止めよう。落書き帳に理屈を並べても仕方ないし、夏彦もそれが嫌いなものだから――。

免に角、少年期に育くまれた夏彦のSEX対象は成長すると共に消えるどころか、益々大きくふくれ上りAへの憧憬は烈しく燃えつづけた。しかし戦争の激化と共に夏彦の環境も目まぐるしく変化し、復員したときは灰燼と帰した吾家の焼跡に立って自失していた。

この辺は「妄執」の中に、書いた通りである。そこに登場する三人の女性もモデルが実在しているが勿論小説のつもりでかいたのだから多少の虚構はある。だが、ニヒリティクな気持と、荒れた感情に支配されて衝動的な、無責任な、そして悪魔的なこずるい計算で彼女達の心理の綾をあやつり、女心の葛藤をニタニタ楽しんでいた夏彦の当時の事実だった。

十八、九のひたむきな乙女心を、自在にしその内三人までクリスターマニヤ夏彦の犠牲にしたのは、今考えて罪深いことと思う。然しその反面、遠い過去の何枚ものベールを通

して見ると青春の楽しい思い出の一コマとも考えられるのだ。

東京に復帰しての数年間、新入社員時代の夏彦は狂ったような戦後の街の中で、所謂アプレゲールの行動に全エネルギーを注いだ。

仕事もよくしたが、夜の行動が楽しくて仕方がなかった。一杯入ると必ずといっていい程、紅灯を求めて徘徊した。荷風の『墨東綺譚』にでてくる街、玉の井、洲崎、亀戸と下町から遠く亀有、立石辺りまで、足をのぼした。深夜ひとり妄想を逞しくしていると、それらの女共の顔や姿態が、ふと鮮明に浮んでくることがある。

数十、いや数百を、超えているかも知れない、それらの女性達は、今どうしているだろう。仲には落付いた主婦におさまって、PTA婦人として活躍しているかも知れないし、場末のバーのホステスになって厚化粧でしわをかくすのに、腐心してくらしているかも知れない。

兎もあれ、夏彦は一度も病気をうつされなかったのが奇蹟と思える程、精勤？したものだ。道学者から見たら、この上ない不徳漢だろうが、重い戦争の灰色に疲れた夏彦の年代に許された唯一の排出行為だったと弁解する

外あるまい。

いや弁解することはない、今二十代にある人の方が良い年代に生れたとはいいいながら、大らかで比較にならない快樂の中に生き生きと生きているのだから。（読者通信など読むと益々その感がつよい）

でも、夏彦は慾が強いのか、そんなに赤線に通っていても、いつも満たされなかった。勿論誰でも精神的なものを求めて行くのではないと思うが、少くとも、その方の慾望は或る程度満たされたのだろうと思う。

ところが夏彦は、そこが常人とちがうところなのだ。ああいうところの女達ほど、常識では計れない、精神的潔癖さを、もつものだし、平凡で健康なものなのだ。例えばV感覚はかなりひどいことをしても、平気で許しているのに、絶対唇は許さないというような。

——まして夏彦の慾望を素直に受入れてくれた女など（それもごく軽いAnus責め）ごく数人に限られていた。所謂、馴染を重ねてさえ、そうだから、初回などから、そんなことをしようものなら変態あつかいされて塩をまかれるのがオチである。当時、案外スタイリストで自尊心の強かった夏彦は彼女達の怒声をおそれた。せいぜいある姿勢にもっていく

ことによって視覚を楽しませ、何かのはずみを粧って、触覚を満足させる程度にとどまった。本当の行為は淡泊であったしプレイボーイを気取っていたから、よく玉代をつけて連れだし、飲み食いさせてやった。それも下心がないわけではないのだが、少し夏彦好みのことであろうとすると笑いこけたり、照れたりして軽く拒否されるのが普通だった。稀には俯せになったまま、相当のことまで許すのもいたが、全く反応のないのに興を失ってしまふこともあった。

× × ×

現在中年といわれるとしになって、そんな遊びは卒業したつもりでいるが、実は却ってとしと共に、その想念は強く高まってくる。全く救い難い男というのか所謂何かの業を負って生れて来たのか夏彦という人間は、死ぬまでその慾念を持ちつづけるのではなからうか。

夏彦の最近の体験

四月下旬のある金曜日、新宿のキャバレー「J」に、若い腹心の部下二人をつれていった。ある情報によって買った株が当って二万ばかり入ったので、それをパッと使ってしまった。うつもりであった。

「J」に入る前、小料理で相当飲んでいるのだが、夏彦は下心もあり、それに車できているのでビールだけを適当にして繰込んだものだ。

華やかな声で女狐どもが三匹現われる。その内、絹子だけは指名で他はヘルプ。

「アー課長さん、いらっしやい。この間はどうぞ。今日は？ ああのウルトラエッチの部長さんご一緒じゃないの？」

「ひでエこと云うな。ウルトラエッチの部長って、仲田さんのことだな」

「そうだろう。多分。この間、客の接待で来たんだ」

「あの部長さんたら、ほんとにすごいよ。トイレに行くと云うからついて行って、おしぼりもってまっていたら、いきなりズボン広げて手はいいから、これふけだって」

そんな会話が始まって、若いKとBは大いに乱れ、フラつきながら踊りに出かけてしまった。

ここで美しい女狐絹子について、ふれておこう。

前に来たとき、夏彦は幹事役として忙しかったのだが、一番先に絹子に目をつけた。しゅすの黒地に金の竜が刺しゅうされた支那服

が胸をくつきりと浮き立たしている姿態は、特に中年の男心を把えた。顔は細面だがピツタリした支那服の曲線は肉体の豊満さを如実に示していた。冗談のように上役たちが彼女を口説き落すことに賭けているのを小耳に入れたが、夏彦もひそかにファイトをもやしていたのである。

女の年齢はわからないと云うが、絹子は二十七、八というところか、落着いた態度や、言葉の端々に三十近い年増であることを感じさせている。それに変にウジウジしたところがなく、あけっぴろげな多少ドライに見える性格が後くされないように思われた。

KとBが、どやどやとボックスに戻って来たので、絹子と踊りにでた。彼女の踊りはさして上手ではなかったが柔かくピツタリねばりつくようでリードに素直についてくる。だんだんチークになりながら

「今日は何なの？」

「何なのって？」

「会社のつけじやないの？」

「ちがう。今日は、俺の身銭きってきているんだ」

「部下のために」

「まあ、そんなとこかな」

「いい課長さん」

「ハイ、アリガト」

「じや今日は余り追加しない方がいいわね」

「うん、でも心配しなくていいよ。アブク銭が入ったんだ」

「へえ景気いいのね。お宅の会社」

「ところで、ずばり云うがね、どう今夜浮気しない」

「奥さんは？」

「埼玉の実家に祝い事があって、三日ばかりご不在」

「課長さんなら大丈夫かな。絶対、秘密まもれる？」

「ばか！ そんなこと、人に云う奴があるか」

「でも男の人って、すぐ自慢たらしく仲間に云うでしょ。女の世界って、うるさいのよ」

「俺を見損うなよ、部長達だって君、ねらってるんだから、そんなことしたら、俺がまずくなるよ」

「一晩だけね」

「当り前だ。浮気は同じ相手と、何回もするものじやない」

「課長さんて、プレイボーイね」

「そうかも知れんね。でも君、病気はないんだろう。イテエ！」

「失礼ね、課長さんこそ、大丈夫なんでしょ
うね」

「不思議と、一度もかからなかった」

「うまいのね、」

「運がいいんだ。」

「君、御亭主かヒモさんは？」

「いないわ、いたら浮気なんてしないわよ。
でも結婚したことあるわ」

「近ごろは、こわいんだってね。いいところ
までいって、さあ一戦という時、黒眼鏡かけ
たおにいさんなんかでてきて——」

「そうよ。課長さんなんか浮気だから氣をつ
けた方がいいわ」

「君みたいな可愛い子ちゃん、一人にしてお
くなんて勿体ないね」

「課長さん、疑ってるのね、私を——」

「中年になりますとね、色々と」

「じゃ、はねてから私のアパートへいらっし
やいよ」

「ほんとに行ってもいいの」

「えーえ、いいわよ」

「ドアをあけたら、お母ちゃんお帰りなさ
い——なんて可愛い子ちゃんが、でてきたりし
たら、カクンだからな。イテエ、イテテ、
イテテ」

これで、狐と狸の化かし合いよろしく、お
互いの打診は済んだが、こういうところの女
性は危ういところで、するりとエスケープす
るので、それでもいいと思ってKとBに別れ
て車の中で待つことにした。夜半からふりだ
した雨が相当強くなってきた。裏通りの旅館
の塀に駐車してラジオを聞いていた。

十二時になっても現われないので、やっぱ
り冗談にされてふられたかと思ったが、エン
ジンをかけて暖めていると助手席の窓をコッ
コツたたく音がする。

絹子が、ネッカチーフをかぶって立ってい
る。

ロックをはずしてやると

「待った、課長さん。そこまで友達に入れて
きてもらったんだけど、ばれるとうるさいか
ら、別れてかけてきちゃった」

と、のりこんできた。

車を動してから無性に放浪癖にかられて

「このまま雨の街道をドライブしないか」

「ええ、でも、ドレスを着換えて、もっと地
味な恰好しなくちや、課長さんの奥さんらし
く化けて行きたいわ」

「アパートに行っていないの？ほんとに」

「おこるわよ課長さん。まだ疑ってるのね。」

じゃ、どうしても来てよ。それによそに行く
と高くつくから」

「悪かった。どうも、こういうところの女性
には、だまされつけているんでね。アパート
どこ？」

「柏木」

いくところまで流されて見ろという気にな
って彼女の教えるままにアパートについて十
部屋位の安アパートの一室に入った。うまく
設計されていて四畳半一間だが、一人ぐらし
には、その狭さが却って落着きと気安さを感じ
させた。何気なく観察すると調度品にも装
飾品にも女らしいなまめかしさがにじみ、少
なくとも男氣を感じさせるようなものは見当
らなかった。

そんな夏彦の心を見通すように、

「課長さん、どう、これで納得いった？お客
さんを私の部屋につれてきたのは始めてよ。
課長さんが疑っているみたいで口惜しかった
からよ」

「ほんとに悪かった。君と一緒にこの部屋に
入って見かけとちがって、かたい生活してる
なって、すぐピンと来たよ」

「そんなこと本当にわかる？」

「そりや男も俺ぐらいの年齢になれば、いろ

いろ経験をつむからね」

「課長さんは、特に——でしょ」

「そうかも知れないね」

「課長さん、今までにどの位の女の人知っているの？」

「赤線青線の女性を含めてかい？」

「ええ」

「さあーね、二百人から三百人位かな」

「確りしない程なの？あきれた。でも男の人っていいわね、それができるんだから」

そんなやりとりの後で彼女は割合に世間智に乏しいこと、二十二で結婚して四年間、主婦の座にいたこと、相手の男の教養？のなさ、と働が悪いのに愛想つかして別れたこと、現在料理学校に昼間通って独立をはかっていることなどを写真や、学生証まで見せて説明して聞かせた。

夏彦はその真疑は問題ではなかったが、確かに彼女は案外純真で、ノーマルな考え方をもち女であることを認め、軽い失望を感じていた。

夏彦の求めるものは、もっとデカダンスなニヒリスチックな、そしてアブノーマルな雰囲気なのだ。この女は案外後腐れがあるのではないか——ふと、そんな気もした。しかし

（かまうものか。ここまで来て男が退却できるか。夏彦よ、いいチャンスだ。この女にお前の慾念の限りをつくして、それで逃げだせばいいじゃないか。「お前は子供だ。女の複雑な欲びを教えてやろうとしたのに——。お前なんか、そこらの青二才と乳くり合っているのがせいぜいだ」と頭ごなしにののしって尻を捲って引上げれば、それでいいじゃないか）

兎に角行動に移そう。経済的に恵まれぬ環境に育ったらしいこの女の泣きどころは、何と云っても物質作戦だ。完全に主導権をにぎって、今夜はきりきり舞させてやろう。それには、これから一瞬の隙もなく、めまぐるしく引きずりまわすことだ。

それに別れぎわのことを考えると、ここでは後味が悪いと考えたので「兎に角、どこかへ行こう。深夜のドライブもいいよ。君関西育ちだって云うんだから、東京余りくわしくないだろ、さあ」と、うながした。

× × ×

篠つくような雨がフロント・ガラスにたたきつけられ、ヘッドライトの光茫だけがかすんで深夜の川越街道ををらしていった。ラジ

オが甘いムードでタンゴをながしていた。途中でレストランに入り、軽い食事と、ピンクレディ二杯をのんで彼女は蕩然となって運転している夏彦にもたれかかっている。「すばらしいわ。課長さんと二人だけね。ほんとに」

女学生じみた台詞に照れて、私はグッとアクセルをふんだ。五〇、六〇、スピードメーターが上る。

「こわい？今七〇キロ超えたよ、雨でスリッパすれば、このまま終りだ。心中ってことになるな」

「それでもいい、だけど、課長さん、困るでしょ」

どこの馬の骨だかわからない夏彦との一夜のアバンチュールに、この女は雰囲気酔って生命の危険も感じないのだろうか。

「俺ってね——」

「なによ、何でもおっしゃいよ」

「俺って、少し普通のことでは、満足できないんだよ」

「ああ、あの話、いやだ」

「いやなことあるものか。これから、どうせそうなるんだろ」

「ふふ……、そりゃそうだけど、普通とちが

うことって？縛ったりなんかするの？」

「なんだ知ってるの。俺のは縛るのより、君を思い切りいじめたいんだ」

「いいわ、いじめても、だけど、からだにきずのつくようなことしないで——」

「君、そんなことするの、アブノーマルだと思わない？」

「そりゃ、思うわ。でも——」

「でも——どうした？」

「でもね、正直云うと、その面でも、前の亭主、物足りなかったのよ。慾は、強いくせして、変にオドオドして、同じようなことばかり——」

「よかった。本当に。俺は又、誰かさんみたいにウルトラエッチなんて云われやしまいかと心配したよ」

「あれは商売用語よ。若い娘なんか意味もわからず、さかんに使ってるわ」

やはり夏彦はついていて、女も絹子位の年増になれば相当の知識はもっている。体験は兎も角としてリード次第で、どうにかなりそう。このムードを持続させつつ、自然にもっていけば——。

× × ×

東上線S駅に近い旅館をたたきおこして、

この一室に治った。田舎ではあるが一応二間つづきで、バス・トイレがついていたのは、俺には何よりだった。

さすがに深夜の雨の街道を走ったのでつかれていたし、運転から解放されて、ビールをグツとおおった。わざと風呂は別に入り、絹子がでてくるまでにスマートバッグに入っている器具をふとんの下にしおぼせた。下心がある。湯は後でもう一度入るからぬかないように云っておいた。

旅館のだした単衣には手を通さずスリッパ姿で絹子を床に入れると、燈りを消してと云ったが、夏彦は一段だけ消して豆ランプはわざとつけておいた。目がなれてくると、それで充分鑑賞できた。絹子のきめは細かく、乳房は少し外側にとびだす恰好に向いてかたくしまっていた。冷静に、表情とうねりを確かめてから、ゆっくりと俯伏せし腰の上で手首を交叉させ、軽く縛った。

二つの丘は実に豊かに実っていた。なだらかな斜面の両側に、えくぼが愛らしく刻まれて、その豊かな発育と爛熟を示していた。

左手を働かせながら、そっと二〇cc浣腸器にビールの残りを吸い上げる。

「これ、何だか知ってる？」

顔を左へねじまげて、それを見せる。

返事のかわりに絹子は深いためいきをして鼻をならした。それは軽い嫌悪とも、陶醉とも、あきらめとも受けとられた。

絹子は確かに嫌ってはいない。微かではあるが反応を示している。よし、もっと責めてやれ。

挿入の角度を変えたり、速度の緩急を変化させたりでビール一本を殆んど注入してしまった。

その間、時折大きく呼吸して腹を波うたせたり、ヒップを僅かに上下させたりはしたが遂に一言も発しない。

「どう苦しい？苦しかったらやめるが、まだ我慢できるね」

俯伏せのままうなずく。

× × ×

綿のように疲れ果てて、熟睡し、ふと気づいて、時計をみると、八時半だ。「しまったッ」今からでは、いくらとばしても街道が混雑しているから間に合わない。度胸をきめて宿から、会社に電話して遅刻の届けをだしておく。

絹子はまだ睡っている。こんな朝、女の顔がきたなく見えるものだが、色白のきめの細

かい膚が、それをカバーして可愛い表情を見せていた。

いつものことだが後味の悪い気持で別れたくないと思った。池袋まで送って綺麗にサッパリと別れよう——そう思いを決めると絹子をおこした。

× × ×

帰りの車の中、ピッタリともたれてきて、どうも運転しにくい我慢していると、

「課長さん、浮気は同じ女と二度しないって云ったわね」

「ああ云ったよ」

「あたしとも？」

「原則としてはね、君が絶対口のかたい女なら、又会ってもいいがね」

「課長さんこそ、特に会社の人には絶対ね」

夏彦の心の中では、同じ浮気にしても絹子と、このまま他人に帰るには未練がありすぎた。

池袋の駅に近いところで

「君、ここですかと別れよう。又気が向いたらでかけるよ。これタクシー代」

聖徳太子を数枚彼女の胸におしこんで車をとめた。

「お金でつき合ったんじゃないわと云いたい

んだけど、学校に納めるお金もあるから、じや遠慮なく」

「じゃバイバイ」

「バイバイ」

まるで若い年代の恋人同士が、別れるような、あっさりした別れ方であった。

日が経つにつれて絹子との一夜が懐しく思い出され、特に夜半に例の空想の領域にひたると必ず絹子の姿態が、チラチラする。しかし、仕事も忙しかったし、又絹子が本当に夏彦を忘れ得ぬ人と心待ちにしているような自惚れ心もあって、約一カ月もたって何気ないような顔で出かけて行った。

指名は故意にしなかった。本番が、ついたが、いつまでたっても絹子は現われない。

踊りながら古顔の娘にサインを送ったら間もなくテーブルに來た。

「今日、絹子さん休み？」

「そうくるだろうと思ったわ。彼女やめたのよ」

ドキッとする心をおさえて

「へえ、結婚でもしたの？」

「ちがう。まじめよ、お母さんがなくなったんで故郷に帰るんだって、やめたのよ」

内心の失望をおさえきれなかった。

「フッフッフッ……課長さん応えた？」

「いや、ちっとも」

「知ってるのよ、課長さん、すごいんですってね、フッフッフッ、でも、見えたならよろしくって云ってたわ」

夏彦にはショックだった。女への不信、社会人としての恥かしさ、それにもまして絹子を失った悲しみが、今になって大きく拡がった。

今筆を動かしつつも、もう一生めぐり合うこともないであろう絹子への思慕が夏彦の心を重くしめつけてくるのだ。

(これでいいんだ。一夜だけの浮気と割切ったのは俺の方じゃないか。プレイボーイを自認するこの俺が未練たらしいぞ)

ここいらが石川達三の所謂ロマンチックなニヒリストたる夏彦の真実か？ 呵々……

なつかしき作品とモデルたち

子供も大きくなったし、深みに入る懼れから家人の留守に、焼きすてた旧号の奇クの数々。然し又、いつからともなく、溜まっていた、古書店から豪華であった頃の奇クを集めてくる。

あの頃(昭和二十八、九年頃)の旧号が莫

迦高い価格で売られている。今となつては焼却した奇クが惜しまれるし、自分の性癖を否定する気持もないので、失われたそれらを、おいおい買い戻していくつもりだ。

印象に残っている作品としては、花村恵美子さんの「浣腸マニヤの手記」「続浣腸マニヤの手記」――

これは二十九年頃の作品だと思うが兎に角その行動性と研究心の旺盛なことには感心して読んだものだ。それと確か井上正子さんだったと思うが「埋もれた日記」が素直で正直な告白文として頭に残っている。羽村京子さんの所謂「蛙腹もの」には大いに畏敬の気持ちを抱いていたことには間違いないのだが、A感覚の深部については夏彦など到底ついていけない次元と諦めざるを得ない。

それに沼田不二世？作者の名前は確かではないが「アーヌスイじめ」という作品、――自分の体験だったと思うが、女同士の争いの残酷さが表現されていて、これも頭に残っている。

「気狂いにされた令嬢」「淫らな虫」――こうして書いていると、だんだん思い浮んでくる。辻村氏の「奇譚三十九夜物語」の中にも度々浣腸の話がでてきて楽しんだものだ。辻

村氏がでてきたのでモデルにふれよう。

辻村氏の本職は何であるか知らないが、彼ぐらい研究熱心で、文才があり、加えて写真の技術に秀れた人物であれば、モデル諸嬢も喜んで裸身を供するものも尤ものことと思う。

口惜しいけれど、憧れの人物として認めざるを得ない。我々は、彼の中に自己を投影させ、彼の行動によって自分の満足を得る外に道はない。

本当に幸せな男だと思う。彼が手がけたモデルは無数であろうが、過去現在を問わず夏彦の好みから好きなモデルをあげてみよう。

杉 美美――細身のひきしまった躰と古典的な顔の哀感が何といってもすばらしい。然し彼女の活躍した期間はごく短く残念。

梨花悠紀子――あの清純さを自由自在に、それもかなり強烈に縛り上げる辻村氏が憎らしい程、特に諦めめの表情は美しい。逆えびにされて足を高くもち上げられたポーズと表情が忘れられない。分譲品に彼女の浣腸ものがあるが是非手に入れたいと思っている。

絹川文代――梨花さんとはイメージが大分違うが、いかにも柔軟そうな白い肌と整った目鼻立ち――。妖艶な秋波には成熟した女のみがもつエロチシズムが溢れている。やはり俯

伏せの姿勢をとった彼女の曲線に魅力を感じる。双丘の奥に隠された花芯を想像すると気が狂いそうになる。

大塚啓子――腹のたるみと肉付が豊かすぎるのが、夏彦の好みではないが、この人は時に恐ろしいくらい、表情によって、角度によって、美しく感じることもある。緊迫感不足、白痴美的表情が多い。それでいて勝気なものを感ぜさせる不思議な人。

大塚さんと似たタイプに昔、伊吹まさ子さんがいたが、この人は一層白痴美的な美しさがあり、徹底した従順さが覗かれ、可憐さがあつた。

旧号に辻村、塚本両氏が実際に浣腸を施した時の撮影記があつたと思う。手に入れたかつたなあ、ほんとに。

あの当時、夏彦好みの人をあげれば、加茂良子、前本妙子、館典子さんたちだが、特に加茂さんの細身の躰と美しい表情、前本さんの「屈服」だったか、あの姿態と諦めの表情は実に印象的だった。

最近の文献特集号から夏彦の好きな人を挙げると新井マリ子さん、五月亜紀子さんだけでなく、お二人とも生硬でこれからという感じ、新井さんの表情には蔭があつてほりの深い顔

だから、思い切りいじめたら、美しい表情の変化に富んでいると思う。

最後にこれは新人ではないが「私をいじめて下さい」で一躍有名になった東浦ひかるさんについて一言。

躰つきは大塚さんと同型で客観的に見たら啓子の方が美人だろうし表情も変化に乏しいだろう。しかし誌上を通じて知る限り東浦さんのマゾの方が本格派だと思う。これも辻村氏のレポートに実際に縛りから浣腸を施した時の様子が（これは羽京氏への返書の形で書かれていたと思う）克明に描かれていて垂涎を禁じ得なかったものだ。先月号に東浦さんが復帰される由の通信がのっていたが彼女の幸せを東京の空から祈りたい。

転向宣言

以前「深夜の独白」に夏彦は大分年寄りくさいことを書いたし、時に焰が燃え上り、時にくすぶりはしたが、長年消えたことのなかったこの情熱？を一生陰気に持ちつづけることもないと最近考え始めた。

それは兎に角妻との壁も破ったし、絹子との一夜が転期になったことは否めないが、太く短く主義の夏彦の人生は五十年とすると僅

か十一年ということになる。全く趣味の違う相手に自己をおしつけければ、迷惑でもあろうし、罪造りなことにもなるうが、傾向の同じ者同士が共に愉しむのに、どこに不都合があるというのか。深刻に考える程のことではないのではなからうか、というのが最近の夏彦の感想だ。

お互いに理解し合い、信じられる相手が見つかれば一人で悶々としているのが愚かしくなってくる。密通、不義とは、根本的に違ふし、妻子ある夏彦が、そんなプレイをしても背信行為と一概にきめつけられることもないと思うのだ。

妻には、どうしても、その趣味はないのだし、夏彦の欲望の吐け口が外に向っていくのは仕方あるまい。——と自己弁護しても始まらない。

正直に呼びかけている人達がいるではないか。（お前だって呼びかけたくて、その人をいつも羨ましがっていたじゃないか。うじうじするな。昼の夏彦のように行動的に明るくやれば、いいじゃないか）

これからはおくれればせながら、夏彦も仲間入りをさせてくれ給え。

広いこの世には一人や二人、こんな夏彦の

性癖を理解してくれる女性がいるのじゃないだろうか。

甘ちゃんな考え方だが、そこに生きる光明を見出すことは、これからの夏彦の人生に大きな豊かさや厚みをもたせてくれるにちがいない。

本日、この深夜の床で、ものぐさながら夏彦は行動派に転向を宣言する。

転向宣言をした以上、夏彦の正体を明らかにしなければ男らしくない。

さてしかし、どんなことを書くべきかな。

1、性癖は、今までの落書きで、充分お解りと思う。

2、性格 明朗、物にこだわらない江戸ッ子気質。反面鋭敏な感覚と、気の廻るところ。（これはいやだと自分

でも思うが野人になりきれぬ、イ

ンテリの弱さだね）

3、学歴と社会的地位

私大旧商学部卒。

4、収入 必要ないからやめる。

5、身体的特長 身長一七三糎、体重約六〇

キロ、容ぼう十人並（若い時は目がきれいといわれた）

もういやになった。

見合いじやあるまいし。

ところで夏彦の好みだが先ず精神的には、

第一に、クリスター・マニヤに近いM傾向の強い人というところかな。

第二に、くずれた中にも、心に純粹なところのある人。

第三に、お互いに、別れのサッパリできる位、野暮天でないこと。

第四に、お互いに秘密を守り、その愉しさのわかる人。

虫がいいかな。云わば女性の理想像だね、そんな人。外に具体化した好みとして、肌の白い人、首のほっそりした人、指の細く長い人で、夏彦より年下の人が好ましいが、これは贅沢かも知れん。

要するに夏彦の性癖と好みを理解してくれる人ならO・Kだ。どうも通信欄など、みていると関西の人の方が夏彦のと同好者が多いようだ。

いつだったか京都の女子美大の学生が妻があつて、しかも愛している中年男に呼びかけていたが、可愛かったし嬉しかったね。

奇クの本拠が大阪なんだから当然かも知れないが、関東の女性は意気地がないようだ。

六月に入つたので例によって七月号を浅草

の本屋に買いに行った。いつもその本屋では「これ下さい」と云うとサツとカバーのついた本誌をわたしてくれる。別に夏彦などこの頃は恥かしくもないがスマートで買い易い。

夏彦の転向宣言から間もないのに七月号の「読者通信の女たち」で芳野眉美氏が手きびしく女性の呼びかけに対して男性の返書、又は男性の呼びかけを批評しておられる。

芳野氏の「濡れにぞ濡れし」の洗練された文章に敬意を表して来たし、そして、彼の傾向とはっきり異質なものを認めつつ、ああいう世界の愉しみも、肯定できるのだが、七月号の彼には感情的に反撥せざるを得ない。

勿論、言論は自由であり、批判精神は結構だ。然し読者通信に呼びかけるに至る心の中の葛藤と、斗争、そしてその後に行動したいと誰しもが望むのであろう。その表現が幼稚であり、連絡方法があかぬけしていなくても（又は実現不可能だと思われるものも）そこに止むに止まれぬ、心の叫びがあり、一つ的情熱を認めざるを得ないのだ。もとより、ふざけたものや、ひやかしは編集部で没にするに違いないのだから。

そこでよし求める相手が、得られなくとも（得られぬ場合が殆んどと思うが）その読者

の心は救われるに違いないと思う。

いたずらに銜気や、先輩風を吹かして若い読者の芽を摘むような言辞は控えていただきたいものである。

それは本格的？マニヤの方々や、投稿の定連達から較べたら、読者通信に現れる新人達の中には突飛な、そして時には吐の立つ声もあるかと思うが、夏彦はそれでもいいのではないかと思う。最近、同人雑誌的云々の文字を目にするが、所謂ベテラン諸氏だけが独善的（独善的かな？）に思い上り、若い読者諸氏を圧迫するようなことが誌上を通じて行われるならば、そのセクショナリズムが長い年月の内に必ず行きづまりを起すことが予見できるような気がするのだ。

若い層、新しい読者といえども、こと、この世界に関しては、対等であり、表現や、呼びかけは自由である筈だ。誌面にのらなくとも、書くことによって心の中を吐露し、陰気な気持から脱け出せば、それだけでもいいじやないか。

たまたま七月号を読んで感じたことをしるしたが、芳野氏だけに反論したのではないから、大きく受容されたいと思う。

〔代理部新版分讓品一覽〕

腸露出無念腹切腹	大手札十枚一組 略号(せ10) 八〇〇円
全裸の切腹悦楽	1 大手札四枚一組 略号(ひた) 四〇〇円
全裸の切腹悦楽	2 大手札四枚一組 略号(ひと) 四〇〇円
マニヤの切腹	大手札三枚一組 略号(まに) 三〇〇円
女子斗争場面写真	大塚、玉田 略号(のわ) 三〇〇円
二女格闘場面写真	大手札三枚一組 略号(のか) 三〇〇円
全裸正面切腹姿態	大手札三枚一組 略号(のみ) 三〇〇円
切腹に悶える裸身	大手札三枚一組 略号(のそ) 三〇〇円
浣腸と便意の苦悶	遠藤百合子 略号(のけ) 三〇〇円
強烈エビ責め	大手札三枚一組 略号(てへ) 三〇〇円
後手首の高縛り	玉田美佐子 略号(ねむ) 三〇〇円
椅子またぎの責め	大手札三枚一組 略号(ねと) 三〇〇円
血紅切腹決定版	大手札十枚一組 略号(れは) 一〇〇〇円
血紅切腹凄惨姿態	大手札十枚一組 略号(れみ) 一〇〇〇円
黒いフンドンを誇る	遠藤百合子 略号(くわ) 三〇〇円
高圧空気浣腸	大手札三枚一組 略号(むい) 三〇〇円
浣腸場面大写真	大手札三枚一組 略号(むは) 三〇〇円
施される浣腸	大手札三枚一組 略号(むろ) 三〇〇円
全裸脚挙姿態	長野良子 略号(てい) 三〇〇円
全裸アケラ縛り	長野良子 略号(てい) 三〇〇円
全裸屈伸縛り	大手札三枚一組 略号(てほ) 三〇〇円
六尺禪の変形姿態	大手札三枚一組 略号(てに) 三〇〇円
蹲踞と拍手	長野良子 略号(てり) 二〇〇円
鬼面と接吻する	長野良子 略号(てち) 二〇〇円
強烈エビ責め	松本アサ子 略号(まと) 三〇〇円
裸身に羞らう	松本アサ子 略号(まつ) 三〇〇円
女賊捕縛	大手札三枚一組 略号(へい) 三〇〇円
女賊処刑	大手札三枚一組 略号(へは) 三〇〇円
全裸緊縛姿態開陳	遠藤百合子 略号(ゆり) 四〇〇円
鼻をいたぶる	遠藤百合子 略号(ゆは) 三〇〇円
浣腸をする女	遠藤百合子 略号(ゆか) 三〇〇円
バンドを脱ぐ女	遠藤百合子 略号(ゆお) 三〇〇円
絞首刑	新宮夫人 略号(るく) 三〇〇円
引回しと晒	新宮夫人 略号(るに) 三〇〇円
磔(はりつけ)	新宮夫人 略号(はみ) 三〇〇円
晒(さらし)	新宮夫人 略号(さら) 三〇〇円
絞首刑	新宮夫人 略号(こけ) 三〇〇円
晒台の生首	新宮夫人 略号(のく) 三〇〇円
斬首の瞬間	新宮夫人 略号(のき) 三〇〇円
斬首処刑場面	新宮夫人 略号(くし) 三〇〇円

月経帯のまま縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆす)	豊満を切り裂く刃 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ほふ)	鎌腹を切られる女 大手札二枚一組 略号 (三〇〇円) 愛川悦子、田中芳代 略号 (らく)	咽喉笛を刺される女 大手札二枚一組 略号 (三〇〇円) 愛川悦子、田中芳代 略号 (らみ)	血紅使用 斬られる女 大手札七枚一組 略号 (七〇〇円) 絹川文代 略号 (らふ)	雲斎の相撲フンドシ姿 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 東浦ひかる 略号 (ろみ)	凄んだ女賊スタイル 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (へに)	バンド、ゴム見せ 大手札五枚一組 略号 (五〇〇円) 東浦ひかる 略号 (へみ)	浣腸を施される女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちら)	煙草責めの裸身 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (たく)	淫らな長髪の流れ
大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ろも)	ふり乱す長髪の悶え 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ろめ)	縄目に悶える夫人 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (ほく)	髪を引き回される夫人 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (ほむ)	自ら施す浣腸 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちぬ)	浣腸器を弄ぶ女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちり)	写真の中に悶える 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (けよ)	写真に埋れた裸女 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (けお)	フンドシ姿の魅力 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 細川アヤ子 略号 (ふの)	フンドシ姿の羞らい 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 栗本ミチ 略号 (ふへ)	フンドシの前後左右 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
栗本ミチ 略号 (ふな)	フンドシの変わった姿 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 栗本ミチ 略号 (ふに)	前開き、ゴムオシメカバー 大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円) 大塚啓子 略号 (しま)	前開き布製防水オシメカバー 大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円) 大塚啓子 略号 (しな)	全裸の切腹悦楽(1) 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (ひた)	全裸切腹悦楽(2) 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (ひと)	乳房しばり 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (うは)	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 略号 (五〇〇円) 大塚啓子 略号 (うい)	木馬責三態 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (もく)	椅子責めの果て 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (いす)	哀婉血紅切腹 大手札五枚一組 略号 (五〇〇円) 大塚啓子 略号 (るな)
双胸の強調縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (そう)	動感海老責地獄 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (とう)	色禪の開股縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (いふ)	鼻責めのアップ 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (はす)	膨満正面縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (へな)	血紅切腹絶命態 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 絹川文代 略号 (ちの)	血紅美女の切腹 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 絹川文代 略号 (ちた)	オムツ着用フオート 大手札七枚一組 略号 (七〇〇円) 大塚啓子 略号 (むね)	バンド着用開股ポーズ 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 東浦ひかる 略号 (つん)	マニヤ全裸緊縛フオート 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 栗本ミチ 略号 (いな)	

○臨月腹妊婦資料の部

臨月腹妊婦緊縛	大手札三枚一組 四〇〇円
田中美佐子	略号 (にち)
診察を受ける妊婦	大手札四枚一組 五〇〇円
田中美佐子	略号 (にし)
臨月腹開陳	(座位)
大手札四枚一組 五〇〇円	
田中美佐子	略号 (にり)
臨月腹開陳	(立位)
大手札三枚一組 四〇〇円	
田中美佐子	略号 (にす)
柱縛りの妊婦	大手札二枚一組 三〇〇円
田中美佐子	略号 (にや)
臨月のヌード	大手札三枚一組 四〇〇円
田中美佐子	略号 (にわ)
妊婦の裸身像	大手札二枚一組 三〇〇円
田中美佐子	略号 (にた)
縛られた妊婦	大手札二枚一組 三〇〇円
田中美佐子	略号 (にる)
臨月の裸身像	(立位)
大手札三枚一組 四〇〇円	
田中美佐子	略号 (にお)
臨月の裸身像	(座位)
大手札三枚一組 四〇〇円	
田中美佐子	略号 (にぬ)
突き出した臨月腹	大手札三枚一組 四〇〇円
田中美佐子	略号 (にい)

○刺青女体資料の部

入墨の高手小手	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いち)
縄に悶える入墨	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いへ)
足吊り三態	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いと)
剥れた腰巻	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いは)
女一匹御意見無用	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いお)
玉取姫が凄む	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いる)
全裸緊縛立像	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いに)
入墨ヌード	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いよ)
後手吊りの構図	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いほ)
黒細帯の裸身	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いわ)
黒禪を誇る	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いか)

入墨自慢	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いり)
黒ふんどし入墨姿	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (くの)
黒ふん媚態の魅力	大手札五枚一組 五〇〇円
山原 清子	略号 (くな)
黒禪背面模様	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (くこ)
黒ふん手吊り責め	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (くり)
全裸入墨姿態	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (いれ)
晒六尺ふんどし	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (ろと)
白六尺禪一本の姿	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (ろに)
白禪後手高手小手	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (らし)
日本髪全裸強烈縛り	大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子	略号 (いら)
洋髪全裸強烈縛り	大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子	略号 (いこ)
日本髪全裸股間縛り	大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子	略号 (いさ)
可憐島田鬚全裸縛り	大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子	略号 (いみ)
黒フン高手小手縛り	大手札八枚一組 八〇〇円
山原 清子	略号 (ひろ)
入墨女体全裸像	大手札十枚一組 一〇〇〇円
山原 清子	略号 (ひへ)
黒禪刺青女体美	大手札十枚一組 一〇〇〇円
山原 清子	略号 (ひね)
六尺禪をするまで	連続二十ポーズ組写真
大手札二十枚一組 二〇〇〇円	
山原 清子	略号 (ひは)
白ふんどし脇差切腹	大手札十枚一組 一〇〇〇円
山原 清子	略号 (ひに)
白ふんどし短刀切腹	大手札十枚一組 一〇〇〇円
山原 清子	略号 (ひぬ)
刺青姐御腹巻脇差	大手札十枚一組 一〇〇〇円
山原 清子	略号 (ひほ)
刺青姐御腹巻短刀	大手札十枚一組 一〇〇〇円
山原 清子	略号 (ひり)
入墨女体海老賣姿態	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (ほか)
文身女体股間縛り	大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子	略号 (ほき)

M資料分譲品一覧

○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる
大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり
大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円

縛った男をムチで料理
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円

女王様の人間便器になる
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円

エビ責めに弄ぶ女
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足舐と嗅香
大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円

顔面に女の尻が乗る

大手札七枚一組 略号(あう) 一五〇〇円

人間犬の芸仕込み
大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円

足指に挟んだ菓子
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円

男を縛って弄ぶ女
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め
大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女
大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

人間椅子の御褒美
大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円

飼犬に餌を与える
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円

股で絞められる首
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円

芳香を嗅がす尻
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円

人間馬の調教プレイ
大手札三枚一組 略号(まの) 五〇〇円

足舐めの奉仕と強制
大手札三枚一組 略号(まわ) 五〇〇円

股責めにあう男の顔
大手札三枚一組 略号(また) 五〇〇円

女に縛られて弄られる
大手札三枚一組 略号(まひ) 五〇〇円

踏みにじられる顔面
大手札三枚一組 略号(まな) 五〇〇円

肩車に奉仕する青年
大手札三枚一組 略号(まは) 五〇〇円

男を縛って玩具にする
大手札三枚一組 略号(まて) 五〇〇円

首を太股で絞めあげる
大手札三枚一組 略号(まや) 五〇〇円

灰皿にされた男
大手札四枚一組 略号(そほ) 六〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ
大手札四枚一組 略号(そに) 六〇〇円

美女に飼われる犬の生態
絹川文代 略号(そろ) 五〇〇円

美女の手で縛られる過程
大手札四枚一組 略号(そと) 六〇〇円

女御主人に使役される男
絹川文代 略号(そち) 六〇〇円

美女のおいしい足を戴く
大手札四枚一組 略号(そぬ) 六〇〇円

むしゃぶりつく素足の味
絹川文代 略号(そは) 五〇〇円

凌辱と美女のなぶり者
大手札五枚一組 略号(そり) 七〇〇円

素足を舐める構図
絹川文代 略号(そへ) 六〇〇円

代理部分讓品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りく」
臨月腹アップ	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りと」
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りせ」
臨月腹の側面	大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号「りそ」
臨月腹の背面	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りも」
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号「りみ」
妊婦ヌード	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「やま」
妊婦しぼり	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「やむ」
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「よむ」
産み月のお腹	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「よま」
動物的な腹部	大手札三枚一組 三〇〇円

安原さゆり 略号「よみ」	妊婦の股間縛り
大手札三枚一組 四〇〇円 児玉 昌子 略号「には」	妊婦八カ月の緊縛
大手札三枚一組 四〇〇円 児玉 昌子 略号「にあ」	妊娠五カ月の緊縛
大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「にこ」	妊娠前裸縛り
大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「まさ」	妊娠初期の緊縛
大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「ぬろ」	妊婦の股間縛り
大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「にと」	分娩後縛り
大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「につ」	分娩後股間縛り

○女体緊縛資料の部○

鼻の穴責め	大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号「なく」
鼻なぶり	大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号「ない」
鼻責めの陶醉	大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号「なは」
苦悶の裸身	大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「くせ」
裸身の晒し	大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「わあ」
全裸股間縛り	大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「せら」
強烈エビ責め	大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号「えり」
蒲団に悶ゆ	大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「なき」
悦虐の果て	大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「なみ」
椅子エビ責め	大手札三枚一組 三〇〇円 東浦ひかる 略号「おき」
六尺縛り	大手札三枚一組 三〇〇円 東浦ひかる 略号「ろは」
弓吊り責め	大手札二枚一組 二五〇円 梨花悠紀子 略号「つき」
手足宙吊り	大手札三枚一組 三〇〇円 梨花悠紀子 略号「つた」
オムツの股間縛り	大手札四枚一組 四〇〇円 東浦ひかる 略号「むく」
強烈責、被虐の果	大手札五枚一組 五〇〇円 梨花悠紀子 略号「りお」
乳房いじめ	大手札二枚一組 二五〇円 大塚 啓子 略号「とお」
激痛ノ逆エビ責め	大手札四枚一組 四〇〇円 大塚 啓子 略号「きえ」
美貌の裸身に縄目	大手札三枚一組 三〇〇円 絹川 文代 略号「きん」
腰元吊り責め	大手札二枚一組 二五〇円 村井知可子 略号「こり」
腰元間諜の拷問	大手札四枚一組 四〇〇円 村井知可子 略号「こく」
強烈エビ縛り	大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「もい」
乳房責の苦悶	大手札二枚一組 二〇〇円 関谷富佐子 略号「もろ」
全裸ムチ打ち	大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「もた」
強打に泣く裸身	大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「むち」

踊り子 緊縛 大手札三枚一組 略号「りこ」 三〇〇円	股間縛法悦境 絹川 文代 大手札三枚一組 略号「ぬこ」 三〇〇円	吊り打ち 関谷富佐子 大手札三枚一組 略号「やり」 三〇〇円	足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号「うり」 五〇〇円	二つ折りエビ責め 東浦ひかる 大手札五枚一組 略号「うら」 五〇〇円	後手吊り足挙縛り 関谷富佐子 大手札三枚一組 略号「せや」 三〇〇円	夫人の表情 東浦ひかる 大手札五枚一組 略号「はん」 五〇〇円	バンド責め 東浦ひかる 大手札三枚一組 略号「はこ」 三〇〇円	バンド開股 水本 茂美 大手札三枚一組 略号「みす」 三〇〇円	ゴム衣緊縛 水本 茂美 大手札三枚一組 略号「えひ」 三〇〇円	強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」	猪 吊り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」	責め衣 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」	六尺フンドシ 東浦ひかる 大手札五枚一組 略号「ろい」 四〇〇円	白フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」	黒フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」	ゴムぐるみ人形 東浦ひかる 大手札四枚一組 略号「こみ」 四〇〇円	ゴム包みの束縛 東浦ひかる 大手札四枚一組 略号「こは」 四〇〇円	ゴムと女体アップ 東浦ひかる 大手札四枚一組 略号「こあ」 四〇〇円	パリスバンド前開き 東浦ひかる 大手札三枚一組 略号「こい」 三〇〇円	パリスバンド縛り 東浦ひかる 大手札三枚一組 略号「おは」 三〇〇円	携帯用白バンド 東浦ひかる 大手札三枚一組 略号「おか」 三〇〇円	サカエ軽便型バンド 東浦ひかる 大手札三枚一組 略号「おた」 三〇〇円	パリスSSバンド 東浦ひかる 大手札三枚一組 略号「おこ」 三〇〇円	パピアバンド 東浦ひかる 大手札三枚一組 略号「おし」 三〇〇円	サカエバンド 東浦ひかる 大手札三枚一組 略号「百合」 三〇〇円	六尺 緊縛 細川アヤ子 大手札三枚一組 略号「ふは」 三〇〇円	変形 六尺 緊縛 細川アヤ子 大手札三枚一組 略号「ふい」 三〇〇円	相撲 締め込む 遠藤百合子 大手札四枚一組 略号「すい」 四〇〇円	黒 禪の女 (背面) 遠藤百合子 大手札三枚一組 略号「くま」 三〇〇円	黒 禪の女 (正面) 遠藤百合子 大手札三枚一組 略号「しろ」 四〇〇円	白晒 六尺 禪 (背面) 遠藤百合子 大手札四枚一組 略号「しは」 四〇〇円	白晒 六尺 禪 (正面) 遠藤百合子 大手札四枚一組 略号「しは」 四〇〇円	○フエチ資料の部○ 大塚 啓子 大手札四枚一組 略号「むら」 四〇〇円	緊縛女体撮影風景 大塚 啓子 大手札四枚一組 略号「あけ」 三〇〇円	足挙 開股責 大塚 啓子 大手札三枚一組 略号「いの」 三〇〇円	猪 吊り 大塚 啓子 大手札三枚一組 略号「せめ」 三〇〇円	責め衣 大塚 啓子 大手札三枚一組 略号「せめ」 三〇〇円	狙われた和装の娘 愛川 悦子 大手札十二枚一組 略号「ねい」 一〇〇〇円	狙われた和装の娘 愛川 悦子 大手札十二枚一組 略号「ねい」 一〇〇〇円
-------------------------------------	--	--	--------------------------------------	--	--	---	---	---	---	-------------------------------	-----------------------------	----------------------------	--	------------------------------	------------------------------	---	---	--	---	--	---	---	--	--	--	---	--	---	--	--	--	--	---	--	--	--	---	--	--

遅ましき臀部責め

柔軟二つ折り緊縛

猿ぐつわ全裸縛り

真紅腰卷着用縛り

柱縛り宙吊り晒し

柱縛り全裸臀晒し

柱正面縛り折檻

坐禅縛り足吊揚げ

足挙げ全裸正面

柱抱擁全身縛り

柱縛り臀部晒し

柱縛り正面晒し

鼻腔煙草挿し責め

鼻責めアップ。

強烈縛り顔面翻弄

亀甲縛りに身動き出来ない美木嬢の裸身が、一番大切な顔を辻村隆に責められて身悶える。鼻を中心にした女の顔を弄る男の手は、あくことを知らぬ執拗さである。



○ 奇ク十一月号は近來にない充実した一冊になっており、十分楽しく読ませて頂きました。その中、「花と蛇」は、いよいよ、その内容も輝きを増してきた様に思われ嬉しく思います。その他の小説にしてもエッセイにしても本当に充実しているように思いました。先ず巻頭の久我庄一氏の「アブ談義」こういった放談は楽しいですね。本誌だけで読めるもの、そして、こういった一文を楽しく読めるといふことで奇クの一冊三〇〇

円は安いと思います。誰かが高いというようなことを書いていました。たが、そんなヤツは大バカです。考えても見なさい。もし仮りに奇クの内容を他の単行本、雑誌で、あちらこちら買い漁ってごらんない。何千円出したって、集まりっこありません。それが一冊にあって私達のマニア向きになっているんですからね。有難いと思わないとバチが当たります。そういうことを言うヤツは、慣れっこになって、奇クの有難味を解しないトンマというべきでしょう。もし奇クがなくなったら、どんなに淋しいか、先ずそれを考えるべきでしょう。閑話休題。山本一章の「痴人の糧」これは、自分が山本になった気持で、あれこれ、空想を働かせながら読めます。長くないところろが又不満でもあり次号に楽しみが残っているようでもあり、いいですね。夜乃探郎氏の「美少女煩惱」の類魔的なところも面白く、幻想の上では、私も同感です。妊娠腹観賞会も凄いですね。私は別に「妊婦」に関心は持っていませんが、こういった観賞会に出席出来たら、きっとその愛好者になるでしょう。妊婦の腹の魅力については共感を持てます。麒麟児久さ

んの「亜紀子奇譚」は力作です。しまい口が常套的だったのは惜しい。久我庄一氏は今月号で三篇のいずれも実のある作品を寄せられたの大活躍はたのしい。「江戸川乱歩の影の世界」は文句なし。偉大なマニア作家の心的裏面を描いて、その作品を生みだす苦悩をいきいきと、あらわしているのは心をうたれた。「文学的悪讚美論」では私もかつて石川達三の「悪の愉しさ」を愛読し感銘をうけていただけに共感するところ大なるものがあつた。「花と蛇」の結末に対して今までもいろいろな意見が散見されたが、この讚美論にて結末されたとの感が深い。西条操氏の「心傷たむ遍歴」では、この大作に注がれる作者の熱意を買いたい。連載完結の暁は、一冊の本として発刊したい作品である。その時は挿絵を豊富につけて。小泉正氏の告白は、もっともうなずける点があるがおしまいは余りにも出来すぎている感。但し事実は小説よりも奇なりというから、作月号は、よく出来ていた。これからの奇クの充実がより一層楽しみとなってきたというものである。

(広島・所沢弘)

○ 私は大のK誌ファンです。本当に私のために編集されているような素晴らしい内容。いつもK誌を買ってきて、忽ちのうちに夢中で読破してしまいます。感激が大きかっただけに、そのあとの空虚さ。そしてそれから何遍も何遍も繰り返し読んで楽しんでおります。そんな私ですが、私には一度も経験のない事で、一度でも実行できたら、いや実行できないまでも、実際のプレイを拝見できたらと念願しております。そこで貴社に一つの提案があるのですが、色々なプレイ別のグループなどを作って戴けたら、と思うのですが如何でしょうか。ぜひ御一考を煩したく思います。又ぜひ浣腸についてもグラビアで飾って下さいますようお願い致します。(東京都新宿区・高橋和成)

○ 静かな夜。時折、遠く微かに車の音がして、あとは静寂そのものの音ばかりで一人っきりでの部屋で、もの想いに耽り、そんな時に奇クのなんと力強く、我が友になつてくれることか、昼の友達は数多しと云えど、夜の友達は只一つ奇クのみ。初めて奇クを手にした

のは大学二年の時でした。その時はグラビヤも多く、友人の部屋で差し出されたのを胸ときめかして読みました。実はそれまで、この様な風俗雑誌のあることを知りませんでした。私は北海道生れの北海道育ち。入学と同時に単身上京したわけですが、郷里での生活が秀才一家ということ、全てに自我を押し潰して生きねばならなかったのです。中学の二年の頃にフロイトの「精神分析学入門」を読み心理学への憧憬というべきものが芽生えました。男だけの兄弟という環境もあったのでしよう。特に女性への憧れが強く植えつけられました。東京でのアパートの生活が、益々女性の全てを知りたいという気持を大きくしいったのです。ある国家試験を取る為の勉強の合間に、幾回となく心理学の本を読みましたが、物足りなさが残るばかり、そんな時でした。貴誌を拝見したのは、それから四年。当時知り合っていた女性とは悉く断交して一人きりの世界を作りはじめました。そこで私と心から話し合える又プレイをし合えるひとを待っているんです。結婚したら彼女を必ずMに仕立てあげるつもりで毎夜種々と案を練っています。

しかし一人で考えるには限度があります。奇クの奇抜なアイデアの数々とても勉強になり励ましになります。人それぞれに考えもあり好みも違う訳ですが、私も素晴らしい責を生み出そうと考えております。いい考えが浮かびましたら、お便りしましょう。今迄の生活でも面白いことが幾つかありました。そのことも、いずれ告白したいと思います。私の好みも何も書けませんでしたが、奇クを友としたこんな生活を送っている人間もあるということ、つれづれなるままに書いた次第です。(東京都世田谷区・永田利夫)

日本中で不況旋風が台風と共に吹きまくっている今日此頃ですが我々KKファンはますます気持を引きしめ永遠の存続を願っていることでしょう。私もその一人です。私がKKを始めて見たのは十七歳の時ですが、それは私の友人の父が古本屋をやっていて、そこへ遊びに行った時、偶然目にとまった時です。その時、私は何かジーンと胸にくる今までに感じたことのない変な感覚が芽生えた事に気がつきました。それから新本を購入入する一方、古本を集めて、今で

は私も一かどのKKファンと自負しています。SMFなどいろいろあるなかに、私は特に浣腸に関して強く興味をもちます。若くて美しい女性をこの手でソツと浣腸してあげて、相手の苦しみ、いやそれを超越した欲びを共に味わえたらと、最近殊に強く期待するようになりました。私は今或る研究室へ入って或る種の研究に没頭しているのですが、薬学徒である自分が、浣腸に興味を持ってい

ても自然の結果と思われる。本誌十月号に太田尚子様と佐々木典子様が共に浣腸に興味をお持ちの事と知り、改めて自己の執念を深くした次第です。しかし私が男性であるが故に、別の心配もしていると思いますが、同じ東京の中です。共に語り合うだけでも意義のある事だと思えます。女性をニキビ等から解放して美しくする為にも、浣腸マニアは大いに誇りを持とうではありませんか。もし

☆傑作迫力Mフォト☆

二人の女性からの責め

山原清子外一名出演

男が屈伏するまで

大手札十二枚一組 略号(三〇〇〇円)

臀の下に呻吟する

大手札十二枚一組 略号(三〇〇〇円)

二女の股責地獄にあえぐ

大手札十二枚一組 略号(三〇〇〇円)

逆エビとムチ打ち

大手札十二枚一組 略号(三〇〇〇円)

ムチで仕込むズベ公

大手札十枚一組 略号(二五〇〇円)

口の中の汚水処理器

大手札九枚一組 略号(二三〇〇円)

顔を玩弄する

大手札八枚一組 略号(二〇〇〇円)

豊満な二人の馬になる

大手札七枚一組 略号(一八〇〇円)

臀部をかかされる

大手札六枚一組 略号(一六〇〇円)

口中に汚れた布を押し込む

大手札六枚一組 略号(一六〇〇円)

縛り人形を踏みつける

大手札五枚一組 略号(一四〇〇円)

顔を素足で踏みつける

大手札三枚一組 略号(一〇〇〇円)

私に志を共にする方がありましたら、お知らせ下さい。楽しみにまっています。では本誌の着実な歩みを願ってペンをおきます。(東京・中村浩志)

○ 奇ク発刊のための各位の御努力には敬意を表します。さて読者通信を読むとMマニヤの方が多く、またプレー希望者が多いようすが、小生、これはそのような方が多く投書する気になり易いがためだということに帰すると思うのですが、いかがでしょうか。特殊なマニヤの渴仰を満たすのもさることながら、公刊雑誌たる奇クとしては、より安定した続刊の基礎を固めるためにも、より審美的、より健康的、より衛生的ということを御配慮願いたいと考えます。その観点及び小生の嗜好で申し上げればSM写真は現実感が強く廃止も賛成です。(十月号二二頁ポリウムとカットの技巧で救われていますが、他は印刷が悪かったり貧弱であつたりして目障りです)それに対して絵は夢に遊ぶ性質のものですから、審美性を具えたものを適宜の形で大いに補って頂きたいと切望します(二三頁の写真と二五頁の絵とを比べれば写真が線、

背景とも硬く人体のバランスも悪いのに対して、絵の方は質感、バランスとも優れており、清潔さ、奥深さも完備しており、雲泥の差があると賛するのには小生だけではないか)本号一四頁、二五頁、七六頁の作品はまことに絶佳。このような線、しなやかな着衣を基にあらゆるポーズを工夫願いたいと思います。一七頁、四五頁、六五頁、一四〇頁、一七二頁、一九九頁の作品は健康なエロチシズムがあつて佳良と存じました。文章の方でも醜悪や惨鼻をただ八くそりアリズムV的に扱ったもの、他人の生命をやたら軽々しく奪うものなどは極力やめべきではないでしょうか。少くともS場の場合、クライマックスで余韻を残して萃をおく方がよいでしょう。個人的には、小生、糞尿物、切腹物、妊娠物などは他の折角の佳作の興をそぎますので、ざっと一覽後、速かに切取って宝玉のみを残します。いたずらに暗い部分や余計な結末部分も同様です(十月号では一四頁、一七頁、二二―二五頁、四一―四二頁、四五頁、六五―六九頁、七二―七四頁、七六頁、一三四頁、一四〇頁、一六六―一八〇頁、一九一頁、一九九頁、一二〇頁等が

残りしました)なお、上述の趣旨で拷問特集をそのまま絵画化した特集又は既往の該当作品に新作を加えたものを内容とする豪華特集等を発行願えれば、必ずや熱心ならざるファンでも随喜するではないかと思ひます。また申し落しましたたが、奇クの表紙は、この際裏カバーの図柄程度とし、是非露骨さを避け健全らしくすべきではないでしょうか(表カバーの絵で買っているわけではないでしょう)以上、大変無礼勝手な発言ですが、真摯なものであることをお酌みとり頂ければ幸いです。(東京・S生)

○ 気候もすっかり秋めき毎日毎日が快く過せる日々となりました。神経をすりへらすお仕事に精励される編集部の皆様、お元気ですか?私は過去四年位前より奇クを愛読する一ファンです。私の趣味に合った、他に見当らぬ特殊性を持った心から楽しい奇ク。私は私の生活に潤いを与えてくれる奇クに大いに感謝しております。まず私の趣味を披露させて頂きます。私はフェチシストとして婦人用パンティ、メンズバンドン、おむつかバー等のマニヤです。その他にも

婦人ランジェリーとして、ブラジャー、スリッパ、ガードル、ネグリジェ、スリーマー、ストッキング等も愛用し、それらは現在に至るまでのコレクションとして数百点あまり所有しております。それで次々と現われる新製品やまたデザインの新鮮な婦人下着を見ると値段にかまわず買い入れてしまします。それらは色も千種万別で自分でもあきれ程です。その他ブラウス、スカート、ワンピース、セーラ服等も持ち時々着用した女性姿を鏡に写して楽しんでおります。また浣腸にも大変興味を持ち、シリンドー、エネマ等も集めております。今年に入ってから数カ月前より私が関心を寄せる生ゴム製パニティと生ゴム製おむつかバーマニヤの方が寄せられた読者通信が見受けられました。私も同好の士故現在中々市販されていない入手困難なこれ等の品物をしたく思っておられる方々の度合は私も経験がありますのでよくわかります。朗報になりますかどうか、私が貴方がたに私の有する生ゴム生地で生ゴム製パニティか大人用のヌメヌメした感触をもつおむつかバーを造って差し上げてでもよろしいです。又私の造った物がお気に召さ

ない場合は、それ等のメーカーを教えてあげてもよろしいです。その他に前ボタン着脱式の昔に多く売っていましたが生ゴム裏張り黒メリヤスバンドを入手ご希望の場合それ等を売っている東京のメンスバンドメーカーも教えて差し上げます。では今後共全国に多くいる私達マニヤの為に読者通信上にて大いに語り合おうではありませんか。(東京・有田友治)

○ 先日ある新聞で拝見したのですが、六十幾才にかなる銀行の部長の方が、今まで余りにも堅物で通してきた自分の人生の過去を顧みて、淋しい限りだ、たまの宴会でも冗談一つ言わず真面目な顔

をしてきたが、今の年になって、余命を考えてみると、若い時に、もっとデカタン的な生活を送りたかったと、つくづく述懐していたというのです。花の命は短くて、という言葉もありますように、やはり元気のある若いときに、自分のしたいことをしておかないと、老いてから悔いを残すことになりかねませんね。といって、私も二十才代は、その銀行員の方と同じように真面目一点張りで会社でも堅物で通っていました。最近では心気一転するところがあって、これからは、おいおい軟かくしてゆこうと決心しております。そのため奇巧は私にとって、最も適したテキストとなっております。新

聞雑誌週刊紙単行本なんかは人一倍よく読む方ですがまだまだ勇気がなく、実行の方はとても駄目です。しかし、奇巧を読むだけでもそんなことを実行している気持ちになって、楽しい日々を送ることが出来ます。どなたか、こんな私を手を取って指導して下さい方はありませんか。これからは山原清子後援会の座談会なんかに、どしどし出席させて頂いて、啓発して貰いたいと思います。末筆ながらK誌の発展を祈ります。(兵庫 県・森川弓一)

○ 世相きびしき折柄にもめげず、常に我々マニヤのための代弁者たる位置を確保して下さる努力を深く感謝いたします。十一月号嬉しく拝見しました。オムツカバーや月経帯と浣腸の記事が少く残念でしたが、浣腸の新フォトが発表されたのでまずまずです。それにも増して私の喜びは、大塚さんの下に頭の下る思いです。このともしびを絶やすことなく、いつまでも私のささえとなって下さい。筆不精のため思いついたまま、延々になっておりますが、山原清子後援会に入会致したく、ここに入会金をお送りいたします。(神奈川 県・大山登)

☆本誌既刊号在庫一覧表

○本誌の既刊雑誌は左記の一覧表の通り在庫しております。昭和36年3月号以前の号は、全部売切れとなり在庫しておりません。

○倉庫整理の結果、36年4月号、36年6月号、36年10月号が若干出てきましたのでお申込み下さい

既刊号在庫案内

昭和36年4月号	(送共一七〇円)
昭和36年6月号	(送共一七〇円)
昭和36年10月号	(定価二〇〇円)
昭和37年7月号	(定価二〇〇円)
昭和37年10月号	(定価二〇〇円)
昭和37年11月号	(定価二五〇円)
昭和38年12月号	(定価二五〇円)
昭和39年1月号	(売切)

昭和39年2月号	(定価二五〇円)
昭和39年3月号	(定価二五〇円)
昭和39年4月号	(定価二五〇円)
昭和39年5月号	(定価二五〇円)
昭和39年6月号	(定価二五〇円)
昭和39年7月号	(定価三〇〇円)
昭和39年8月号	(定価三〇〇円)
昭和39年9月号	(定価三〇〇円)
昭和39年10月号	(定価三〇〇円)
昭和39年11月号	(定価三〇〇円)
昭和39年12月号	(定価三〇〇円)

昭和40年1月号	(定価三〇〇円)
昭和40年2月号	(定価三〇〇円)
昭和40年3月号	(定価三〇〇円)
昭和40年4月号	(定価三〇〇円)
昭和40年5月号	(定価三〇〇円)
昭和40年6月号	(定価三〇〇円)
昭和40年7月号	(定価三〇〇円)
昭和40年8月号	(定価三〇〇円)
昭和40年9月号	(定価三〇〇円)
昭和40年10月号	(定価三〇〇円)
昭和40年11月号	(定価三〇〇円)

着分譲の件です。大塚さんの大柄なむっちりした下半身にせまりくる浣腸器や、そこに喰い込んだ月経帯と、それをつけた彼女の表情の素晴らしさ……私は多くの彼女のフォトを、所持しているファンです。今回はパンティのみとのことですが、小生も是非一枚手に入れたいと思います。ともあれ、このようなアイデアは我々マニアを無限に期待し、空想にかりたてる素晴らしい企画です。今後とも機会がありましたら、どしどし発表して下さい。なお、先般号にありました某氏のオムツカバー、月経帯の製作、頒布の斡旋の件は、その後如何に相成りましたか、心待ちにしている読者通信も見受けられますので、何卒早く結果を発表して下さい。よろしくお願いします。(新潟県・三条生)

私はSMに興味をもつものですが、M女性を心ゆくまで責めはすかしめてみたいと、思っております。貴女もそれを望み、どんな責めにも耐えられる人であってほしい。しかし、小生には愛妻がありますし、あくまでプレーであってそれ以上の行為は望みたくもありませんし、できもしません。その

プレーはいろいろないたしたく、体はきずつけることは女性美をくずしますで行わず、貴女が精神的肉体的に身悶える姿は壮観だと思えます。一〇月一〇日一〇時に東本願寺門に新聞紙をもって、後ポケットにハンカチをのぞかせておきますから、奇クですと、いっていただければ幸いです。お待ちします。(大津市京町・藤村生)

「辻村さん」——毎号(ただし掲載された時)カメラ・ハントを真先によまして頂いておりますが、おほね発病後の作風(女性を見る眼が)生々しく、そして底にリアリストたらんとする冷静さを感じられます。チャップリン(喜劇スター)という意味でなく表現しようもない、街の灯に生きる哀愁の人生詩人とした)のドタ靴がいかぬぎ捨てられて、事実を肯定した場に晴雨画伯の持つ眼を、おのれの美の追求に賭ける、現実の中に八詩Vをという辻村隆の姿に圧倒される。直接的な刺激を受けます。とおく昔(もう、こう表現されるべきか?可れんなるマゾヒスト・梨花悠紀子嬢とコンビあるプレイの時代は詩の中に八現実Vを、ただよわせていた。おのれの

☆異色文献資料分譲品☆

- | | | | | | | | | | | |
|---|--|--|---|---|--|--|---|---|--|---|
| 鼻 いじめ 三態
大手札三枚一組 略号(はね)
山原清子 略号(はね) | 寝 棺 中の裸婦
大手札二枚一組 略号(ねか)
山原清子 略号(ねか) | 刺青姐御腰一本艶姿脇差
大手札八枚一組 略号(てね)
山原清子 略号(てね) | 刺青姐御腰一本艶姿短刀
大手札十二枚一組 略号(てし)
山原清子 略号(てし) | 刺青姐御腰巻一丁艶姿短刀
大手札八枚一組 略号(てな)
山原清子 略号(てな) | 刺青姐御腰巻一丁艶姿脇差
大手札十二枚一組 略号(てふ)
山原清子 略号(てふ) | 黒 禪 奔放 姿態
大手札十枚一組 略号(ろち)
刑部典子 略号(ろち) | 碧玉 裸身 緊縛
大手札三枚一組 略号(のん)
刑部典子 略号(のん) | 全 裸 麻縄 強烈縛
大手札十枚一組 略号(いね)
山原清子 略号(いね) | 白 禪 奔放 姿態
大手札十枚一組 略号(ろて)
刑部典子 略号(ろて) | 入墨を踏みこむ
大手札十枚一組 略号(うね)
大塚・山原 略号(うね) |
| 鼻 責め 万華鏡
大手札八枚一組 略号(いつ)
山原清子 略号(いつ) | 裸女レスリング
大手札四十枚一組 略号(れす)
大塚・山原 略号(れす) | 浣腸される清子
大手札三枚一組 略号(かる)
山原清子 略号(かる) | 浣腸に興ずる女
大手札八枚一組 略号(かへ)
山原清子 略号(かへ) | 浣腸に悶える女
大手札七枚一組 略号(かに)
山原清子 略号(かに) | 乳房 責め 五態
大手札五枚一組 略号(てら)
山原清子 略号(てら) | 禪 美に羞じらう
大手札六枚一組 略号(こん)
玉田美佐子 略号(こん) | 啓子をいじめる清子
大手札八枚一組 略号(うの)
山原・大塚 略号(うの) | 啓子を縛しめる清子
大手札八枚一組 略号(うな)
山原・大塚 略号(うな) | 山原を責める大塚
大手札八枚一組 略号(うね)
大塚・山原 略号(うね) | |

描いたムードに相対する人物をとけこませ演出しようとした。同じ現実でも、それは八小説Vの世界の物である。そのドラマに夜の空に妖しく輝く星のような、ネオンのようなSMを感じた。あの当時と、現在のカメラ・ハントとを比較評価するつもりはない。詩の中に八現実Vも、現実の中に八詩Vも、終着駅のシグナルは八美Vであらうことに変わりはないからである。ただ、近頃の辻村さんのときたまチャリと見せる砂をかむような自嘲的な笑いが気になります。アブ追求の体当りの円熟した八黒い幻想V十一月号は、そこにたしかにSM的な八人生Vがあり、「こんな魅力のある人は始めてだよ（嘘つけ）ノ方便、方便、うまいこといいよ」是非撮らしてもらいたいな——というような一節など、麻生氏が云われ理想とされるような、まさしく人間が書かれ自己が表現されています。生活（SMの）が描かれています。さてさよならが象徴される「カメラ・ハント」は、だからこそ、いっそう八詩Vであり八美Vですが、コンピによるSMフォトを発表された、またその余韻があった「耳責めに微笑む娘」の頃よりは、ズバ

リ八大人Vの持つ現在のハントぶりに、カッサイを惜しみませんが……どうも自嘲的な笑いが、人事とは思われない。辻村隆の前に次々と現われ、縛られ、レンズで洗礼を受け、去ってゆく美女たち。読者は八もったいないと、ゆびをくわえるVだが、はたして……それだけだろうか……「SMカメラ・ハント」そこにアブ追求の美を賭ける男の情熱と哀愁と自嘲は、その複雑な心境は、だれが本当に判ってくれるだろうか——辻村さん如何。八たんろうV

十一月号拝見、楽しく読みました。第二回琵琶湖畔の女相撲分譲写真の御案内やら、写真特集第九号発行予定の御報せやら、それ等の文字を見るだけでも嬉しく感じました。又十月号の予告になかった「女相撲物語」奮斗士好太氏のお作と挿絵、思いがけないことで大変興味深く、可愛らしい女子高校生が相撲部に入部する有様、はつらつとした美少女がマワシを締めて貰う情景など素晴らしく、次回が鶴首されます。奮斗士氏とは海野氏の変名でしょうか。それとも新しい方でしょうか。何しろ秀れたお作で、よい作家が登場さ

逆さ吊り正面背面	大手札二枚一組 五〇〇円 増田みゆき 略号(つる)
夫婦連縛鼻責	大手札十枚一組 一二〇〇円 増田夫妻 略号(らか)
夫を責める新妻	大手札十枚一組 一二〇〇円 増田夫妻 略号(はや)
牛男をのりこなす新妻	大手札十枚一組 一二〇〇円 増田夫妻 略号(はま)
完全逆さ吊りフォト	大手札三枚一組 一〇〇〇円 木村洋子 略号(さつり)
両足首括り逆さ吊り	大手札五枚一組 一〇〇〇円 梨花悠紀子 略号(さか)
逆さ吊りの女体折檻	大手札五枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(させ)	手足逆滑車宙吊り
大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号(にん)	大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号(にの)
九カ月の妊娠腹	大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号(にみ)
八カ月の妊婦腹	大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号(にへ)
六カ月の妊娠腹	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号(にそ)

れ今後を大いに期待されます。海野氏作と思われる挿絵も毎号拝見しますが、取組みの動きをよく捕え女体のムーブメントがよく現われされ秀れた女子相撲絵で感心して居ります。箕面様がこの分野に力を入れて下さることは私達女相撲マニアの感激おくあたわざる所です。(東京・雪崎京人)

○
ファンとなって8年余1月頃よ

り附近の本屋で売らなくなり手に入らなく残念に思っていた所、9月号より又手に入る様になり喜んでいます。8カ月のブランクを何とかしようと思本屋を探し8冊の奇クをみつければとした次第です。最近の読者欄にゴムマニアの諸氏が多数投稿されているのが大変嬉しく思っています。小生もゴムマニア、特にオシメカパー・メンスバンド等には異常な程の執着心を

持っています。三宮のNS様、総ゴムの下着とはどの様な構想ですか。一度この欄で御紹介下さい。マニヤとして他人ながらウレシイ次第です。又使用するゴム布はどの様な所で購入されますか。？。店を御紹介下さい。男子夜尿帯とはどの様なものですか又どこで売っていますか？これも教示下さい。小生は現在メンスバンド白・ブルー各々1枚ピンク2枚（うち1枚は今流行の替ゴムのないナプキン使用のもの）バンドに氷のうを切りバンドのウラ側に糸とゴム糊で張付けた手製オシメカバー1枚、痔バンド1本氷のう2枚産用ゴム製品1打持っています。バンドが病みつきになった動機は、先年痔を病んだ際近所の薬局で薬と痔バンドを買いもめた時、薬局の奥さんが下着がよごれる様ななら女性の使う生理バンドを着用すればよいと言った。こっちは真赤になつたが先方は「マジメに言ってるんですよ。はるかしがらずに使用したら」と言うので思い切って買いました。その後病み付きになり病気の方は良くなりましたが、バンドは離せなくなり毎日着用して出勤しています。過月号でオシメカバーの販売の件、大西様も賛成さ

れた様に小生も、もろ手を上げて大賛成です。小生もあちこちの薬局で聞いてみるのですが大人用カバーを知らぬ人が多い様です。又黒メリヤスのメンスバンドは大部分少い様ですね。ピンク又は薄いブルー系統が多く替ゴムを使わないアンネの様な製品の多くなったのはさみしい限りです。フレンドバンドは現在市販されていないのでしようか。夜尿帯とはどの様なものか薬局にあるのかどうか又子宮バンドについて御存じの方お教示下さい。（尼崎市・藤田公一）

○ 私は三十才になるM傾向の者です。手足を縛られ束縛された上で鞭打ち、アヌス責めエネマ、尻に敷かれこずき廻される事を生甲斐としています。しかし乍ら不幸にして現在は、それを満たしてくれる相手がおられません。行為の醍醐味を知った現在、相手無しでは寂寥の感免れず悶々の日々を送っております。両親を早く亡くした為か、年長の方を慕う心が強いので若い人には、興味がありません。四十才前後の抱擁力豊かな方との御付き合いが致し度くお便りした次第です。平日午後七時以降ならば如何様にも都合出来ず。現在

器具はエネマシリンジのみ所有しています念の為（東京都中央区・田中啓文）

○ 横須賀市の齊藤住男様。十一月号での通信拝見しました。小生もパンティファンです。美しい人の肌に太腿にピッタリとひっついてる白のピンクの……パンティ、どうか奥様の穿いておられたパンティを私に譲っていただけないでしようか。汚れたままのものでしたら尚更幸です。尚読者の皆様の中で、私の願いを叶えて下さる方があれば光栄です。（兵庫県・美波靖）

○ その後心ならずも久しく御無沙汰して居ります。編集部初め同好の諸兄には益々御健闘の程御同慶の至りで御座居ます。さて十一月号本欄にて一女子レスリング愛好者よりの御便りを拝見し、早速ペンを取りましたので参考迄に御読み願えれば幸いです。女の相撲を公開の場で行うのはすでに過去のものとなり、現実には一部地方の祭礼行事の際に或は特種に限られた場所で愛好家達の間にのみ散見するに過ぎないものとなりました。本当の女闘美愛好家には全く淋し

い限りです。それ故之に順じて追想させるものは女子プロレスに他なりません。之とても一時隆盛を極めたものの現在ではもう日本には見られなくなり、時折何かのショウの間に公開されて居るのを見聞するのみです。然し外国では現在でも女子レスラーは依然としてその華やかな勇姿を雑誌其の他に掲載されて居ります。日本女子レスラー達の其の後は或は結婚した者、或はバーなど経営して居る者等転身振りは様々に伝えられて居りますが、すでに現在ではたしかな消息もわからない様です。大阪東京での試合状況やその報道記事又は各選手達の個人紹介等各資料はほぼ収集保持して居ります。又映画となった部分も当地上映の際はほとんど写し取って居りますので貴兄御希望の如く機会をみて広い意味での女闘美特集など企画して戴き度く御願ひ出来ればと全国同好諸兄と共に切望して居るもので御座居ます。乱筆を御ゆるし下さい。（兵庫県・増田トシロウ）

○ 奇クを知ってから三年目。あやしげな文章を投稿し始めてから二年にしかならぬのに、夜乃氏のベスト・10ソーソーたるベテランと

共に加えられたのは感激の至りです。しかも夜乃氏はすばらしい挿絵まで画いてくれました。ビルの屋上から投げられる美女の生首、勿論下に待っているのは私です。生首の大特売、全部私がいまし。美女と落下傘に対しては地上一メートルまで落ちてきたところ、一刀のもとに首を刎ねます。血汐は滝となってふりそそぐでしょう。また紐を足首でなく頸にまいたらどうでしょう。傘がひらく時の強い力で細首はキューと締まって絞首刑です。月と美少女も月が次第に満ちてゆけば星のくさりもひっかかりがなくなつてずりおち哀れ逆吊りのまま、まっさかさま脳骨ミジンとなって即死……例に

よってこんな想像をしています。そのほかにも嬉しい記事がいっぱい。池田氏の女体射的。的はおへソにすべきでしょう。的に命中したら絞首台の踏板がはずれるとか、ギロチンの斧がおちてくるとかの仕掛は如何ですか。剣持氏の生首写真、映画の紹介。有難うございます。印刷もはつきりしてきました。こういうのをみるとグラビヤがほしくなります。室井氏のイメージ画集。女像柱の美女は、このあとどんな風に料理されるのでしょうか。処刑場面の画を是非お願いします。世想診断室の木戸川氏に同感。たしかにまともな小説が多くなりました。奇く以外の本には絶対むかないもののみ

にすべきでしょう。しかし現代風俗云々とかムッカシイことを云われると頭が痛くなります。自分勝手なメチャメチャなものの方が面白くはないですか。例えばかく申す黒田寿のような。久我庄一氏、私の仲間に加っていただけますか。久我立川文庫、女忠臣蔵の続篇をどしどし書いてください。夜乃氏対芳野氏の論争。木戸川氏によれば私は夜乃氏側に属しておりますが、私はこんなデタラメな人間の上、好き嫌いがはげしく、興味の無いものは、そのまま読みすごすだけなので、双方をジユクドクガソミした上、批評し論争に加るという資格はありません。ただ私個人として、どちらが好きかは言

ってもよいでしょう。それは夜乃氏の方です。では、十二月号を期待して、さようなら。(福島・黒田寿)

初めてお便りいたします、私は二十一才の色白の女性、あるオフィスに勤めております。背は百五十六センチ、顔は面長で均整のとれた体をしております。私の恋人は、デートのとき、私をやさしく愛撫して「君の身体はすばらしいよ」といつてくれるのですけれども、何かみたされたい気持ちがしております(そのときは彼のやさしい愛撫に身をまかせはげしくもだえるのですが……)そのとき奇クのあることを知り、サドやマゾ

四馬孝妖美画集

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しせ)

一、若き姫君の切腹美態

二、介錯を受ける美しき娘

三、切腹する娘落城の哀史

四、夫の眼前で切腹する若妻

浣腸美媚態

△女体浣腸の極美▽

大中判印画紙極鮮明焼付

三枚一組

略号(のゆ)

一、美しい令嬢に対する浣腸

二、女事務員の浣腸の場面

三、女学生に行う浣腸の私刑

浣腸責め図譜

△強制浣腸場面五態▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しき)

一、片足吊りで美女に浣腸

二、いちぢく浣腸の恐怖

三、高圧浣腸に喘ぐ美女

四、硝子シリンドラーの浣腸

五、イルリガートルの浣腸

浣腸責め図譜

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しえ)

一、踊子へのイルリ浣腸責

羞恥責め絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しい)

一、灌水による人工妊婦製造

二、浴槽の女神を責める

三、三角木馬の美女責め

四、全裸の美女柱抱き責め

五、女体洗滌のあられもなさ

のあることも知つてたちまち夢中になってしまいました。何かみたされない気持が男性におもいきりいじめられたい、縛られ恥かしめられたい、責めて責めて責めぬかれないという気持だったことがわかりました。これをマゾヒストというのでしょうか。それなら私は百パーセントのマゾヒストなのでしょう。それ以来男性に責められ恥かしめられ、いたぶられたいといつも願っておりましたが恋人には恥かしくてとてもいえません。……それで、どうぞ奇クの読者にひそかに、この願いをかなえていただきとうございます。でも読者の好きな責めはどんなことでもよろこんでお受けいたします。たとえ全裸にされて、つり責、えび責股間縛りと、さまざまに責められ恥かしめられてもかまいません。ただむち打だけは体に傷がつくとこまりますから、お許しくださいませ。そのほかのことでしたらほんとうにどんなことをされてもかまいません。はじめは大塚様や梨花様のようにな上手なポーズや責められ方はできないかもしれませんが、どんな責めにもあらゆる恥かしめにも一生けん命に耐えますから、どうか私を存分に縛り、恥か

しめもだえさせてくださいませ。ひみつを守っていただけの方でしたら、どなたでも、どこか静かなホテルか旅館で（もちろん人目のつかない所でしたら、戸外でもけっこうですけれども……）私を心ゆくまで、責めいじめてくださいませ。読者のお便りが誌上にのるのを待ちしております。かしこ「奇ク」の愛読者の皆様へ（東京・花山千鶴子）

「保藤久人さん、ありがとう」——貴兄の十一月号発表の「落穂拾い」其の二を拝見させて頂きました。私の九・十月号に続けて掲載された「ドラマ・奇譚クラブ」及び「実録・奇譚クラブ」を、正しくお読み受け取って下さっているようで私は激しく感動しています。新しい風俗文献誌とは、ズバリノ紙屑にならない（カストリ雑誌と違う）年月を越えた貴重な生きた文学告白ETCが編集された物で、ハ懐古趣味Vと片付けられるには、あまりにも旧刊号の誌面からほとぼるSM的なまんはかつて、いまも、迫るものがあるろうと存じます。そして、その（旧刊号の世界）誌面から、読む雑誌としての充実に、大いにプラス

されるものが与えられる筈です。私の「ドラマ——」「実録——」はハ整理Vという意味もあるが、むしろ、奇クの明日のために執筆した。私流的になり過ぎた感があるのは、表現の未熟さで他意はありません。——とにかく、保藤さんは、私の深意を判ってくれたようであれしう限りです。アリガトウ。S小説こそ、奇クのパックボーンであるという声もきかれる。新しい本格的なSM小説出でよ！については賛成である。しかし、小説・告白手記・論評・論争・エッセイETCどれもがバックボーン（背骨）である。バラエティあるハ公平なV編集こそ、奇クの独自の特色では、ないだろうか。保藤さん、終りに私の心意を付け足しさせて頂きます。（よるの・たんろう）

貴誌益々で発展にておよろこび申し上げます。小生十年余に亘り日々の糧として蔭ながら時間のゆるす限り愛読しております。最近では世間がうるさくなりましたね。そのためグラビヤ写真が消えましたので、なんだか手足をもぎとられたようで淋しいですね。しかし読む方に力を入れられ本文が充実

してきたように小生にも見受けられます。写真の方は限定版のグラビヤ集を買い求めて満足させていたくことにしますが、挿絵の方をもっとはり込んで下さる様、ゆるされる範囲内でストーリーにマッチされる様お願いしたいと思ひます。十月号、十一月号の本文の方は至極充実していると思ひました。この調子で行って下されば有難いです。（兵庫県・大黒進）

私は大学を卒業してある自動車関係の企業につとめている26才になる男性ですが、私の希望は若く美しい女性に浣腸にかけていたくことです。私は浣腸に興味を持つようになつて長らくあります。が、浣腸のような変つたものに関心を持っているのは、広い世の中に自分一人であるのかと悩んでおりました。が、二年前に何気なく、この雑誌を見たとき、なんと、自分があればど独りで悩んでいた浣腸の記事が載っているではありませんか。このときは本当に目の前がひらけたような気持になりました。私が今持っている浣腸器はイチジク、それに三〇CCグリセリン浣腸器二本、アメリカ製のゴム製ピンク色した高圧イルリガート

ル浣腸器（たためる）です。なるべく都内又は近辺の若い女性の方を希望します。新宿の沼田洋子様よろしく。どなたか私を病人扱いにして下さる方がおられましたらお願いします。もしよかったら、私にもあなたを浣腸器で浣腸させて下さい。（東京・新井生）

編集部の皆様如何お暮しでしょうか。私（田代俊夫）としては、よもやあのような拙い作品を掲載されようとは思ってもいなかった。ので、書店で十月号の目次を一見した時、本当に息の詰まるぐらい驚きました。それでもボツになっってしまうよりは、実際に活字になって多くの人達に読んでいただければいい。か分りません。本当に有難うございました。実はあれを書き上げて清書してから、内容の不出来やその他のことで気になり、軽い自己嫌悪の念に駆られて、尚数日送付をためらっていたのですが、今は嬉しさの念と、その反面、貴誌の立派な誌面を汚しはしなかったかという心配の念とで、一種奇妙な心境になっています。一応作品の中で断っておきましたが、あの拙文は私の独断論なのですから、

下敷きにした「ある夏の間奏曲」の作者木原氏（おそらく読んでおられると思いますが）の意図と喰い違ふところがあるかもしれません。自分はそんなつもりはなかったというものであれば、私として一言もない訳で、この点が一番心配です。もし木原氏が私のものについて貴誌宛て或は私個人宛てで何か意見を述べられる場合、そしてそれが誌面に載らないという場合には、大変厚かましいお願いとは思いますが、木原氏の意味表示を私のほうへ伝達していただけないでしょうか。別に木原氏以外の方の中でも結構です。私はどうも欲が深いというか横着というか、そんな性質なので作品を送付する時には、掲載されるなどと思ってもいなかったし、又拙文中に他の人に見てもらうだけで満足だなどと殊勝なことを言っていたくせに、それが実現されてしまうと、もっと欲がでて、他の人がどのように思っているのだろうかと、その影響を自分の目で確認したい衝動を押さえきれないのです。通刊二〇〇号を突破して、ますます本誌の内容の充実と発展をお祈り申し上げますとともに、今後とも私の心の糧として愛読させていただきたい

と存じております。（田代俊夫）
△編集部より▽保藤久人氏から「感じること」（これは反論ではありませんが）△田代俊夫氏▽の「蚯蚓のたわごとを読んで」という一文が寄せられています。今月号には誌面の都合で掲載できませんでしたが、多分来月号に載せられると思います。

初めて貴誌九月号を求めました所二百三拾頁に「真紅の腰巻をする」の分譲品広告が載っていましたので、早速求めたく急送下さる様御願います。僕はあまり縛っている女の姿は好みません。しかし真赤なネルの腰巻はマニヤと云える程好きでいろいろ集めています。真赤な腰巻関係の絵、写真（写真の場合は天然色）等があります。

玉取姫のモデル山原清子嬢の仕置図

入墨女賊拷問刑罰集

キヤピネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

仰向け木馬責

三枚一組 略号（よひ）

全裸入墨女折檻

三枚一組 略号（よせ）

笞打ち白洲糾問

三枚一組 略号（よゆ）

ハリツケの拷問

三枚一組 略号（よめ）

海老責の拷問

三枚一組 略号（よす）

全裸四這木馬責

三枚一組 略号（よも）

逆さ吊りの仕置

三枚一組 略号（よき）

大の字磔処刑

三枚一組 略号（よさ）

したら、なるだけ詳しくお知らせ下さい。腰巻姿の場合、立ち姿、坐り姿、後ろ姿、特に後ろ姿がいとおもいます。お尻の曲線を生かし、腰のふくらみの上に着けた赤いお腰のすそをしぼって曲線を強調した後ろ姿等、腹巻をテーマにしたものがありましたら、お知らせ下さい。僕の好きなのは、縛らない赤い腰巻をつけたもたえる女性の特集がないかと思っています。近頃の悪書追放のおかげで僕好みの本が姿を消し残念でなりません。淋しい限りです。(福岡市・根本恭)

○ 九月号の富田様。私は二十七才身長五尺五寸余体重十九貫のお転婆のBGです。私は貴男を投げ飛ばしたたきつけ私のお尻に敷いて窒息寸前迄責めぬいてあげます。私は高校の時スポーツもやって居り大抵の男は組伏せます。体重差五貫五百もあるあなたは体力に依り女の私に圧倒され屈伏降参するでしょう。亦咽喉輪を股責にして身動きも出来ない様押し潰して差し上げます。十一月十日国電御徒町駅(松坂屋の方の出口)午後六時頃右手にピンクのハンカチを持って居ります故御会い致しませう。

う。(東京神田・宮野政子)

○ 初めての投稿です。最近号の貴誌を見るにつけ淋しく成るボク。鳴叫!グラビア、在し頃のあの梨花、大塚、絹川諸嬢の美鼻の責。摘み、ヒネリ、潰し、異物をねじ込み、ボクはそれらを見る度に小さい胸をトキメカしたものです。今では、わずかに増田夫妻の鼻責が、砂漠に化したボクの心のオアシスであります。でもやっぱり淋しいネ。もっともっと美しき女性の鼻を誇る写真が欲しい。グラビアなき今、カット写真もツラツラながめ吐息をついてるボク。それに、鼻責の本格的小説も無くなっってしまったって、ボクは益々ショボクレているのです。黒々とした二つの穴に魅かれてるボク。鼻の話をしたたいから誰でもいいから連絡してネ。K誌編集者諸氏、御願います。鼻責の文章、写真を。(東京・藤村若葉)

○ 奇クの読者様、おかわりございませんか。私も、読者通信にお便りをかかせていただきます。世の中には、SMの性質をもった人がわりあい多いものです。それが毎日顔を、あわしていてもSMの性

〔今月の新版分譲品〕

血紅切腹連続写真

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号(のせ)

血紅使用

美しき女の屍体

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号(のり)

血紅使用

立腹に悶える女体

大手札印画紙焼付
十枚一組 一八〇〇円
大塚啓子 略号(のさ)

血紅使用

切腹した女の死体

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号(のい)

血紅使用

屠腹される女体

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円

大塚啓子 略号(のる)

血紅使用

絞首された女体

大手札印画紙焼付
六枚一組 一八〇〇円
大塚啓子 略号(のひ)

血紅使用

切腹に苦悶する女

大手札印画紙焼付
十枚一組 一八〇〇円
大塚啓子 略号(のむ)

檻に入れられた女

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
山原清子 略号(もの)

浴室の全裸刺青

大手札印画紙焼付
五枚一組 六〇〇円
山原清子 略号(よな)

海老縛りの表情

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号(えふ)

乳枷貞操帯着用

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
山原清子 略号(もや)

質というものは絶体から見ただけでは分りません。例えば女性に責められたという希望をもっている男性、又男性を責めたいと思っている女性、又この逆のこととも言えます。そういう人たちが毎日顔をあわしていても、お互いの性質を分るということは不可能なことです。しかしこの不可能を可能あらしめたものが、奇クの読者通信らんだと思います。そこで私もこの読者通信らんを通じてSMプレイの相手を探したいと思い、お便りをかきました。私はたいへなMの男性です。一度でいいから女性の方にうんと責められたいと思っています。女性の方から責められることが私の夢です。どうか私の夢を、かなえてくれる女性はいませんか。私の夢を、かなえてくれる女性がいまいたならば、まずは、この読者通信らんにおいて返事を下さい。又逆に私から責められたいと思う女性の方も読者通信らんにおいて返事下さい。では奇クをお読みの女性の方お願いします。私はハンサムな青年です。(大阪・大丸四郎)

○ 私は二十一才になる至極真面目な青年です。私は十四才の頃、あ

る日、少年雑誌の絵物語(題は忘れてしまいました)を見ていたら、そこに登場する一人の少女が悪漢に捕えられ、両手を背で括られ屋敷の庭の松の枝に吊り下げられ、竹で折檻される……という場面があったのです。その絵と文章にすっかり魅せられてしまい、何回も何回も続んだことを覚えております。その時からSMの世界に目覚めてしまい少年雑誌などからSM的要素のある絵(女性緊縛)の収集を始め、ずいぶんの量になってしまったのを今でも、はっきり覚えております。そんな私ですから、奇クを発見したときは、ペラペラと、ページをめくっただけで、これまでと違った世界を発見したように、目の前がくらむような感激を味わったことを忘れることが出来ません。これこそ私のために創られた本だと強く感じたのです。ところで今日私が、この様な手紙を書いたのは一つの理由があります。それは奇クの読者通信欄が東京大阪近郊など、いわゆる都市又はその近辺の通信にその殆どが費されていることです。本文を読みますと「ボクの責め方」をはじめ読者の原稿が数多く掲載されています。しかし私は時々考

えるのですが一体この世の中にマゾヒストなる女性がいるのだろうか。いや私はこの広島地方にもM女はいるのであると思うのです。どうかこの小文に目をとられた全員のM女様、又広島近郊のM女の方、私の願いを叶えて下さいませんか。私の願いとはM女である貴女と便りの交換をしてみたいということなのです。お便りをお待ちします。編集部より回送して頂ければ幸いに存じます。(広島・宗方俊二)

○ 東京の佐々木典子様への呼びかけ。小生三年くらい前からの奇クのファンです。東京にも貴女のよくな浣腸マニアの女性がいるのを知っておどろきました。実は小生も浣腸に関するものが大好きで、実際には十年前にやられたことがありますが、この時は激しい腹痛のため、どんな感じだったか、はっきりとはおぼえておりません。それよりも三年ばかり前に盲腸で入院した友人の附添いとして行った折、同室に腹痛の患者が入ってきて浣腸されたのですが、暴れるので看護婦二人ではどうする事もできず、その患者のお尻をおさえつける手伝いをさせられました。

その病院に一週間いる中、そんな事が二回もあったのですが、その時浣腸を自分で直接したら、どんなに素晴らしいことだろうと思いましたが。貴女は病院で浣腸をやったもらいたいような事を通信に書いてありました。患者は人間としてのやるだけで、患者は人間としての羞恥心は病気の手前、全く認めてもらえませんか。これはあまり好ましいものでありません。病院では裸にされても恥しいと思う人はあまりありませんからね。貴女も浣腸に関心があるのですから、同好の異性である小生と一度逢ってみませんか。小生は二十七才の会社員です。あと三、四年独身のつもりです。その間にみっちり浣腸について勉強するつもりです。(東京都葛飾区・山口正)

○ 山原清子後援会の入会を御願いし早速御返信下さり誠にありがとうございます。同封の御案内状を拝見致しましたが近々に第二回座談会が開催される様心から御待ち申上げております。貴社に郵便を御送りするのはこれで三度目でございますが、第一回目に送りました通信にて長谷川洋子氏の「読者通信」を読んで直ぐ手紙を記し

ましたので、あの様な文面になり誠に申訳なく思っております。私自身の研究不足とはいえ何とか真剣なS型の女性にお会いしたく如何にしたらと日夜考えているので「読者通信」のあの様な文を拝読致しますと、つい、わらをもつかむの例えの通りになってしまったのです。貴書によりますと同じM型とはいえ各種の傾向、嗜好をもつ男性が居るようですが、私自身は、女性による縄でのいじめつまり、縛られてムチ、ローソク、カノンチョウ等全ての責道具によりプレイすることを夢みており、仮に大変失礼とは存じますが貴殿（個人的に）によってそれが可能ならばという淡い希望をいただいているものです。以前に記しました通り金銭的に女性に頼んでも、その女性性がS型の傾向がなければ型ばかりのプレイで、真剣に満足出来ないものです。金銭的な面はいずれにせよ、とにかくS型女性に会いたい只それだけを考えているような現状です。現在は想像の時点で自分の立場を考えております。日常生活に何の変りもない私でございます。何卒この秘密の世界の道案内を御願ひすることは貴殿にとつて御迷惑なこと、不良読者に属

するかとは存じますが機会がございましたら是非とも御指導下さいたく御願ひ申上げる次第でございます。（埼玉県・村松鋭二）

○ 奇ク十月号を読んで。毎月欠かさず奇クを読まして頂いておりますが、今年十月号は、われわれM族にとつてはまことにたのしみ多い一冊でした。読後の興のさぬうちに二三の感想をのべさせて頂きます。十月号で特に心をひいた作品は、サロンの中の「それでも僕は犬になりたい」田代氏の「みずのたわごと」芳野氏の「夢のまた夢」などでした。その他、毎月たのしみにして居るのは、芳野氏の「ぬれにぞぬれし」などM物です。又今月の読者通信に久しぶりにS女性のよびかけ（東京の長谷川洋子さん）があり大いに氣をよくしました。まず「みみずのたわごと」入選作品として発表されましたが中々の佳作でした。「三の組み敷く」の項は特に小生には実感をもって迫りました。「大きく重く」のことは、中々迫力あると思います。もしこの文中に「組み敷くことの最高のものは顔を、お尻の下に敷いて重圧を加える」といった意味の一節がみられ

読者M氏受難の巻

◎M組二十五態◎

大手札印画紙焼付（9×13糎）
各組一枚一組（送料共）

一組一枚 三〇〇円
十組十枚 二〇〇〇円
二五組二五枚 四〇〇〇円

MMMMMMM
8 7 6 5 4 3 2 1
足の裏なめを強制する女
足のお味はどんな具合？
この犬奴踏み潰してやろう
股に挟まれて幸福な男の顔
さあ口を開けてごらん！
両股の下にある悦楽境

MMMMMMMMMMMMMMMMMMMM
25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9
女御主人の唾液をのます
玄関でチンチンをする男
玄関で足指をなめさされる
私の放屁でも糞くらえ！
足の踵を必死になめる犬男
両股の下に埋れた犬の顔
頭を蹴られた尻尾を振る犬
両股の首絞めに喘ぐ犬男
臀部を革ムチで打ちまくる
ツバの御馳走を飲ませる
足の指先で鼻を摘みあげ
鼻も口も足の裏で蓋される
足のお味はどんな具合？
この犬奴踏み潰してやろう
股に挟まれて幸福な男の顔
さあ口を開けてごらん！
両股の下にある悦楽境

たらもっとすばらしかったかと自分勝手に思っております。女性によつて組みしかれ、而も顔をお尻の下敷にされるということは男性にとつては最大の恥辱であると共にマゾ男にとつては最高の快楽であるといえましょう。次に芳野氏の「夢の、また夢」実にすばらしいの一語につきます。芳野氏の作品は、毎月たのしみにしております。この作未完との事、来月号大いにたのしみです。どうかもっともっとすばらしい作品をおねがい

します。作品中の「中膈の神酒」は胸おどらせて拝見しました。番人がお清の中膈の小水を浴びせられる場面の描写は、自分をその番人の立場におきかえて読み返えしました。この番人、お清が後始末拭いたチリ紙を投げ与えられたのではないでしようか。それとも、或は直接番人の舌に始末させたかもしれない。この外番人は次々に用を足しに来る奥女中たちの小水を何度も浴びせられた事でしょう。下に番人がいるのを知って平

気で用を足す女中たちの心理、反對に頭から女中たちの小水を浴びせられる番人の心理など、想像は限りなくつづきます。全体的にM物にも力を入れて下さる編集部の方の御努力に、心から感謝しつつ次号をたのしみに。(大阪・S・T生)

○ 長谷川洋子様、読者通信でのお言葉、私のようなM男にとってはしびれるような快感を覚えます。住居が近ければすぐにでも女王様のお許に参り、奴隷として又家畜として飼育される光栄に浴したい思いで一杯です。私は三十八才、女王様とは殆ど等しい身体をもっておりませんが、女性に虐げられることに喜びを持つ私の事です。女王様の御願いを拝した瞬間、すべてこの力を失い、苦もなく組み伏せられ、縛り上げられてしまうことでしょうか。あとは女王様の思召しの通りです。答打ち、ローソク責め、浣腸責めその他身体に傷が残らない程度でしたら如何ように責められても結構です。お疲れになった場合は椅子代りに使われ馬として尻を鞭打たれながら乗り回されることも願ってもない喜びです。私の願いは顔面を女王様の

臀の下に敷かれたり、肛門、鼻などを責められることです。御気に召しましたら、どのように飼育されるか女王様の御考え、通信欄にお寄せ下さいませんか。お待ち申しております。(徳島・MA生)

○ 初めてお便りをします。山中冬子さん、貴女は僕がいつも思っている事をずばりされているので感激しました。貴方のご主人はほんとに幸せだと思います。一人前の女畜になる様努力して下さい。それからご主人に申し上げます。貴方の行動力には、ほんとに感心します。もっともっとくわしくいろいろな事を教えていただきたいと思っています。まことに申分のない飼育の仕方で感心していますが、ただ僕の思う事は、どうも女畜を入れるじようぶな『おり』がない様ですが、鼻に穴をあけるのがだめでしたらネジ式の物でも鼻輪があった方は便利ではないかと思えます。それからもう一つ尻か背中に女畜というやきごてを入れてはどうでしょう。それがだめなら、いれずみかマジックで書いてもおもしろいと思います。最も貴方の事だから私が申上げるまでもなく十分承知と思いますが、僕は貴方と

女畜と文通していただけないでしようか。文通していただき写真でも分けていただけたら幸せです。それから編集者の方にお問い合わせします。この山中冬子さんの文を参考ににして「女ドレイの半生」という様なものを「花とへび」に対抗させて書いて見てはどうでしょう。時をドレイが認められている時にして、ドレイは外でも衣類は与えられず、いつも褌一本。そして繋具はいつもはめられ、ねる時はオリの中です。前には「宇宙のどこかで」で、よく似たいいものがありませんでした。必ずお願いします。では奇巧の発展を願いつつ筆をおきます。(東京・伏見和男)

○ 高松市のかよ子様。十月号の松田様のご紹介拝見しました。素晴らしいS女性の方が身近かにいられることを知り、大きな喜びをもって呼びかけさせていただきます。私三十五才、市内に勤務する公務員です。趣味はカメラ・音楽・ドライブです。プレイの経験はありませんが、もし御交際願えるなら誠意をもって御奉仕いたします。一度だけお話合の機会をお与え下さい。(高松市・坂本章)

○ 初めてお便り致します。私は典型的なM型の三十一才になる男です。今になって考えますと子供の頃より遊びや生活態度にM型の素質があったものと考えられますがその傾向が具体的に出来て参りましたのは十年前にもなるうかと思えます。生活にもゆとりがなく只、雑誌を読んだり映画のシーンを見過ぎなかつた私も事業を起し経済的にも多少の余裕が出来始めた五年程前からS型の女性を具体的に巷に求める様になりました。私自身このプレイ自体、秘事に附しておくべきと考え雑誌等に投稿することなく只、求め得た女性と共にプレイし、そして不満足ではありましたが心の鬱積を晴らして参りました。今迄何回となく偽名にて分譲写真もいただき保存して鑑賞致しておりましたが、貴誌十月号の読者通信にて大田区の長谷川洋様のお便り御要求を拝読致し私の本当に願望する女性(S型)が居られることを知り何だか目の前が急に明るくなった気が致します。今迄に何回もお便りしようと思つたのですが今回思いきって書面をお送りする次第です。私は浦和に居住致して居ります故大田区と

いえば一時間たらずです。何卒貴誌を通じまして、文通なりお会い出来る様お取次いただければ幸甚に存する次第でございます。(浦和市・ET生)

○大西良子様。漸く貴女の筆に上る事が出来まして大変光栄です。ひたすらに月経帯マニヤの道を歩いた甲斐があります。男の私にとってはどメンソバンドが好きになったのも良子様なら御理解いただけますね。ダンロップ・オムツカバーの件大変有難う御座いました。実に数カ月前に、この宇都宮製作所に直接たのんで残っていた、たった三枚切りの前開きのゴムのメンソバンドを手に入れた許りなのです。生ゴムのオムツカバーがここにあらうとは気付きませんでした。早速注文いたしました。貴女と共に柔いプリプリした甘い香りのオムツカバーを着用して過せる日を楽しみにしています。産後バンドの件御質問ありましたが犬印と云うのです。メーカーは、大阪市西区京町堀二の六一日本油脂工業です。でもゴムは黒なのですよ。あらかじめ御断りしておきます。たしかにゴムは大きく腰(背中側です)にピッタリはりついて了

う位です。良子様御尋ねしますが何日もバンドやオムツカバーを着用してますといわゆるオムツカブレを生じ発疹が出たりしますが、どの様な手当をされますか御教え下さいませ。ピンク社(西独)のピンク・バレリーナバンドって素晴らしいですね。本当に羨しいです。分けていただけませんか?それと男が月経帯やオムツカバーを着用している写真御希望でしたら遠慮なく御申越し下さいませ御送りいたします。ではゴムを恋している大西良子様、益々誌上御活躍下さい。(山口県・安田隆夫)

○長谷川洋子様。御文を拝見致し早速名乗りを上げさせて頂きます私の自己紹介から始めますと、年令二十九才、体重六十三キロ、身長一七二センチ、独身です。現在神田にある会社に勤務していますが下宿先は千葉県松戸です。営業関係なので時間は割合自由になります。大学を卒業して仕事にはげんで来たのですが、一応落ち着いて来た現在、どうしても結婚する気になれずこのまま一生独身で過す決心をしています。もう御気づきの事とは思いますが、高校時代から女性神聖化の傾向が成長

し続け、在学時代等にガールフレンドとデイトしてもあまり相手を神聖化して考える為に力強い女性のイメージが崩れて失望のみを味わって来ています。元より私の理想の女性は、力強く、私自身を自分の持物、消費道具の様に取扱ってせいぜい犬並みの存在にしか考えない人です。勿論そうして下さい、とは言えないのでこの悩みは起るべくして当然起る事ですが、それにしても苦しい毎日です。唯私を人間扱いせず徹底的に飼育動物的扱いに終始してくれる人、例え気まぐれでも良いからそうして私を御自分の為に役立つ様に利用してくれる人、こういう女性の方の出現を待ち望みつつ生活しています。現在、そういう方々の御出をかねて私は次の様な自己訓練をかねて実行しています。まず第一に相手を選択する評価する、という人間の習性を徹底的に無くす為に聖書を毎日読み、その中の神、及び神の子をまだ現れぬ女性におきかえて一度び女性の足元にひれ伏した瞬間から崇拜心のみに心をおおい、人間的判断力を完全に無くして女神への祈りと讃美を唱えつつ御下命を喜びでもって行なう事に徹する様心がけて準備してあります。従ってどんな事でも、例え人間として恥知らずな事でも相手が女神だからその命令を行なう事は自分の義務であり、人生の最大の喜びであるという訳になります。次に完全に無の心で酷使される為に、逆に云うと使用されやすい状態を心につくる為、一週間に四日位三〇分ずつ坐禅を組んで聖書の祈り言葉、女性崇拜の祈り以外に何事も考えない様に心がけています。これ等により、私は相手を神と考え一旦使用された時には自分を無の世界に置いて全ての人間社会の事を忘れて唯々、支配者の喜びのみが自分の人生の生きがい、生きる目的として如何なる事でも喜び感謝をもって全力で実行するという自信が湧いて居ります。この気がねなく気ままに消費される事の中に生きがいを見出している私の能力をぜひ貴女様にテストして戴き度くここに御慈悲を願い上げる次第です。勿論経済的にも都合のよい時に御うかがいできる自信も持っています。唯一つ、あえて御願ひさせて戴き度いのですが、当初は私を人間扱いして戴かない事を潜越ながら御願ひ申し上げる次第です。(東京・安田サダオ)

○

松田美恵子様。読者通信欄での貴女のお呼びかけ願ってもない話なので早速お便り申し上げます。実は私、生来のマゾでKK誌の古くからの読者ですが、妻はこのような性癖はなく、時々縛ってくれるよう頼むのですが一向応じてくれません。仕方なく家人の留守をみては、自ら縛ってみるのですが、ほどく時の事を考えると充分な緊縛感が得られません。今までにも数回この通信欄で呼びかけたことがあります。反応なく、悶々の月日を送っております。お話では、かよ子様がSがかった好みとか私にとっては誠に都合で、もし私でよければSMプレーをお願い致したいと思います。御希望の三十五才以下という条件には合いませんが四十才未満ですから、そう大した違いもないと思います。口のかたい事は、この私が保証致します。何分趣味が趣味で他言をはばかりる事です。尚私の希望と致しましては身体に傷が残らない程度でしたら、どのような緊縛、鞭打ち、その他いろいろの責めも差

しつかえございません。出来ればかよ子様に縛り上げられ、責められる過程を撮して頂ければ最高と存じます。甚だ勝手なお願ひですが、もし宜しければ連絡方法通信欄にお寄せ下さい。日曜日なら何時でも参れます。良い便りをお待ち申しております。(撫養市・加川生)

○

深まりゆく秋。愛読者の皆様お元気ですか。もうずい分以前の奇クだと思ひますが、たしか四馬孝さんの絵だと記憶しています。グラビヤに「新妻を縛る」という題で連続フォトが載っていました。夫に後手に縛られた新妻が「ねえなぜこんな事するの」と恥じらいながら夫に問いかけます。夫は答えました。「それは君がかわいいからさ」又食卓を囲みながら「さあもつと食べなさい、だめだよ。あーんして」といって無理に食べさせられているところとか。今想い出しても胸が熱くなるようなムードのある絵でした。その絵を見てから奇クが大好きになったのですが、最近の奇クにはそういう愛

情が前提となったSMプレイの記事が少なくなった様に思ひます。毎月、今月号こそは好きな記事が載っておりますようにと祈りながらページをめくりますが、失望ばかりです。もっとも最近号の方が内容が充実して読みごたえがあるとおっしゃる方が大勢いられる様ですから、好き嫌いですもの仕方ありませんね。Mのムード派を自認する？私としましては、後手に縛られたまま、夜のドライブを楽しむとか、散歩するとか。もっともそんな事実際にされたら嫌になるかもしれません。一度そんな目に会いたい等と空想している私です。同好の方とお便りの交歓致したくお待ち申しております。(大阪・井手雅子)

○

先々月号で愛知のT〇生様にお教え頂きましたダンロップ製おしめカバー、私も入手致しまして毎日着用しています。そのときの文中にゴムがベトつかず工夫された製品とありましたが、なるほど薄くてピチピチした純良の総ゴム製です。色は薄茶とアメ色、ゴムの両面が非常に細かい布目の様にわずかにザラツク様に作られていますので素晴らしいネバツコさを發揮

します。そしてベタつきません。買った時は表面に粉がついていてそのまま使ってみたら着用中の汗でぬれた部分だけ粉がとれて色が変ります。汚れた感じが倍増するのです。奇ク発展につながるマニヤの方々のために、お見落しがあるとは思いますが、もう一度ダンロップゴム製大人用総ゴムおしめカバーの発売元をお知らせ致します。大阪市東区淡路町一丁目一七宇都宮製作株式会社です。お話は変わりますが先日朝の出勤途中のこと神戸元町四丁の国鉄高架下を通るとき私はハツと思わず立ち止まりました。そこには色々のゴミが集積してありました。私の足元に大人用のビニール製おしめカバーが少し汚れて二枚その横に生ゴム製の真新しいカバーが二枚の計四枚が点々と捨ててあるのです。薄黄色の総ゴムカバーの新品の様です。立止まって見ると、その横にセトモノのまくらも捨ててあるところから、どなたか病人さんのもので恐らく亡くなって不用になったのでしょう。私のうしろから来た女学生がゴムの上を次々とふみつけて通ってゆきました。ゴムマニアの方のお便りをお待ちしています。(神戸・大西良子)

次号(十二月号)は十一月二十五日に発売いたします

☆編集後記☆

○十一月でも若干掲載しましたが、このところ本誌の内容に対する批判も相当きびしいものがあります。誌面の関係でその全部はとも掲載できませんが、大いに参考にさせて頂いております。外部からばかりでなく熱心な寄稿家、読者からのご批判、これは大変有難いことだと感謝しております。

○月刊雑誌ですから月に依つて少々流れに従つて片寄るといふことはあつても又流転すると考へて貰つていいと思ひます。いづれ生々しい△告白▽が盛沢山に誌上を飾る日も必ずあります。どうか永い目で見て下さい。

○今月号では例によつて、誌面狭しとばかり各人の論評で大いに活躍して頂きました。今

ささか長枚数だったため、予定作品の未掲載が若干でました。奇クサロンでは読者投稿の絵や写真が大分翌月回しになりました。

○連載小説「花と蛇」続篇第十二回は、十月十日に入手しましたが、すでに初校終了というところで今回は残念なから滑り込みセーフというわけには参りませんでした。次号では必ず掲載いたしますから御諒承願います。

○グラビヤフオトという切札を持たなくなつた現在、文字通り内憂外患という事態です。で真剣に全力投球を続けているつもりですが力足らずして八読む雑誌としての体裁が急速に整わない憾みが多分にあります。来る新年号からは表紙を始め一新したいと考えております故御期待下さい。

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

これだけは、どうしても人に話したい、書いておきたいといったことが、どなたにも一つや二つ必ずある筈です。物言わざるは、腹ふくるるのたとえ、どうか皆様の真実の叫びや思い出などをどしどしお寄せ下さい。採用篇には本誌一年分以内贈呈します。

△創作、小説、物語▽

最初は余り長いものは無理ですが、本誌の内容に適した題材で皆様の夢を文章に托して下さい。採用篇には本誌半

年分以上贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、関連したものでも結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを皆様の筆でまとめて下さい。採用篇には本誌五カ月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌) 通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊紙、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく報道下されば幸いです。採用篇に

は本誌三月分贈呈します。

△マニヤ、ファン通信▽

編集者 執筆者 投稿者
モデル嬢などへの呼びかけや
ファンとしての希望、或は前
号の感想批評、本誌に対する
希望や御意見、など愛読者と
しての通信をお寄せ下さい。
本誌とファシ、マニヤ同志の
忌憚のない通信ですから、何
なりと御遠慮なく。採用篇に
は本誌三月分贈呈します。
◎尚、以上の採用篇に対する
本誌贈呈の代りに、写真を御
希望の方には、代理部分譲品
の中から御指定下されば、贈
呈いたします。

☆ 本誌御購読の栞 ☆

一月分(1冊)	三〇〇円△送共▽
三月分(3冊)	九〇〇円△送共▽
半年分(6冊)	一八〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三〇〇円

十二月号

〔第十九卷第十二号〕
通刊第二〇九号

昭和四十年十一月二十日 印刷
昭和四十年十二月一日 発行

編集人 箕田 俊二
 發行人 吉田 稔
 印刷人 北村 俊夫

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天星社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三年四月二〇日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各條例に指定されな
いよう充分に注意して編集いたしております
すが、本来成人向として發行を企図してお
ります關係上、未成年の方には絶対販売下
さらないよう、特にくれぐれもお願ひ申
し上げます。